

見玉

# 内ヶ磯窯跡 1

福智山ダム建設に伴う福岡県直方市大字頓野所在近世窯跡の調査

福岡県文化財調査報告書 第163集

2001

福岡県教育委員会

うちがそかまと

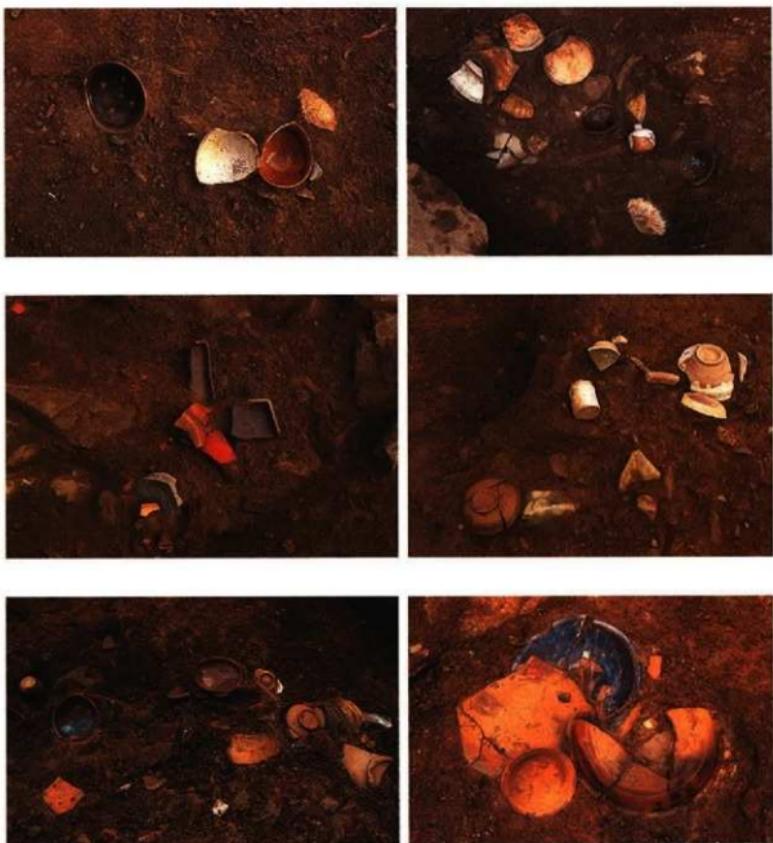
# 内ヶ磯窯跡 1

福智山ダム建設に伴う福岡県直方市大字領野所在近世窯跡の調査

福岡県文化財調査報告書 第163集



建設工事が進む福智山ダムと内ヶ磯窓跡（平成11年度）



遺物の出土状況

## 序

本書は県営福智山ダム建設に係り福岡県教育委員会が発掘調査を実施した直方市大字頓野字二ノ瀬所在の内ヶ磯窯跡の報告書です。発掘調査は平成7年度から11年度にかけて実施しましたが、出土した遺物の量が膨大なこともあります、報告書は3カ年に分けて発行することとなりました。本書はその第1冊日にあたります。

内ヶ磯窯は江戸時代の初頭、慶長19年（1614年）から寛永元年（1624年）にかけて創業されたと伝わる高取焼の登り窯です。高取焼は福岡県を代表する陶器の一つであります。中でも内ヶ磯窯で焼かれた陶器は古高取と呼ばれ、初期の作風を顕著に表すものがあり、高取焼の歴史を語る上でなくてはならない存在とされています。

今回報告するのは内ヶ磯窯の屋敷・工房部にあたります。建物跡や粘土を貯蔵した遺構といった多くの発見があり、当時どのような環境で製陶がなされていたかを考える多くの資料が提供されました。出土した陶器は多種多様であり、当時の文化を反映した特長が色濃く現れているものであります。今後これらの成果は歴史学・考古学・美術史学など多くの方面への貴重な資料になると思われます。

内ヶ磯窯は福智山ダムの湖底に水没する運命にありますが、今回の発掘調査によって得られた成果は永く活用されることを願うものであり、この報告書を通して生涯学習への活用、学術的側面の深化、文化財愛護思想の普及に寄与することとなれば幸いに存じます。

最後に、発掘調査及び報告書作成の過程で、地元の方々を始めとする関係各位の皆様のご協力が得られましたことに心から感謝申し上げます。

平成13年3月30日

福岡県教育委員会

教育長 光 安 常 喜

## 例　言

1. 本書は1995年度（平成7年度）から1999年度（平成11年度）にかけて、福岡県教育委員会が福岡県土木部河川開発課から委任を受けて、県営福智山ダム建設に伴い破壊され、或いは盛土保存される埋蔵文化財の発掘調査を実施した報告書である。
2. 本書に収録した遺跡は、福岡県直方市大字額野字二ノ瀬所在の内ヶ磯窓跡工房部であり、平成7年度から9年度にかけて発掘調査を実施した範囲である。次年度以降、西物原（平成10年度調査）・東物原（平成11年度調査）に関する報告書を刊行する予定であり、本書はその1冊目にあたる。なお、内ヶ磯窓跡の周辺地形測量は平成9年度及び10年度調査時に実施し、その成果の一部を本書に収録している。
3. 遺構の実測図は調査担当者と調査補助員が主として作成した。遺物の整理・復元は九州歴史資料館において岩瀬正信の指導の元で古賀陽子・竹田まち子・武藤睦子・坂口好子・辻光子が行った。金属器の処理は九州歴史資料館において横田義章の下で行った。遺物の実測は、岸本圭・野口未幾・岡寺良・大庭孝夫・平田春美・櫛町陽子・田中典子・久富美智子・坂田順子・若松三枝子・寺岡和子・中川真理子が行った。製図は豊福弥生・原カヨ子・江上佳子が行った。出土した遺物は福岡県教育庁総務部文化財保護課太宰府調査事務所及び九州歴史資料館にて所蔵・管理される予定である。
4. 遺構写真は調査担当者が撮影した。空中写真は御空中写真企画に委託し気球による撮影を行った。遺物写真は九州歴史資料館において石丸洋・北岡伸一が撮影した。
5. F区土壤7から出土した炭化物については株式会社パリノ・サーヴェイに委託して樹種同定分析を行った。その成果はVに収録した。
6. 本書に用いた遺跡周辺地形図は、建設省国土地理院発行1/25,000地形図、及び直方市作成の国土基本図（1/2,500）を改変したものである。
7. 本書で使用する方位は国土座標II系による座標北を用いる。
8. 本書の執筆はIIを岡寺、I・III・IVのうち第4次調査分を大庭、Vを除くその外を岸本が担当した。編集は大庭の協力の下で岸本が行った。

## 本文目次

I 調査の経過	1
1 はじめに	1
2 調査に至るまでの経緯	2
3 平成7年度（第4次）の調査	4
4 平成8年度（第5次）の調査	5
5 平成9年度（第6次）の調査	6
6 平成10年度（第7次）の調査	7
7 平成11年度（第8次）の調査	8
8 平成12年度（報告書作成）	8
II 位置と環境	10
III 内ヶ磯窯の概要と既往の調査	15
IV 調査の記録	19
1 各調査区の概要	19
2 検出された遺構	27
3 包含層の調査	109
V 自然科学分析の調査	201
VI おわりに	204

## 図版目次

卷頭図版1 建設工事が進む福智山ダムと内ヶ磯窯跡（平成11年度）

卷頭図版2 遺物の出土状況

図版1 茶入①

図版2 茶入②

図版3 水指・水注

図版4 瓶・花生

図版5 瓶・蓋

図版6 鉄絵陶器

図版7 鉄絵陶器・水盤

図版8 筆立・鍵輪回転軸受・小形特殊品

図版9 梱①

図版10 梱②

図版11 梱③

図版12 梱④

図版13 盆①

図版14 盆②

- 図版15 皿③
- 図版16 皿④
- 図版17 皿⑤・鉢
- 図版18 片口・甕・擂鉢
- 図版19 B区土壤1出土遺物
- 図版20 CD区土壤2出土遺物
- 図版21 CD区土壤2・5・6出土遺物
- 図版22 CD区土壤6、E区土壤1・ピット出土遺物
- 図版23 E区土壤1、F区土壤1・5・11、G区土壤10出土遺物
- 図版24 F区土壤12、H区土壤7、K区土壤1出土遺物
- 図版25 K区土壤1出土遺物
- 図版26 K区土壤1・2・3出土遺物
- 図版27 K区土壤3・土壤出土遺物
- 図版28 K区土壤出土遺物、包含層出土遺物①
- 図版29 包含層出土遺物②
- 図版30 包含層出土遺物③
- 図版31 包含層出土遺物④
- 図版32 包含層出土遺物⑤
- 図版33 包含層出土遺物⑥
- 図版34 包含層出土遺物⑦
- 図版35 包含層出土遺物⑧
- 図版36 包含層出土遺物⑨
- 図版37 包含層出土遺物⑩
- 図版38 包含層出土遺物⑪
- 図版39 包含層出土遺物⑫
- 図版40 包含層出土遺物⑬
- 図版41 包含層出土遺物⑭
- 図版42 包含層出土遺物⑮
- 図版43 包含層出土遺物⑯
- 図版44 包含層出土遺物⑰
- 図版45 包含層出土遺物⑱
- 図版46 包含層出土遺物⑲
- 図版47 包含層出土遺物⑳
- 図版48 包含層出土遺物㉑
- 図版49 包含層出土遺物㉒
- 図版50 包含層出土遺物㉓

## 挿図目次

第1図 発掘調査前の状況（平成7年度）	1
第2図 第2次調査空中写真	2
第3図 摂智山ダムと内ヶ磯窯跡の位置（1/5,000）	3
第4図 調査スナップ（平成7年度）	4
第5図 工房部（E区）の発掘調査風景	5
第6図 現地説明会風景	6
第7図 現地説明会会場の陶器洗い体験	6
第8図 福地川における陶器の洗浄作業	7
第9図 雪化粧の福智山をバックに-手前竹藪が内ヶ磯窯跡-平成8年度	10
第10図 周辺遺跡分布図（1/25,000）	11
第11図 鷹取城（木島孝之氏作図）	13
第12図 内ヶ磯窯跡全景（昭和55年度）	15
第13図 内ヶ磯窯跡実測図（1/300）	17
第14図 内ヶ磯窯跡周辺地形測量図（1/1,000）	18
第15図 内ヶ磯窯跡遺構配置図（1/300）	18-19
第16図 内ヶ磯窯跡工房部空中写真（B～F区）	19
第17図 A区全景（南東から）	20
第18図 B区全景（南西から）	21
第19図 CD区全景（南東から）	21
第20図 E区全景（空中写真）	23
第21図 F区全景（南から）	23
第22図 第3次調査G区全景（南から）	24
第23図 第3次調査H区全景（南から）	25
第24図 埋め戻し終了後の内ヶ磯窯跡工房部（F区から福智山方面を望む）	25
第25図 K区全景（東から）	26
第26図 B区土壤1実測図（1/40）	27
第27図 B区土壤1出土遺物実測図①（1/3）	28
第28図 B区土壤1出土遺物実測図②（1/3）	30
第29図 B区土壤1出土遺物実測図③（1/3）	31
第30図 CD区1号建物実測図（1/60）	32
第31図 CD区1号建物（南から）	32
第32図 CD区土壤1実測図（1/20）	33
第33図 CD区土壤1検出状況（南西から）	34
第34図 CD区土壤1底面灰白色粘土検出状況（南から）	34
第35図 CD区土壤1出土遺物実測図①（1/3）	35
第36図 CD区土壤1出土遺物実測図②（1/3）	36

第37図	CD区土壤 1 出土遺物実測図③ (1/3) .....	36
第38図	CD区土壤 2 実測図 (1/20) .....	37
第39図	CD区土壤 2 横山状況 (北から) .....	38
第40図	CD区土壤 2 底面白色粘土検出状況 (東から) .....	38
第41図	CD区土壤 2 出土遺物実測図① (1/3) .....	39
第42図	CD区土壤 2 出土遺物実測図② (1/3) .....	40
第43図	CD区土壤 2 出土遺物実測図③ (1/3) .....	41
第44図	CD区土壤 3 実測図 (1/20) .....	43
第45図	CD区土壤 3 検出土面土器出土状況 (南西から) .....	43
第46図	CD区土壤 3 出土遺物実測図 (1/3) .....	44
第47図	CD区土壤 4 (北から) .....	45
第48図	CD区土壤 4 実測図 (1/20) .....	45
第49図	CD区土壤 4 出土遺物実測図 (1/3) .....	45
第50図	CD区土壤 5 実測図 (1/20) .....	46
第51図	CD区土壤 5 (北東から) .....	47
第52図	CD区土壤 5 出土遺物実測図 (1/3) .....	47
第53図	CD区土壤 6 実測図 (1/20) .....	48
第54図	CD区土壤 6 出土遺物実測図 (1/3) .....	48
第55図	CD区土壤 6 遺物出土状況 (北西から) .....	48
第56図	CD区土壤 7 実測図 (1/20) .....	49
第57図	CD区土壤 7 (北東から) .....	49
第58図	CD区土壤 8 実測図 (1/20) .....	50
第59図	CD区土壤 7・8 出土遺物実測図 (1/3) .....	50
第60図	CD区ピット出土遺物実測図 (1/3) .....	51
第61図	E区櫛状遺構実測図 (1/60) .....	52
第62図	E区土壤群 (南西から) .....	52
第63図	E区土壤 1 実測図 (1/20) .....	53
第64図	E区土壤 1 遺物出土状況 (南西から) .....	54
第65図	E区土壤 1 出土遺物実測図① (1/3) .....	54
第66図	E区土壤 1 出土遺物② (1/3) .....	55
第67図	E区土壤 2 実測図 (1/20) .....	56
第68図	E区土壤 2 出土遺物実測図 (1/3・1/1) .....	56
第69図	E区土壤 3 実測図 (1/20) .....	57
第70図	E区土壤 4 実測図 (1/20) .....	57
第71図	E区ピット出土遺物実測図① (1/3) .....	58
第72図	E区ピット出土遺物実測図② (1/3) .....	60
第73図	F区 1号建物実測図 (1/60) .....	61
第74図	F区建物と土壤群 (空中写真) .....	62

第75図	F区土壤1実測図(1/20)	63
第76図	F区土壤1検出状況(北西から)	64
第77図	F区土壤1 1/4カット状況(北から)	64
第78図	F区土壤1出土遺物実測図(1/3)	65
第79図	F区土壤2実測図(1/20)	66
第80図	F区土壤2粘土面検出状況	66
第81図	F区土壤2出土遺物実測図(1/3)	67
第82図	F区土壤3実測図(1/20)	69
第83図	F区土壤3出土遺物実測図(1/3)	69
第84図	F区土壤3検出状況	70
第85図	F区土壤3粘土面半截状況	70
第86図	F区土壤4実測図(1/20)	71
第87図	F区土壤4検出状況(北西から)	72
第88図	F区土壤4出土遺物実測図(1/3)	72
第89図	F区土壤5実測図(1/20)	73
第90図	F区土壤5粘土面検出状況(西から)	74
第91図	F区土壤5出土遺物実測図(1/3)	75
第92図	F区土壤6実測図(1/20)	75
第93図	F区土壤6出土遺物実測図(1/3)	76
第94図	F区土壤7実測図(1/20)	77
第95図	F区土壤7出土遺物実測図(1/3)	78
第96図	F区土壤8実測図(1/20)	78
第97図	F区土壤8(北西から)	78
第98図	F区土壤9実測図(1/20)	79
第99図	F区土壤9出土遺物実測図(1/3)	79
第100図	F区土壤9検出状況(南から)	79
第101図	F区土壤10実測図(1/20)	80
第102図	F区土壤11実測図(1/20)	81
第103図	F区土壤11出土遺物実測図(1/3、1/2)	81
第104図	F区土壤12大皿検出状況	81
第105図	F区土壤12実測図(1/20)	82
第106図	F区土壤12出土遺物実測図(1/3)	83
第107図	G区1・2号建物実測図(1/60)	84-85
第108図	G区土壤10実測図(1/20)	85
第109図	G区土壤10出土遺物実測図(1/3)	86
第110図	G区土壤10検出状況(南東から)	86
第111図	F・G区ピット出土遺物実測図(1/3)	87
第112図	H区土壤5実測図(1/20)	88

第113図	H区土壤5（南から）	88
第114図	H区土壤6・ピット16実測図（1/20）	89
第115図	H区土壤6検出状況（東から）	90
第116図	H区ピット16水指出土状況（北東から）	90
第117図	H区ピット16出土遺物実測図（1/3）	91
第118図	H区土壤7実測図（1/20）	92
第119図	H区土壤7遺物出土状況（東から）	92
第120図	H区土壤7出土遺物実測図（1/3）	93
第121図	K区1号建物・横列実測図（1/60）	94
第122図	K区1号建物（西から）	95
第123図	K区土壤1実測図（1/40）	96
第124図	K区土壤1	97
第125図	K区土壤2・3実測図（1/20）	98
第126図	K区土壤2・3	99
第127図	K区土壤1①出土遺物実測図（1/3）	100
第128図	K区土壤1②・2・3出土遺物実測図（1/3）	101
第129図	K区土壤4実測図（1/20）	103
第130図	K区土壤4（東から）	103
第131図	K区土壤5実測図（1/20）	104
第132図	K区土壤5（東から）	104
第133図	K区土壤6・7実測図（1/20）	105
第134図	K区土壤8実測図（1/20）	106
第135図	K区土壤6・7・8	107
第136図	K区土壤出土遺物実測図（1/3）	108
第137図	包含層出土遺物（茶入）実測図（1/3）	109
第138図	包含層出土遺物（水指）実測図①（1/3）	112
第139図	包含層出土遺物（水指）実測図②（1/3）	113
第140図	包含層出土遺物（水指）実測図③（1/3）	115
第141図	包含層出土遺物（水指）実測図④（1/3）	117
第142図	包含層出土遺物（水指）実測図⑤（1/3）	118
第143図	包含層出土遺物（文様状叩き瓶）実測図（1/3）	119
第144図	包含層出土遺物（蓋）実測図①（1/3）	120
第145図	包含層出土遺物（蓋）実測図②（1/3）	122
第146図	包含層出土遺物（花生）実測図（1/3）	123
第147図	包含層出土遺物（有孔鉢）実測図（1/3）	124
第148図	包含層出土遺物（盤・紺文形鉢）実測図（1/3）	125
第149図	包含層出土遺物（火入・香炉）実測図（1/3）	126
第150図	包含層出土遺物（筆立）実測図（1/3）	126

第151図	包含層出土遺物（把手）実測図①（1/3）	127
第152図	包含層出土遺物（把手）実測図②（1/3）	128
第153図	包含層出土遺物（椀）実測図①（1/3）	129
第154図	包含層出土遺物（椀）実測図②（1/3）	131
第155図	包含層出土遺物（椀）実測図③（1/3）	132
第156図	包含層出土遺物（椀）実測図④（1/3）	133
第157図	包含層出土遺物（椀）実測図⑤（1/3）	134
第158図	包含層出土遺物（椀）実測図⑥（1/3）	135
第159図	包含層出土遺物（椀）実測図⑦（1/3）	136
第160図	包含層出土遺物（椀）実測図⑧（1/3）	137
第161図	包含層出土遺物（椀）実測図⑨（1/3）	138
第162図	包含層出土遺物（椀）実測図⑩（1/3）	139
第163図	包含層出土遺物（鉄捻陶器）実測図（1/3）	140
第164図	包含層出土遺物（皿）実測図①（1/3）	142
第165図	包含層出土遺物（皿）実測図②（1/3）	143
第166図	包含層出土遺物（皿）実測図③（1/3）	144
第167図	包含層出土遺物（皿）実測図④（1/3）	145
第168図	包含層出土遺物（皿）実測図⑤（1/3）	146
第169図	包含層出土遺物（皿）実測図⑥（1/3）	147
第170図	包含層出土遺物（皿）実測図⑦（1/3）	148
第171図	包含層出土遺物（皿）実測図⑧（1/3）	149
第172図	焼け歪んだ皿	150
第173図	包含層出土遺物（皿）実測図⑨（1/3）	151
第174図	包含層出土遺物（皿）実測図⑩（1/3）	152
第175図	包含層出土遺物（皿）実測図⑪（1/3）	153
第176図	包含層出土遺物（皿）実測図⑫（1/3）	154
第177図	包含層出土遺物（皿）実測図⑬（1/3）	155
第178図	包含層出土遺物（皿）実測図⑭（1/3）	156
第179図	包含層出土遺物（皿）実測図⑮（1/3）	157
第180図	包含層出土遺物（皿）実測図⑯（1/3）	158
第181図	包含層出土遺物（皿）実測図⑰（1/3）	159
第182図	包含層出土遺物（皿）実測図⑱（1/3）	160
第183図	包含層出土遺物（皿）実測図⑲（1/3）	161
第184図	包含層出土遺物（皿）実測図⑳（1/3）	162
第185図	包含層出土遺物（皿）実測図㉑（1/3）	163
第186図	包含層出土遺物（皿）実測図㉒（1/3）	164
第187図	包含層出土遺物（皿）実測図㉓（1/3）	165
第188図	包含層出土遺物（皿）実測図㉔（1/3）	166

第189図	包含層出土遺物（鉢）実測図① (1/3)	168
第190図	包含層出土遺物（鉢）実測図② (1/3)	169
第191図	包含層出土遺物（縹）実測図① (1/3)	171
第192図	包含層出土遺物（縷）実測図② (1/3)	172
第193図	包含層出土遺物（縷）実測図③ (1/3)	173
第194図	包含層出土遺物（縷）実測図④ (1/3)	174
第195図	包含層出土遺物（縷）実測図⑤ (1/3)	175
第196図	包含層出土遺物（縷）実測図⑥ (1/3)	176
第197図	包含層出土遺物（縷）実測図⑦ (1/3)	177
第198図	包含層出土遺物（縷）実測図⑧ (1/3)	178
第199図	包含層出土遺物（縷）実測図⑨ (1/3)	179
第200図	包含層出土遺物（瓶）実測図① (1/3)	180
第201図	包含層出土遺物（瓶）実測図② (1/3)	181
第202図	包含層出土遺物（瓶）実測図① (1/3)	182
第203図	包含層出土遺物（瓶）実測図② (1/3)	183
第204図	包含層出土遺物（網状突帯）実測図 (1/3)	184
第205図	包含層出土遺物（片口）実測図① (1/3)	185
第206図	包含層出土遺物（片口）実測図② (1/3)	186
第207図	包含層出土遺物（片口）実測図③ (1/3)	187
第208図	包含層出土遺物（擂鉢）実測図① (1/3)	188
第209図	包含層出土遺物（擂鉢）実測図② (1/3)	189
第210図	包含層出土遺物（擂鉢）実測図③ (1/3)	190
第211図	包含層出土遺物（擂鉢）実測図④ (1/3)	191
第212図	包含層出土遺物（擂鉢）実測図⑤ (1/3)	192
第213図	包含層出土遺物（擂鉢）実測図⑥ (1/3)	193
第214図	包含層出土遺物（磁器）実測図 (1/3)	194
第215図	包含層出土遺物（特殊品）実測図 (1/3)	195
第216図	包含層出土遺物（金属器）実測図① (1/2)	197
第217図	包含層出土遺物（金屬器）実測図② (1/2)	198
第218図	包含層出土遺物（石器）実測図 (1/3)	198
第219図	包含層出土遺物（製陶道具・窯道具）実測図 (1/3)	199
第220図	包含層出土遺物（窯道具）実測図 (1/3)	200
第221図	炭化材	203

## I 調査の経過

### 1 はじめに

福智山ダムは福地川総合開発事業の一環をなすものとして建設される多目的ダムである。重力式コンクリートダムの型式を採り、総貯水量は2,710,000m<sup>3</sup>、有効貯水容量は2,560,000m<sup>3</sup>である。福地川は一級河川遠賀川水系彦山川の支川であり、過去にしばしば洪水による氾濫被害をもたらした歴史を持つ。このため抜本的な治水対策が望まれていたが、本川流域は既に宅地化が進み全面的な河川改修は困難な状況であった。そこでダムによる洪水調整によって災害被害の軽減が図られたのである。

また本川流域は交通網の整備や宅地開発が進み、水資源開発が重要な課題となっていた。そこで、水道容量を確保し上水道用水を供給するという役割も果たすことが求められた。

福智山ダムの建設が内ヶ磯渓谷に計画されたのは昭和50年のことである。ダム建設に伴って水没する地区には福岡県の代表的な焼き物である高取焼の古窯跡、内ヶ磯窯が存在することは早い段階から知られていた。ダム建設計画当初から直方市民を中心として保存の声が高まり、直方市教育委員会は内ヶ磯窯の実態把握のために発掘調査を実施した。次に今回の調査に至るまでの経緯を中心にまとめてみたい。



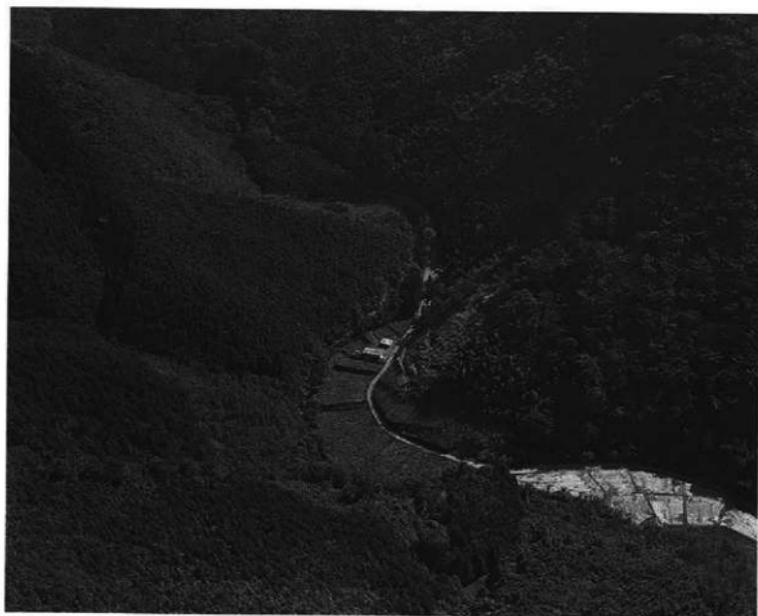
第1図 発掘調査前の状況（平成7年度）

## 2 調査に至るまでの経緯

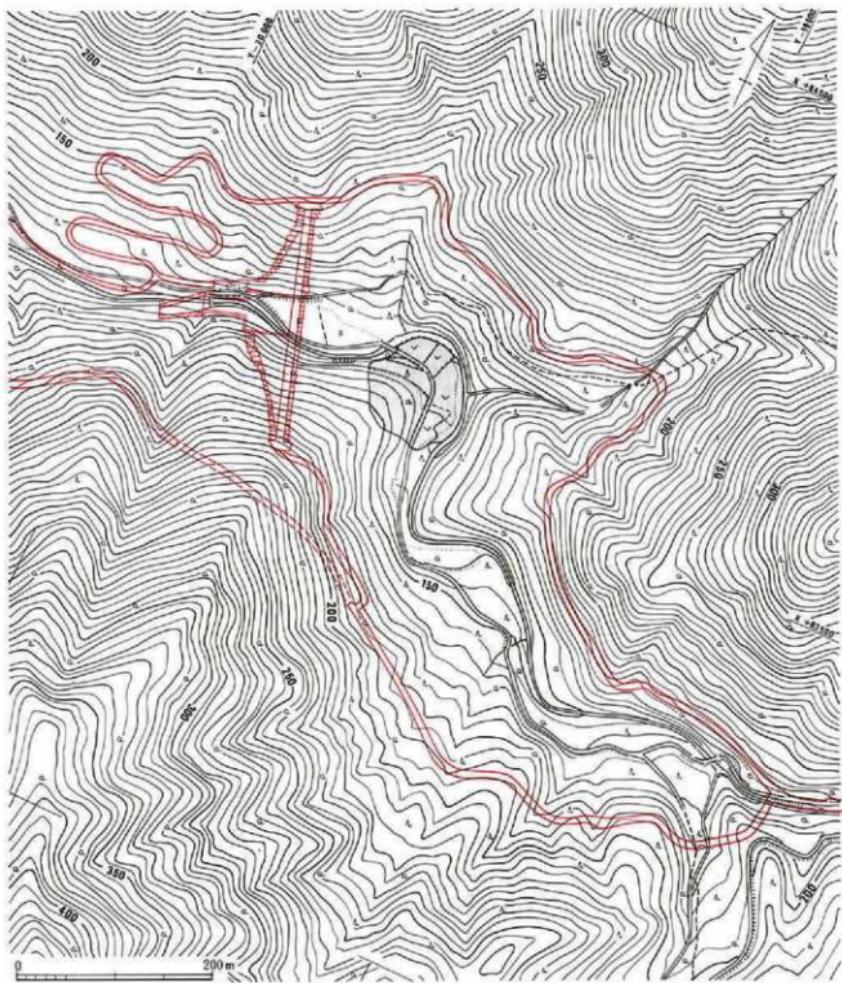
窯本体の発掘調査は昭和54年から二ヵ年に渡り直方市教育委員会が主体となって実施された。第1次調査（昭和54年9月17日～12月7日）では周辺地形図の作成と窯本体の約1/3が調査され、続く第2次調査（昭和55年9月10日～11月20日）によって窯本体全体が調査された。また昭和56年第3次調査（昭和56年5月19日～6月23日）では周辺水田部において工房跡が検出された。これらの発掘調査成果の概略は後述するが、近世陶磁研究に大きな影響を及ぼしたものといえる。しかし、用地未買収等の関連からそれ以上の調査は実施することができず、陶片堆積地である物原や工房・屋敷部分全体の解明は将来の課題として残された。

土地問題が解決に向かい、再びダム建設の動きが具体化してきたのは平成4年度のことである。福岡県教育庁北九州教育事務所は福岡県福智山ダム建設事務所から埋蔵文化財の有無について照会があったことをうけて、用地買収が済んだ地区的試掘調査を実施した。その結果、内ヶ磯窯関連の遺跡以外にも炭窯の存在を確認し、調査が必要であるとの回答を行った。

協議の結果、発掘調査は平成7年度から実施し、工事関連施設が設置される工房部から始められることとなった。物原まで含めると調査面積はかなりの広さとなり、また出土する陶片は膨大なものになると予想されたため、調査・整理期間は十分とられるように求められた。



第2図 第2次調査空中写真



第3図 福智山ダムと内ヶ磯窓跡の位置 (1/5,000)

### 3 平成7年度（第4次）の調査

調査対象地は内ヶ磯窓跡の西物原の裾部にあたる地点であり、調査前は梅林として植樹がなされていた。この地点はダム本体建設のための工事用道路がつくられる予定地であり、調査の優先順位としては高いものであった。調査区は西物原に接するK区と西に一段下がったL区に分けられ、その面積は合わせて600m<sup>2</sup>であり、窓にごく近い平坦面ということで、工房・屋敷跡の存在が予想された。調査は平成7年8月24日から重機を用いて表土を除去することからはじめたが、L区は既に削平されており、遺構は確認されず、表面採集により若干の遺物を採取したに止まった。K区もまた梅林造成時に地形の変更が加わっていると思われ、物原の裾が削られて、50cm程度の高さの石垣が組まれている。表土除去の結果、柱穴及び土壙が検出された。遺物はK・L区で合わせてパンケース150箱分の陶器片が出土した。調査は同年10月30日に現場を終了した。

平成7年度の調査関係者は次の通りである。

#### 福岡県土木部河川開発課

課長 北島祥光  
課長補佐 吉田栄治  
課長技術補佐 水流秀直  
建設係長 新免直樹  
主任技師 山本潔

#### 福智山ダム建設事務所

所長 西木千敏  
工務課長 諸英治  
技術主査 森忍

#### 福岡県教育委員会

総括  
教育長 光安常喜  
教育次長 松枝功  
指導第二部長 丸林茂夫  
文化課長 松尾正俊  
参事兼文化財保護室長 柳田康雄  
課長補佐 元永浩士  
参事補佐兼保護室長補佐 井上裕弘  
調査班参事補佐兼調査班総括 橋口達也  
調査班参事補佐 木下修  
調査班参事補佐 中間研志  
調査班参事補佐 小池史哲  
庶務  
管理係長 柴田恭郎  
管理係主任主事 高田裕康

#### 教育庁北筑後教育事務所

所長 十時栄一  
副所長 国武康友  
生涯学習課長 宮尾敏彦  
参事補佐兼文化班主任 高橋章（調査担当）



第4図 調査スナップ（平成7年度）

#### 4 平成8年度（第5次）の調査

平成8年度は、前年度に引き続き工房部分の調査が予定された。この部分、すなわち旧水田面である平坦部はバッチャープラント等ダム本体工事に欠かせないプラントが予定される地点であり、事前の発掘調査が急がれた。しかし、この年度は筑紫野インター・エンジ建設に伴う貝元遺跡の発掘調査が困難を極めており、職員総動員に近い体制がとられていた。したがって技師の配置には苦慮を強いられ、内ヶ磯窯の調査体制が整ったのは既に年度も押し迫った2月であった。そのため平成8年度に関してはいくらかでも調査を進展させ、残った部分に関しては次年度に継続することとした。調査はまず調査対象地について重機を用い表土を除去する作業から入った。幾分表土の除去作業が進んだ時点で作業員を入れて調査を開始した。調査は上流部のA区から入り徐々に下流に進めることとした。C及びD区では広い落ち込み部に多量の陶片が含まれる地点を確認し、深くなると予想されたためにこの部分については早めに作業を取り掛かった。

平成8年度の調査関係者は次の通りである。

##### 福岡県土木部河川開発課

課長 村上 治  
課長補佐 吉田栄治  
課長技術補佐 田村延行  
建設係長 目野勝弘  
主任技師 山本 錠

##### 福智山ダム建設事務所

所長 隅田知明  
工務課長 林田数也  
技術主査 高田 勇

##### 福岡県教育委員会

###### 総括

教育長 光安常喜  
教育次長 松枝 功  
指導第二部長 竹若幸二  
文化課長 松尾正俊  
石松好雄  
参事兼文化財保護室長 柳田康雄  
課長技術補佐 井上裕弘  
参事補佐兼調査班総括 橋口達也  
調査班参事補佐 木下 修（調査担当）  
調査班参事補佐 中間研志  
調査班参事補佐 小池史哲

###### 庶務

管理係長 黒田一治  
管理係事務主査 東 健二

###### 調査

調査班技師 岸本 圭（調査担当）



第5図 工房部（E区）の発掘調査風景

## 5 平成9年度（第6次）の調査

平成9年度は前年度に引き続き工房部の発掘調査を実施した。調査は五月の連休明けである5月6日から開始した。C・D区の落ち込み部に関しては遺構面近くまで下げていたが、その後の遺構検出を中心に実施した。さらにE区、F区、H区へと調査地点を移した。またダム建設の工事用道路の関係で、西物原の一部が削られる可能性がでてきた。西物原は平成10年度に発掘調査を予定していたが、工事用道路予定地部分を早急に終了させる必要が生じたために、工房部の調査を終了した時点で、対象部分について発掘調査を実施した。この部分については西物原の調査と共に平成13年度に報告を予定している。また窯の対岸にある炭窯跡についても工事用道路建設により破壊されるために事前に発掘調査を実施し記録保存することとした。工房部の調査成果については10月18日に現地説明会を開催し、約100名の参加者があった。

### 福岡県土木部河川開発課

課長	村上 治
課長補佐	的野正男
課長技術補佐	田村延行
建設係長	目野勝弘
主任技師	山本 潔

### 福智山ダム建設事務所

所長	白谷勇夫
工務課長	黒瀬正昭
副長	高田 勇

### 福岡県教育委員会

#### 総括

教育長	光安常喜
教育次長	松枝 功
指導第二部長	竹若幸二
文化課長	石松好雄
参事兼文化財保護室長	柳田康雄
課長技術補佐	井上裕弘
参事補佐兼調査班総括	橋口達也

調査班参事補佐 木下修（調査担当）

調査班参事補佐 新原正典

調査班参事補佐 中間研志

#### 庶務

管理係長	黒田一治
管理係事務主査	鶴我哲夫

#### 調査

調査班技師 岸本圭（調査担当）



第6図 現地説明会風景



第7図 現地説明会会場の陶器洗い体験

## 6 平成10年度（第7次）の調査

平成10年度は西物原の発掘調査を実施する予定であったが、工事用道路として林道を拡幅したいとの連絡があり、そのために東物原の裾部分が削られる可能性が生じた。拡幅の幅は広くはないが多量の陶片が確認されるために、西物原の調査に先立って発掘調査を実施することとした。その間に西物原部分の樹木伐開作業を地元の造園会社に委託して実施した。東物原の調査終了後は西物原に調査対象を移した。当該地は昭和54年からの第1次調査においては土地問題が解決しておらず、地形測量も終了していなかった。そこでまず西物原部分について地形測量を行い、1/100の地形測量図を作成した。発掘調査は裾部から順にグリッドを設定しつつ進行させた。11月4日には地元の小学校である上頓野小学校の六年生76名による体験発掘が実施された。また窯本体の保存に備えて佐賀大学林重徳教授・九州大学生島恵輔教授を招き今後の方針についての協議を実施した。調査は平成11年3月19日まで実施した。調査の経過・成果については平成13年度に報告予定である。

平成10年度の調査関係者は次の通りである。

### 福岡県土木部河川開発課

課長 原 俊樹  
課長補佐 的野正男  
課長技術補佐 齋藤和之  
建設係長 小林 彰  
主任技師 山本 潔

### 福智山ダム建設事務所

所長 波折紀文  
工務課長 黒瀬正昭  
副長 高田 勇  
技師 角 康二

### 福岡県教育委員会

#### 総括

教育長 光安常喜  
教育次長 藤吉純一郎  
総務部長 富永 熊  
文化財保護課長 石松好雄  
文化財保護課参事 柳田康雄  
参事兼課長技術補佐 井上裕弘  
参事補佐兼調査第一係長 橋口達也  
調査第一係参事補佐 中間研志  
庶務  
課長補佐兼管理係長 角 信幸  
管理係事務主査 鶴我哲夫  
調査  
調査調査第一係技師 岸本 圭（調査担当）



第8図 福地川における陶器の洗浄作業

## 7 平成11年度（第8次）の調査

平成11年度は発掘調査の最終年度であり、調査対象地は東物原である。調査は平成11年6月18日から開始した。調査前は低い灌木に覆われており、まずその伐間作業から開始した。この調査区は既に第1次調査時に地形測量が実施されており、今回は再びそれをすることはなかったが、乱掘によって地形が変化している部分が多く見られた。また次年度以降に予定された窯保存処置に対し、第1・2次調査で発掘された窯本体を再び露出させる作業を行った。さらに次年度以降に備え、窯保存の方針について文化財保護課と福智山ダム事務所との間で協議が為された。調査は平成12年3月13日に終了した。発掘調査の成果、及び保存対策の経緯については平成14年度に報告を予定している。

平成11年度における調査関係者は以下の通りである。

### 福岡県土木部河川開発課

課長 隅田知明  
課長補佐 的野正男  
課長技術補佐 齋藤和之  
建設係長 大場 優  
主任技師 住吉正浩

### 福智山ダム建設事務所

所長 波折紀文  
工務課長 近藤伸幸  
副長 中島邦雅  
技師 角 康二

### 福岡県教育委員会

#### 総括

教育長 光安常喜  
教育次長 藤吉純一郎  
総務部長 岩本 誠  
文化財保護課長 柳田康雄  
参事 井上裕弘  
課長補佐兼管理係長 角 信幸  
参事兼課長技術補佐 橋口達也  
参事補佐兼調査第一係長 児玉真一  
調査第一係参事補佐 中間研志

#### 庶務

管理係事務主査 吉武祐二  
管理係主任主事 田中利幸

#### 調査

調査第一係主任技師 岸本 主（調査担当）  
調査第一係技師 岡寺 良（調査担当）  
調査第一係技師 大庭孝夫（調査担当）

## 8 平成12年度（報告書作成）

本年度からは調査成果についての整理・報告書作成期間が充てられた。福岡県教育委員会は例年

数多く発掘調査を実施し、遺物量も膨大なものに上る。内ヶ磯窯跡はその中でも特に多く、遺物の箱数はパンケースにて4,000箱程度にも及んでおり、全体の調整の中で十分な整理期間を確保するのが困難な状況であった。

平成12年度における報告書作成の関係者は以下の通りである。

**福岡県土木部河川開発課**

課長 田村延行  
課長補佐 大草邦雄  
課長技術補佐 小林 彰  
建設係長 西田直人  
主任技師 住吉正浩

**福智山ダム建設事務所**

所長 植原睦男  
工務課長 近藤伸幸  
副長 中島邦雅  
技師 角 康二

**福岡県教育委員会**

**総括**

教育長 光安常喜  
教育次長 柳原英夫  
総務部長 岩本 誠  
文化財保護課長 柳田康雄  
文化財保護課参事 井上裕弘  
文化財保護課参事兼課長技術補佐 橋口達也  
文化財保護課課長補佐兼管理係長 川述昭人  
参事補佐兼調査第一係長 平野義峰  
佐々木隆彦

**庶務**

管理係事務主査 古武祐二  
管理係主任主事 鎮守俊明

**報告書作成**

調査第一係主任技師 岸本 圭（整理担当・原稿執筆）  
調査第一係技師 同寺 良（原稿執筆）  
調査第二係技師 大庭孝夫（整理担当・原稿執筆）

現場作業においては地元の内ヶ磯集落を始めとして多くの協力があって円滑に進めることができた。礫や竹の根が多く困難な作業条件であり、また冬は地形的にも極めて冷え込むといった環境の中で熱心に作業にあたられた皆様に感謝申し上げます。直方市教育委員会からは多くのご支援を頂いたが、特に文化財担当である田村悟氏には現場作業員の手配等、終始手を煩わせた。

調査担当者が研修等による不在時には文化財保護課から重藤輝行・吉田東明・森井啓次各氏からの応援を得た。調査及び整理・報告書作成に期間においては、近隣市町村文化財担当者、北九州教育事務所、九州歴史資料館、文化財保護指導委員、直方郷土史研究会等の多くの方々からのご支援、ご教示を受けたことに対し、感謝申し上げます。

## II 位置と環境

内ヶ磯窯跡は直方市大字頓野字二ノ瀬・下久保・白毛瀬に位置する。窯跡は旧筑前国と旧豊前国との境界をなす福智山（標高900m）の西側、鷹取山（標高633m）と雲取山（標高507m）との間に挟まれた内ヶ磯の谷の中ほどに位置する。福智山西側山麓の地質は、花崗閃緑岩類の地帯にあたり、良質の粘土層が豊富に産出することから、この地に多くの窯が築かれたと考えられる。この内ヶ磯窯跡周辺の遺跡を以下時代順に説明する。

### 縄文時代

縄文時代には、下新入地区の天神橋貝塚、植木の扇崎貝塚などの貝塚遺跡のほか、上境地区的奥長谷池西遺跡・和田遺跡で縄文土器、石器が採集されている。このほか、遠賀川や彦山川の河床で、縄文早期から晩期にかけての土器片が採集されている（直方市史編纂委員会1983）。

### 弥生時代

弥生時代の遺跡としては、上境地区では、福地神社境内遺跡で甕棺墓と箱式石棺墓各1基が検出されており、福地面遺跡では箱式石棺1基が露出している（直方市史編纂委員会1983）。また、水町遺跡群では、古墳時代後期の横穴墓群に近接して、弥生時代中期から後期にかけての土坑墓4、貯蔵穴1、小兒甕棺墓1が発掘されており土坑墓内から石戈の切先が出土しており注目される（田村1997）。このほか、桐の木遺跡で甕棺墓、保木原遺跡では貯蔵穴が認められ、尾辻遺跡・谷出口遺跡・中長谷遺跡などの弥生遺跡がある（直方市史編纂委員会1983）。下境地区では、猪の久保遺跡があり貯蔵穴などが検出されている。ほかにも屋敷遺跡・徳市遺跡・吉分遺跡・辻谷遺跡・黍田遺跡（田村1993a）といった弥生時代の遺物が検出される遺跡が数多く認められ、これら彦山川に面した台地上に位置する上境・下境地区周辺における弥生時代の遺跡の濃密さを窺わせる（直方市史編



第9図 雪化粧の福智山をバックに一手前竹藪が内ヶ磯窯跡－平成8年度調査



- |           |           |          |             |
|-----------|-----------|----------|-------------|
| 1. 内ヶ磯窯跡  | 2. 鷹取城跡   | 3. 雲取城跡  | 4. 上頓野宮ノ前遺跡 |
| 5. 水谷寺跡   | 6. 宅間窯跡   | 7. 丹山本窯跡 | 8. 墓ノ口窯跡    |
| 9. 岩谷高麗窯跡 | 10. 水町遺跡群 | 11. 兴國寺  |             |

第10図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

纂委員会1983)。また、頓野地区では、弥生時代中期の貯蔵穴などが見つかった頓野横道遺跡(馬田2000)があり、感田地区的感田上原遺跡では、住居跡4、貯蔵穴84が検出されている(直方古代文化財研究会1969)。そして、遠賀川西岸にあたる下新入地区にも、弥生遺跡は数多く認められ、帯田遺跡では土坑墓35、小兒塚墓5が発掘され、31号土坑墓からは5点の異形勾玉などの新潟県糸魚川周辺で産出された硬玉製の装身具が出土し、注目される(田村1992)。辻の上遺跡でも住居跡1、貯蔵穴2が発掘されている(木下1993)。このほか、鴨生田遺跡・平原池の上遺跡などの弥生遺跡も確認されている(直方市史編纂委員会1983)。

#### 古墳時代

直方市内の古墳時代の遺跡は、主に市内東部の上境・感田・頓野地区に集中する。古墳時代前期には、内ヶ磯窓跡から南約7kmの地点にあった三本松古墳が知られる。箱式石棺から内行花文鏡が出土しており、出土地点をはじめとして詳細が不明な点は多いものの重要視される遺跡である(水ノ江1997)。

続く中期には、上境地区の福地神社2号墳があげられ、竪穴系横口式石室から滑石製の管玉8点が出土している。

そして、後期には多くの群集墳や横穴墓が造られる。福地神社1号墳では、後期後半と考えられる横穴式石室が発掘されている(直方市史編纂委員会1983)。また横穴墓群として注目されるのが、上境地区的水町遺跡群である。この遺跡は1994年から1996年まで直方市教育委員会により発掘調査が行われ、横穴墓群56基(70基確認)、古墳1基が発掘され、線刻画などが見つかったほか数多くの副葬品を検出し、横穴墓群をほぼ全面発掘した調査として注目される遺跡である(田村1997)。この他にも、上境地区の万五郎横穴墓群や頓野地区的勘木田横穴墓群などがあげられる。直方市域においては、墳丘を持つ古墳よりも横穴墓の分布が極端に多いことが特徴的であるが、方城町伊方には先述の三本松古墳に近接して本地域最大規模の横穴式石室(全長11.6m)を有する伊方古墳がある(水ノ江・新原1998)。

古墳時代の集落遺跡としてはいまだ大規模なものは発掘されていないが、辻の上遺跡でカマドを持つ住居跡1が検出されており、後期に位置づけられる(木下1993)。

#### 奈良時代

奈良時代の遺跡は、あまり確認されてはいない。下境地区的高山田遺跡と笹尾遺跡は、ともに国道200号線直方バイパスの建設工事に先立って発掘調査され、前者は掘立柱建物をもつ集落跡とみられ、後者は炭化物が充満した土坑が出土している。

#### 中世

平安時代の遺跡としては永満寺宅間の経塚があげられる。経筒は、粗造の石室に納められ、周囲は木炭で包むように埋まれており、天永元(1110)年、承久3(1115)年の年号が記されている(直方市史編纂委員会1983)。

鎌倉時代の遺構には、下新入の帯田遺跡があり、掘立柱建物跡2、土坑墓2が検出されている(田村1992)。

赤池町上野には曹洞宗興國寺がある。この寺院は南北朝時代に開かれた臨済宗宝覺寺を前身とするものである。寺には開山と仰がれる無縫元晦の座像をはじめとして多くの寺宝が伝えられている(九州歴史資料館2000)。

室町時代から戦国時代には、上領野地区に領野宮ノ前遺跡が当該時期の遺跡としてあげられる。この遺跡は1991年から92年にかけて直方市教育委員会によって発掘調査が行われ、大小42棟のもの掘立柱建物を含む集落跡の存在を明らかにした。中心となる時期は15世紀から16世紀にかけての時期で、中でも周囲に溝や柵を巡らし、廻付きの大型掘立柱建物も検出されており、豪族居館の可能性が指摘されている（田村1993b）。

周辺には多くの戦国城館も築かれている。内ヶ磯窯跡の北側にあたる標高607mの雲取山山頂には、雲取山城があり、永禄年間の麻生氏の居城とされている。一方、雲取山から内ヶ磯窯跡をはさんで南側の標高631mの鷹取山山頂には、鷹取城があり、主郭部の周囲には畝状堀群が見られるように、北部九州における典型的な戦国末期の在地系城郭であるが、慶長6（1601）年、黒田氏により筑前六端城として主郭部付近に改修の手が加えられ、主郭部の石垣や外折形の城門にその痕跡を見いだすことができる（副島1987、馬田1988・89、田村1990・91）。そして、鷹取城の廢絶の契機は内ヶ磯窯跡が開窯したとされる慶長19（1614）年の翌年（元和元年）に出された一国一城令であり、内ヶ磯窯との関連が注目される。このほか、感田の感田城跡や、下境の光福寺館跡などの城館が残されている。

#### 近世

内ヶ磯窯跡の西5kmには現在の直方市街地が展開している。この市街地は元和9（1623）年に攝岡藩の支藩として東蓮寺藩が成立したことにより形成されたものであり、その街路は一部を除き現在でも旧状を保っている。また「直方懸郭図」という絵図が残っており、そこからも元禄年間の状況を復元することができる。更に近年の発掘調査成果によってもその具体的な様相が徐々に明らかにされてきた（田村1995）。東蓮寺藩はその後直方藩と名を変え、享保5（1720）年に廢藩となるまでの約100年間の歴史をもつ。

16世紀末の文禄・慶長の役を契機として、朝鮮半島の多くの陶工が俘虜として日本に連行され、各地で陶磁器の生産が盛んになる。筑前直方においても黒田氏に仕えた陶工八山によって窯が開かれることになる。いわゆる高取焼の発端である。直方市永満寺に所在する宅間窯跡は、その最も初期の窯と考えられており、発掘調査によって焚口から窯尻まで焼成室6室と焚口1室の全7室からなる地上式の割竹型の登窯と判明している（副島1983）。この宅間窯で数年間操業した後、『筑前國統風土記』によると慶長19（1614）年、今回報告する内ヶ磯窯に窯を移したといわれている。またほぼ同じ時期に隣の豊前国においても尊旨によって上野焼の製陶が始められる。古上野の代表的な窯である窯ノ口窯跡は宅間窯跡の僅か南東約1kmの地点にあり、発掘調査により全15室からなる大規模な登窯が検出された（三上1950）。窯ノ口窯跡周辺には同じく上野焼の窯跡である皿山窯跡・岩屋高麗窯跡が残るが実態は不明な点が多い。

この他に近世の遺跡で発掘調査が実施されたものには、江戸時代中期の一宇一石経塚3基が調査された蘭牟田遺跡（副島1984）が挙げられる。



第11図 鷹取城（木島孝之氏作図）

## 参考文献

- 木下修編 1993『辻の上遺跡』福岡県文化財調査報告書第112集 福岡県教育委員会
- 九州歴史資料館編 2000『豊前上野興国寺』九州の寺社シリーズ17
- 副島邦弘・木下修編 1982『内ヶ磯窯跡』直方市文化財調査報告書第4集
- 副島邦弘編 1983『永満寺宅間窯跡』直方市文化財調査報告書第5集 直方市教育委員会
- 副島邦弘編 1984『蘭牟田遺跡』直方市文化財調査報告書第7集 直方市教育委員会
- 副島邦弘編 1987『筑前鷹取城跡』直方市文化財調査報告書第8集 直方市教育委員会
- 田村悟編 1990『筑前鷹取城跡』IV 直方市文化財調査報告書第11集 直方市教育委員会
- 田村悟編 1991『筑前鷹取城跡』V 直方市文化財調査報告書第12集 直方市教育委員会
- 田村悟編 1992『蒂田遺跡』直方市文化財調査報告書第13集 直方市教育委員会
- 田村悟編 1993a『黍田遺跡』直方市文化財調査報告書第14集 直方市教育委員会
- 田村悟編 1993b『上頓野宮ノ前遺跡』直方市文化財調査報告書第15集 直方市教育委員会
- 田村悟編 1995『須崎町公園遺跡』直方市文化財調査報告書第18集 直方市教育委員会
- 田村悟編 1997『水町遺跡群』直方市文化財調査報告書第20集 直方市教育委員会
- 直方古代文化財研究会編 1969『惑田上原遺跡発掘調査概報』直方市教育委員会
- 直方市史編纂委員会編 1983『直方市史』資料編
- 馬田弘稔編 1988『筑前鷹取城跡』II 直方市文化財調査報告書第9集 直方市教育委員会
- 馬田弘稔編 1989『筑前鷹取城跡』III 直方市文化財調査報告書第10集 直方市教育委員会
- 馬田弘稔編 2000『頓野横道遺跡・浦田池南遺跡』福岡県文化財調査報告書第149集 福岡県教育委員会
- 三上次男 1950「上野釜の口占窯」『陶説』28
- 水ノ江和同編 1997『伊方小学校遺跡・宝珠遺跡』方城町文化財調査報告書第4集 方城町教育委員会
- 水ノ江和同・新原正典編 1998『伊方古墳・方城岩屋磨崖梵字曼荼羅・野添遺跡群』  
方城町文化財調査報告書第5集 方城町教育委員会

### III 内ヶ磯窯の概要と既往の調査

内ヶ磯窯は慶長19（1614）年から寛永元（1624）年に操業されたと伝わる高取焼の登窯である。高取焼については『高取歴代記録』や『高取家文書』、『筑前国統風土記』といった史料が残されており、そこから変遷を窺い知ることができる。開祖である高取八山は豊臣秀吉の朝鮮侵攻の際、黒田長政に従って渡来した陶工である。高取焼は黒田藩の御用窯として慶長12（1607）年に内ヶ磯窯より南に3km離れた所に位置する永満寺宅間窯で焼き始められた。その後、今回報告する内ヶ磯窯に窯を移すこととなる。内ヶ磯窯跡の終焼の時期については、藩主の怒りにふれ八山が浪人となり嘉麻郡上山田唐人谷の山田窯に窯を移した寛永元（1624）年頃と考えられる。これら宅間・内ヶ磯・山田の各窯で焼かれた高取焼は「古高取」と称され、古田織部の影響を強く受けた作風として知られる。中でも内ヶ磯窯は製品の多様性や生産規模から考えて古高取を代表する窯といつても過言ではなかろう。

内ヶ磯窯跡の発見は、九州における考古学の先駆者である中山平次郎博士による。博士は貝原益軒の『筑前国統風土記』をもとに現地踏査を行い、窯の場所を突き止めた。この経過及び遺物の観察については『考古学雑誌』第5巻第6号に「高取焼最古の二古窯跡と其遺物」と題して発表されている。中山平次郎博士により採取された陶片は、現在九州大学考古学研究室において「中山コレ



第12図 内ヶ磯窯跡全景（昭和55年度）

クション」として保管されている。

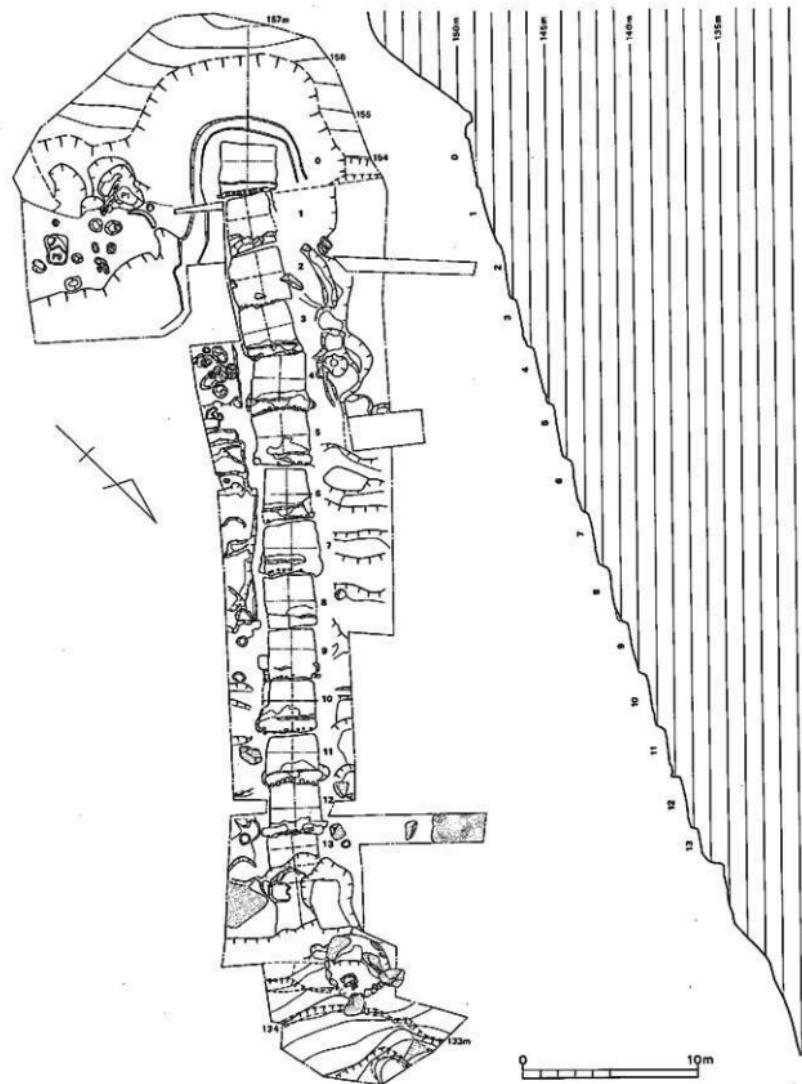
内ヶ磯窯跡の本格的な調査にメスが入ったのはダム建設計画が動き出した昭和54年からである。調査は3ヵ年にわたって実施され、その成果は1980・81年の概報、1982年の本報告としてまとめられている。初年度である昭和54年度（第1次調査）では窯尻を含めた9室が、更に翌年度（第2次調査）には6室が調査され、焼成室14・焚口1の15室からなる連房式登窯の全容が明らかとなった。その規模は全長46.5m、焚口から窯尻までの比高差15mという長大なものである。焚口前面の平坦面では石組み造構が確認された。これはその位置から考えて窯祭祀に関する遺構かと想定される。また窯本体の1・2室の東側にあるテラス面が調査され、その遺物の出土状況等から焼成品の選別場としての機能が想定された。昭和56年度は窯正面にある工房推定地の発掘調査が実施された（第3次調査）。今回発掘調査を実施し本書に報告する調査区はこの昭和56年に調査が実施された地点の隣接地である。第3次調査が実施されたのはG区及びH区である。まずG区では建物跡と土壌群が確認された。建物跡は調査面積の関係上調査区外に伸びており、今回の発掘調査ではその続きを確認することも念頭において実施された。土壌は9基確認され、粘土溜めに用いられたものや、釉薬の原料かと考えられる灰を貯蔵したものが含まれる。またH区でも同様の土壌が3基確認されている。

その後、永満寺宅間窯跡や山田窯に後続する白旗窯跡、更に小石原村に展開する鼓釜床窯跡・中野上の原窯跡・一本杉窯跡等の発掘調査が実施され、その成果は考古学・美術史の分野に大きな影響を与えた。特に内ヶ磯窯に関していえば、従来は「古唐津」と分類されていたものの中に内ヶ磯窯の製品と見られるものが多く含まれている事実が判明した点が大きい。今回の発掘調査においても従来見られなかった遺物が多数出土しており、改めて古高取の多様性が印象づけられた。今後も古高取とそれを取り巻く環境についての研究が盛んとなることを期待したい。

なお、今回の発掘調査ではG・H区を拡張する形で調査区を設けたものがあり、同様に土壌が検出されたが、過去の調査成果との混乱が無いように土壌番号を第3次調査の続きでつけることとした。ただし調査時は1から順番につけているために、出土品に付せられているラベルと報告するものとは名称の変更がなされている点を断っておきたい。また第1～3次調査においては標高が何らかのミスで本来よりも丁度2mずれており、ここに訂正する。

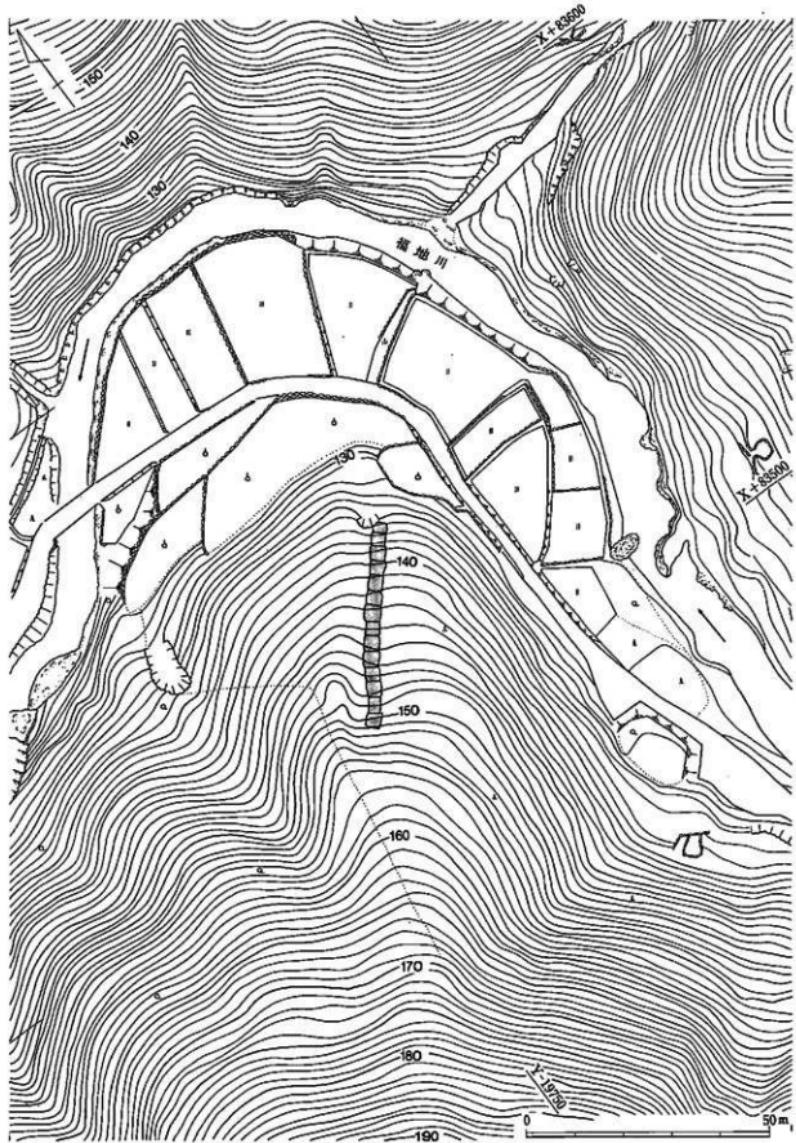
#### 古高取焼関連主要文献

- 木下修編 1980『内ヶ磯窯跡』I 直方市文化財調査報告書第2集  
木下修編 1981『内ヶ磯窯跡』II 直方市文化財調査報告書第3集  
柄内禮次 1935『古高取山田窯』  
副島邦弘・木下修編 1982『内ヶ磯窯跡』直方市文化財調査報告書第4集  
副島邦弘編 1983『永満寺宅間窯跡』直方市文化財調査報告書第5集  
高取静山編 1979『高取家文書』雄山閣  
中山平次郎 1915『高取焼最古の二窯址と其遺物』『考古学雑誌』第5卷第6号  
西田宏子・尾崎寅人編 1992『筑前高取焼』福岡県史文化史料編



第13図 内ヶ磯塚跡実測図 (1/300)

前島邦弘・木下修編 1982「内ヶ磯空跡」直方市文化財調査報告書第4集を改変



第14図 内ヶ磯踏跡周辺地形測量図 (1/1,000)



第15図 内ヶ磯古跡遺構配図 (1/300)

## IV 調査の記録

### 1 各調査区の概要

調査成果の説明の手順として、まず各調査区の概要を述べ、次に検出された遺構の内容について記述する。各調査区では川へ向かって落ち込む部分、或いは物原からの流れ込み、表土に遺物包含層がある。包含層出土遺物については、各区に分けて説明するには考古学的に意味は少なく、また分けることによって器種毎の説明が煩雑になりかねないので、包含層出土遺物として一括して整理する。遺構から出た遺物についてはそのセット関係を重視し遺構毎に遺物を整理して概要を記す。

### A区の調査

A区は工房推定地の最も上流部に位置する。東側はすぐに福地川、西側は林道を挟み内ヶ磯窯跡東物原の裾という地形的に狭くなる位置である。内ヶ磯窯跡東物原は急峻な斜面であり、陶片が散在している状況であった。A区は水田として利用されていたが、水田床土層を剥ぐと調査区の東半部分では多量の川原石が出現し重機での作業も困難となった。したがって既に福地川により侵食されていると考えられ、包含層の発掘を終えた時点で調査を終了した。遺構は浅い落ち込み以外は検



第16図 内ヶ磯窯跡工房部空中写真 (B~FIG)

右側竹藪が内ヶ磯窯本体

出されなかった。

A区の出土遺物は、林道を挟んで拡がる東側原から転落してきたものと考えられる。表土と若干の包含層からパンケース6箱分の陶片が出土した。

### B区の調査

B区は工房推定地の中でも上流側で、A区の下流側に続く部分である。C区の東側であり、一段低い地形となる。水田として造成されており、すぐ東側は福地川が流れ、北側には更に低い水田面がある。福地川及び北側水田へは比高差がかなりあり、水田造成に伴うと考えられる石垣が組まれている。遺構はごく少ないが、福地川による侵食を受けた結果であろう。調査区北東隅で遺物がおびただしく出土する土壤が検出されたが、川へ向かって落ちる物的な性格のもの可能性がある。

### C区及びD区の調査

調査前においてはC区・D区は水田によって区分されていたが、高低差がないこと・D区の面積が少ないと、両区に遺構がまたがることをもって、区を分けずに説明を行う。

まず表土剥ぎを行った結果、C区の中央付近に南北に細長く地山が検出され、西側は遺物を多量に含む落ち込みが、また東側は福地川にむかって落ち込む部分が認められた。その時点で検出された地山部分には遺構は少なく、西側の落ち込み部は重機を用いて若干下げたところ、完形品を含む多量の遺物が出土したために手掘りで下げるに至った。

D区についても西側にC区から続く落ち込み部があり、多量の遺物が見え隠れする状況であった。



第17図 A区全景（南東から）



第18図 B区全景（南西から）



第19図 CD区全景（南東から）

東側は比較的広く地山が検出され、白色粘土を含む土壌が確認された。さらに東側は福地川への落ち込みであるが、面積は広くない。

C区の北西部からD区の西部にかけて南北に広い大きな落ち込みがあり、多量の遺物が出土した。落ち込みは、北及び西へも延びる。北へはE区との間に巨石を組んだ石垣がある。また西側は林道であり道路付け変えることによって調査することを考えたが、平成9年度の調査で林道部付近は大きく地山が掘削されており、比較的残りが悪いことが想定された。またこの地点は福智山ダム建設に係る工事によって掘削されず盛土されることから、調査は実施しないこととした。

落ち込み内には上塙が7基検出された。それに対し、落ちこみ上面ではピットが検出されたものの依存状態は悪く、ある程度水田造成時に削平されたものと見られる。川への落ち込み部では検出面で焼土・ピットが検出されたが、依存状態は悪く、ごく浅い。

### E区の調査

重機による表土剥ぎによって地山と考えられる面を確認し、その面でピット群と若干の粘土土壌が確認された。しかし礫が多く遺構は見難い。また埋土が異なる小ピットが多数確認されたが、遺物も出土せず擾乱と考えられる。調査区の西側は不整形の落ち込みと粘土が点在し、粘土付近は土壌の存在が予想された。東側には調査区を斜めに横切る細い溝状遺構が確認されたが、調査の結果これは誤りであり、落ち込み部の堆積土が溝状に検出されていたものと判明した。調査区の北東側は大きな落ち込み部となるが、上層は無遺物層であり、下層からはまとまった量の陶片が出土した。創業時近くに堆積した包含層の上に一気に洪水等により堆積した状況である。E区では北東側落ち込みに対してほぼ直交する深い溝が検出された他、土壌4基、等間隔に並ぶピット群（櫛か）が確認された。調査中に一つのピットから水指が出土したが遺憾ながら盗難にあった。

### F区の調査

F区とは昭和56年度の第3次調査時に調査されたG区の南隣であり、標高もF区の方が若干高い程度である。表土剥ぎに際してはG区との境界を無くし連続させる形をとった。

表土剥ぎの結果、特にG区との境付近に多数の粘土土壌が検出され、炭化物土壌の存在も確認された。調査の結果、土壌は12基確認され、それらの上塙を取り囲む形で掘立柱建物が検出された。これとは対照的に調査区南側における遺構は希薄にみえた。地形は南側のE区に向かって上り斜面となっていたものが、水田造成時に削平されたものであろうか。調査区北東部を中心として福地川に向けての落ち込み部があり、遺物包含層が形成されている。遺憾ながら表土剥ぎ直後にF区土壌1（粘土溜め）から粘土が何者かに持ち去られた。

### G区の調査

G区の大部分は既に昭和56年度に発掘調査が終了している。今回の調査ではF区との繋がりを理解することと、前回の調査で検出されていた掘立柱建物についてその続きを確認することを考え、F区に至るまで調査区を拡張するような形をとった。また前回の調査時の図面との合成が容易になるように前回の調査区を部分的に剥いて調査を実施した。調査の結果、新たに土壌が1基確認された。また掘立柱建物の延長を確認したが、遺構の残存度は良くなかった。



第20図 E区全景（空中写真）



第21図 F区全景（南から）

第3次調査において土壤は9基検出されているために、今回調査を行った土壤に関してはその続きとして土壤10と呼ぶこととする。

#### H区の調査

H区の一部もまた昭和56年度に調査が実施されていたが、今回はその東側を重点的に調査することとした。しかし調査開始時に前回の調査区の正確な位置がおさえられていなかったので大きく重複するものとなつた。

調査区南側では明灰色の埋土のピットが等間隔に並ぶが、遺物が出土せず、埋土の色調も異なるために擾乱として扱うべきであろう。またこれと同様の埋土の不整形ピットが数個検出されているが、同様に擾乱と考えられる。

H区では土壤が3基の他、落ち込み部からは多量の遺物が出土している。H区の福地川への落ち込みもE区と同様に比較的厚い無遺物の間層が認められる。第3次調査においては土壤が4基確認されているので、今回調査を行った土壤に関してはその続きとして土壤5・6・7とそれぞれを呼ぶこととする。



第22図 第3次調査G区全景（南から）



第23図 第3次調査H区全景（南から）

平成8・9年度に発掘調査を実施した地点は以上のA～H区である。これらの地点は調査終了後重機による埋め戻しを行った。窯本体については保存工を施した上でダムに水没させることとなつたが、工房部についてはそのような特別な措置は施されない。この工房部にはダム工事時のセメント開連施設が構築されることとなつたが、大部分は盛土されることとなり、極力遺構を破壊しないように、福智山ダム建設事務所及び工事施工業者に依頼したことを付記する。



第24図 埋め戻し終了後の内ヶ磯窯跡工房部（F区から福智山方面を望む）

## K・L区の調査

平成7年度に発掘調査を実施した第4次調査区は窯本体北東部の窯本体と林道に挟まれた東西に細長い二段のテラス面で、今年度報告のA～J区とは林道を挟んで南側に位置する。調査時は東からA・B区として調査したが、報告の便宜上、内ヶ磯窯跡（直方市文化財調査報告書第4集）の工房部A～J区の続き、テラス面を東からK・L区とする。

第4次調査区は以前は梅林として植樹がなされていたため、上部が削平されており遺構の残りはあまり良くない。また林道により、調査区の北～北東側が弧状に削られていたため、土壌1～4の一部はこのため削平されていた。L区は窯廃棄以後の削平のため、遺構は確認されなかったため、包含層出土遺物と一緒に報告する。

遺構は、掘立柱建物1棟と柵列状のピット列、土壌17基を確認した。なお、調査時は17基の土壌を確認していたが、担当者の不注意により、土壌1～3号以外の土壌出土遺物は遺構と照合できなかったため、土壌一括遺物として報告する。そのため今回は土壌4～8に関しては遺構図のみ報告するが、来年度以降の報告書の中で照合できた遺物はできるかぎり補足していきたい。



第25図 K区全景（東から）

## 2 検出された遺構

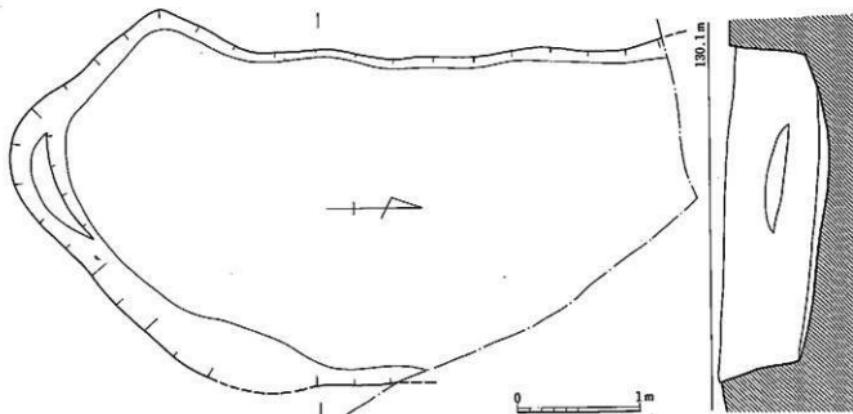
### B区土壌1 (第26図)

調査区の北東隅にあり、土壌の北東部分は水田造成時の石垣が組まれているために検出できない。平面プランは幅約2.8m、長さ4.8m以上の不整形な方形。深さは35cm程度である。遺物は多量に出土しており、パンケース約30箱に及ぶ。出土状況は多量の陶片が厚く堆積する状況で、接合する遺物は少ない。川側の遺構のラインが不明瞭である点や、遺物の出土状況から考えて、川へ落ちていく地形に陶片が堆積したものとも捉えられ、性格は「物原」に近い可能性がある。

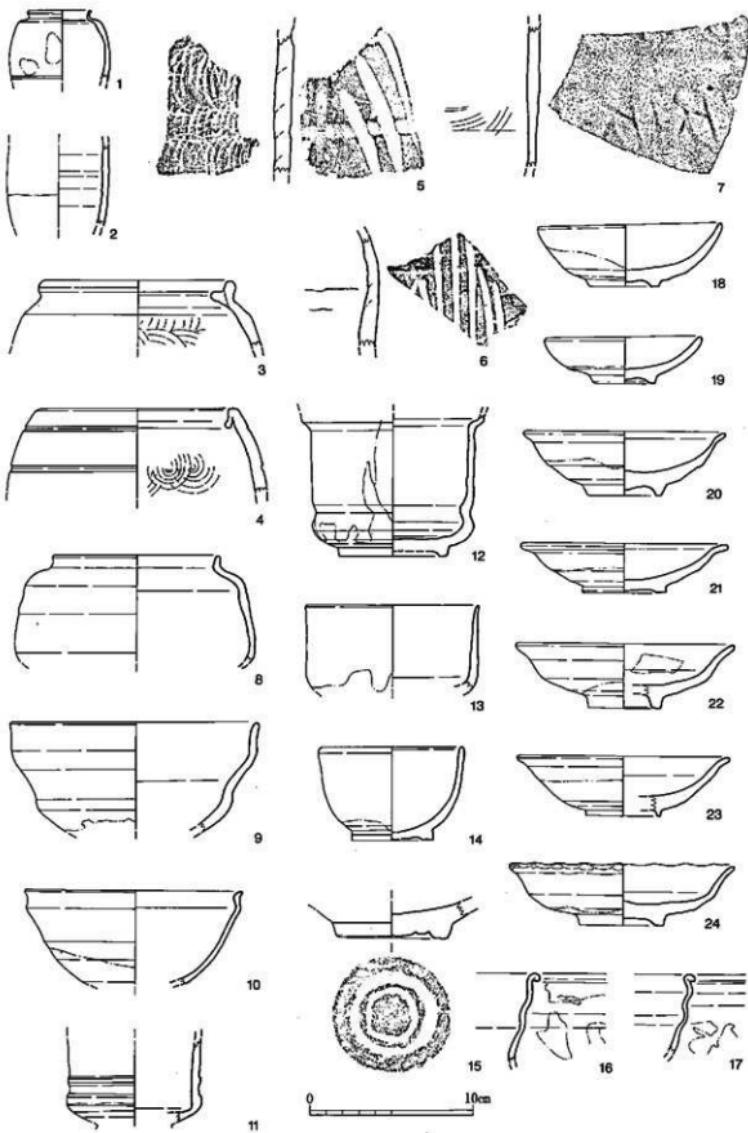
### 出土遺物 (第27~29図)

1・2は茶入。なで肩の肩衝茶入で、胴部は丸みを持つ。胴部最大径よりも下位に刷縞の沈線がめぐる。口縁部は緩やかに外反させる。内面の轉轍目はごく弱い。釉は茶褐色の鉄釉であり、部分的に円形に釉が抜け露胎となる。2は胴部で、筒形を呈し底部に向かってやや内傾する。内面の轉轍目は弱い。釉は明茶褐色。外面の下半は露胎で、火擣がみられる。

3から8は水指。3は素焼きの口縁部。蓋受は貼り付けにより、強く内面に張り出す。明瞭な肩部をもち、壺形を呈するものと見られる。胴部内面には叩きの當て具痕である青海波文を残す。4は内傾する胴部をもつ水指で、口縁部を短く内側に折り込み、僅かにつまみ出して蓋受とする。外面には沈線を巡らせており、現況で2条確認される。胴部は叩き調整で、内面に青海波文を残す。焼締であり、硬質。5は水指の胴部片で図の左辺がコーナー部となり、方柱状をなすものであろう。外面には太い彫文を縱横に描く。内面は青海波文を残すが、粘土紐の接合痕を顕著に残したままである。6は彫文を縦に多く刻む胴部片。故意に歪められており、径を出し得ない。内外面とも施釉するが、発色せずに鶯色を呈する。7はかなり大形になると見られる胴部片。叩き調整で、外面には幾何学的な叩き痕を残し、内面には青海波文を残す。胎釉を掛け、褐色の伊羅保釉となる。8は壺形を呈するものであるが、つくりが良く水指として作られたものかもしれない。直立する口縁部



第26図 B区土壌1 灰測図 (1/40)



第27図 B区土壤1出土遺物実測図① (1/3)

を持ち肩は緩やかに張る。下端は底部に統くためか内湾する。土灰釉を掛け透明度の高い緑色を呈し、部分的に青みを帯びた乳濁色に発色する。

9から17は碗。9は半鉢形の大ぶりな碗である。薬灰釉を掛け、乳濁色に発色する。内外面に壁土塊が多数付着する。10は天目形の碗。土灰釉を掛け明緑色に発色する。11は筒形の碗。薬灰釉を掛け乳濁色を呈するが、発色は良くない。体部下位に細い突帯を巡らせ、体部と底部との境は幅広の突帯状とする。次の12は大形の筒形碗であり、体部下半は一段のくびれ部をつくるが、11の突帯はこうしたくびれ表現の痕跡器官であろうか。12の筒形碗は蓋受状に口縁部を作り出す。褐色の鉛釉の上に乳濁色の薬灰釉を掛ける掛け分けである。底面に厚く黒土が付着する。模を敷いて焼成されたことがわかる。13は半筒形の碗で土灰釉を掛け、透明度の高い浅緑色を呈し、一部乳濁色に発色する。14は小振りの丸形碗。薬灰釉で青みを帯びる乳濁色を呈し、内面は未発色である。15は素焼きの碗或いは大皿の底部。高台を削りだした後、ゆっくりした回転で高台内に同心円を刻むいわゆる釘彫高台である。16と17は杏形碗の口縁部。口縁端部は丸く外へ折り返す。16は薬灰釉、17は鉛釉のそれぞれイッチン掛けである。18から24は小皿。18と19は丸形で、18は褐色を呈する鉛釉。19は大部分剥落するが、土灰釉と見られる。19は内面に多量の壁土が付着し、また体部外面には模が付着する。20・21は縁付形で短く外反させた直線的な口縁部を有する。20は鉛釉で、見込に胎十日跡を4ヶ所残す。21は薬灰釉で乳濁色を呈する。22から24は縁反形で、緩やかに外反する口縁部を有する。22・23は鉛釉で褐色～濃青色を呈し、22では内面の一部に釉がかからない部分がある。24は緑なぶりとする。三日月高台となり、釉は未発色。

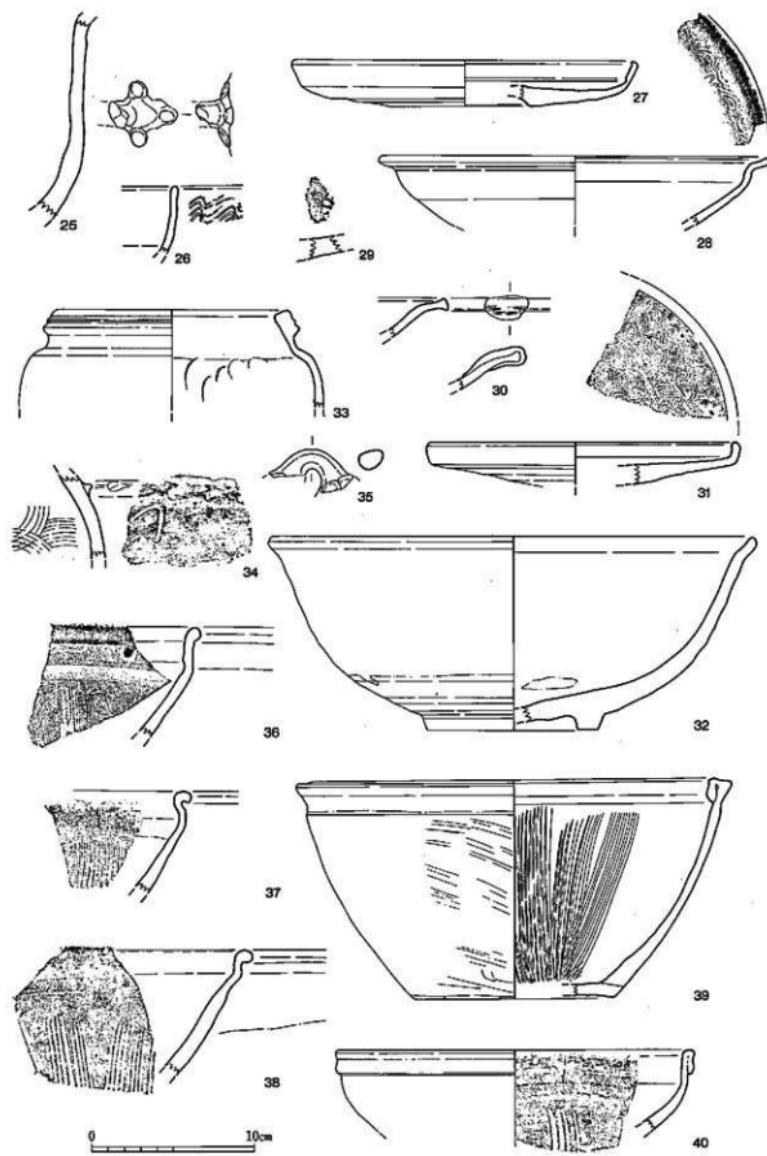
25は深鉢でかなり大形になるものと見られる。断面円形の把手がつくもので、付根には3個の円形浮文が添えられる。釉が厚く掛かるが未発色で灰白色を呈する。

26は縁立形の大皿の口縁で外面に波状文を描く。土灰釉で透明感のある緑色を呈する。27は縁立形の中皿で、葵筋底。薬灰釉を掛けたが、発色が悪い。28は縁付形の中皿。口縁部上面は内湾し、波状文が巡らされる。鉛釉で褐色を呈する。29は大皿の見込につけられた菊花文押印。素焼きである。30は縁付形の大皿の口縁部で、割れた個所に封して補修がなされている。補修は削口に粘土を巻いて布で押さえる手法を探っており、布目が明瞭に残る。薬灰釉を掛け、乳濁色に発色する。31は焼締の縁立形中皿。見込に十字方向及び円周に沿う方向に波状文を描く。32は縁反形の中皿。見込に推定4ヶ所の方形鉛剥ぎがある。鉛釉を掛け褐色に発色するが、外面は輪廻の凹部に厚く入ることによって濃く発色し沈線状となる。

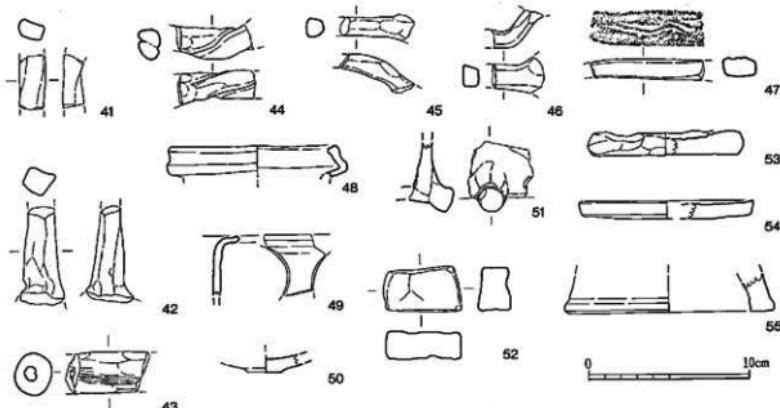
33は焼締の小形壺。口縁部は外に折り返し断面方形に整形し、側面に2条の沈線を入れる。胴部は叩きにより内面には半円形の当て其痕が連続する。口縁部上面には貝目跡を残し、別個体に出来する鉛釉が付着する。34は素焼きの壺の肩部。外面には綱状突帯が巡り、波状文も描かれる。内面は青海波文がつく。35は四耳壺の耳。鉛釉で暗褐色を呈する。

36から40は擂鉢。40は焼締で、口縁部は外に折り返して整形される。40以外は施釉されるものである。36から38はいずれも口縁端部を強く外反させて端部を丸くするもの。36は鉛釉で褐色、37は緑色の土灰釉の上から乳濁色の薬灰釉を掛けた二重掛け、38は鉛釉で褐色～濃青色を呈する。39は口縁部を内側に折り返すタイプである。内部に灰白色粘土が詰まつた状態で出土した。体部は叩き調整であり、外面に平行叩き痕が残される。外面は口縁部を除き施釉されるが未発色である。

41から47は紐状を呈する遺物。41・42は同一固体と考えられ、42は広がる形状から付根部と考え



第28図 B区土壤1出土遺物実測図② (1/3)



第29図 B1区土壌1出土遺物実測図③ (1/3)

られる。断面方形の紐を握る形状である。素焼きで軟質。43は中空の直線的な棒状のもの。中空部は丸めて整形したものではなく穿孔したものとみられ、内面には穿孔時の稜がみられる。素焼き。44は2本の粘土紐を巻き上げて成形したもの。灰釉を掛け、透明感のある緑色に発色する。45と46は屈曲する形状から考えて鉢の把手とみられる。断面形状は円形である。45は素焼きで、46は釉薬が掛け褐色を呈する。47は断面方形の棒状のもので、屈曲はほとんどない。片方の広い面に波状文を描く。素焼きである。

48は故意に歪めた二重口縁形の口縁部である。花生であろうか。全体に薄く施釉するが、未発色で鷺色を呈する。

49は円形の透孔が入った椀。直立する体部をもち、口縁部は直角に屈曲させた後、端部を軽く上方へ摘み上げる。全体に素灰釉を施釉し乳白色に発色する。

50は底部中央の外面にボタン状の突起を持つ底部片。素焼きである。筆立とみられる。

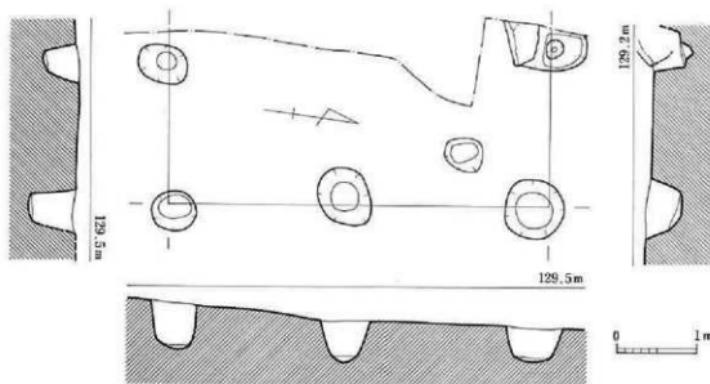
51は水指の底部であろうか。底部角に斜め下方向に円形の突起を有する。全体に釉薬を掛け褐色に発色する。突起部先端は別固体に付着していたためか、釉が剥げ落ちている。

52は用途不明の直方体。全体をナテにより調整するが、広い2面は調整が粗雑で凹凸を多く残す。窯道具の一種かもしれないが、強い火を受けたような状態ではなく、素焼きである。53と54はハマである。簡単に粘土を円盤状に伸ばしたもので、片面には板の圧痕が多数付着する。

55は大形の高台であろうか。端部外面は丸みを持って肥厚させる。焼締で硬質である。

### CD区1号建物（第30・31図）

CD区西落ち込み内にて検出された掘立柱建物で、西側（窓方向）に続くが林道下となり実態は不明瞭。山の斜面が近いために長くは延びないと思われる。主軸はほぼ北を向き、7度西に振れる。2間×1間分のみ検出された。柱穴は検出面での径が60～70cm、深さは50cm程度でしっかりとしたものである。南北方向の柱間は220cm、東西方向の柱間は190cm。



第30図 CD区1号建物実測図（1/60）



第31図 CD区1号建物（南から）

### CD区土壤1 (第32~34図)

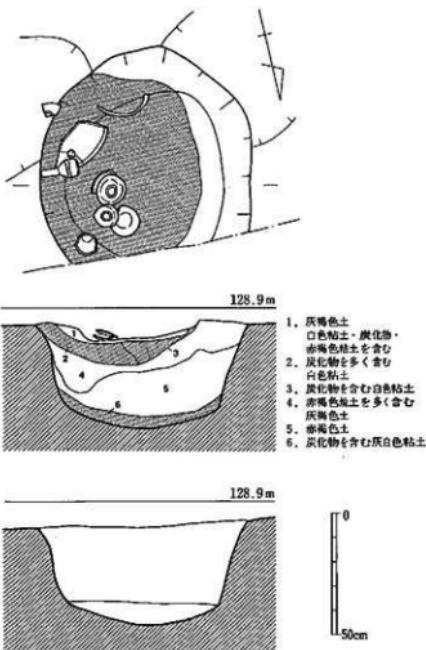
CD区西落ち込みの北西隅にて検出された。

北側にやや延びる。検出面にて白色粘土の広がりを確認し、皿類がまとった形で出土した。この土壤周辺は粘土ブロックや焦土などが多数散在し、踏み締められたように固い包含層が形成されており、遺構が判り難い状況であった。遺構検出を試みたところ、土壤はそれよりも一回り大きくなるものと見られ、径が85cmのほぼ正円となる平面プランが確認された。検出面において伏せた状態での皿や異形の瓶、土玉の他に錐とみられる鉄製品が出土した。白色粘土は検出面に広がり、土壤の底面にも張り付いているような状態で検出された。間層は粘土は含まれず、焼土及び茶褐色土が厚く堆積する。間層からは遺物も少ない。堆積状況から考えると、粘土土壤として機能していた土壤が廃棄の後、短期間で埋められ、最後に粘土を張って意図的に皿や瓶を残したものと想定できる。東西に切り合うピットが存在するが、土壤よりも古いものと考えられる。西側のピットの埋土には灰白色粘土のブロックが散見できた。

#### 出土遺物 (第35~37図)

56から59は椀・小振りのものではあるが厚みがあり重みを感じる。56と57は丸形の椀。56の釉は発色せずに鶯色を呈する。57は森灰釉を厚く掛け、縁味を帯びた乳濁色を呈する。58は割り高台の椀。切り込みは一方にのみ残り、全体の数はわからない。59は手捏ねの椀形土器。外面には指押さえ及びナデの調整痕が残り、内面は粗いナデがみられる。焼成は土器間に近く軟質である。

60から67は小皿。60・61は丸形の皿で、口縁端部はやや内側に出し気味でシャープさを伴う。このような端部を肥厚させる型式は椀に多く見られるが、皿では少ないようである。60は胎釉を掛け褐色に発色する。61は灰釉か。黄味が強く一部は青白色に発色する海鼠釉となる。高台内のケズリは浅く疊付は広い。62は口縁端部を短く外反させる皿。釉は未発色で鶯色を呈する。見込を中心には根状の物質が多く付着する。63は縁立形の椀。胎釉で褐色に発色する。口縁端部には凹部が数ヶ所あるが、偶然付いたものであろう。見込に胎土目跡を4ヶ所残す。64から66は縁付形の皿である。64と65は上面を内凹させ、66は外反させる。64は底面に僅かに糸切痕を残す。釉は未発色で灰白色を呈する。65は高台内のケズリが大きく、疊付が狭くなる。見込に胎土目跡が4ヶ所残る。釉は未発色で鶯色を呈する。66は胎土が精良でシャープな印象を受ける。釉は森灰釉で乳濁色を呈する。



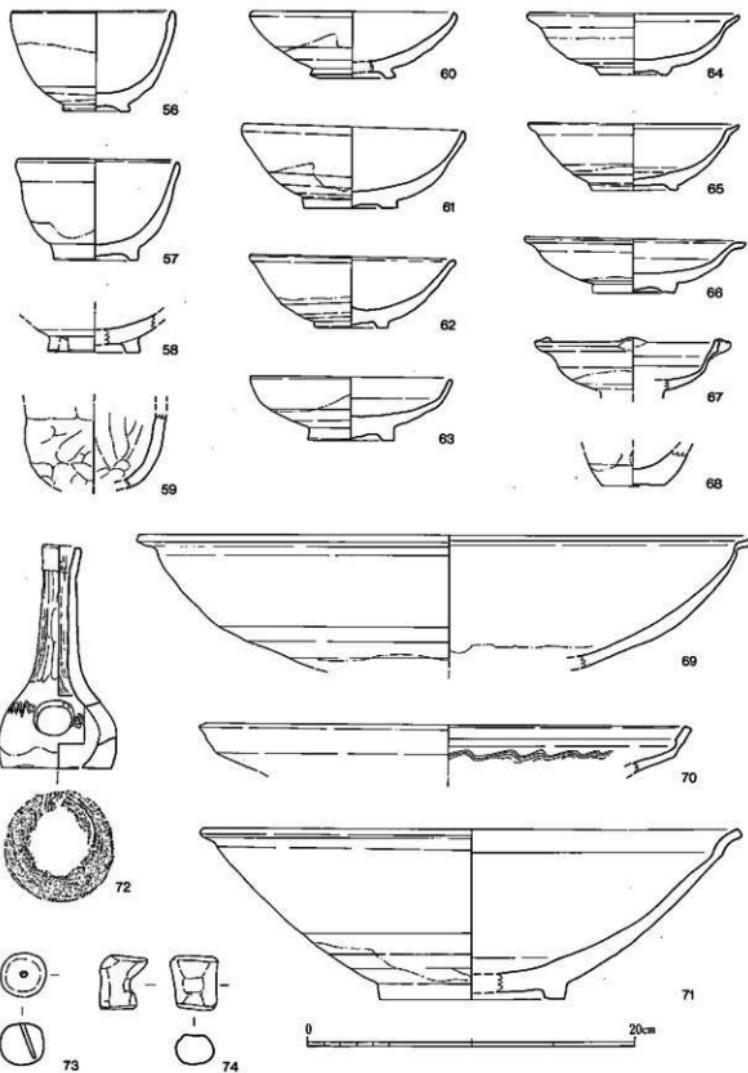
第32図 CD区土壤1実測図 (1/20)



第33図 CD区土壤 1 檢出状況（南西から）



第34図 CD区土壤 1 底面灰白色粘土検出状況（南から）



第35図 CD区土塚1出土遺物実測図① (1/3)

見込みに糸切痕を明瞭に残す。67

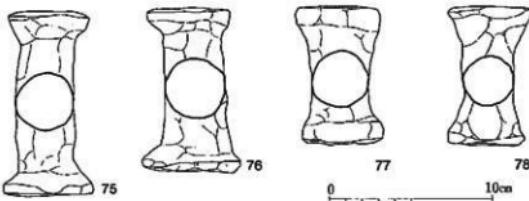
は縁反形の小皿で口縁端部の四方を擒み上げる。薬灰釉で乳褐色に発色する。

68はぐい呑み。底面は糸切後にケズリ調整を加え、平坦にする。釉は未発色で鵝色を呈する。

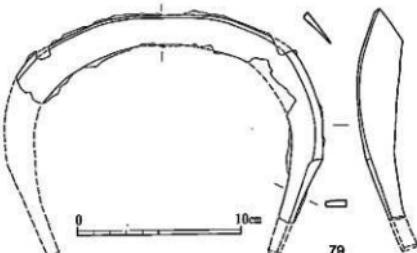
69は縁付形の大皿で口縁部は僅かに内湾させる。鉢釉を施し褐色に発色する。70は縁立形の大皿で内面に波状文を巡らせる。

鉢釉で緑褐色に発色する。71は縁反形の大皿。屈曲部の内面には明瞭な稜が走る。鉢釉で褐色を呈する。見込みには推定4ヶ所の方形の釉剝ぎ部があり、胎土目跡がそれに伴う。72は一輪押しの瓶か。底部を糸切する際に失敗し、底が貫通してしまっている。底面には糸切痕を残す。半球形の体部には径2cmの透孔が開けられる。その透孔の高さに波状文が巡る。頸部の外表面は縦方向にケズリ調整を施し、縦方向の面が多数生じている。内面は絞り痕を残す。釉は鉢釉で褐色を呈する。口縁を下にして施釉されたものであり、透孔から頸部の方へ釉が流れる。

73は72の横に添えられた状態で出土した土玉。径は2.6cm。径3mmの穴があけられているが貫通しない。土灰釉であろうか、一部透明感のある緑色に発色する部分がある。74は脚状の土塊。全面を丁寧になでられており、何らかの別固体に伴うものとは考えがたい。釉は掛けられない。硬質に焼きあがる。75から78はトチン。小皿に用いるタイプの小形のものである。79の鉄製品は鏟と呼ばれる削りの工具。柄の片側を欠損する。大きく湾曲する刃部を持つ。柄部は断面方形となる。



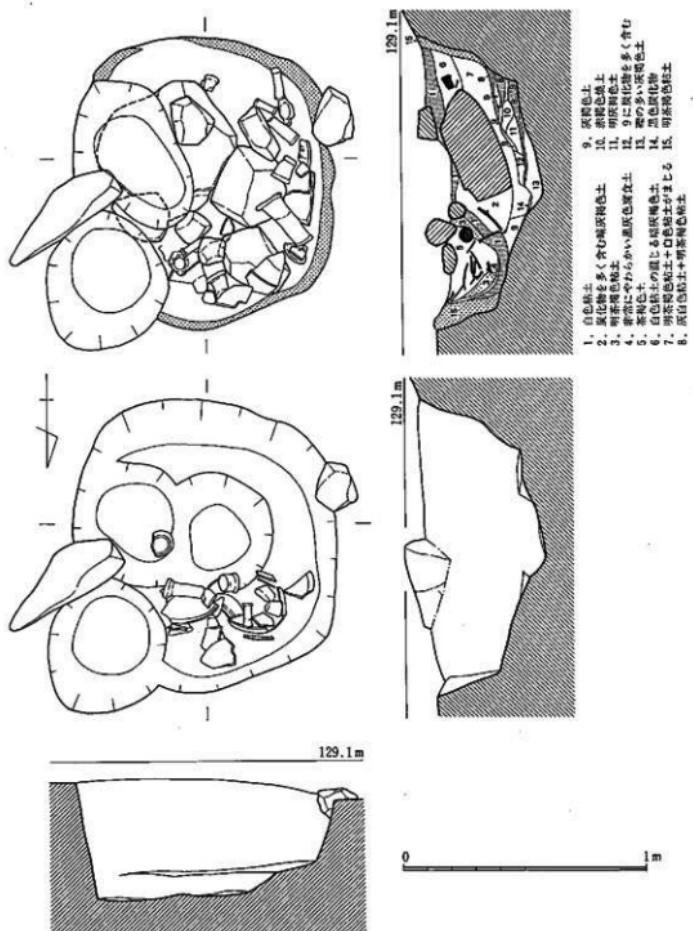
第36図 CD区土壤1出土遺物実測図② (1/3)



第37図 CD区土壤1出土遺物実測図③ (1/3)

#### CD区土壤2 (第38~40図)

CD区西落ち込み内にあり、1号建物に近い位置にある。平面形は円形で、検出面での径は1.2mを測る。検出面においては周囲に赤褐色の粘土が巡り、内部には多量の陶器（特にトチン）と大小の礫が放り込んである状態であった。土壤の廃棄時にトチンを投げ込んだものかと思われる。壁は垂直に近く立ち上がる。底面は中央部がやや深くなり、深さ40cmとなる。側壁には明茶褐色粘土が3~7cm程の厚さで貼られるが、底面には及ばない。土壤の埋土は下層が灰白色粘土と灰褐色土が互層に入る状況であり、何度も繰り返し堆積したものとみられる。103の鉢形土器は底面に据えられたのに近い状況で検出された。中間は灰白色粘土が混じる暗灰褐色土であり、礫とともに短期間に埋まったものである。土壤北側は周囲に灰白色粘土が巡り、内部に多量の陶片・礫が入る状況で



第38図 CD区土壤2実測図(1/20)

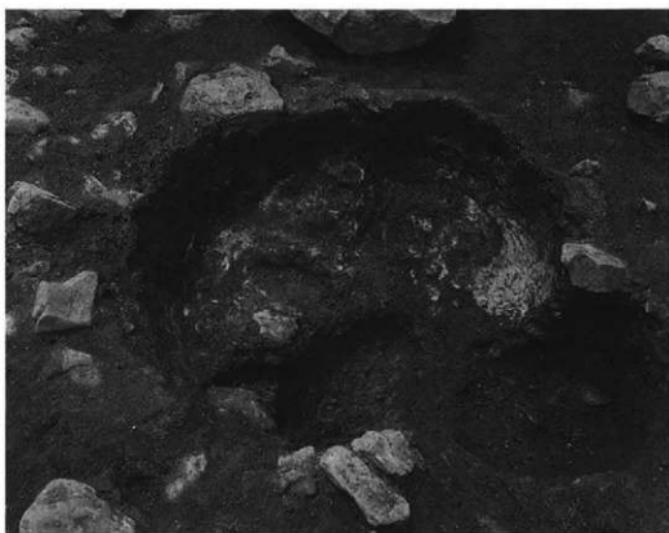
ある。土壤南側の検出面は、礫が混じる灰白色粘土がひろがる。土壤横には2つのピットがあり、土壤2の周りに巡らせる明茶褐色粘土を切ることから土壤2より新しいものと言える。これら2つのピット同士の切り合は不明。土壤2を切る2つのピットは遺物量はごく少なく、図化できる資料はない。

#### 出土遺物 (第41~43図)

80は水指。壺形のもので、肩はなだらかな形状を呈する。口縁部内面の蓋受部は明瞭な稜をなす。



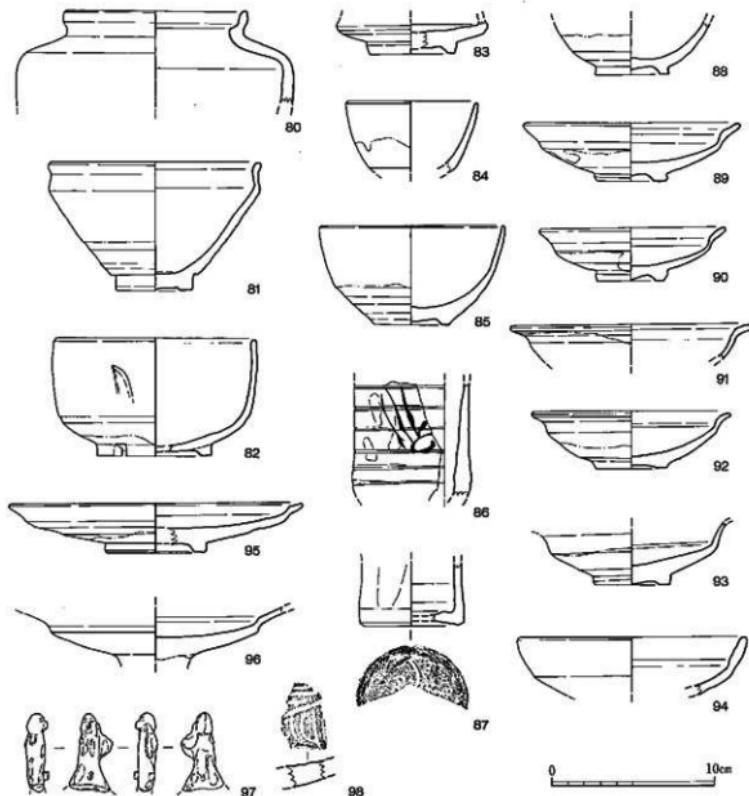
第39図 CD区土壤 2 検出状況（北から）



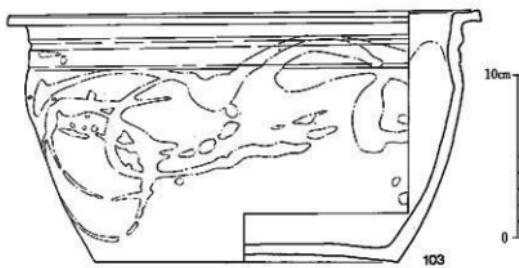
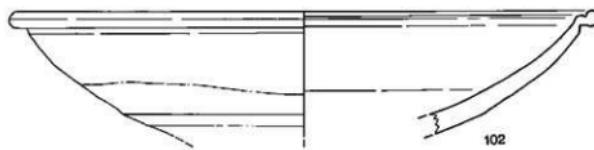
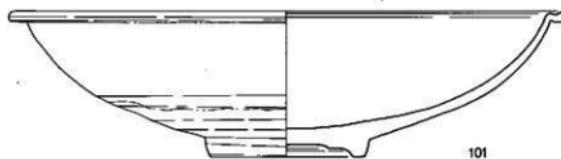
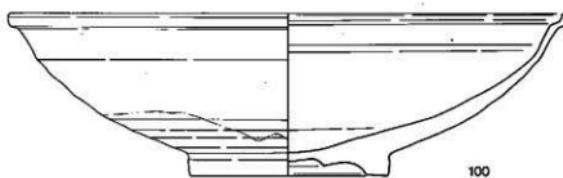
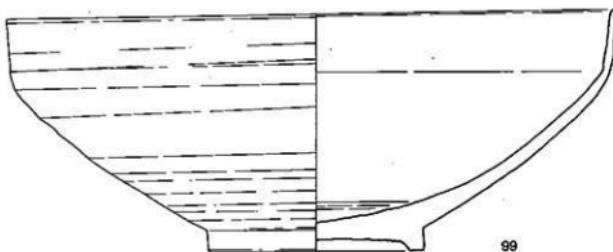
第40図 CD区土壤 2 底面白色粘土検出状況（東から）

藁灰釉をかけるが発色は不良。

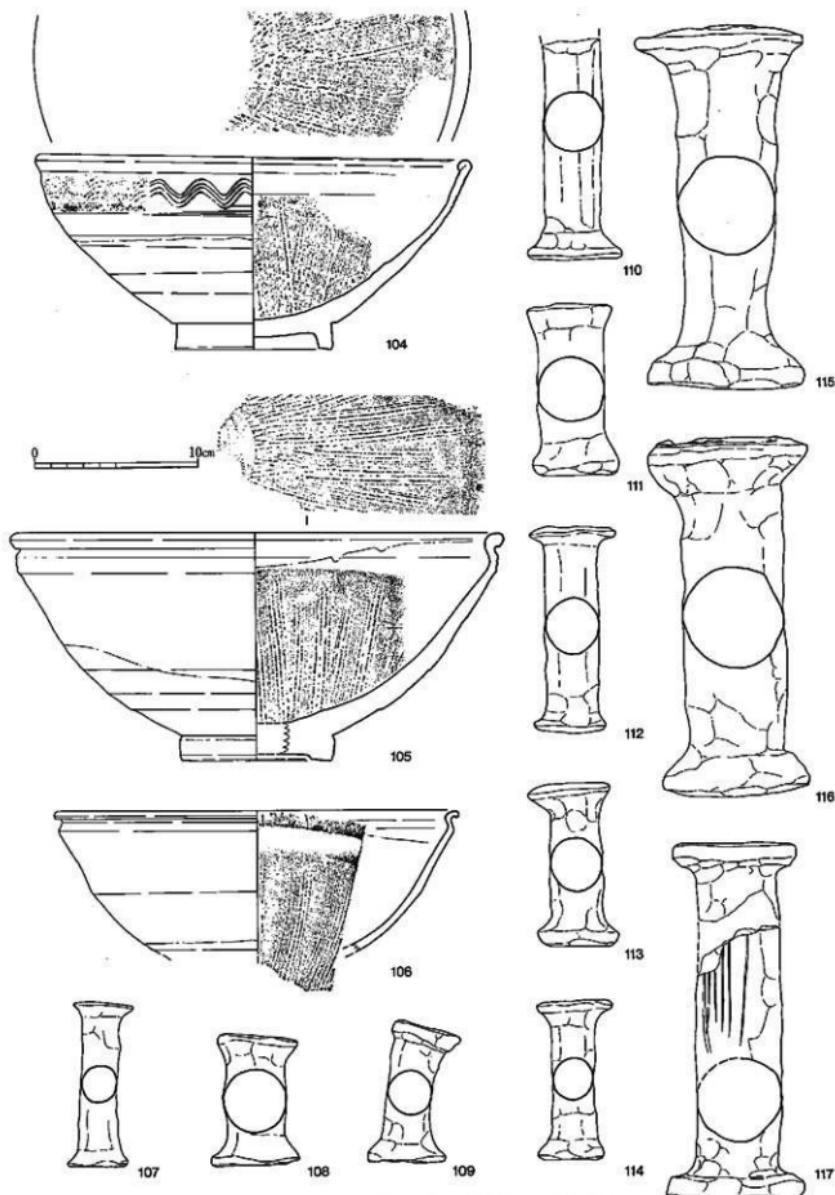
81は天目形の椀であり、白磁色の釉は他に例がないほど鮮やかである。いわゆる白天目と称されているものであり、瀬戸地方の強い影響があったことが伺える。高台は比較的小さく、シャープなケズリを施す。高台際は強く削ることにより明瞭な段を有する。82は割高台の椀。ごく一部しか残っておらず、また故意のひずみを作っているために図の正確さには疑問を残す。体部には彫文を刻む。藁灰釉を掛け、濃青色の海鼠釉となる。83は筒形の椀。内傾する立ち上がりが見られるが、おそらく一旦くびれて直立する体部を持つものであろう。素焼きであり、灰白色を呈する。84はぐい呑みである。藁灰釉であり、一部乳濁色に発色するがほとんどは未発色である。85は椀。高台と体部との境が明瞭ではなく、基苟底に近い形態をなす。釉は未発色で緑白色となる。86は多条の沈線を巡らせる筒形の椀で鉄絵が描かれる。鉄絵を描いた後、長石釉を掛けるが、外面は大部分が剥落



第41図 CD区土壌2 出土遺物実測図① (1/3)



第42図 CD区土壤2出土遺物実測図② (1/3)



第43図 CD区土壌2出土遺物実測図③ (1/3)

する。内面は発色がよく、長石釉が明灰色に発色する。88は椀の底部。未発色で緑白色を呈する。

87は茶入であろうか。胎土は悪く焼などと変わらない。底面は糸切による。体部は一部故意に歪める。釉は鉄釉で渦った灰褐色を呈する。89から95は小皿。いずれも縁付形であり、89は底面に糸切を残す。釉は未発色で緑白色を呈する。90はくすんだ褐色を呈し、胎釉かと考えられる。91は薬灰釉で乳濁色に発色。92もまた薬灰釉で乳濁色を呈するが、発色は悪い。93は釉は未発色。94は素焼きのもので、内湾する形態を有する。内面は帯状に肥厚させ、体部との境の稜は明瞭である。95は平坦な体部を持つ皿。未発色で灰白色を呈する。96は高环形となろうか。底面の剥離痕は脚がはがれたような形状を呈する。

97は陶人形。坊主頭で顔面には目・眉・鼻・口が表現され、鼻には鼻の穴が鋭くあけられている。顔の表現がこまやかなに対して他の部分はあまり念入りではない。肩周辺は釉が厚いこともあり観察することが難しい。右肩には何らかのボタン状の表現がある。下牛身には男性の陰部を表現する。

98は大皿の文様部である。画題は不明瞭であるが、魚のうろこかと思われる。素焼きで灰白色を呈する。99は縁立形の大皿で深い体部をもつ。口縁端部は僅かに外方へ摘み出す。見込に軽くケズリを施している。焼成は素焼きで内外面に黒斑状の黒色部を残す。100から102は縁付形の大皿で、100-102は口縁端部を上方へ強く摘み上げる。いずれも釉の発色は悪く、剥落が進行する。101-102は一部乳濁色に発色し、薬灰釉とみられる。103は鉢形をなすもので、水指として使われたものであろう。丸く屈曲する口縁部を有し上面は平坦で1.5cmの幅をもつ。口縁部直下の外面上には沈線により段をつける。焼締により硬質である。外面に鉄釉をイッチン掛けし、濃褐色～濃青色に発色する。内面は口縁部を除き厚く施釉され、くすんだ濃青色に発色する。底面には焼成時に付着した壁土を除去したためか小凹部が多数残っている。104から106は鉢鉢でいずれも施釉されるものである。104は外面に土灰釉を掛け明るい緑色に発色する。口縁端部は内側に折り込む。口縁部外面には波状文が巡らされる。105はく字形の口縁部を有する。緑色に発色する土灰釉を掛け、一部乳濁色に発色する。106は105と同形態でやや小振りのもの。釉は未発色で淡い緑色を呈する。

107から117はトチン。小形と大形のものがあり、小形の中にも細長い形態のものから寸胴のものまで変異に富む。117は使用されていないためか軟質である。縱方向に細い沈線を刻む。

#### CD区土壤3（第44・45図）

CD区土壌1の東側に位置する土壌で、同じく落ち込み内にある。南側を別のピットによって切られるが、径80cmの円形になるものと考えられる。底面は撹鉢状に丸みを帯びた形状となっている。内部は白色粘土が詰まっており、中央には黄褐色土が底面に達するまで入り込む。検出面において中皿がまとまった量出土した。なお、図・写真にある完形品の小皿は来年度報告分の遺物にまぎれたらしく探すことが出来なかった。来年度に改めて報告を加えたいと思う。

#### 出土遺物（第46図）

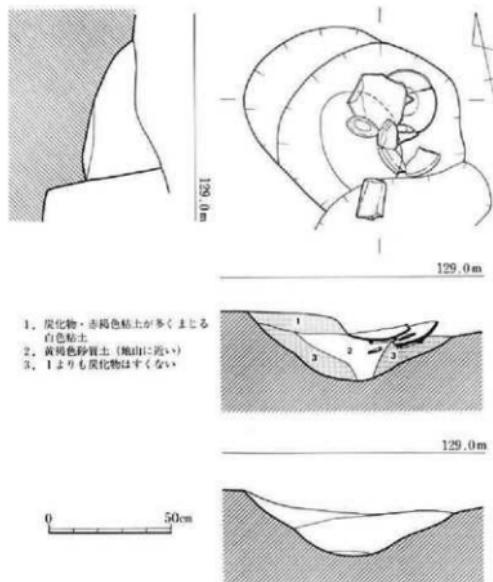
118は縁付形の中皿で口縁部を輪花形とする。胎釉を掛け、褐色に発色するが約1/2周は発色しない。見込に正方形に近い釉剥ぎを4箇所もつ。119は鉄釉を掛け濃青色の海鼠釉となる中皿。縁反形であり、比較的浅い形態である。見込に釉剥ぎを4箇所施すが、軽く剥ぎ取ったような形態をなす。釉剥ぎ部近くに胎土目跡を残す。120は縁付皿で釉は未発色。

121は甕の口縁部。素焼きである。口縁部は内面に折り込み、上面を水平に仕上げる。胴部は叩きにより成形され、内面には叩きの当て具痕である青海波文が残る。

122は丸形の小皿。釉は未発色で灰白色を呈する。

ケズリの範囲は狭い。高台内のケズリは浅く、疊付には糸切痕を残す。

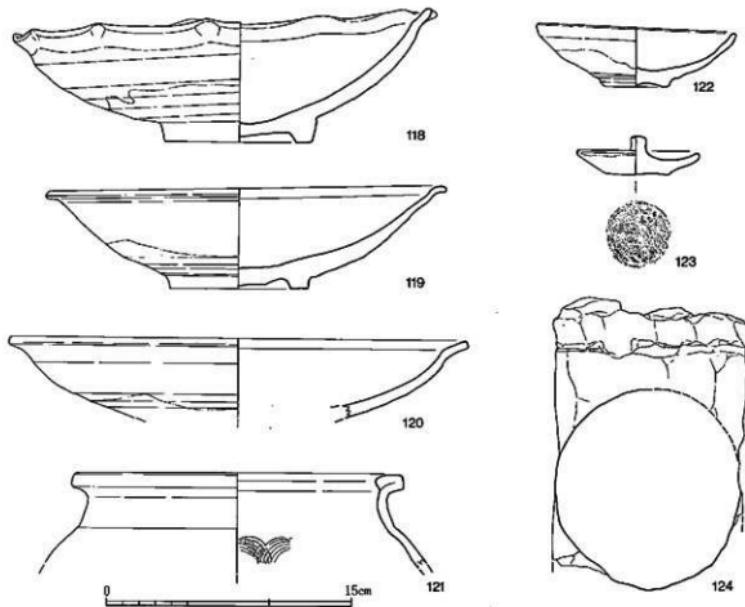
123は蓋。底部は糸切により円柱状のつまみを作り出す。薺灰釉を掛け、緑味を帯びた乳湯色に発色する。



第44図 CD区土壤3実測図 (1/20)



第45図 CD区土壤3検出土器出土状況 (南西から)



第46図 CD区土壤3出土遺物実測図(1/3)

124は大形のトチン。トチン頂部に粘土紐を巻きつけたハマを置く。

#### CD区土壤4（第47・48図）

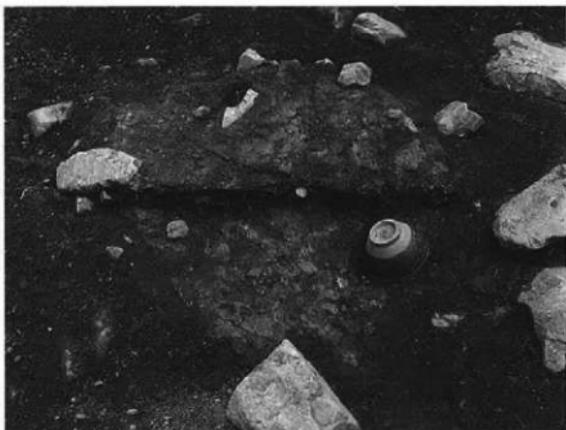
D区の東、水田面に近い高さに位置し、CD区では唯一の落ち込み外の遺構である。径90cmの円形土壇で深さは24cm。不純物が多く混じる淡黄褐色粘土が厚く堆積する。下層は黒色土である。遺物は粘土層において大形の椀が伏せられた状態で出土した以外は皆無である。

#### 出土遺物（第49図）

深い体部を持つ大形の椀であり、ほぼ完形である。体部は丸形で口縁部は短く緩やかに外反させる。豊付の一部に糸切痕を残す。見込に若干のケズリを加える。透明感のある土灰釉が施され、緑色に発色する。

#### CD区土壤5（第50・51図）

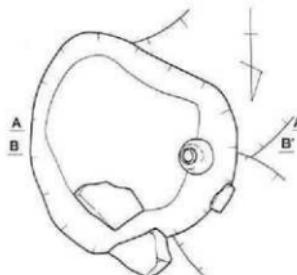
CD区北西の落ち込み内にあり、土壇群の中では最も南側に位置する。緩やかな傾斜面に位置しており、北側にこの土壇を切るピットがある。長さ1.5m、幅1.2mを測る。赤色粘土が土壇内に広範に渡って拡がる。遺物量は僅かであるが、完形品の瓶が出土地している。



第47図 CD区土壤4(北から)



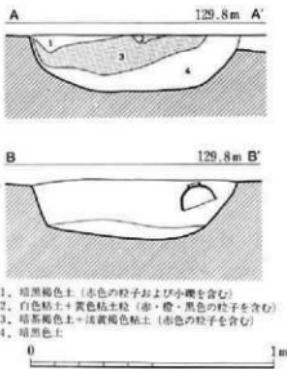
第49図 CD区土壤4出土遺物実測図(1/3)



#### 出土遺物(第52図)

126は縁立形の皿。藁灰釉を掛け乳濁色に発色する。内外面に壁土が多数付着する。

127は口縁部のごく一部を欠損するがほぼ完形品の瓶。球形の胴部から頸部は大きくくびれ、強く外反する口縁部を持つ。藁灰釉を掛け乳濁色に発色。胴部にヒビが入るが、釉が厚く釉の凹部となってする。底面に壁土が付着。板が底面に付着することから、それを敷いて焼成されていたことがわかる。焼成時に転倒したために、体部下間に板が多くつく部位がある。



第48図 CD区土壤4実測図(1/20)

128は小形のトチン。中央の軸状部分に叩きと見られる平行線が入る点は珍しい。

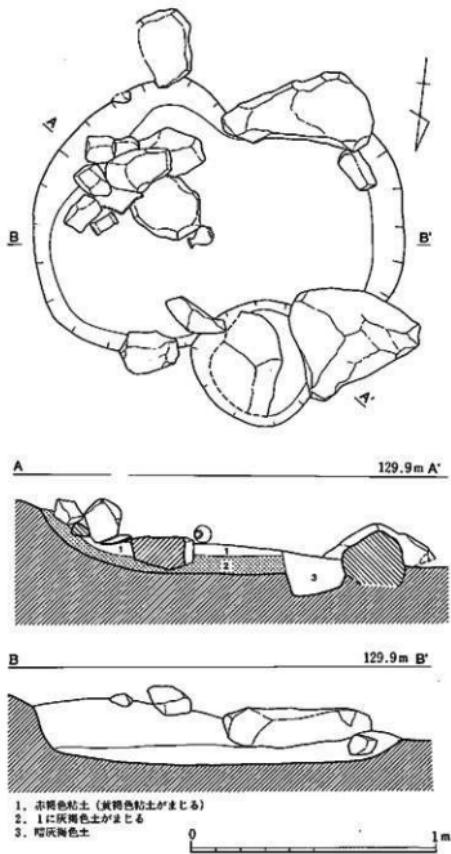
#### CD区土壌6（第53・55図）

径1m程度の不整形土壌の検出面において小皿及び蓋が立てた状態で検出された。この不整形土壌を掘り下げるに、皿・蓋の周囲を除き地山が検出されたが、皿・楕部分は深く、更に35cmの深さがある。最終的には二段掘のピット状となつたが、ピットを埋めた、或いは埋まつた時点で皿と蓋を立てて置いた状況が復元でき、このピットに對してどのような意味をもたせていたのか興味深い。

#### 出土遺物（第54図）

129は縁付形の小皿。口縁部を僅かに欠損するがほぼ完形である。比較的浅い体部に高い裾広がりの高台がつく。釉は蛤釉で、褐色に美しく発色する。見込みに胎土目跡を3ヶ所残す。

130は完形品の蓋。薄い体部に手捏ねによる丸みを帯びたつまみがつく。体部上面には沈線が螺旋状に描かれ、4条の沈線が刻まれているように見える。裏面は小凹凸が多数ある。作業台の反映であろうが、どのような台であったかはわからない。素焼きである。



第50図 CD区土壌5 実測図 (1/20)

#### CD区土壌7（第56・57図）

径1mの円形土壌。深さは27cmで、底面は楕状となり、小ピットが存在する。上層は赤褐色粘土が広がり、礫が一定のレベルに含まれる。この礫層の付近に陶片が集中する傾向にある。下層は灰白色粘土がブロック状に入る赤褐色粘土となる。赤褐色粘土を中心として貯蔵するための土壌かと思われる。

#### 出土遺物（第59図）

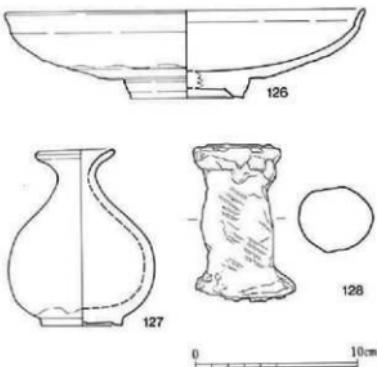
131は口縁部を僅かに欠損するもののほぼ完形の小皿。縁反形であり、口縁部内面には僅かに捺



第51図 CD区土壤5（北東から）

が入る程度である。船軸が掛けられ、褐色に発色する。132は底部から口縁部に向かって強く立ち上がり、更に口縁部は強く外反させるタイプ。口縁部上面は広い。釉は発色せず灰白色を呈する。

133から135は大皿の底部。いずれも見込に方形の釉剥ぎを有する。133は船軸で明褐色を呈する。見込に多数の小さなひびが生じ、それに沿って釉が途切れる。134は未発色で窓色を呈する。135は藁灰釉で乳湯色を呈する。



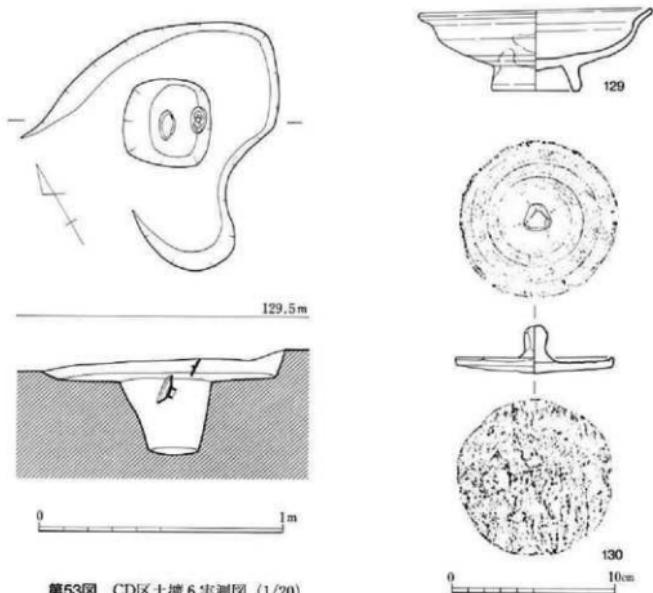
第52図 CD区土壤5出土遺物実測図(1/3)

#### CD区土壤8（第58図）

南北2m、東西1.8mの不整形の円形土壤であり、深さは25~35cmである。上層は灰褐色土であり、下層に薄く白色粘土が入り、その更に下層に明赤褐色粘質土が拡がる。粘土層はほぼ水平に入るものであり、側壁における粘土の貼り付けはみられない。出土遺物はごく少ない。

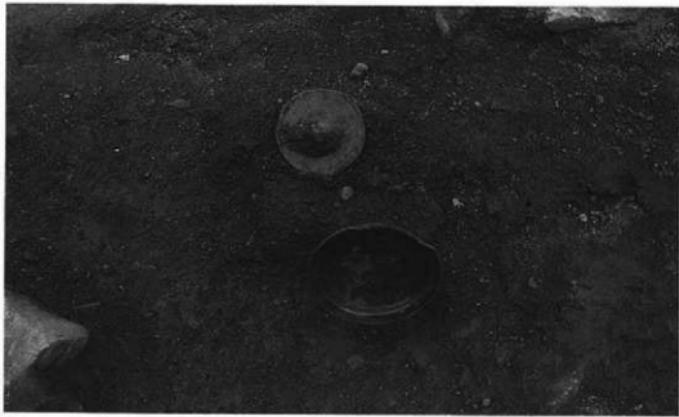
#### 出土遺物（第59図）

136は中世の土師皿に近い形態をなし、底部は糸切である。灯明皿であろうか。

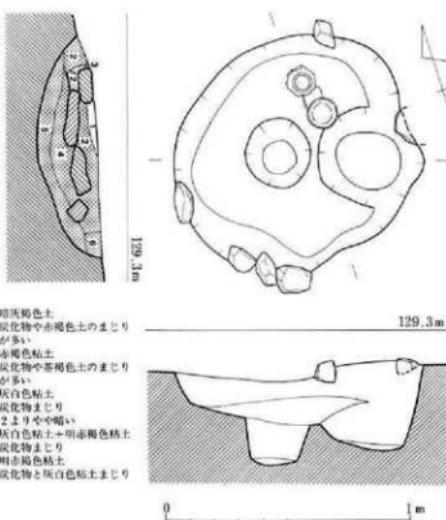


第53図 CD区土壤 6 実測図 (1/20)

第54図 CD区土壤 6 出土遺物実測図 (1/3)



第55図 CD区土壤 6 遺物出土状況 (北西から)



第56図 CD区土壤7実測図(1/20)

#### CD区ピット出土遺物(第60図)

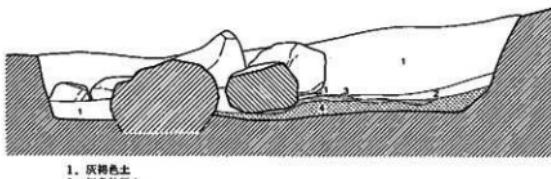
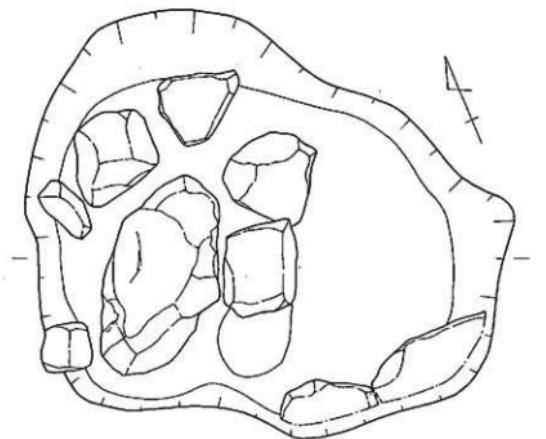
136・146はC区の東、福地川への落ち込みの際にあるピット22からの出土である。周辺には薄い焼土層が拡がっている。136は丸形の小皿。藁灰釉がほとんど未発色で灰白色を呈する。146は縁付形の大皿であり、内面には4ヶ所の釉剥ぎがみられる。藁灰釉を掛け、発色の良い緑色～青白色の海鼠釉となる。

137・148はC区のほぼ中央にある不整形のピット13からの出土。137は丸形の小皿である。藁灰釉を掛けたが発色は悪く、一部青みを帯びた乳濁色に発色する。148は素焼きの把手で、断面は円形。屈曲の状態から鉢の把手とみられる。

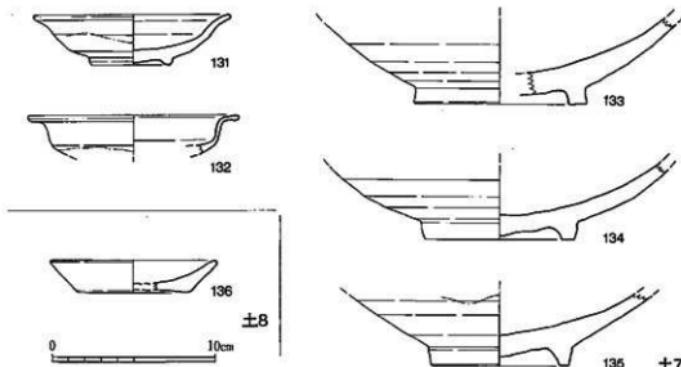
138はC区東側の落ち込み際にあるピット14出土の縁反形の小皿。藁灰釉



第57図 CD区土壤7(北東から)



第58図 CD区土塙8実測図 (1/20)



第59図 CD区土塙7・8出土遺物実測図 (1/3)

で乳濁色を呈するが大部分が剥落する。

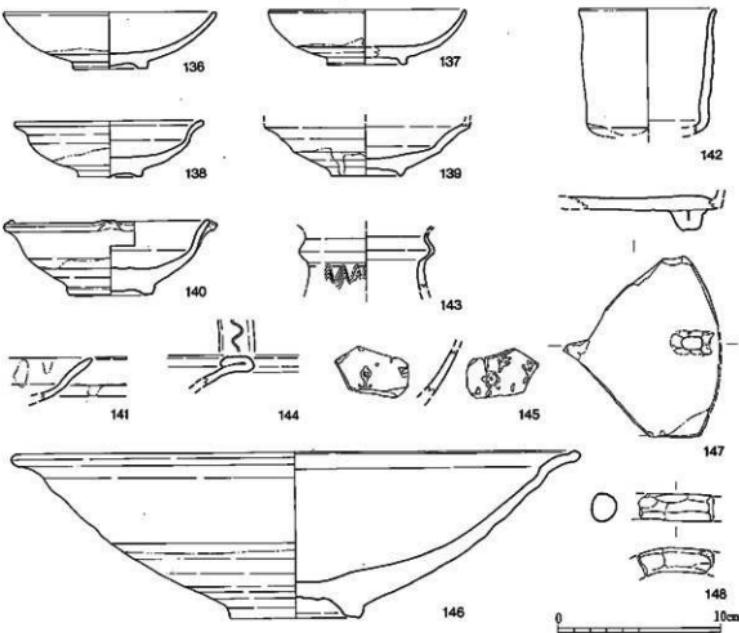
140はCD区土壠4近くの小ピットであるD区ピット2から出土した小皿。縁反形で四方に摘み上げ部をもつ。濁った明灰色を呈し、長石釉かと考えられる。

141はC区東の落ち込み際にあるピット21から出土した縁反形の小皿。薬灰釉を掛け乳濁色となるが、内面に緑青色となる銅釉を一部に掛ける。

142はD区北調査区際のピット1から出土した筒形碗。外面の輪権目は強く緩やかな凹凸が連続する。褐色の鉛釉を掛けた後、濃青色の薬灰釉を掛ける二重掛けであり、海鼠釉となる。

143はB区との境に近いピット4から出土したもので尺立であろうか。強く横に張る屈曲部を持つ筒形のもので、直立部には波状文を巡らせる。灰釉を掛け、緑色に発色する。

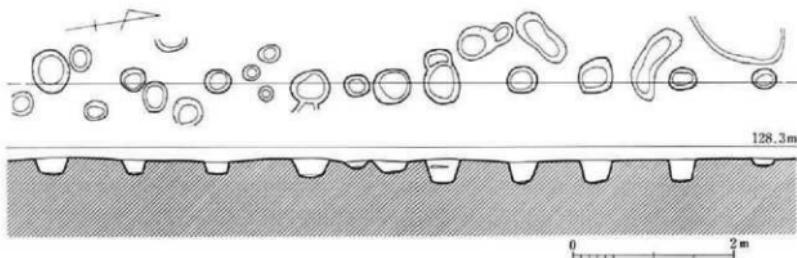
144・145はC区のほぼ中央の不整形なピット15から出土。144は鉢の口縁部で内側に折り込んだ口縁部上面に波状文を描く。鉛釉を掛け褐色を呈する。145は柄の小片で象嵌文様に入る。文様は花と樹木のようである。内ヶ磯窯でこれまで整理したところ象嵌陶器の出土はこの1点のみである(第3次調査で1点出土している)。147は結文形の向付で底部の一部が残る。脚は粘土紐をU字形に折り曲げて底面になで付ける。薬灰釉を掛けた後、褐色の鉛釉を掛けた掛け分けである。薬灰釉は発色せずに灰白色となる。



第60図 CD区ピット出土遺物実測図 (1/3)

### E区柵状造構（第61図）

E区の川への落ち込み近くにはば南北方向に等間隔で並ぶ柱穴が検出された。建物とするにはこれとセットになると考えられる柱穴が存在しないために柵状造構として取り扱う。約1mの間隔で柱穴が並ぶが、それぞれの柱穴は径が30~40cm程度でありそれほど大きいものではない。現状で約8.5m分確認できる。



第61図 E区柵状造構実測図 (1/60)



第62図 E区土壙群（南西から）

### E区土壙1（第63・64図）

E区の西側で検出された造構で、径約1.2mの円形土壙である。深さは約30cm。周囲を赤褐色粘土が取り巻くが、造構の側面のみであり底面には及ばない。内部には灰白色粘土が堆積する。遺物は検出面において完形品の小皿が出土し、その下層から大皿等が重なった状態で出土した。

### 出土遺物（第65・66図）

149は丸形の小皿で口縁部は縁なぶりとする。小振りの割には体部が深い。高台内のケズリは低

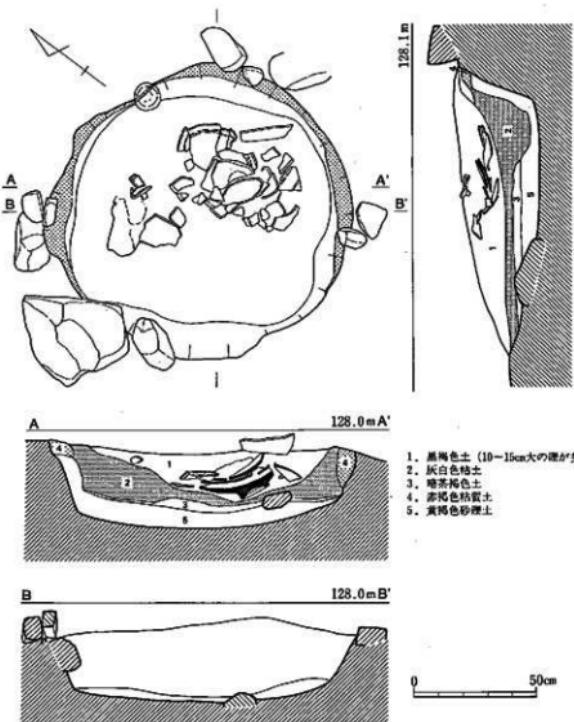
回転で施したためか歪な円形となる。釉は未発色で鷺色を呈している。見込に胎土目跡が3ヶ所残る。

150は結文形の向付。脚部は欠損するが口形のものが付けられていたらしく痕跡のみ残す。釉は発色せずに灰白色を呈する。

151は片口となろうか。口部は欠損する。口縁端部は外側へ折り返し丸く仕上げる。器壁はごく薄く3mm程度である。釉は未発色で灰白色を呈する。

152・153は縁付けの大皿である。両者とも口縁端部を擒み上げる形状が共通し、また眼鏡高台である点も共通要素であるが、153は口縁部に縁なぶりを施す。素灰釉を掛け乳濁色を呈するが剥離が進行する。

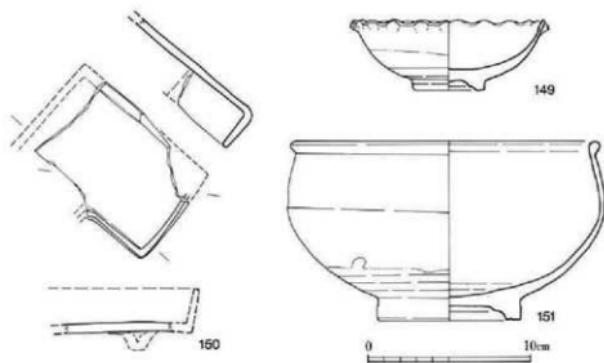
154は把手を有する大形の鉢。深い直立する体部を有し、口縁部は一旦強く外反させた後強く直立させる。体部外面には一条の沈線を巡らせる。把手は断面方形で豪快なつくりである。把手付根



第63図 E区土壙1実測図 (1/20)



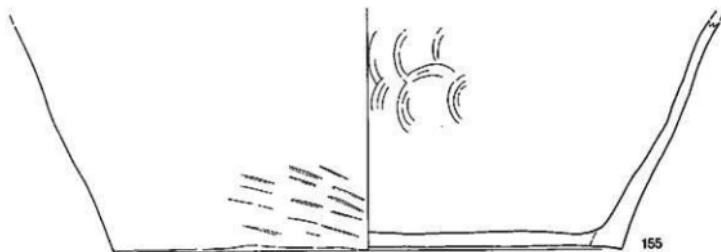
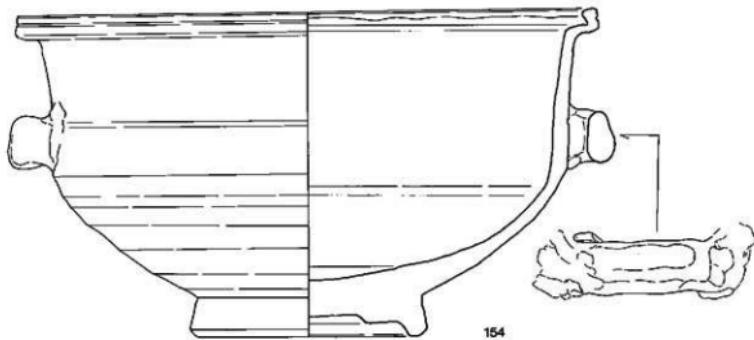
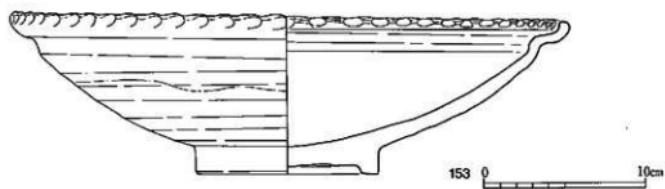
第64図 E区土壤1 遺物出土状況（南西から）



第65図 E区土壤1 出土遺物実測図① (1/3)

には内面から補強した粘土が確認できる。高台は眼鏡高台で堂々とした印象を受ける。

155は大甕の底部。体部は叩き調整で外面に平行叩き痕、内面には当て具痕である青海波文を残



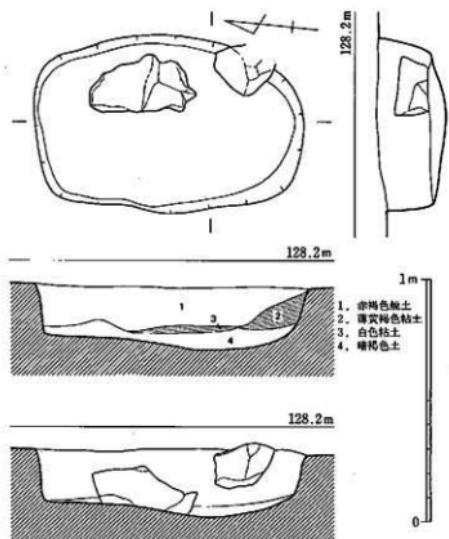
第66図 E区土壤1出土遺物② (1/3)

が、褐色鉛釉が厚く埋もれている。底面は未発色。底面周縁に貝目跡を残す。

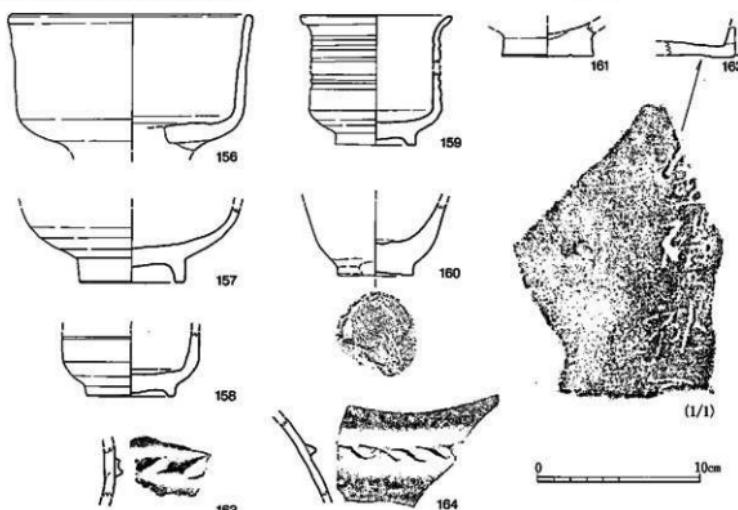
第141図415は水注。編集ミスで別頁に割り付けてしまった。口縁部を内側へ折り込み矢筈口をつくりだす。断面方形の把手をつけるが、付根部を階段状につくり、円形の浮文を2個付ける。注口は片口状とし、両脇に円形の浮文を付けるものである。釉は全面に掛けるが殆ど未発色である。一部緑色を呈するため灰釉かと思われる。

#### E区土壤2（第67図）

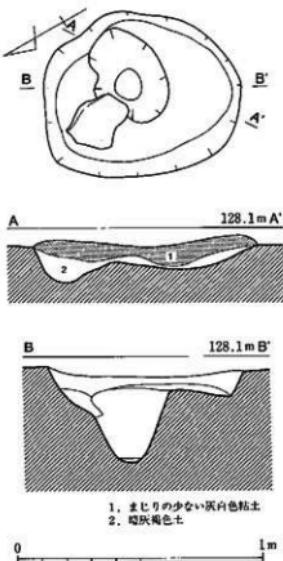
1m×70cmの楕円形平面の土塚であり、上層は赤褐色の焼土が厚く堆積していた。部分的に灰白色粘土の広がりが認められ



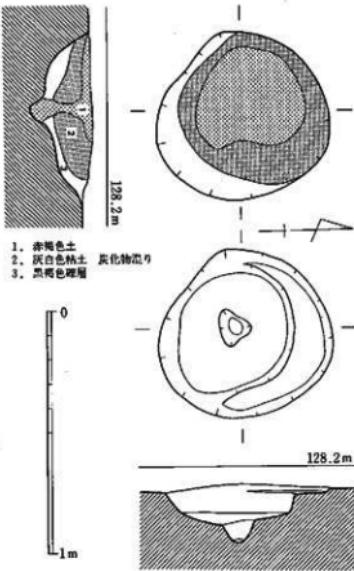
第67図 E区土壤2実測図 (1/20)



第68図 E区土壤2出土遺物実測図 (1/3 · 1/1)



第69図 E区土壌3実測図 (1/20)



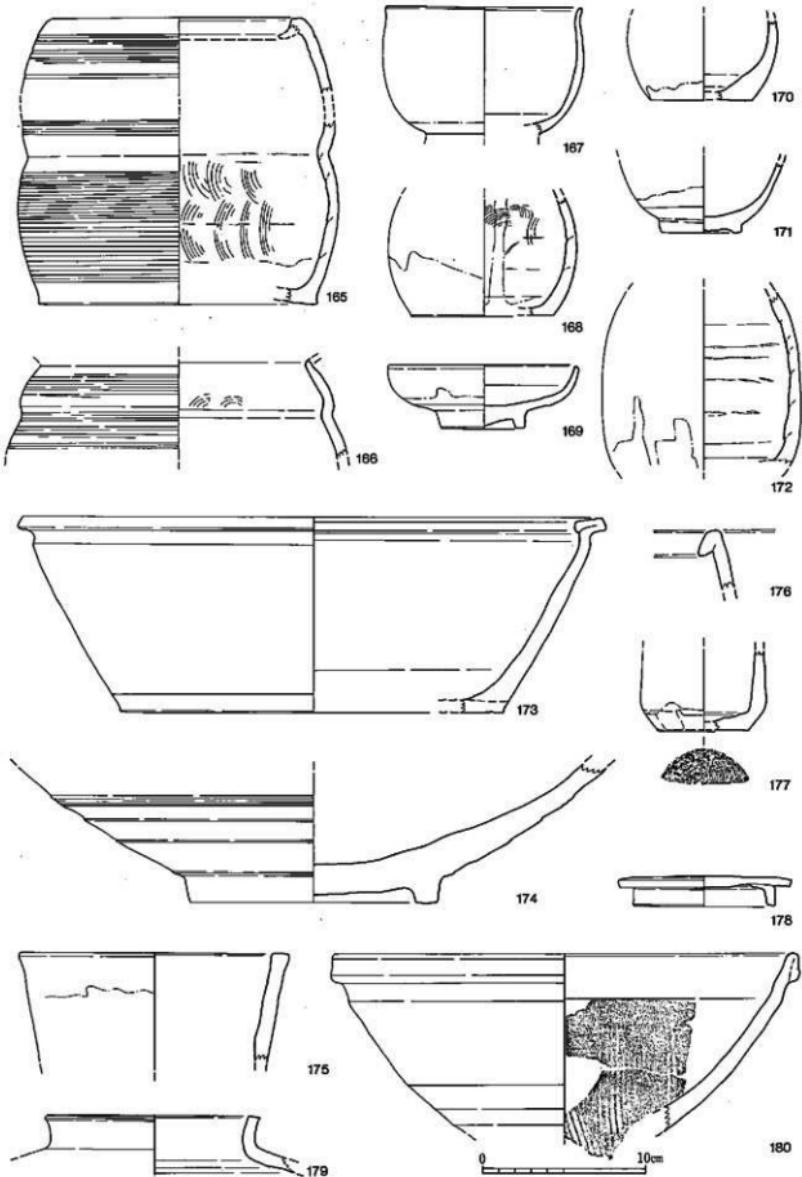
第70図 E区土壌4実測図 (1/20)

る。中から出土するものは成形時に失敗したようなものが多く、単なる粘土塊のようなものも含まれる。いずれも素焼き、或いは乾燥しただけのような脆いものが多い。つまりこれらは成形の過程で失敗をした為に破棄されたものと考えられる。E区土壌2はこうした「ごみ箱」的な遺構であろうとみられる。

#### 出土遺物 (第68図)

156から161は椀。156は大振りの半筒形のもの。高台部は欠損するが、もともと削り出さないようであり、高台際にもケズリはみられない。体部下半が焼成前に切り取られており、高台削り出しの際に失敗し工具で傷つけられて廃棄されたものとみられる。したがって天日干し段階のものであり、焼成はごく甘い。このような焼成は157~161に共通する。157は大振りの丸形椀の底部。158は筒形椀の底部であり、体部には細い沈線が巡らされる。159は接合しない2片のある筒形の椀。口縁部は外反し、端部は丸く收める。体部には太い明瞭な沈線を巡らせる。160は底部を糸切のまま残し、高台際に開してもケズリを施さない。これも高台削り出しの段階前で不具合が生じ廃棄されたものであろう。161は高台内を削り出す際の工具を刺した段階で廃棄したもの。

162は水指の底部であろうか、底面に文字を刻むものである。欠損しており文字は前後に続く。まず一文字目は金篇であるが、旁部は欠損する。二文字目は示篇に豊であろう。三文字目は示篇にトと見えるが読みは不明。全体的にみても意味は読み取れない。素焼きである。



第71図 E区ピット出土遺物実測図① (1/3)

163と164は縄状突帯を有する陶片。163は素焼きで、164は鉛釉を掛け濃褐色に発色する。

#### E区土壤3（第69図）

80cm×70cmの略円形の土壤で上層には純度の高い灰白色粘土が厚く堆積していた。下層は二段掘となり幅30cm、深さ30cmのピットが続く。下層の埋土は暗灰褐色土である。遺物はごく僅かに出土したが、図化できるようなものはない。

#### E区土壤4（第70図）

径60cm、深さ20cmの小土壤。炭化物混じりの灰白色粘土が堆積している。その中央に赤褐色粘土が入り込むような形状で存在する。遺物はほとんど出土しなかった。

#### E区ピット出土遺物（第71・72図）

165・167・168・170・171は東側落ち込みの検出面にあるピット1からの出土。165は水指で焼締により硬質。蓋受けは欠損する。胴締の形態をなすものである。外面は櫛状工具により器面調整されカキメ状となる。内面には叩き当て具痕である青海波文を残す。167は深い体部を持つ椀。口縁部は僅かに外反させる。薫灰釉を施し乳濁色に発色する。168は瓶の胴部。叩き調整で内面には青海波文を残す。鉛釉を掛け褐色となる。170は小形の瓶の胴部。褐色の鉛釉を掛けた後に薫灰釉を掛け、青白色的海鼠釉となる。171は九形の椀。鉛釉を掛け褐色を呈する。

166・172～176は東側落ち込み際にあるピット33からの出土。166は胴締形の水指で165と形狀は類する。焼締で硬質。172は細長い瓶の体部。内面には接合痕を顕著に残す。全体に薫灰釉を厚く掛ける。乳濁色を呈するが、部分的に青白色的海鼠釉となる。173はこね鉢である。口縁端部を内側に折り込みや内傾する口縁部をつくる。174は大皿の底部。外面はケズリにより強い稜が生じる。素焼きである。175は直立する口縁部をもつ壺。176は水指であろうか。内傾する胴部をもち、口縁部は内側へ折り込む。折り込んだ部分の端部は鋭角に仕上げられる。硬質だが素焼きに近い焼成である。

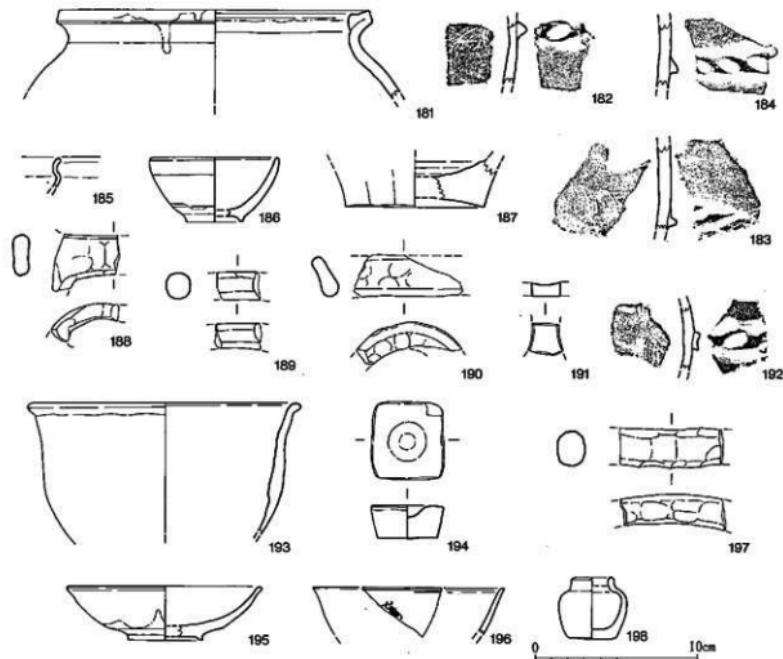
177はE区土壤4近くの小ピットであるピット36から出土した筒形の椀。底面は糸切のままであり外面も静止削りで仕上げる特異なものである。外面には釉を施すが未発色。底面及び内面は露胎である。

178～180は調査区北東角、落ち込み検出面にあるピット4から出土。178は蓋。焼締で硬質である。179は直立する口縁部をもつ壺。頸部は短く、端部はやや外側へ張り出した方形とする。全体に釉を掛けるが未発色で鶯色を呈する。180は素焼きの擂鉢。口縁部は外側へ折り返し丸みを帯びた方形に整えられる。

182～184・192は縄状の突帯を有する破片。182と183は東側落ち込み検出面にあるピット2からの出土であり同一固体であろう。184は調査区北西角に近いピット11から出土。鉛釉を掛ける。192は土壤4近くのピット34からの出土。釉は発色せずにすんだ灰緑色を呈する。

185はく字形に屈曲する口縁部。天目形の椀か。鉛釉を掛け、褐色を呈する。

186はピット11から出土したもので、184と共に伴する。ぐい呑みである。高台際のケズリは弱く、体部と高台の境が明瞭ではない。鉛釉を掛け暗褐色を呈する。



第72図 E区ピット出土遺物実測図② (1/3)

187は厚い底部を有するもので、具体的な器種は不明である。外面を手持ちヶズリで調整し、硬質に焼成される。内外面とも露胎である。

188は調査区北西角に近いピット8から出土した鉢の把手。鉢軸を掛ける。

189は束縛の落ち込み際に近いピット16から出土した断面円形の把手。鉢軸である。

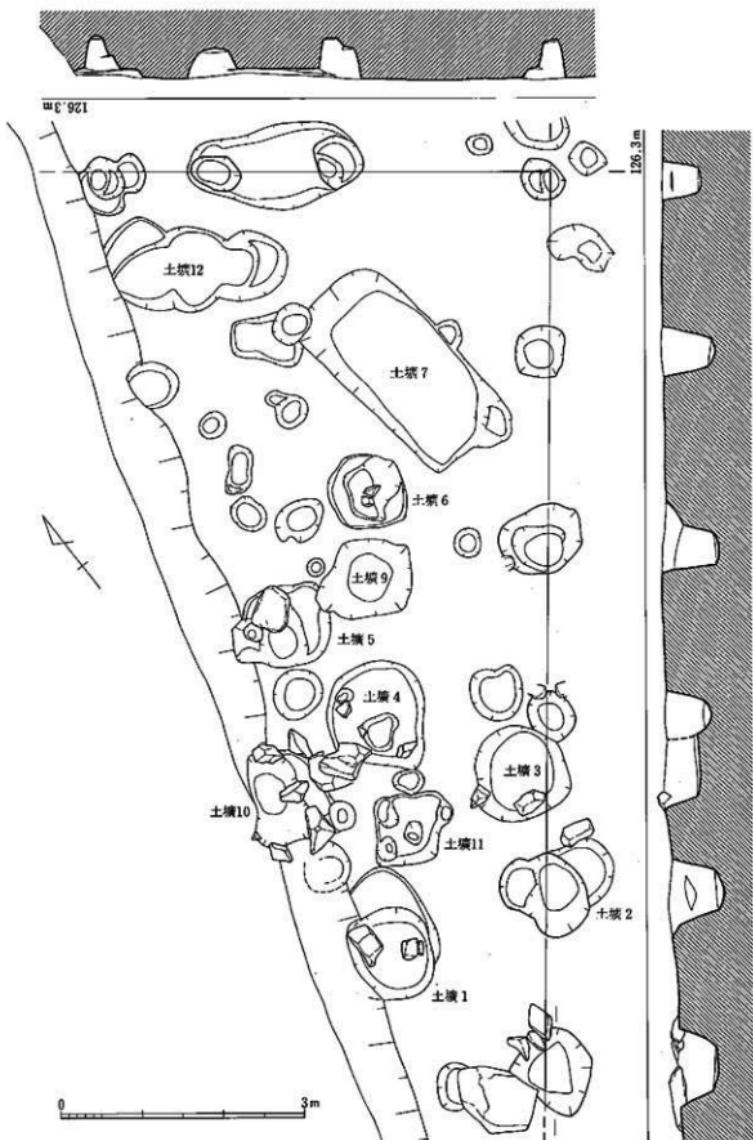
190は土壠2脇にあるピット22から出土した鉢の把手。鉢軸である。197は断面円形の把手でピット35から出土。鉢軸で褐色となる。指圧痕を多数残す。

191は調査区北端にあるピット14から出土した瓶底部の小片。鉢軸である。

193～196はピット27から出土。193は大形の楕で深い体部を有する形態となる。志野調の釉を掛け、内ケ穂では見られない特色を有する。194は轆轤の軸受け。平面形は正方形であり、中央に円形の窪みをつくる。側面及び底面は丁寧にヶズリ調整が施される。上面を中心に鉢軸が施され、褐色に発色する。195は丸形の小皿。土灰釉を掛け透明度の高い明緑色に発色するが未発色部分も多く灰白色となる。

169は調査区北西角にある小ピットのピット7から出土した縁立形の小皿。墨灰釉を掛け乳濁色に発色する。

198はE区ほぼ中央にあるピット37から出土したミニチュアの壺。肩部下半は縱方向に削る。



第73図 F区 1号建物実測図 (1/60)



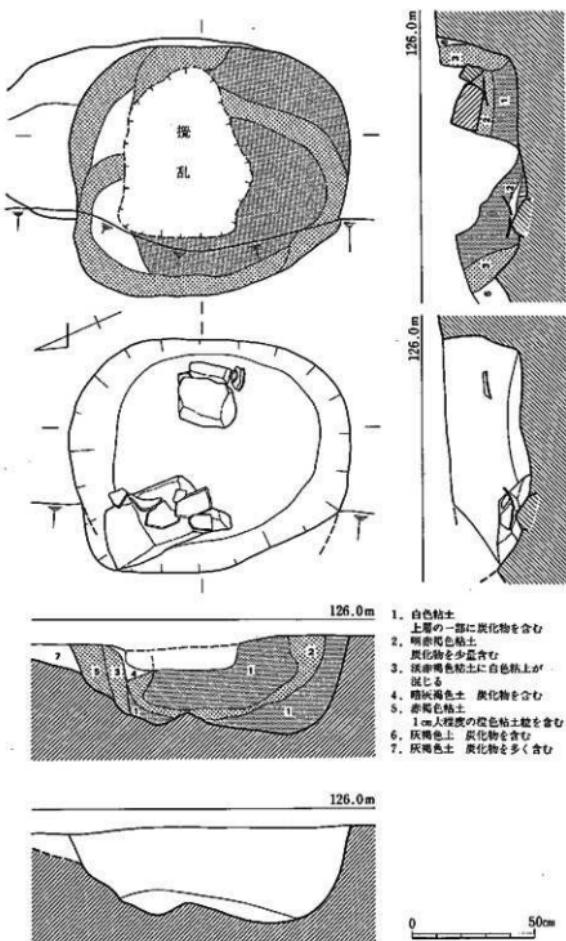
第74図 F区建物と土壤群（空中写真）

#### F区1号建物（第73・74図）

F区はG区との境に数多くの土壤が集中する調査区であるが、その土壤群を取り囲むかのような形で掘立柱建物が復元できる。しかし、G区水田造成時に削平された面に延びており、柱穴はF区分のみしか確認できていない。建物は主軸を北から約45度東に向けるものであり、5間×3間以上のものである。柱間は約2.2mであり、現状で13m×6.5mの規模となる。このうち土壤2はその建物の柱穴に切られている。したがってこの土壤群には時期差があり、途中建物の立て替えの際に以前にあったこの土壤2を壊す結果となっていることが判明する。その土壤2を切るピットの検出面において水指と瓶を並べ置いたような状況が確認できた。柱を抜いた際に意図的に置いたものとみられる。

#### F区土壤1（第75図）

F区とG区との境にあり、西側の遺構の肩は水田造成時に失われている。純度の高い白色粘土が厚く堆積していたが、表土剥ぎ後に何者かによって粘土の一部が乱掘に遭い盗難にあったことは誠に遺憾なことであった。



第75図 F区土壤1実測図 (1/20)

径1.1mの円形の土壟であり、深さは30cmある。周縁には赤褐色の粘土が取り巻いているが、底部には至らず、壁に貼るものである。断面の観察から、土壟は数度にわたって作りかえられている状況が確認された。すなわち一番外側に赤褐色粘土層があり、その内側に白色粘土が堆積するが、



第76図 F区土壤1検出状況（北西から）



第77図 F区土壤1 1/4カット状況（北から）

その内側にも赤褐色粘土が巡り、また白色粘土が内側に堆積する。つまり赤褐色粘土の張替えが認められるのである。他にも白色粘土層中に赤色粘土が断面で細い帯状に見える部分もあり、数回に渡って作り替えがあったことが考えられるが、先の乱掘によって判り難い状況となっている。造様の西側の底に地山の石が額を出すが、その上にシッタが横倒しの状態で出土した。

#### 出土遺物（第78図）

199は完形のシッタである。焼成は悪く非常に脆い。口縁部は幅狭く肥厚させる。底部は厚く、内面には粘土の接合痕を残す。

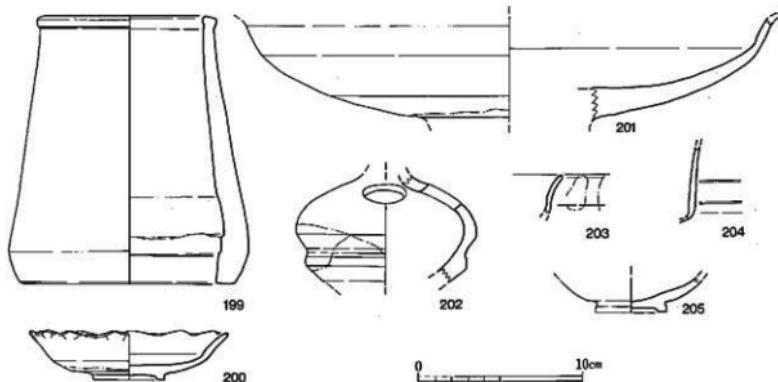
200は縁反形の小皿で口縁部は縁なぶり。12の頂点があるものとみられる。201は大皿。内面に壁土が多い量に付着する。

202は香炉。横に強く張る体部は下半を削りにより稜をつける。体部上半に円形の透孔をあける。頸部は強くすばまる形状である。釉は発色しないが、色調の異なる釉を掛け分けしていることは観察できる。

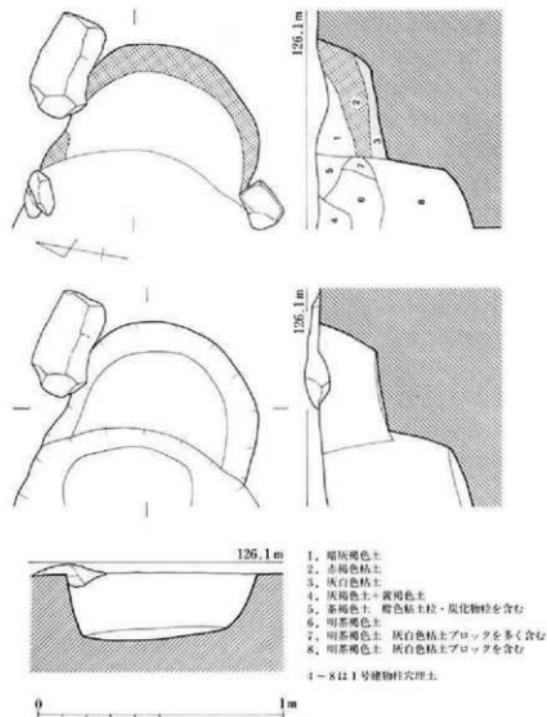
203から205は土壤の検出面からの出土。203は椀の口縁部であり、乳濁色の薬灰釉を掛けた後に銅緑青釉を掛ける。204は筒形の椀の体部。外面に細い沈線を入れる。外面は薬灰釉で乳濁色を呈し、内面は土灰釉で透明感のある明緑色を呈する。205は椀の底部。薬灰釉で乳濁色を呈する。

#### F区土壤2（第79・80図）

F区1号建物の柱穴に切られ、約1/2が残る状態である。径80cmで深さは24cmを測る。検出面では周縁の赤褐色粘土が確認され、内部は暗灰褐色土に覆われていた。暗灰褐色土を除去すると周縁にあった赤褐色粘土が底面に見える。さらにその下に灰白色粘土が拡がるという状況であった。断面の観察からは土壤の底面に灰白色粘土層があり、これは壁に沿って立ち上がりない。その上層が赤褐色粘土であり、比較的厚い堆積となっている。



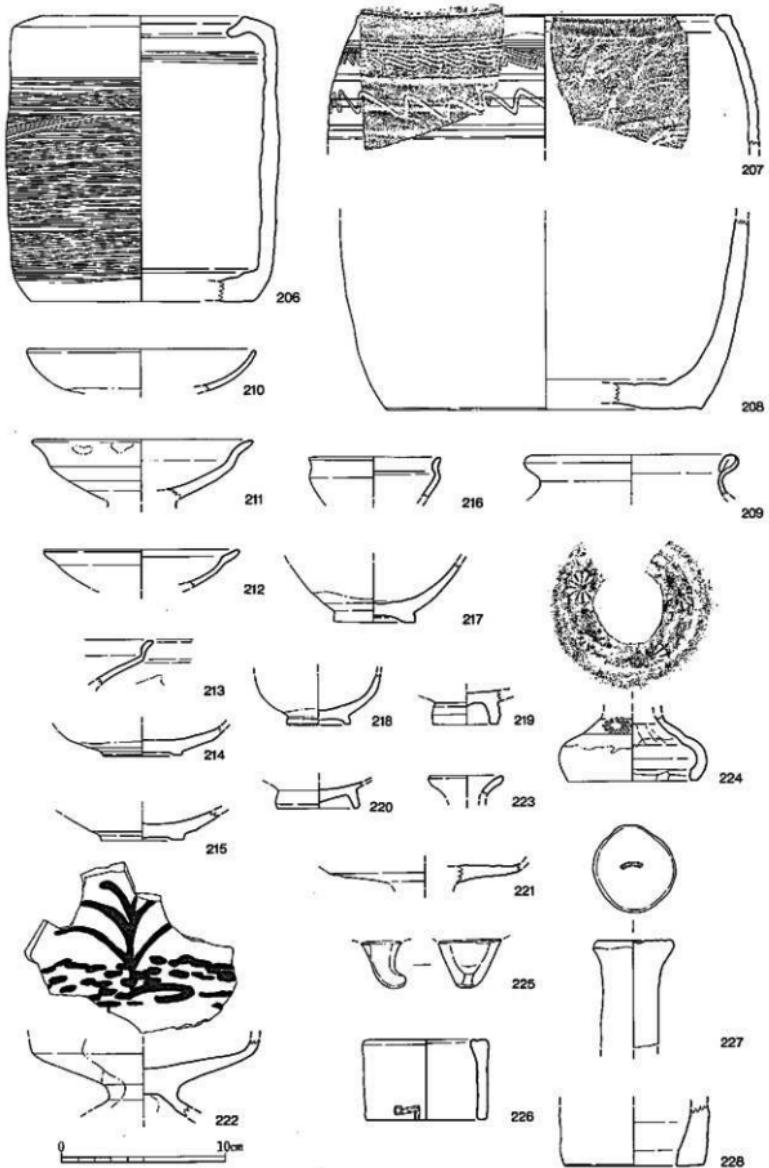
第78図 F区土壤1 出土遺物実測図 (1/3)



第79図 F区土壤2実測図 (1/20)



第80図 F区土壤2粘土面検出状況



第81図 F区土壤2出土遺物実測図(1/3)

なお、柱穴の遺構検出面において206の水指が横倒しで置かれ、そこに224の異形瓶が天地を逆にして置かれている状況が確認された。建物廃棄時に何らかの祭祀を行ったものであろうか。

遺物は土壙2とその周辺のピットの遺物が混乱してしまった。1号建物に関する遺物が入ってしまっているといえる。

#### 出土遺物（第81図）

206は水指である。直立する胴部を有し、底部端は丸みを帯びる。幅広い口縁部をもち、蓋を緩やかに作り出している。胴部は櫛状工具によりカキメ状の装飾を加える。外面は透明感のある土灰釉をかけ、オリーブ灰色となり、そこに未発色の釉が更に掛けられる。内面は未発色で鶯色を呈する。

207は内湾する口縁部をもつもの。用途は限定できないが、甕の一種か。外面は沈線と波状文により装飾を加える。208は重厚感のある底部。全体に施釉するが発色せずにくすんだ緑色に発色する。209は口縁部を内側に折り返し丸く仕上げる壺であり、全体に灰釉がかかり透明感のある緑色に発色する。

210は丸形の皿。藁灰釉で乳濁色を呈するが、発色が不十分である。211は縁反形の小皿で外面に僅かに土灰釉の緑色が確認できる。焼き台として転用されたものか、全体に灰をかぶり硬質である。212は縁付形の皿で、船釉が施されることにより明褐色に発色する。213は強く外反する口縁部をもつもので、おそらく小皿であろう。藁灰釉であるが発色が不十分である。214・215は皿の底部である。両者とも釉の発色は悪い。215は疊付に糸切底を残す。

216は天目形の口縁を持つ小形の椀。釉は鉄釉で茶褐色を呈し、茶入に用いられるものと同一の釉である点は注目できる。217から220は椀の高台部。217は釉は未発色。218と220は藁灰釉で乳濁色を呈する。219は小形の器種で、竹の節高台である。

221は高环形の土器。藁灰釉で一部乳濁色を呈する。222は鉄絵を描く脚がついた皿。透明度の高い褐色を呈する長石釉に船釉をかける掛け分けである。画題は抽象的で判り難いが、地面或いは水面と、そこから生える樹木或いは草であろう。

224は瓶であろうか。底部をくりぬいて切り口をケズリにより丁寧に面取りをする。横に強く張る胴部は一旦軽くくびれて頸部に統く。肩部に菊花文の押印が4か所に押される。胴部上半に船釉を掛け、褐色に発色する。

225は猫足。大皿の脚となろう。226は蓋置。筒形の形態で、口縁部内面は緩やかに肥厚させる。疊付は残存が不良で詳細がわからないが、糸切を残すようである。全体に藁灰釉を掛け乳濁色を呈する。底面に接して鉤形の浅い沈線が認められる。記号的なものであろうか。

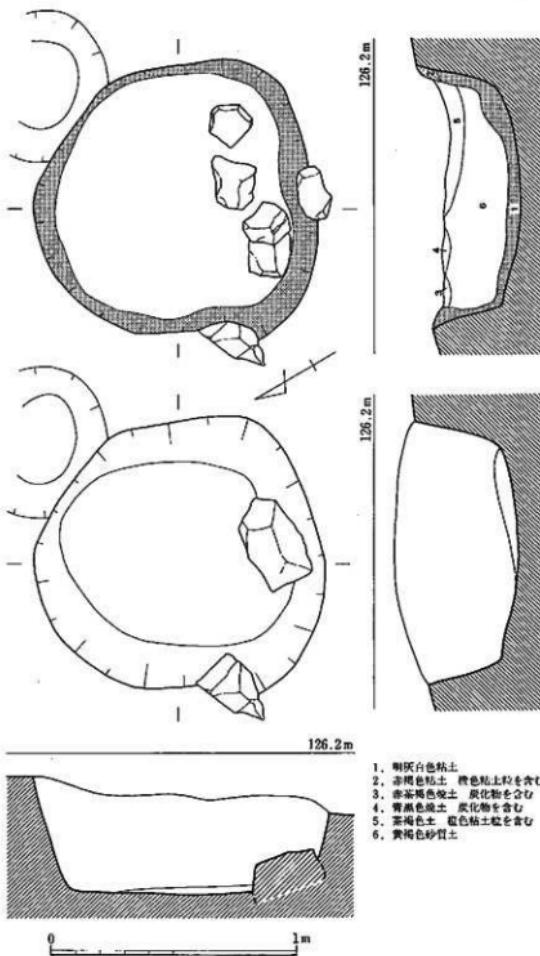
227はトチで、上面に半裁竹管文の押印がある。228はシッタの底部小片である。ごく細い形態をなす。焼成は素焼きである。

#### F区土壙3（第82・84・85図）

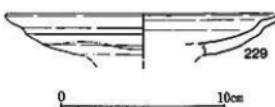
径1.1mの円形の土壙で、深さは50cmを測る。直立に近い壁を持つ。断面の觀察から赤褐色粘土は灰白色粘土の上に乗る形であり、その灰白色粘土が土壙の周壁及び底面を覆う形をとる。内部は粘土等が全て取り払われた状況であり、地山に近い黄褐色砂質土がつまっていた。出土遺物は少なく、実測できたのは小皿の一点のみである。

出土遺物（第83図）

229は体部の浅い縁付形の皿であり、口縁部上面はやや内湾する形態を探る。種は土灰釉、或いは長石釉であろうか。透明度の高い褐色を呈するものであり、内ヶ窯窪跡の調査ではあまり類例を見ないものである。



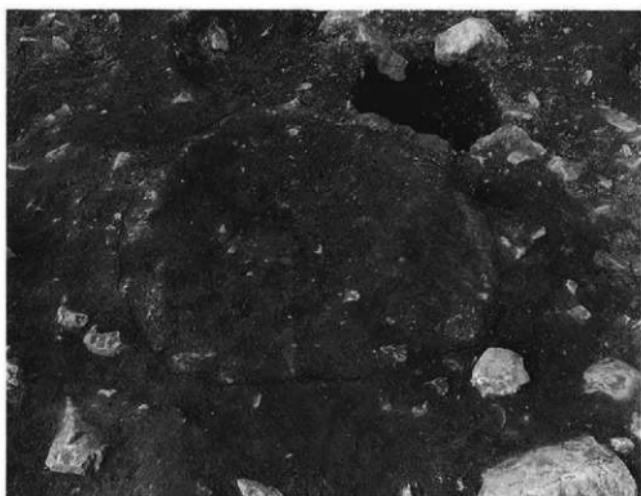
第82図 F区土壤3実測図 (1/20)



第83図 F区土壤3出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物（第88図）

230から233は小形の皿である。230は丸形を呈するもの。種は未発色で灰白色となる。231から233は底部片であり、い



第84図 F区土壤 3 検出状況



第85図 F区土壤 3 粘土面半裁状況

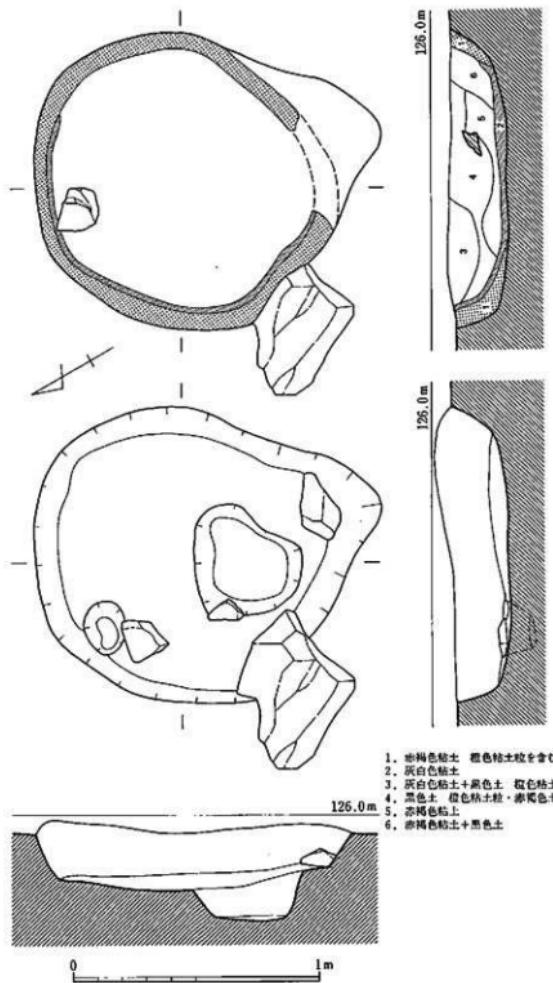
ずれも褐灰釉と考えられる。234は大皿である。釉を掛け、濃褐色に発色する。見込には釉剥ぎが認められる。235は大形で高い高台であり、貼り付けによる可能性がある。褐灰釉を掛け、一部浅い緑色に発色する。

236は甕である。口縁部は外側へ折り返し整形する。胴部最大径とそのやや上位に沈線が引かれ、段状となる。

238はぐい呑みである。灰褐色を呈する精良な胎土を用いている。釉は長石釉であろうか、透明度の高い暗灰褐色に発色する釉を掛ける。239は波状口縁を有する瓶形の陶片。薬灰釉を掛け、乳濁色となるが発色は良くなない。

#### F区土壤5 (第89・90図)

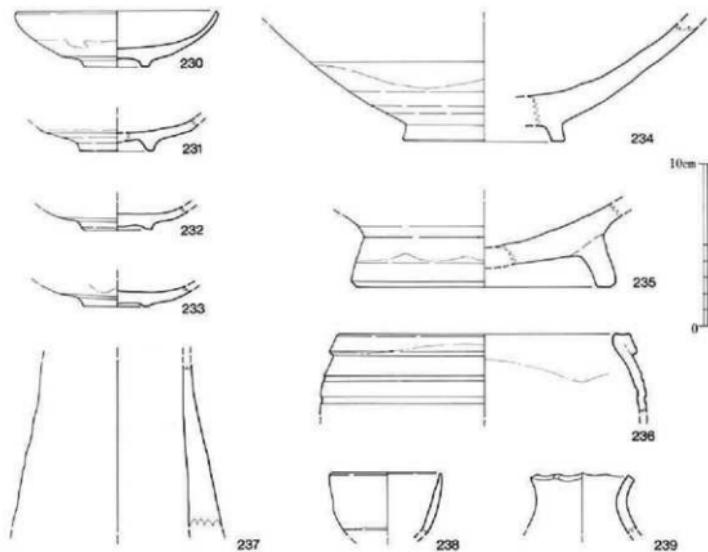
F区とG区との境にある土壌で、一部水田の造成により造構の肩が壊される。径1mほどの円形の土壌であるが、複雑に粘土の堆積が切りあっている状況が観察された。堆積する粘土は炭化物を含む灰白色粘土が多く、周縁に赤褐色粘土+灰白色粘土が巡るものもある。間層には茶褐色土が入る。



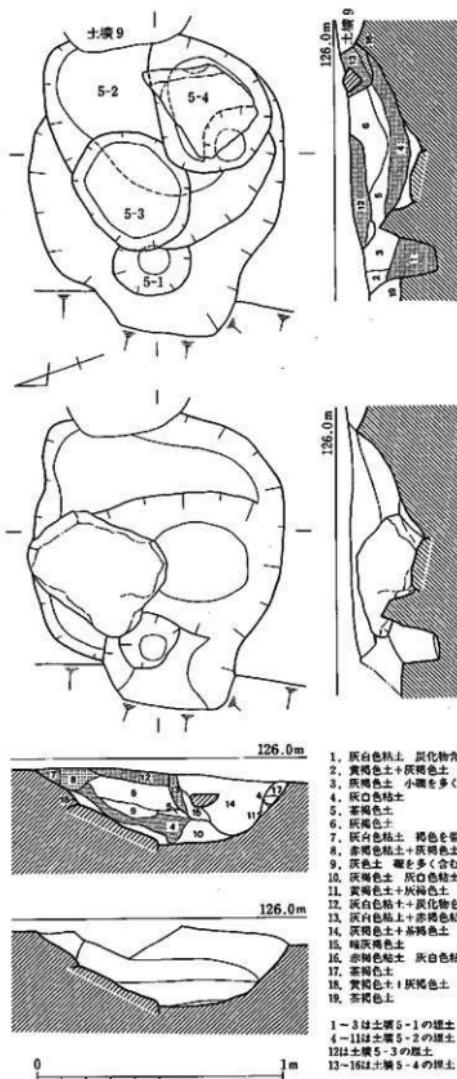
第86図 F区土壤4実測図 (1/20)



第87図 F区土壤4検出状況（北西から）



第88図 F区土壤4出土遺物実測図（1/3）



第89図 F区土壤5実測図 (1/20)

このように一つの土壌に対して何度も掘っては埋めてという作業を繰り返しているように観察できる。また南側は土壌9に切られる。

遺物の出土は少なく、全体的に見て焼成の悪い素焼き片が多く出土している、

#### 出土遺物（第91図）

240はやや内湾気味に立ち上がる体部を持つ椀である。2条の浅い沈線をめぐらせる。胸部下半はケズリによりくびれ部を表現する。未焼成とも思われる甘い焼成であり、灰白色を呈する。241は筒形の椀。完形である。焼成時に生じたと思われる歪みが顕著であり、口縁部は長楕円形となる。全体に施釉されるが、大部分は剥落してしまっている。おそらく墨灰釉であったと思われ、一部乳濁色に発色している。

242は皿或いは椀の底部である。釉は未発色で灰白色を呈している。243は皿の底部である。焼成は非常に甘く、灰白色を呈する。未焼成の段階で破棄されたものであろうか。

244はぐい呑み程度の大きさの高台部。総掛けの釉であるが発色が悪く暗い茶褐色を呈する。

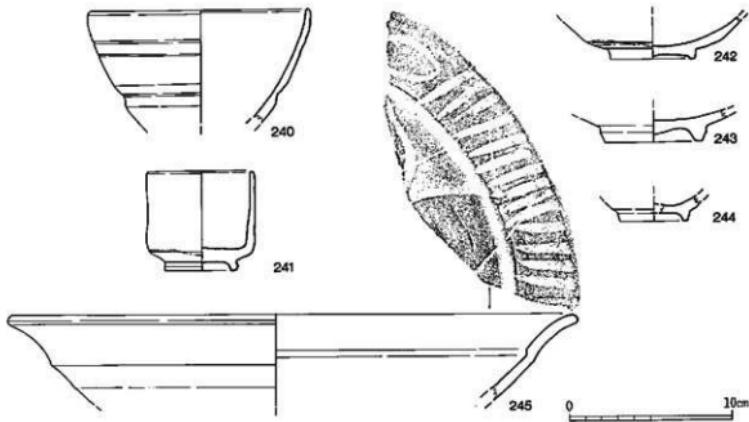
245は縁付形の大皿で口縁部上面及び見込に彫文により文様を刻む。口縁部の文様は放射状の直線と円文の組合せであり、見込は残存度が低く詳細はわからない。

#### F区土壌6（第92図）

径1mほどの円形の土壌であり、深さは20cmを測る。二段掘となっている。内部の堆積は、不純物が多く入る灰白色粘土層のほかに、暗黒褐色土が入り込むもので、粘土土壌の廃棄されたものと



第90図 F区土壌5粘土面検出状況（西から）



第91図 F区土壤5出土造物実測図 (1/3)

考えてよいと思われる。

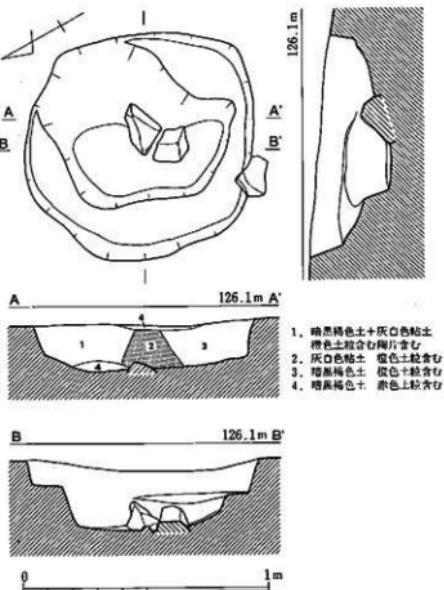
#### 出土遺物 (第93図)

246は鉄絵を描く梳。深い体部を有し、口縁部は短く外反させる。全体に透明感のある灰色に発色する長石釉を掛け、口縁部外面に波線と直線を組み合わせた文様を巡らせる。

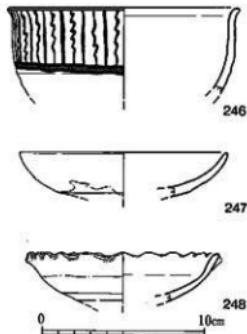
247は丸形の皿。土灰釉で浅い緑色を呈する。一部が乳濁色を発する。248は丸形の小皿であり、口縁部を緑なぶりする。釉は発色が悪いが、一部乳濁色を呈することから露灰釉であると考えられる。

#### F区土壤7 (第94図)

長方形の土壤であり、内部には炭化物が多量に詰まっている状況であった。平面形は $2.6\text{m} \times 1.3\text{m}$ の長方形であり、深さは30cm程度である。底面は北側が緩やかに立ち上がるのに対し、南側は比較的急に立ち上がる形状である。堆積は北側から



第92図 F区土壤6実測図 (1/20)



第93図 F区土壌6 出土遺物実測図 (1/3)

徐々に流れ込んだことが観察され、最後に南側部分が一気に堆積している。内容は炭化物及び炭化物が多く混じる礫層である。この土壌は壁面が焼けておらず、ここで炭化物が作られたのではなくて、別の場所で作られた炭化物がここに持ち込まれて堆積しているものと考えることができる。この炭化物に対しては釉の原料であるかと考えられたために、樹種同定分析を実施したが、その成果はVに掲載してあるので参照していただきたい。結果的には大部分が車輪梅であり、従来言わされているような樹種は確認できなかったが、それが釉として活用できるのか、もしできないのならばこの土壌の性格をどう考えるのか、課題を与えられたものと言えるであろう。

遺物の出土はごく僅かである。

当該期のピットに切られる関係が確認できるので、内ヶ磯窯操業時のものととらえることが可能である。

#### 出土遺物（第95図）

249は小形の丸形皿。釉は未発色であり、灰白色を呈する。

250は球形の体部をもつもので、外面の底部との境には比較的強い稜を有する。器壁は厚く、体部の最大径で9mm、底部付近で18mmを測る。外面には墨灰釉を掛け、乳濁色を呈する。内面は露胎であることから、瓶或いは香炉であると考えられる。

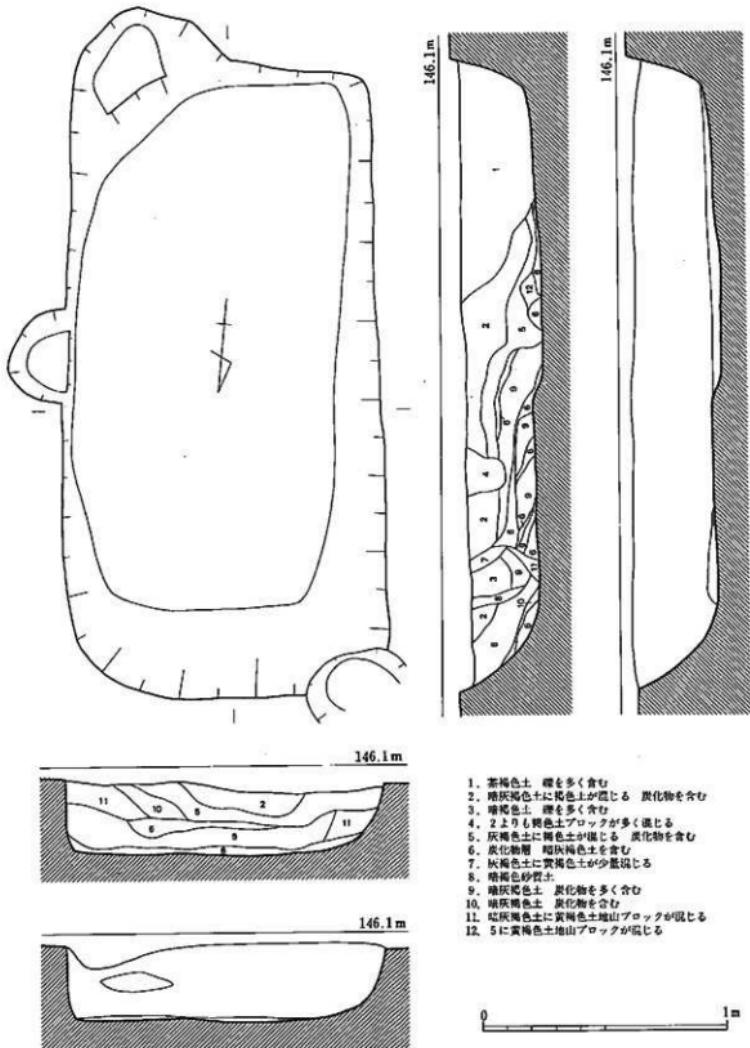
#### F区土壌8（第96・97図）

F区とG区との境にあるもので、大部分が水田造成時に削平されている。灰白色粘土の堆積が短い帯状に検出されたが、本来は径1.1メートル程度の円形の土壌であったと推測できる。

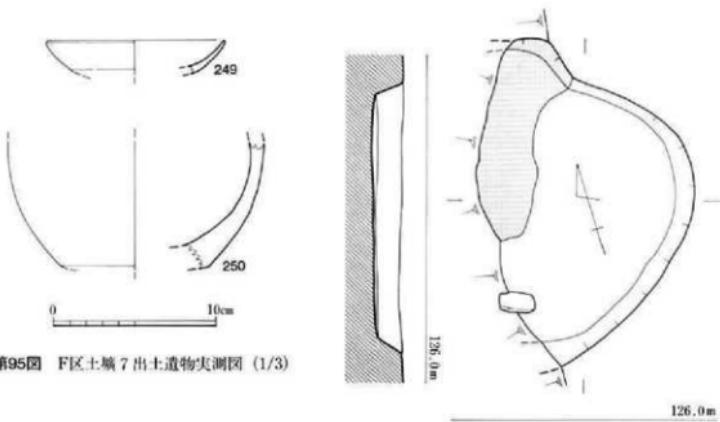
残存状態が悪いこともあり、遺物は出土していない。

#### F区土壌9（第98・100図）

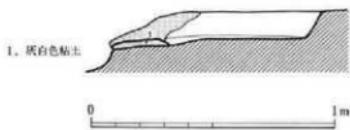
径1mの円形の土壌で深さは30cmを測る。灰白色粘土と赤褐色粘土が複雑に組み合わさる堆積をしている。最も外側に灰白色粘土の層があり、その内側に赤褐色粘土と灰白色粘土が互層に入る。中央に灰褐色土が底まで入り込んでいる状況が確認できる。



第94図 F区土壤 7実測図 (1/20)



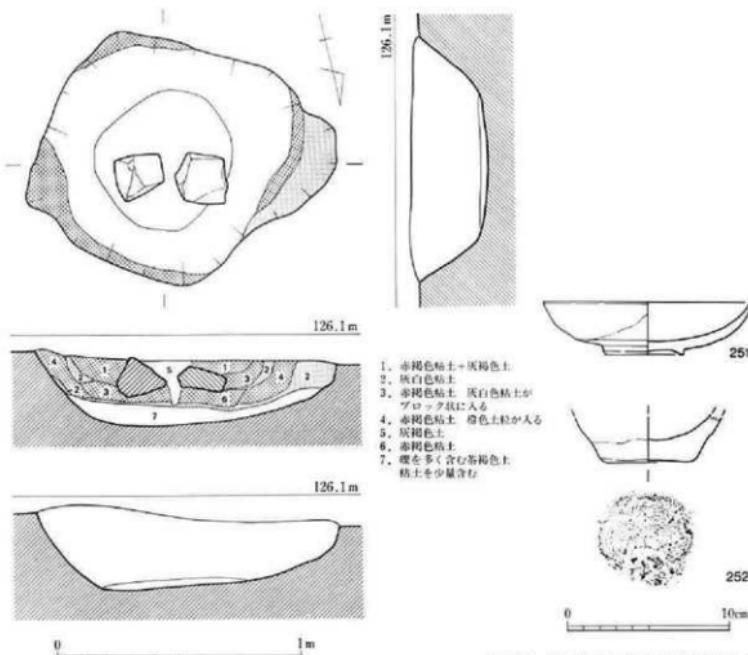
第95図 F区土壤 7 出土物実測図 (1/3)



第96図 F区土壤 8 実測図 (1/20)

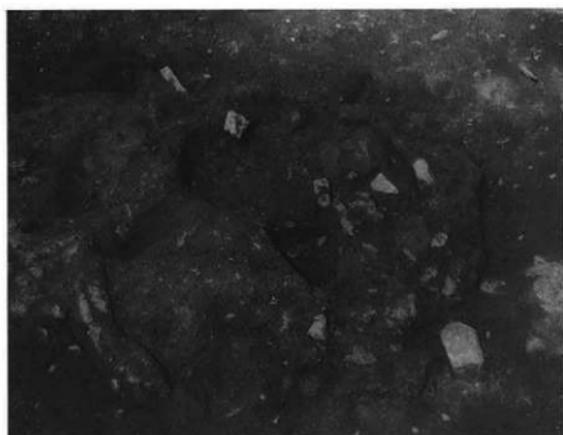


第97図 F区土壤 8 (北西から)

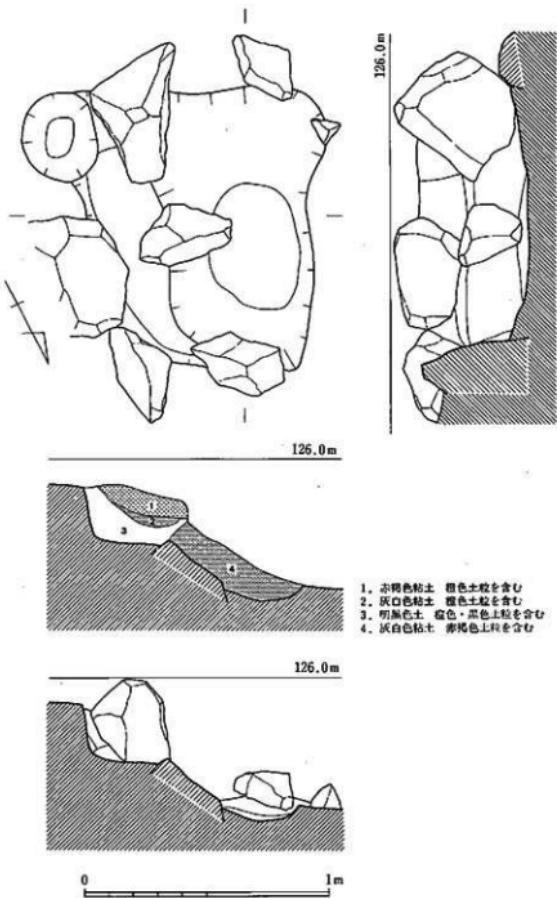


第98図 F区土壤 9 実測図 (1/20)

第99図 F区土壤 9 出土遺物実測図 (1/3)



第100図 F区土壤 9 檜出状況 (南から)



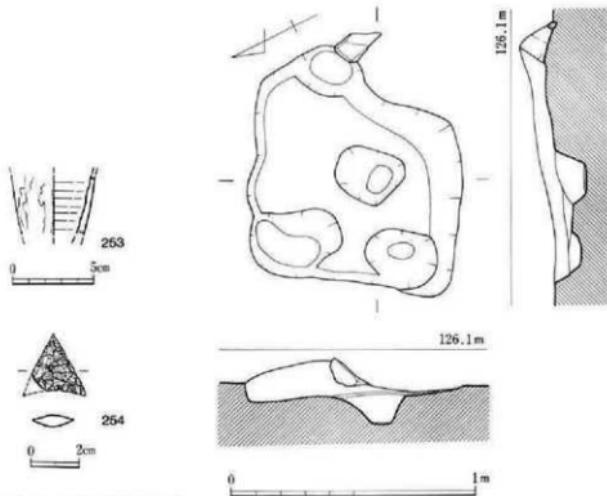
第101図 F区土壌10実測図 (1/20)

#### 出土遺物（第99図）

直接土壌にともなう土器は皆無である。図に示した陶器は造構の北隣で出土したものである。251は丸形の皿であり、薬灰釉を施すが、剥離が進行している。252は底面を糸切のまま放置された柄の底部。未整形で放棄されたものであろう。

#### F区土壌10（第101図）

F区とG区の境で検出されたもので、水田造成によって造構の肩が失われている部分が多い。

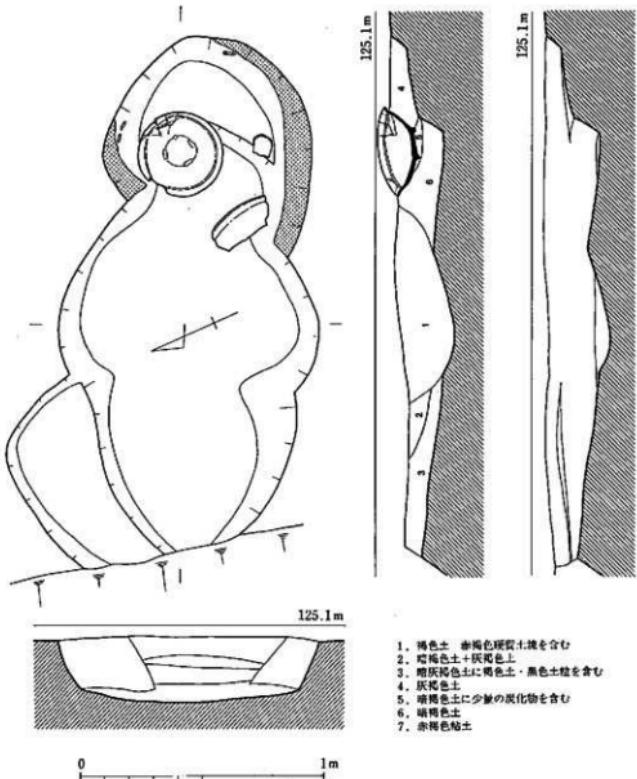


第103図 F区土壤11出土遺物実測図  
(1/3、1/2)

第102図 F区土壤11実測図(1/20)



第104図 F区土壤12大皿検出状況



第105図 F区土壤12実測図 (1/20)

赤褐色粘土が灰白色粘土の上に堆積している状況である。全体に地山の礫が多い個所であり、遺構の肩・壁はそれを利用しており、平面形は歪な形状となっている。残存状態が悪いこともあり、遺物は出土していない。

#### F区土壤11 (第102図)

ごく浅い土壇で、平面形は歪な方形である。遺構の深さは10cmに満たない。

遺構には赤褐色土が塗がっているが、土質がわかりにくく粘土になるかどうかは判然としない。検出面近くで石鎧が1点出土した。また他の遺物は非常に少ないので、茶入が一点出ている点は注目される。

#### 出土遺物 (第103図)

253は茶入の胸部。底部から直線的に開く形態である。内面の模様は強い。茶褐色の鉄釉を掛けた後、褐色の鉛釉を掛ける。254は凹基式の石鎧で片側の脚を欠損する。漆黒色の黒曜石製で、透明感がある。全面に調整剝離が及ぶ。1.5gを量る。

#### F区土壙12 (第104・105図)

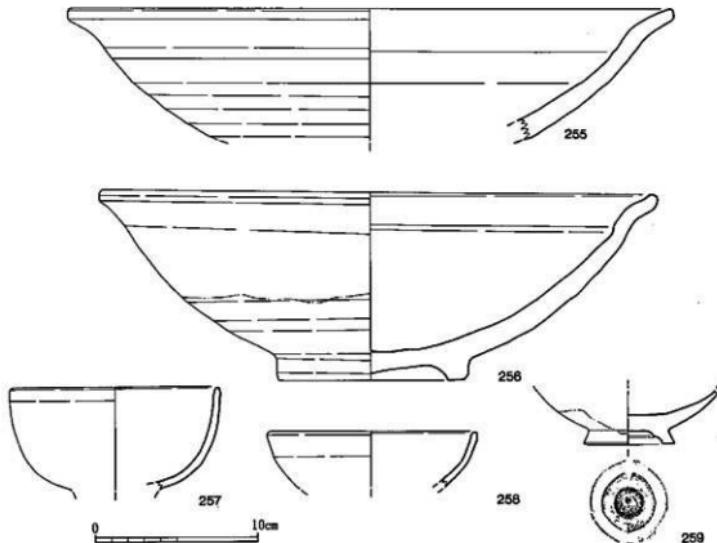
F区とG区の境界近くから検出された。細長い土壙かと考えて調査を開始したが、土壙というべき部分は大皿が出土した円形部分かと思われ、赤色粘土の取り巻くものが見られるのも大皿近くのみである。

赤褐色粘土が取り巻く部分も中央の堆積は灰褐色土であり、粘土を溜めていたような痕跡は確認できなかった。

#### 出土遺物 (第106図)

255と256は大皿で縁付形である。255は素焼き。内面には有機物が付着するが、何であるかは不明である。256はほぼ完形の大皿である。藁灰釉を施し乳濁色に発色するが約半分は未発色で灰白色を呈する。見込に方形の釉剥ぎが4ヶ所存在する。

257は深い体部を持つ楕。土灰釉を施し、透明度の高い褐色に発色する。258は中形の楕となろう。長石釉かと考えられる透明度の高い緑灰色の釉を施す。胎土は精良である。259は楕の底部で、褐色の鉛釉と乳濁色の藁灰釉の掛け分けである。見込は青白色の海鼠釉となる。高台は短くハ字形に開き、内面は二段に掘り込まれる。高台底に巴文のような部分があるが、単に偶然生じた可能性もある。



第106図 F区土壙12出土遺物実測図 (1/3)

#### G区1号建物（第107図）

G区の建物群については、昭和56年度の第3次調査において部分的に確認されており、その全貌については将来の調査に期待された。そこで、今回の調査ではその建物の続きとなる部分の検出を試みたが、F区との境部に段が生じていることからもわかるように水田造成時に削平されたらしく、遺構の残存度は悪かった。その中で、一部約220cm間隔で並ぶピット群があり、それが第3次調査における1号建物の柱穴列と平行することが確認された。したがって1号建物は残存度は低いものの東西5間、南北6間以上の建物と考えることができる。規模は東西約8m、南北12m以上を測る。

#### G区2号建物（第107図）

G区2号建物については第3次調査において2間×2間の規模で確認され、更に延びることが想定されていた。今回の調査においては南北方向に伸びる2号建物に伴うと考えられる柱穴が検出された。今回検出された柱間は約220cmである。東西2間、南北3間以上の建物と考えることができ、その規模は東西4.5m以上、南北8m以上となる。

#### G区土壙10（第108・110図）

第3次調査区との境目で検出した。厚い白色粘土の堆積があるが、質は悪く、不純物を多く含む。径1mの円形を呈し、二段掘となる。下段の径は60cm。深さは60cmであるが、粘土堆積層は上層の20cm程度であり、下層は焼土を含む黒褐色土である。検出面からは茶入を始めとして特殊品がある程度出土した。

#### 出土遺物（第109図）

260は茶人で口縁部から肩部の破片。口縁部は強く外反する。口縁部から肩部へ向かってはなだらかに続き、明瞭な肩部を経て胴部へ続く。釉は残存部に関しては全てに掛かる。茶褐色を呈する鉄釉に鉛釉を掛けた。

261は非常に小形の蓋。底面は糸切によるものと見られるが、丁寧にケズリ調整される。オリーブ茶色に発色する土灰釉を全面に掛けた。

262は縁付形の中皿。鉛釉で濃褐色～濃青色を呈する。口縁の四方を釉に浸す方法で施釉し、見込に釉が掛からない。

263は基筒底のぐい呑み。発色は悪いが、一部淡緑色を呈し、土灰釉かと考えられる。

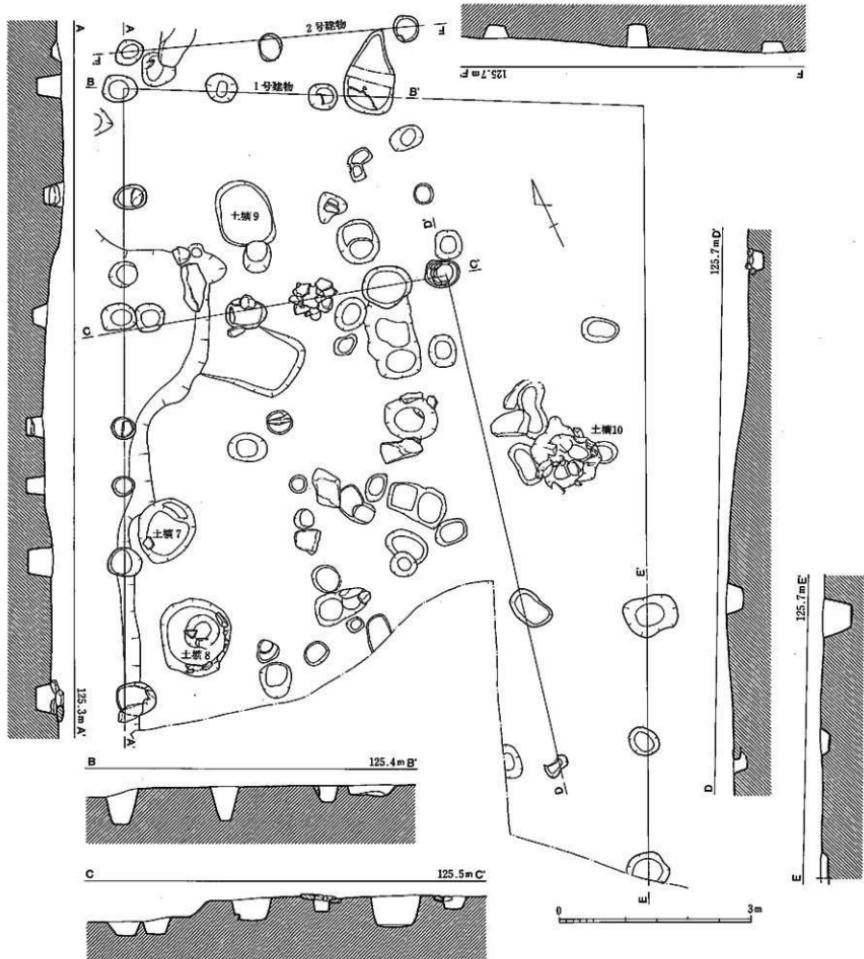
264は壺の口縁部。内傾する口縁部を外側へ折り返し口縁帯をつくるもの。胴部の最大径は口縁部に近く、沈線を巡らせる等して段を表現する。内外面に鉛釉を掛け、褐色を呈する。口縁部は露胎。

265は縁付形の小皿を縁なぶりしたもの。小刻みに縁なぶりされ、頂点は33個に復元される。鉛釉が施釉され、褐色を呈する。

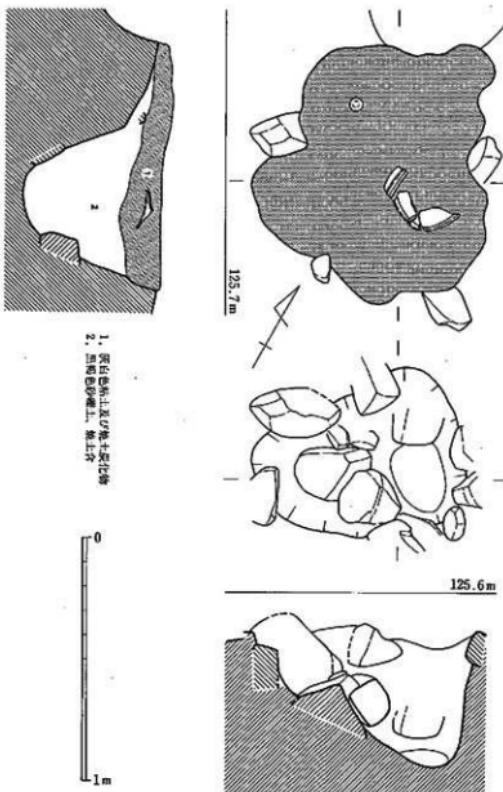
266は大振りの椀。丸みを持つ胴部は深い。口縁部は短く外反させる。茶灰釉が施釉され、乳濁色に発色する。

267は磁器の小片で高台を含む。見込に草文かと思われる染付が描かれるが、小片のために詳細は不明。鮮やかな色調から、混入の可能性も残される。

268と269は鈴。同一固体と思われるほど類似しているが、紐を通す部分が両者にあることから、



第107図 G区1・2号建物実測図 (1/60)



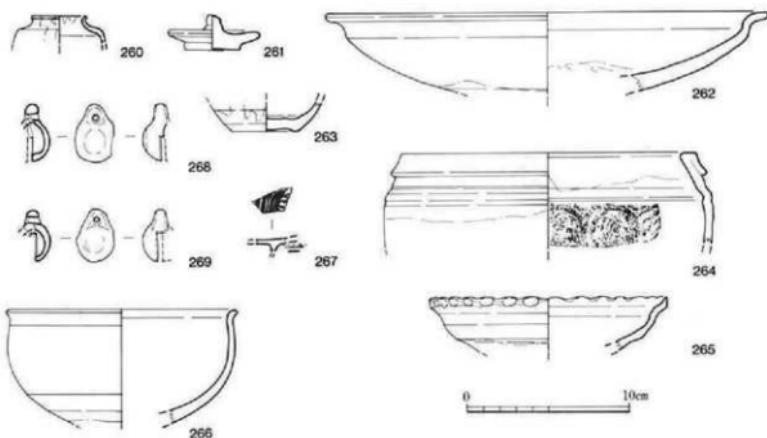
第108図 G区土壤10実測図 (1/20)

別個体であることがわかる。長さ3.5cmのごく小さいものである。焼成は甘く軟質。胎土は非常に精良なものを用いている。

#### F・G区ピット出土遺物 (第111図)

F区とG区のピットを一括して概観する。

270は茶入でF区1号建物の柱穴でF区土壤7脇にあるピット11からの出土。口縁部は欠損する。肩衝茶入であり、頭部が肩よりも沈み込むタイプであろうか、強い稜をもって頭部へと下がっている。鉄釉を掛け、茶褐色に発色する。271は茶入の底部片。270と同様にF区1号建物の柱穴であるピット12からの出土であり、ピット11の南西隣となる。鉄釉を掛け、褐色に発色する。



第109図 G区土壤10出土遺物実測図（1/3）



第110図 G区土壤10検出状況（南東から）

272・274はF区土壤7を切るピット16から出土した。272は縁反形の小皿。鉛釉を掛け、緑褐色に発色する。274は縁反形の小皿である。鉛釉を掛け、褐色に発色する。

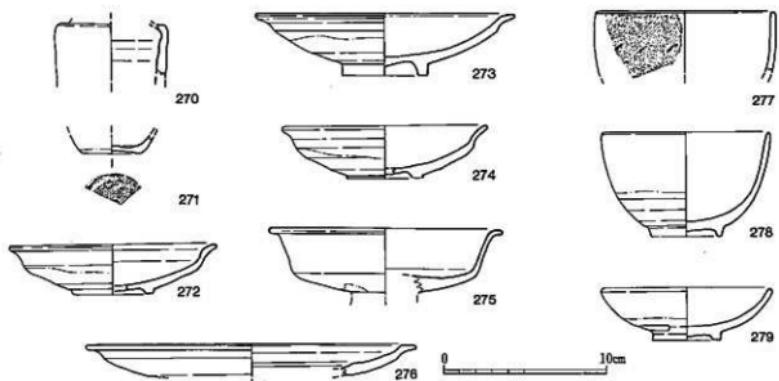
273は縁付形の小皿で、271の茶入と共伴する。小皿の中では大きめの形態である。高台の削り込みは深い。比較的浅い体部を有する。薬灰釉であろうか、クリーム色に発色する。高台の目がつけられていた個所が変色している。

275・277～279はF区の福地川への落ち込み際にあるピット22からの出土である。これら以外にも長石釉が掛けられた中皿片があるが小片のために実測し得なかった。275は深い体部を有する小皿で、直立に近く立ち上がる体部は口縁部で丸みを帯びながら強く外反する。薬灰釉が施され、乳濁色を呈する。

277はやや内湾する椀の口縁部片。波状文を二段にわたって密に施す。薬灰釉を施し乳濁色に発色する。278は丸形の椀。釉は未発色で渦りのある浅い緑色を呈する。

279は丸形の小皿。小振りで浅い体部を有する。釉は未発色であり爲色を呈する。

276は平坦な形状の皿でF区との境に近いG区ピット1からの出土である。薬灰釉を掛け乳濁色を呈するが、剥落が著しい。



第111図 F・G区ピット出土遺物実測図 (1/3)

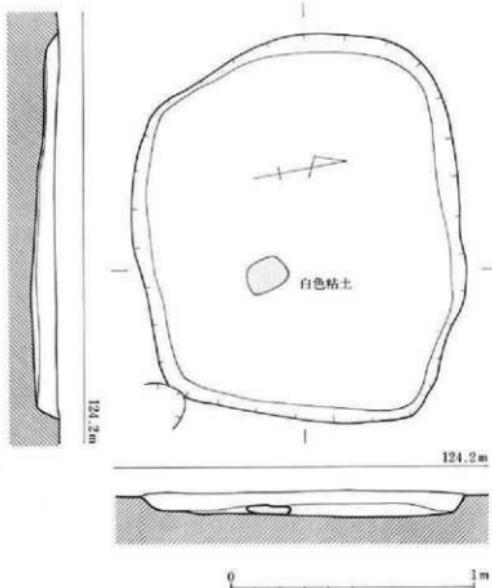
#### H区土壤5（第112・113図）

H区北側の川への落ち込み近くで検出されたもの。平面形はいびつな円形を呈し、 $1.6 \times 1.4$  mほどの大きさである。遺依存状況は悪く、10cm程の深さしか残らない。中央近くに黄味を帯びた白色粘土の小堆積が認められた。

遺物は皆無である。

#### H区土壤6（第114・115図）

調査区の南西角にて検出された粘土土壤。径約80cmの円形土壤である。内部には黄灰色粘土が厚さ25cm程度入るが、炭化物や土を多く含むものであり、質は良いとはいえない。壁面の一部には赤褐色粘質土が見られるが、底面には至らない。土壤の



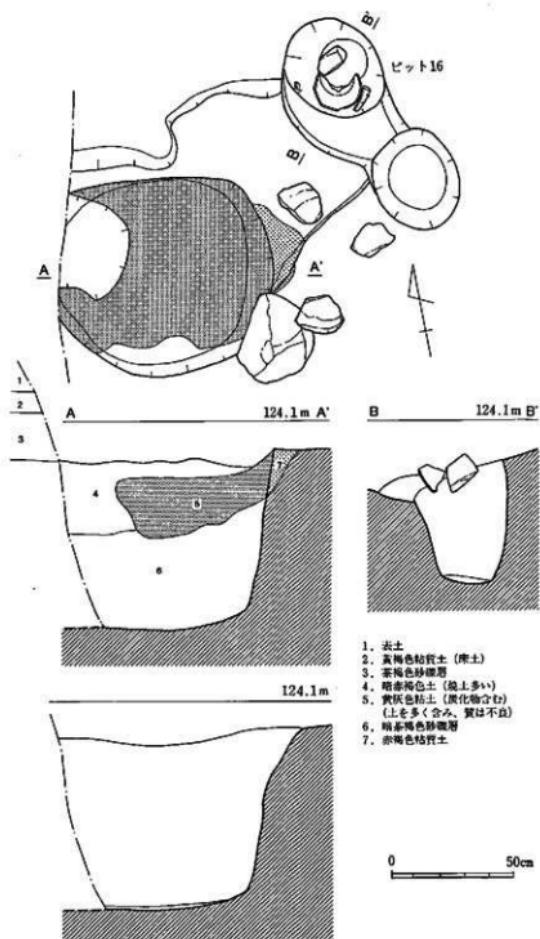
第112図 H区土壤5実測図(1/20)



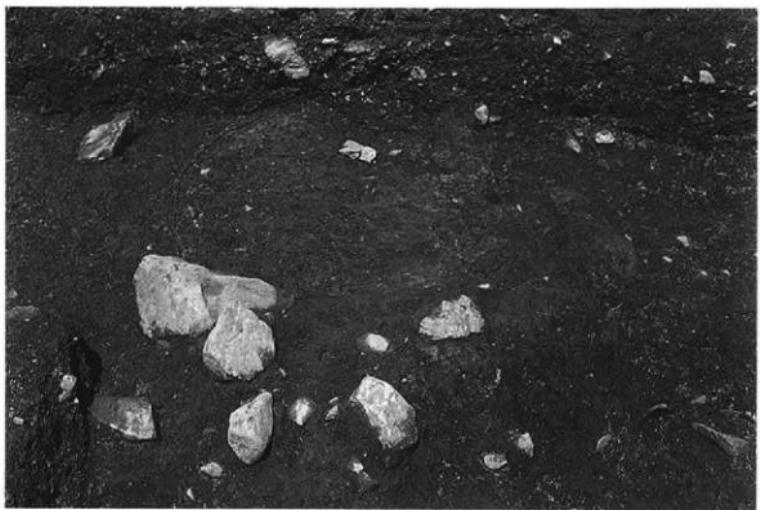
第113図 H区土壤5(雨から)

西側からは焼土を多く含む暗赤褐色土が粘土に切り込む。土壤の下層は38cmの深さで暗茶褐色土が入り、土壤全体の深さは54cmとなる。遺物は出土しなかった。

この土壤に近接して水指を据えるピット（ピット16）があり、ここにあわせて報告する。このピットは径35cm、深さ50cmを測る深いものである。



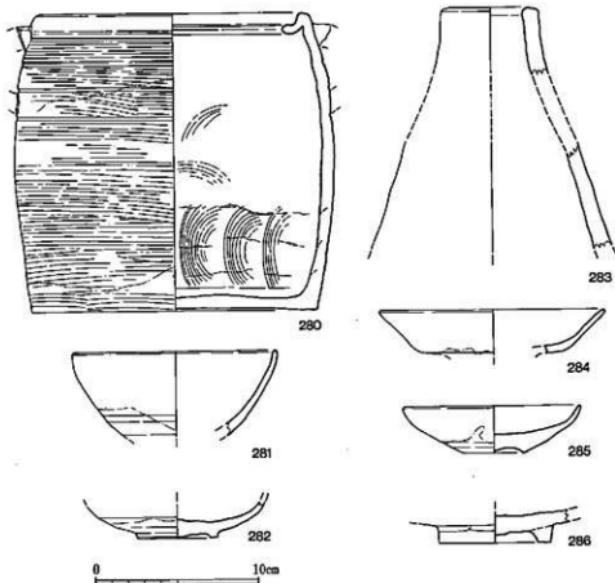
第114図 H区土壤6・ピット16実測図 (1/20)



第115図 H区土塙 6 検出状況（東から）



第116図 H区ピット16水指出土状況（北東から）



第117図 H区ピット16出土遺物実測図 (1/3)

#### H区ピット16出土遺物 (第117図)

280は水指。胴部中位が僅かに膨らむ樽形を呈する。底部は叩きによりつくられ、粘土紐を積みながら成形する。体部も叩き調整によるものであり、内面には当て具痕である青海波文を残す。内面の粘土紐の接合痕は消されておらず、特に下半部に明瞭に残る。外面は全体を柳状工具で調整し、カキメに似た調整痕を残す。口縁部直下の外面から耳を付けるが欠損する。耳は断面橢円形の粘土紐でつくりされていたものである。口縁部には明瞭な蓋受けがつくられる。

281は椀。比較的直線状に拡がる形態を呈する。釉は鉄釉を掛け、茶褐色から黒褐色を呈するものであるが、これは茶入に頻繁に用いられるものであり、特別な椀であると表現できよう。282は椀の底部。墨灰釉で暗褐色の海鼠調を呈する。

284は直線的に口縁部が延びる小皿。285は小形の皿で茎筒底。286は大皿の底部で割れ口の形状から貼り付け高台と考えられる。284と285は墨灰釉を掛け乳濁色に発色する。

283はシッタであるが、接合しない破片からの復元であり、形や傾きには疑問を残す。全体に内傾するもので、口縁部のみ直立とする。厚手の体部を有する。焼成は素焼きで脆い。

#### H区土壙7 (第118・119図)

H区の北側の川への落ち込みより手前においては不整形の浅い落ち込みが多数検出されたが、そこに甕が集中する土壙が検出された。細長い比較的浅めの土壙であり、甕が押し潰れた状態で検出

された。土壙の規模は長さ1.6m、幅60cmで、二段掘になっている。甕が集中するのは下段の上層であり、下段部の長さは1.1m。復元の結果、甕は3固体であった。

#### 出土遺物（第120図）

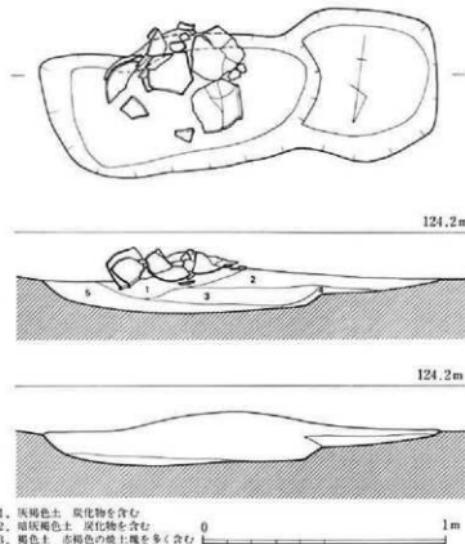
287は完形に復元できた中形甕。口縁部は内側に折り込み、口縁部上面は内傾する。内外面ともナデ調整で、なだらかな輪轍目が巡る。素焼きである。

288は胴部中位は復元できなかつたが、同一固体と思われる口縁部と底部。287を大きくしたような形状で、口縁部形状も共通する。胴部最大径とその上位に沈線を巡らせる。素焼きである。

289は中形の甕で、胴部に柄状工具でカキメのように器面調整をする。口縁部は内側に折り込み、

上面を平坦になるように成形する。素焼きである。

270は蓋で土壙の上層からの出土。糸切の底部を有し、つまみは山形となる。上面に施釉するが未発色で、緑白色を呈する。

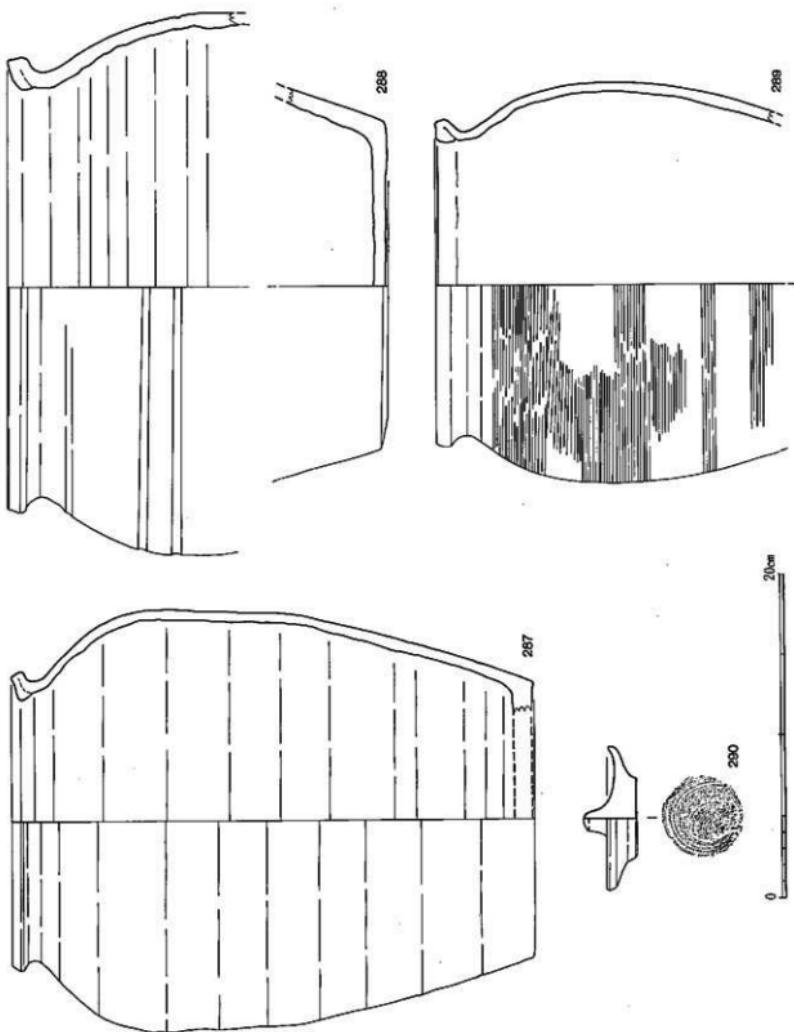


第118図 H区土壙7実測図 (1/20)



第119図 H区土壙7遺物出土状況 (東から)

第120図 H区土塚7出土遺物実測図 (1/3)

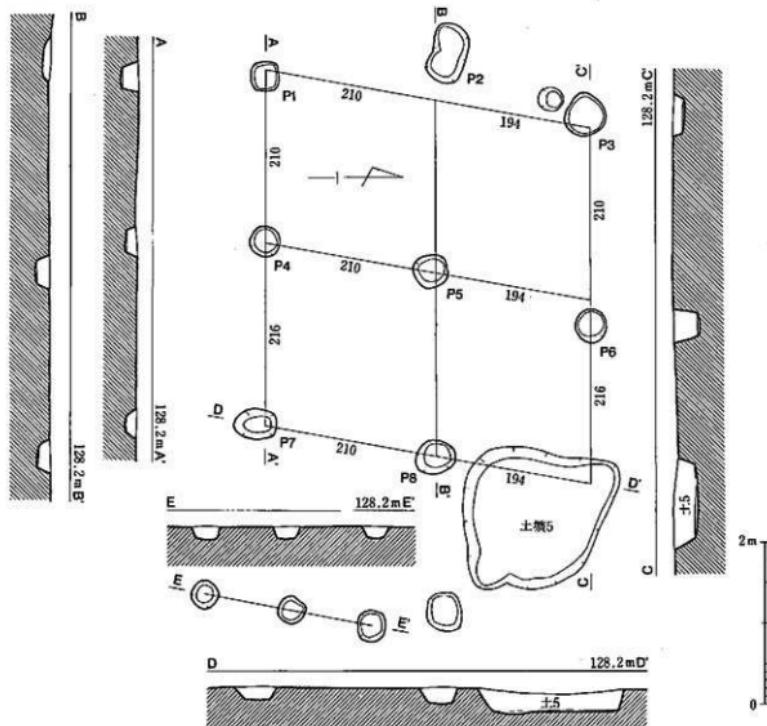


### K区1号建物（第121・122図）

K区1号建物はK区南東隅、土壙4の南に位置する。平面形はかなりいびつな2間×2間の掘立柱建物で、面積は17.6m<sup>2</sup>を測る。柱間は南北で404cm、東西で416cmで、南側が210cmとやや長く、南北軸を意識しているものか。主軸方位は北に対して9°西を向く。北西隅の柱穴は土壙5に切らされていると考えられる。柱穴はいずれも径40~50cm、深さ15~20cmを測り、ピット2はやや東に位置する。柱穴から陶片が出土したが、小片のため図示できない。しかし、土壙5がこの掘立柱建物より新しいことから、窯操業時の建物と考えられる。

### 柵列状ピット列（第121図）

1号建物東に径約30cm、深さ20cmを測る3つのピットが100cmの等間隔で並んでいることから、柵列の可能性があるため図示した。ピットから遺物は出土していないが、1号掘立柱建物と方位が一致するため、同時期の可能性が高い。



第121図 K区1号建物・柵列実測図 (1/60)



第122図 K区1号建物（西から）

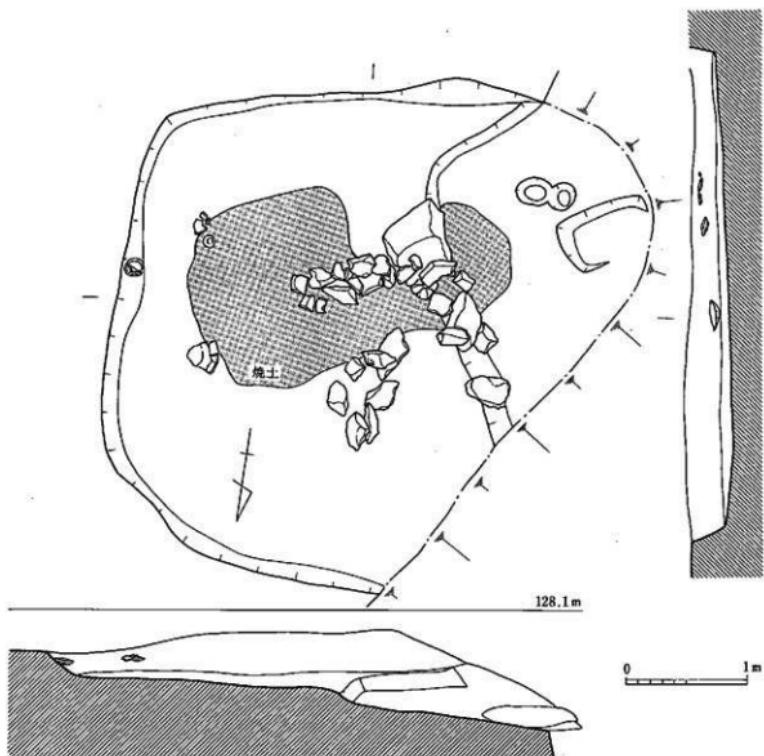
#### K区土壙1（第123・124図）

K区土壙1はK区北西端に位置し、西側は道路により削平を受ける。土壙の長さは南北207cm、東西213cm以上、深さ40cmの楕円形を呈する。埋土は暗黄灰色土で、南西には深さ15cmの段があり、その段に2段の石垣が築かれているが、この石垣は焼土の上に築かれており、土壙掘削当初のものではない。南西隅には埋土に灰白色粘土が混じるビット群を確認した。土壙東側で皿（297・298）や大皿（304）が床の直上にまとまって出土した。

#### 出土遺物（第127・128図）

291は素焼きの蓋である。口縁端部は欠け、底部は右糸切り。292は褐色の鉢釉が掛かる椀で、口縁部がやや内湾気味に外反する。内面には焼成時の多量の付着物がある。

293～302は皿である。293は口縁部が内湾気味に広がる。くすんだ緑味乳濁色の藻灰釉。294は縁付形で縁の幅が広いタイプ。藻灰釉を掛けるが、発色不良で灰白色を呈する。295～298は口縁部を短くすれば水平に折り曲げる縁反形である。295は鉄釉を掛け、緑褐色～青白色の海鼠釉となる。296は緑色の灰釉で、外面の発色が悪く、内面には窓体片が付着する。297・298は比較的高い高台を持つ。297の見込には胎土目跡が4ヶ所残る。焼成時にかなり歪み、高台には胎土目が1ヶ所付いたままである。透明度のある緑色の土灰釉に乳濁色の藻灰釉を掛ける二重掛け。298は傾いていたまま焼成したため、見込の一方に釉がたまる。釉は297に共通する。299は茎筒底の小皿で、外面には



第123図 K区土壙1炎測図 (1/40)

模跡が付着する。緑味乳濁色の藁灰釉。300は縦掛の高台。胎土は精良で、暗褐色の鉄釉が掛かる。疊付に貝目跡を3ヶ所残す。301は口縁部を水平に短く折る縁反形で、口縁部を4ヶ所なぶりを行う。302は平面形を四角に整え四隅を内側へ押さえる形態。内面に窯体片が付着する。乳濁色の藁灰釉。303は大形の皿である。外面上部は船檣による3条の凹線が巡る。内面には10条の横描文が巡り、一部波状文状になる。白色の藁灰釉がかかるが、内外面とも発色は良くない。内面に胎土目跡が3ヶ所残る。304は乳濁色の藁灰釉が厚くかかる縁付形の大皿。内面には横描文を巴状に施し、底部には厚く釉がたまる。内面には胎土目跡が4ヶ所残る。305は大形の直口鉢で、口縁端部はナテで面取りする。口縁部下には円形浮文をつける。把手の付根であろう。内面には3条の凹線が巡る。黄白色の藁灰釉をかけるが、内外面とも発色が悪い。

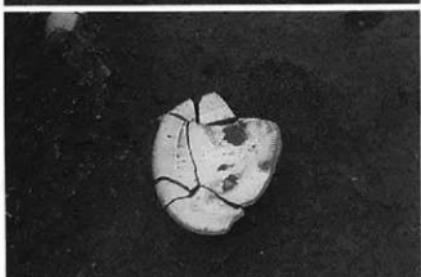
306は瓶で、茶褐色の鉄釉が掛かるが、発色が悪い。底部に粗粒が付着する。



全景（西から）

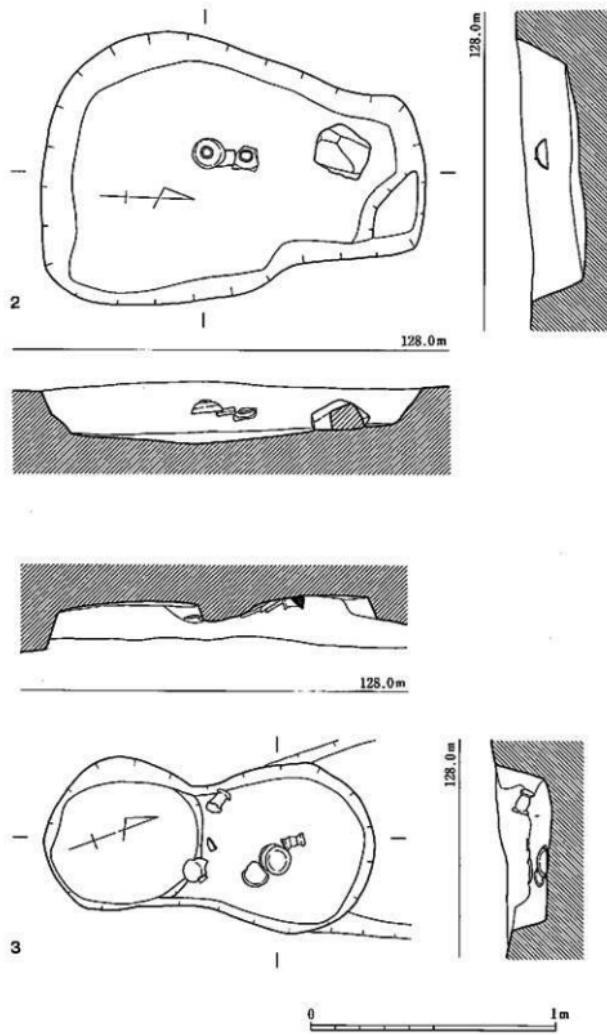


遺物出土状況（南から）



大皿出土状況（南から）

第124図 K区土壙 1

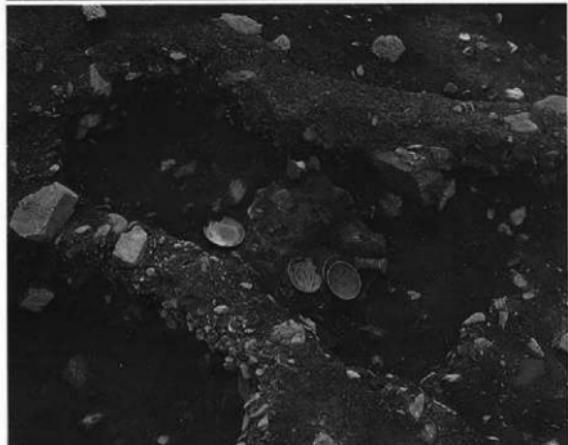


第125図 K区上層2・3実測図 (1/20)

307は口縁部を外側に折り返し丸く整えるもので、片口であろう。釉は未発色で口縁部付近は釉剥ぎである。308は短い頸部の妻で、口縁部をコの字状に肥厚させる。灰釉を掛け透明感のある黄緑色に発色する。309は口縁端部を水平に面取りする椀口縁部で、口縁部下には菊花文のスタンプ



K区土壤 2 (西から)

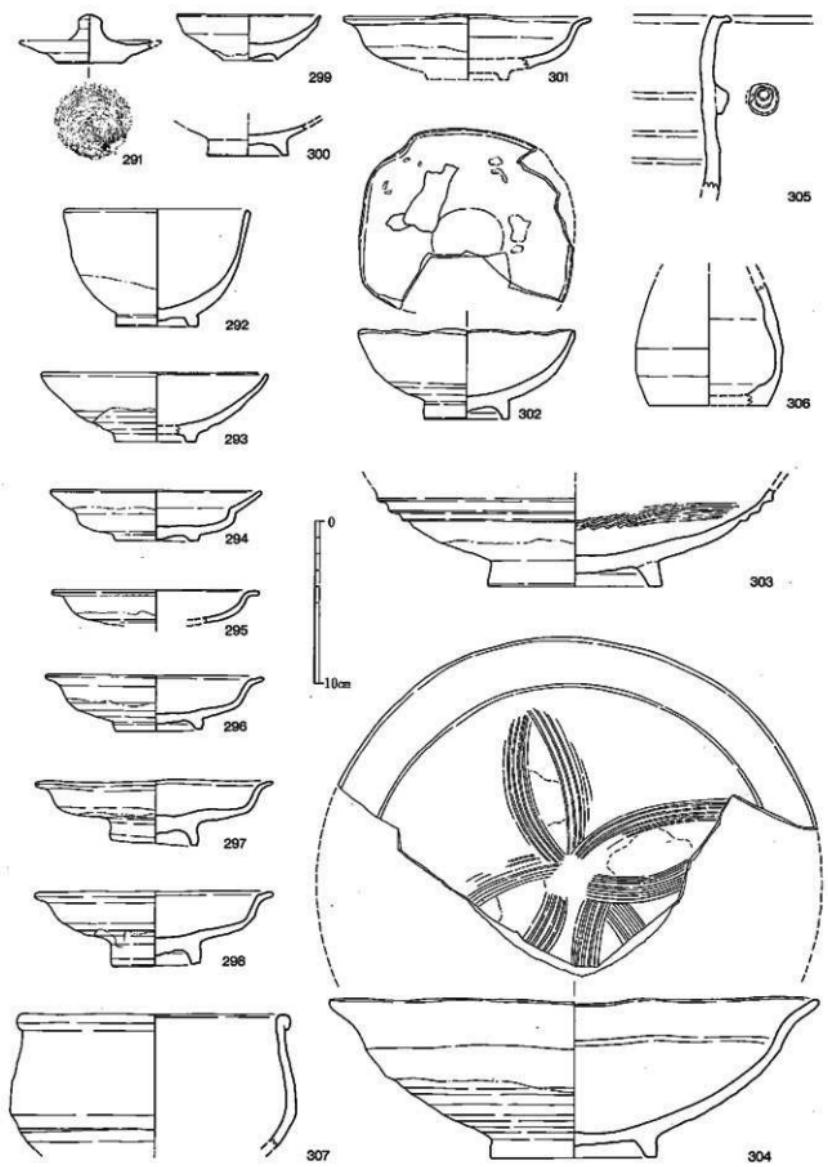


K区土壤 3 (西から)

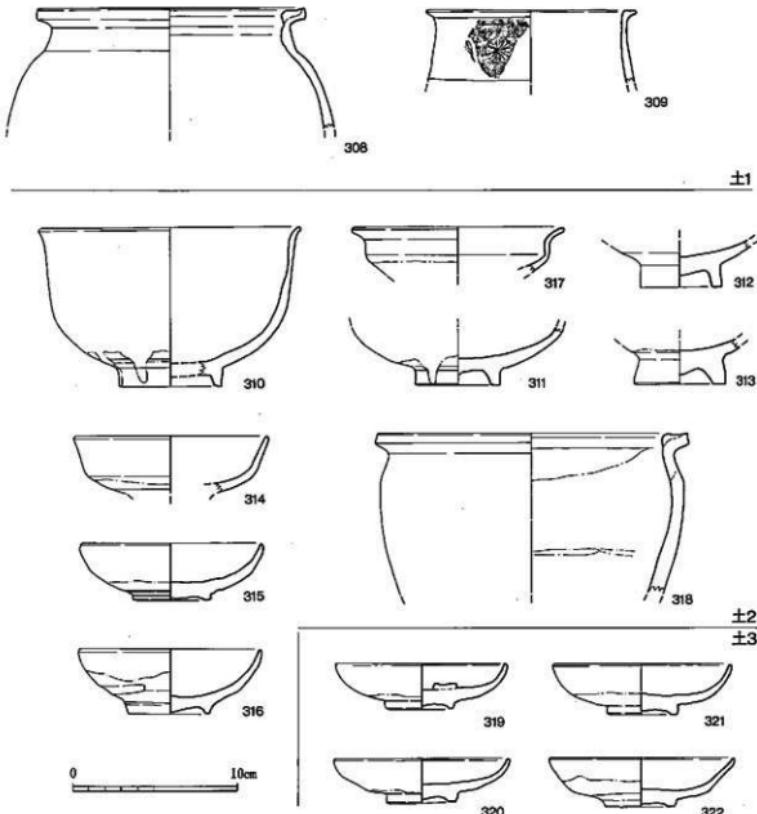


K区土壤 3 遺物出土状況  
(西から)

第126図 K区土壤 2・3



第127図 K区土塁1①出土遺物実測図 (1/3)



第128図 K区土壙 1②・2・3出土遺物実測図 (1/3)

を巡らせ、その下には1条の凹線が巡る。小片のため徑復元に自信がない。灰白色の薬灰釉。

#### K区土壙2 (第125・126図)

K区土壙2は、K区中央やや北よりに位置し、土壙7を切る。土壙の長さは南北155cm、東西108cm、深さ25cmの楕円形を呈する。埋土は黒灰色土で、地山は石が多く含む。土壙内から皿2点が出土した (315・316)。

#### 出土遺物 (第128図)

310～313は椀で、311～313は高台部のみ残る。310は口縁部を外反させ、高台際まで乳渦色の薬灰釉が掛かる。311は割れ口から強く立ち上がり椀となるか。濃褐色の鉢釉。312は濃褐色の鉢釉で、疊付には糸切が残る。313は未発色の灰白色の薬灰釉がかかること。

314～317は小皿である。314は胴部中位で折り曲がり、口縁端部をやや外反させる。未発色の灰白色の薬灰釉。315・316は口縁部がやや内湾気味に広がる。いずれも高台の削り出しが弱い。315は暗緑青色の鉄釉。316は粗い高台の削り出しで、未発色の鶯色の鉛釉が掛かる。317は胴部中位から直立に屈曲させ、口縁部を水平に近く折り曲げる。発色が悪い褐色の鉛釉。

318は口縁部をコの字状に肥厚させる變で、外面には下地釉を掛けるのみである。

#### K区土壤3（第125・126図）

K区土壤3はK区中央や北より、土壤2の北東に位置する。土壤の長さは南北136cm、東西70cm、深さ22cmで双円形を呈する。埋土は茶褐色土で、土壤中央には灰白色粘土の広がりが存在し、粘土上で皿4点（319～322）が出土した。

#### 出土遺物（第128図）

319～322はいずれも土灰釉で、口縁部が内湾気味に広がり、また高台の削り出しが弱い。口径が10～11cm、器高が3cm前後、底径が3.1～3.5cmと非常に似た形態の皿がまとめて出土した。

#### K区土壤4（第129・130図）

K区土壤4はK区北東隅のやや中央よりに位置し、土壤北側は道路により削平を受ける。土壤の長さは南北194cm以上、東西220cm、深さ15cmの長方形を呈する。西壁際にピットを、東壁際に東西80cm、南北67cm、厚さ5cmの黄色が混じる暗灰色粘土の広がりを確認した。埋土は柔らかい焼土が2～3mmの厚さで上面に被り、その下に茶褐色土。

#### K区土壤5（第131・132図）

K区土壤5はK区東、土壤4の南東に位置する。土壤の長さは南北184cm、東西180cm、深さ31cmの円形を呈する。埋土は茶褐色土。

#### K区土壤6（第133・135図）

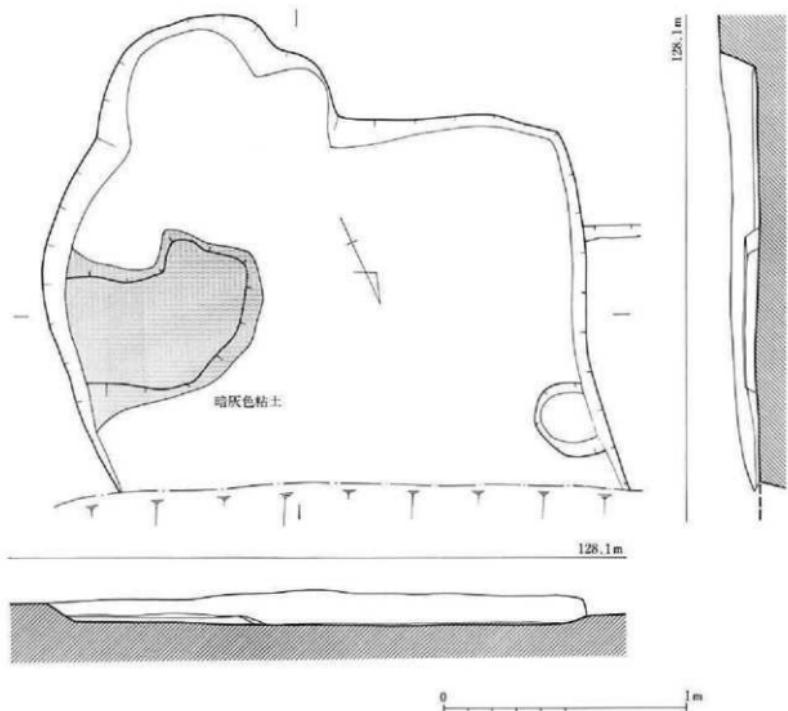
K区土壤6はK区中央や東よりに位置し、東側で土壤7と接する。土壤の長さは東西330cm、南北188cm、深さ30cmの楕円形状を呈する。埋土は茶褐色土で、土壤南東部はピットと切合う。

#### K区土壤7（第133・135図）

K区土壤7はK区の中央に位置し、土壤2に切られ、西側で土壤6と接する。土壤の長さは東西392cm、南北150cm、深さ30cmのくの字状に弱く折れる細長い土壤である。埋土は茶褐色土で、土壤西側には径28cm、深さ16cmの小ピットが存在する。

#### K区土壤8（第134・135図）

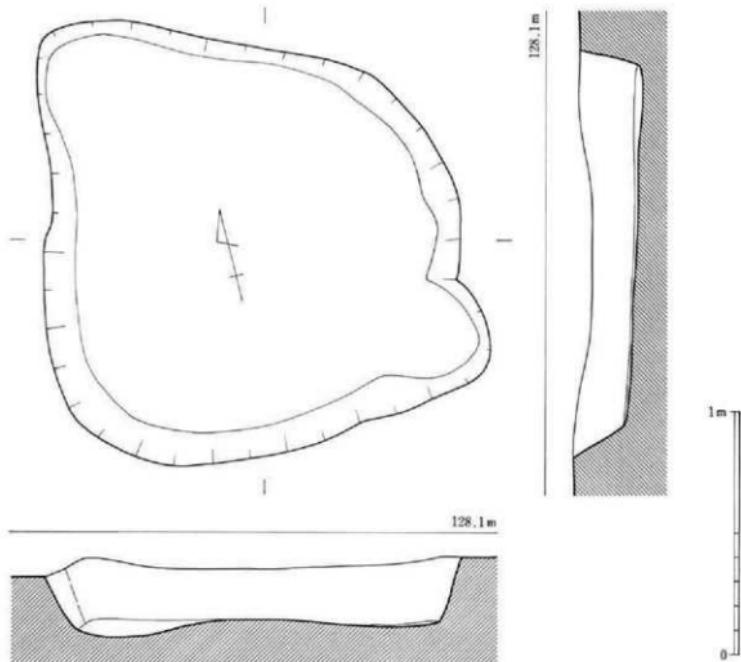
K区土壤8はK区中央のやや西側に位置する。土壤の長さは南北235cm、東西117cm、深さ14cmの2つの土壤が連なった状況を呈する。埋土は茶褐色土で、土壤の東には深さ34cmの楕円形のピットが存在する。



第129図 K区土壤 4 実測図 (1/20)



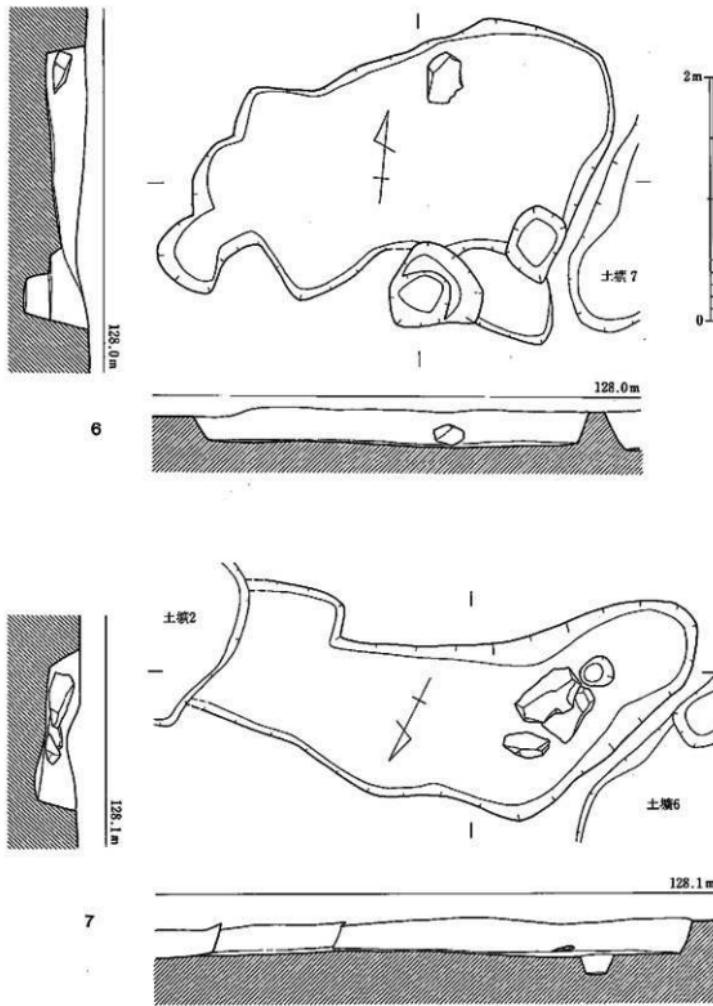
第130図 K区土壤 4 (東から)



第131図 K区土壤 5 実測図 (1/20)



第132図 K区土壤 5 (東から)



第133図 K区土塙 6・7 実測図 (1/20)

#### 土塙出土遺物（第136図）

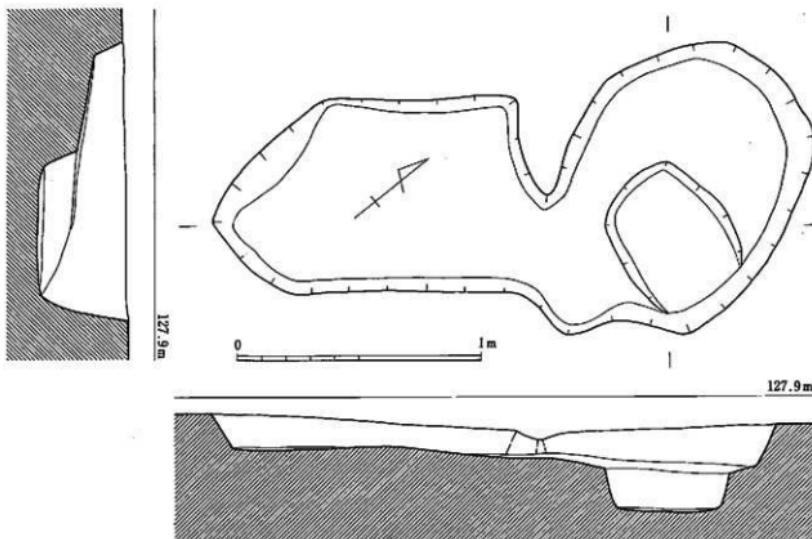
323～326は楕である。323は小形の楕で、楕は全て剥落する。324は高台の削り出しが弱く、厚いくすんだ濃青色の鉄楕が掛かる。内面に4ヶ所の胎土日跡が残る。325は未発色で鷺色を呈する。

イッチン掛け風に施釉する。326は深さがある椀で、外面は輪轍目が顕著である。濃褐色の鉛釉で、外面の発色は悪い。

327は口縁部が短く、強く屈曲する皿で、高い高台をもつ。内面には胎土目跡が4ヶ所残る。釉は未発色。328は濃褐色の鉛釉を總掛する高台。胎土は精良。329は口縁部4ヶ所に縁なぶりを行う皿で、内面には青味乳湯色の露灰釉で十文字状に釉を掛けた。330は鉢で、口縁端部を丸く折り曲げる。片口であろう。331は擂鉢で、口縁端部を外側につまみ出す。焼締で5条の擂目が残る。内面には別個体が付着する。332は注口部が欠ける蒸焼の小形の片口で、口縁端部はコの字状に肥厚させ、ナデにより凹線を巡らす。注口部はヘラ工具で丸く切り取る。333・334は大形の皿である。333は口縁端部を水平近く折り曲げ、器壁は薄い。内外面とも褐色の鉛釉によるイッチン掛けを行う。見込には胎土目跡が1ヶ所残る。334は見込に4ヶ所の胎土目跡が残る。器壁が厚く、焼成時にかなり歪む。濃褐色の鉛釉。

335は上部がすばまた形になる香炉か。胴部に貼り付け突帯を巡らせ、その上には3条の櫛描文と5条の櫛描波状文を巡らせ、その間にヘラ状工具で切り取った口がある。深緑色を呈する灰釉が掛けられる。

336・337は花入である。336は器形が直立し、口縁部下には5条の凹線を巡らす。板状のものを折り曲げた把手が2ヶ所つくものか。深緑色の灰釉。337は波線で示した口縁部がくの字状になる形態のものか。口縁部下に両端を折り返した把手が2ヶ所つくとみられる。濃褐色の鉛釉が掛けられる。



第134図 K区土塙8実測図 (1/20)



K区土壤 6

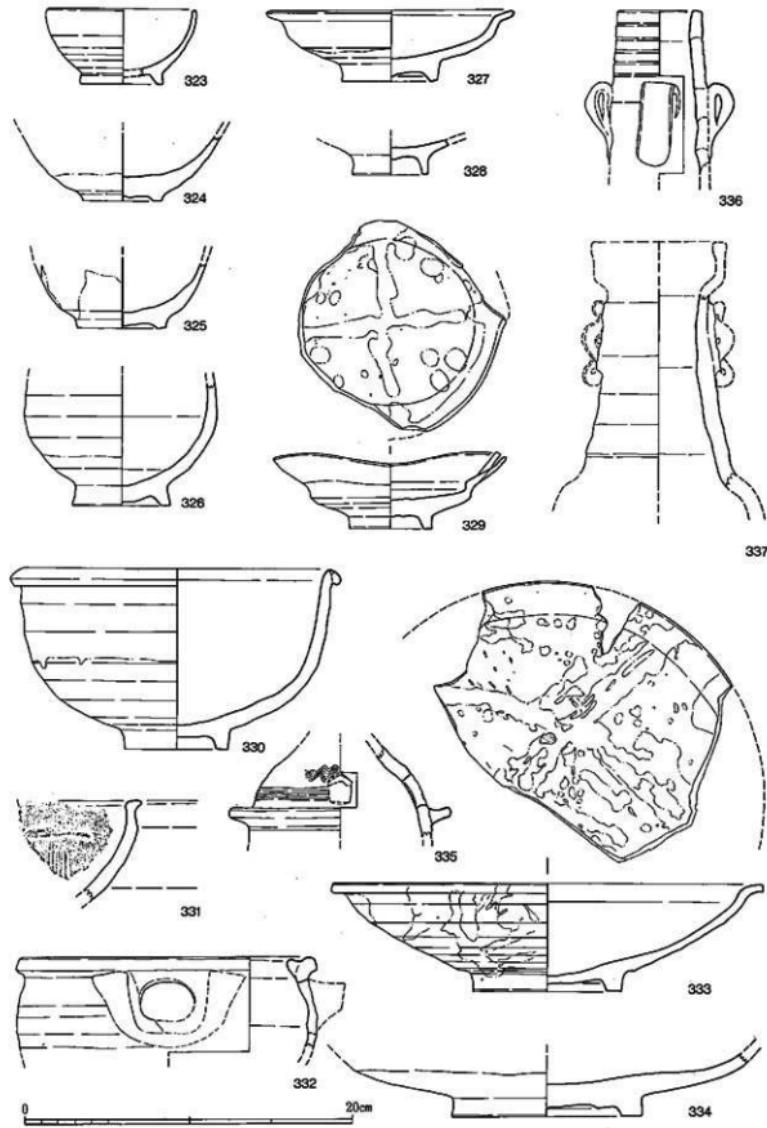


K区土壤 7



K区土壤 8

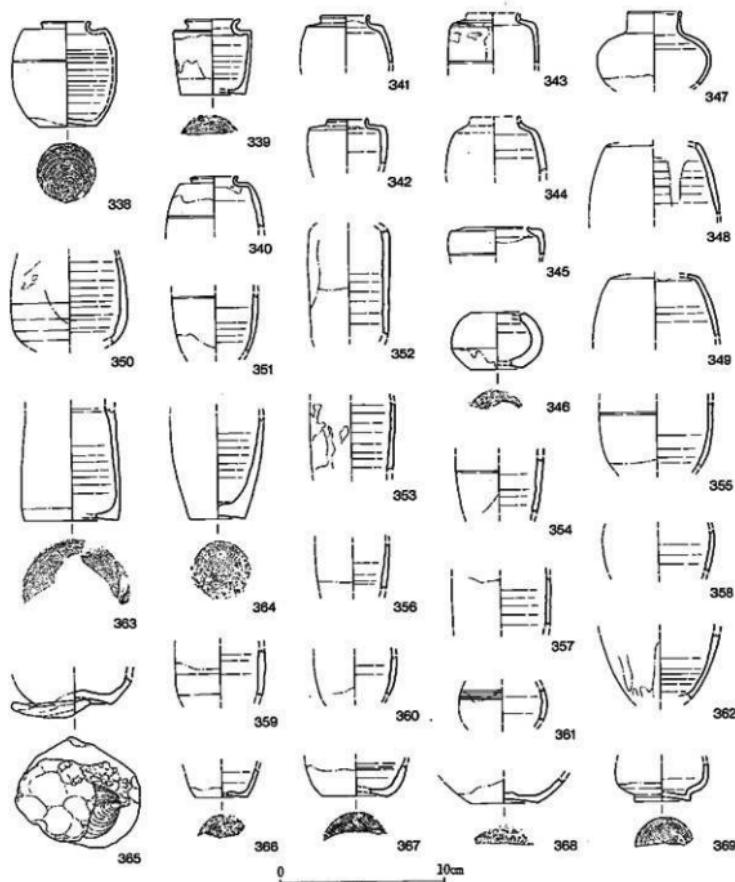
第135図 K区土壤 6・7・8



第136圖 K區土壤出土遺物實測圖 (1/3)

### 3 包含層の調査

各調査区においては、福地川に向かって落ち込む傾斜地や物原からの流れ込みに遺物包含層が形成される。包含層からの遺物の出土は極めて多く、CD区西側の落ち込み部においては1日にパンケース20~30箱の遺物が出土する日もあった。今回の報告では整理・実測が間に合わず、CD区西側落ち込みに関しては実測が出来た所までを報告し、残った部分を来年度に回すこととしている。実測を時間が許す限りの時点まで行っていたために遺物に対する検討が不十分であり、今年度は報告に関する簡潔な概要を記すに留め、来年度以降に詳細を検討することとしたい。報告の順序としては、茶器関連のものをまず挙げ、日用的なものを後半に掲載する。



第137図 包含層出土遺物(茶入)実測図(1/3)

### 茶入（第137図）

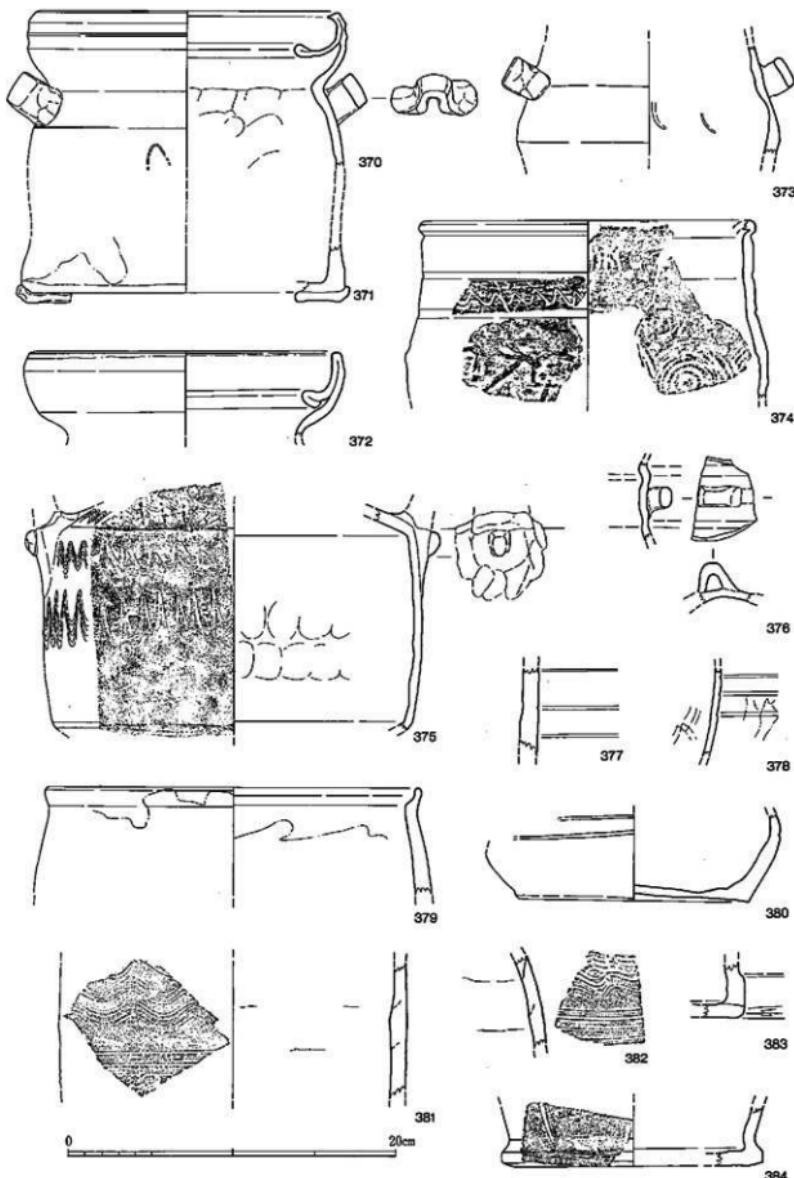
茶入は全体的に見て胎土はいずれも精良で、特記する以外は明褐色・明灰色となる。

338は口縁端部は若干欠損するものの完形に近いもの。胴部が丸みを持つ肩衝茶入。肩よりも口部は沈み込む形態。胴部最大径よりもやや上位に刷継の沈線を巡らせるが釉が厚く明瞭ではない。内面の輪轂目は弱い部類に入る。釉は鉄釉で黒褐色を呈する。外面全体に胎土の粒が多量に付着する。339は器高4.8cmの小形の肩衝茶入。肩と頸部の立ち上がりの高さはほぼ同じ。僅かに外傾する胴部を持つので肩はシャープ。内面の輪轂目はシャープな稜をなす。釉は茶褐色の鉄釉を掛けた後に褐色の鉛釉を掛ける。その後、底部から9mm前後横方向に削ることにより釉を剥ぎ取る。340は肩衝茶入で頸部は肩よりも沈み込む。胴部最大径よりも上位に刷継沈線を巡らせる。鉄釉を掛けた後、褐色の鉛釉を掛けるが、肩から8mm程度流れるのみである。内面に輪轂目はほとんどない。341はなで肩となる肩衝茶入。胴部は丸みをもつものであるが、肩直下を僅かに窪ませるために肩の稜はシャープとなる。鉄釉で茶褐色。342はややなで肩となる肩衝茶入。338から341が強く外反する口縁部を持つのに対し、342はほぼ直立するものである。肩直下に最大径があり、徐々にすぼまる形態であろう。内面の輪轂目はごく弱い。鉄釉を施し、茶褐色を呈するが、部分的に黒色に発色する。343は肩衝の茶入で丸みを帯びた肩である。胴部は筒形に近いらしく刷継の沈線を巡らせる。口縁部は欠損。釉は鉄釉で茶褐色を呈するが部分的にかすれたように鉛釉が見える。別個体の茶入片が付着する。胎土はやや黒味を帯びる。344は肩衝茶入であるが、なだらかな肩であり、ゆるい稜をもつものである。口縁端部は欠損。内面の輪轂目はごく弱い。釉は明茶褐色の鉄釉。345は肩衝茶入であるが、頸部を持たず肩から口縁部にかけて緩やかに反り上がる形態。釉は明茶褐色を呈する鉄釉で部分的に鉛釉がのぞく。346は体部が横に張る球形の茶入であり、上端には明瞭な段がみられ、ここが蓋受となる。茶入としては異様に厚い器皿である。外面に茶褐色の鉄釉を掛ける。347は頸の長い形態のもので横に張った丸い胴部を有する。接合しない2個体から合成して図化している。輪轂目は無いに等しいほど弱い。胎土は暗灰色を呈する。釉は黒褐色の鉄釉で、部分的に暗茶褐色に発色する。348は肩衝茶入の胴部。胴部が丸みを持つもので、比較的大形となる。なで肩の稜が確認できる。内面の輪轂目は弱い。釉は発色が悪く、くすんだ茶褐色となる。349は348と同形態。出土地点は異なるが同一個体の可能性も残される。350は丸みをもつ胴部で最大径が胴部下半にある形態。内面の輪轂目は強い。釉は灰釉と見られ、一部に緑色に発色する釉がみられる。351は細い形態の胴部をもち、下半は底部に向かって緩やかにすぼまる。内面の輪轂目は弱い。茶褐色の鉄釉が掛けられる。352は細長い筒形の茶入。胴部下半内面の輪轂目は強い。茶褐色の鉄釉を掛けた後、黒褐色の鉄釉を流し掛けする。353も352と同様の形態とみられる筒形の茶入。内面の輪轂目は強い。胎土は他と比べて粗く、細砂粒を含む。茶褐色の鉄釉を掛けたが、その下から部分的に鉛釉がのぞく。354はやや丸みを帯びる胴部で、刷継の沈線がある。内面下半部の輪轂目は強い。光沢のある明茶褐色の鉄釉を掛けた。355は胴部下半で、底部に向かって丸くすぼまる。最大径部外面に刷継の沈線が巡るが、釉が厚く埋もれている。内面の輪轂目は弱い。艶のある茶褐色の鉄釉を掛けた。356は筒形の胴部の小片。内面の輪轂目は弱い。黒褐色の鉄釉を掛け、その上から暗茶褐色の鉄釉を掛けた。357は筒形の茶入の胴部下半。外面は横方向に細かいカキメ状の調整痕を残す。通例とは異なり、内面にも施釉される。暗茶色を呈し、鉄釉であろう。358は丸みを持つ胴部の小片。胎土は精良さに欠け、細砂粒を含む。黒褐色の釉が掛けられた。内面の輪轂目は比

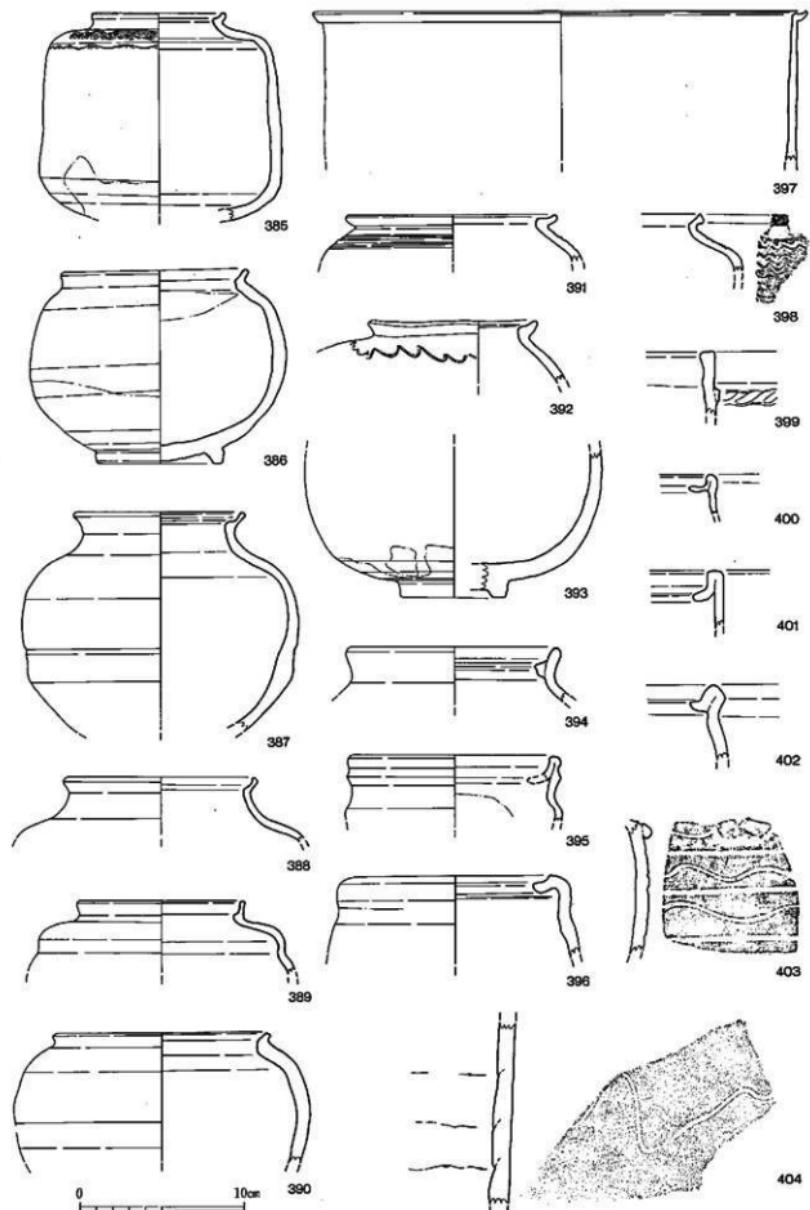
較的強い。359は筒形の茶入で、底部に向かってやや内湾気味となる。内面の轆轤目は弱い。鉄釉が掛かり、黒褐色を呈する。360は丸みを有する小形茶入の胴部。釉の発色が悪く、暗い灰色となり、器壁が荒れる。内面の轆轤目は比較的強い。361は小形の茶入で球形を呈する胴部。上半に沈線を巡らせる。釉は乳濁色の薬灰釉と褐色の鉄釉の掛け分けである。薬灰釉を用いる茶入は珍しい。362は底部近くとなる破片で、急角度ですばまる。内面の轆轤目は稜がつぶれて丸みを帯びる。外側は茶褐色鉄釉を掛けた後、綠味乳濁色を呈する薬灰釉を流し掛けする。363は大形の茶入で、全体的に裾広がりの形状。上端が内側に肥厚し、釉が掛かることから口縁部に近いとみられる。胴部中位は若干故意に歪ませるようである。内底面に広い範囲に細かく釉が付着しており、口径が大きいものとみられる。轆轤目は稜がつぶれた感じとなる。茶褐色鉄釉を掛け、底から6mm幅は釉が削り取られる。364は内湾気味に立ちあがる形態。内面の轆轤目は規則的で強い。外側は底面まで含め全体に暗茶褐色の鉄釉が施釉される。365は大形の丸みを帯びる茶入の底部であり、円盤状のハマが付着したままとなる。温度が上がりすぎた焼成となっており、灰色に硬質に焼ける。鉄釉が掛けられ黒褐色に発色する。366から368は丸みをもって立ち上がる底部。366は底径3cmと、非常に小さい。内面の轆轤目は弱い。367の内面の轆轤目は強く、外側には鉄釉が掛けられる。368は床面が付着。温度が高すぎるような焼成で硬質に焼きあがる。369は台をつくり出すタイプで、横に張る球形に近い胴部が続くものとみられる。内面の轆轤目は弱い。釉は薬灰釉のようであり、ややすくすんだ乳濁色を呈する。

#### 水指（第138～142図）

370は矢管口を有する水指。頭部は強くくびれ、内湾する口縁部が続き、口縁端部で折り返し、長い蓋受をつくりだす。蓋受の端部は上方へ折り返し、肥厚させる。口縁部外面は2条の太い凹線を入れ、中央が突帯状となる。くびれ部の下位の外面に粘土帯をU字に曲げて耳をつくる。胴部には波状文を描くが、ごく一部を残すのみである。故意に大きく歪ませる形態となる。底部は接合しないが胎土や色調から同一個体と考え、合成して固化している。脚は径3cm前後のボタン状のものとする。胴部は叩き調整と見られ、内面には凹凸が多い。底部角の外面を底面はケズリにより面取りされる。釉は未発色。緑白色を呈する。372は370と類する形態であり、しかも釉調・色調も同一であるが、蓋受部分の跳ね上げ方が弱い。つまり370ほど口縁部の内湾度が強くなく、端部で折り返し、そのまま下方で蓋受をつくるものである。373は体部に耳がつくもの。体部は叩き調整であり、内面に当て具痕である青海波文を残す。鉄釉を掛ける。374は素焼きの水指。叩き調整であり、外側には幾何学文の叩き痕、内面には当て具痕である青海波文を残す。直立する体部の上位には2本の沈線で区画される文様帶があり、波状文が巡らされる。375は把手が付く桶状の形態をなす。口縁部・底部は欠損し、胴部のみ残る。波状文は肩部に一段、胴部に二段巡らされる。細い沈線からなる波状文は須恵器のそれと変わらない特徴をもつ。叩き調整かとみられ、内面には当て具による凹凸が顕著である。把手は欠損するが、断面方形のものである。付根に1個のボタン状突起を貼り付ける。釉は未発色で鷺色を呈する。376は耳部。小くくびれの多い胴部に付けられる。暗茶褐色を呈する鉄釉の上から薬灰釉が掛けられ、海鼠釉となる。377と378は水指の胴部と考えられる小片で、横方向に沈線が刻まれる。379はやや内傾する体部の口縁部端にそのまま蓋受を設ける形態。内外側に釉を掛けるが、口縁部周辺は露体。外側はカキメ風に観察される。380は丸みをもって立



第138図 包含層出土遺物（木指）実測図① (1/3)



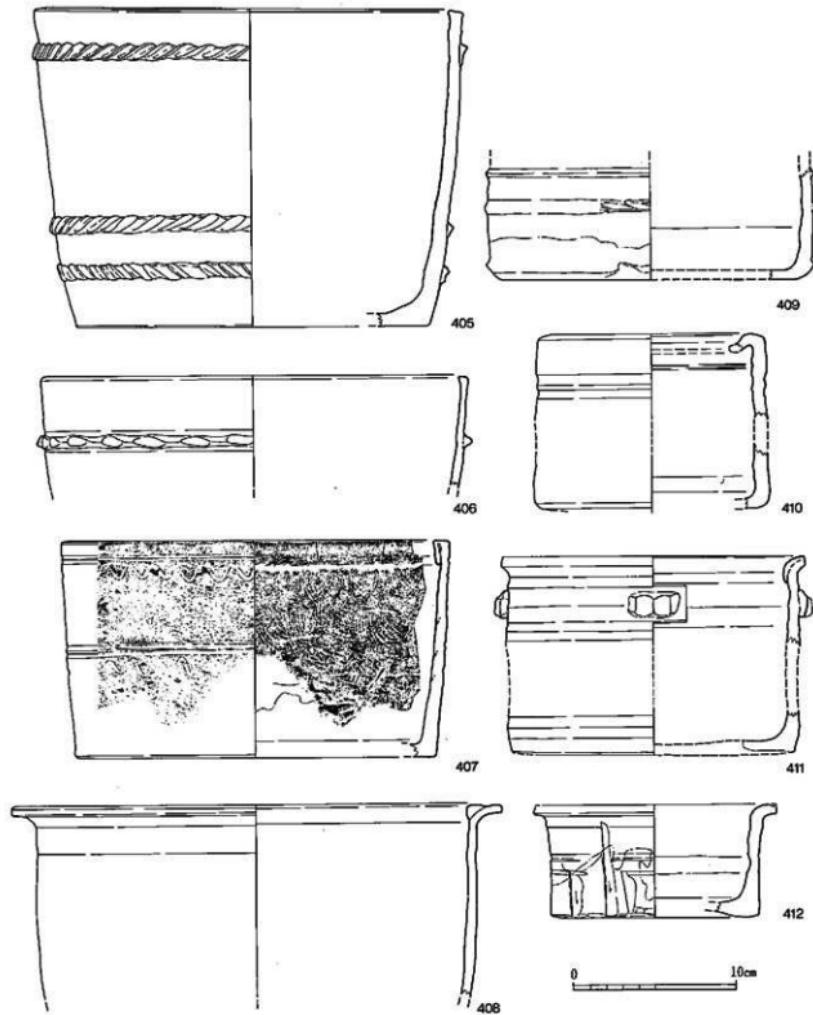
第139图 包含层出土遗物(水指) 实测图② (1/3)

ちあがる胴部を有する底部である。外面には2条以上の沈線が巡らされる。焼締であり、外面には薄く鉄軸を掛け、内面は暗褐色に発色する。381は素焼きの水指の胴部であり、沈線と波状文により外面を装飾する。内面には粘土紐の接合痕が残す。382とは同一個体とみられ、緩やかに内湾する形態であろう。383は底部の小片。素焼き。底面と底部角はケズリにより調整する。脚をつけるためと思われる刻みが底面に観察できる。384も底部の小片。底部が横に張りだすので、底面と底部角はケズリによる調整。外面には縱方向に鋭い沈線を入れ文様とする。内面は発色が不十分であるが、鉄軸と思われる軸が厚く掛けられる。

385は壺形の水指で直立する体部をもつ。頭部から肩部にかけて波状文が巡る。全体に鉄軸が掛けられ緑褐色を呈するが、輪轂目の凹部に厚く溜まることで沈線状にみえる。386は球形に近い胴部を持つ壺形の水指。暗緑褐色の鉄軸を掛けた後に藁灰軸を掛け、青白色の海鼠軸となる。外面を中心灰を被る。387は球形に近い胴部を持つ水指で、下半は浅いくびれ部を有する。口縁部は薄くシャープなつくりとなる。藁灰軸を掛け、乳濁色に発色する。388も薄くシャープなつくりの口縁部を有する壺形の水指。藁灰軸を掛け乳濁色となるが、剥落が著しい。389は肩部直下で一段くびれる形状。口縁部は薄くつくられる。藁灰軸を厚く掛け、緑味を帯びた乳濁色に発色する。390は丸みを帯びる胴部を持つ壺形の水指。386に似た形態となろう。全体に藁灰軸を掛けるが、外面は大部分が剥落する。内面は乳濁色に発色する。391は肩部に浅い沈線を4条巡らせるもので、口縁部と蓋受は水平に近い形状となる。軸は発色が不十分な鉄軸であり、くすんだ褐色となる。392は大きく焼け歪んでおり正しい傾きは出し得ない。肩部に波状文を入れる。軸は未発色で剥落が著しい。393は大振りの壺形水指の体部—底部。藁灰軸を掛け緑味を帯びる乳濁色に発色する。394は直立する口縁部の内側に蓋受を貼り付けた形状。胴部形状は具体的にはわからないが、拡がる形態から壺形になろう。

395・396は細い筒形の形態を呈する。395は口縁部を折り込み蓋受をつくるが端部は欠損する。藁灰軸を掛け乳濁色を呈するが発色は良くない。396は口縁部を内折させ、端部に蓋受を作る。口縁部上面には貝目跡を残す。焼締による。397は直立する体部をもつ桶形のもので、口縁部を短く外折することにより蓋受をつくる。器壁は薄く6mm程度である。藁灰軸を掛け乳濁色を呈するが発色は良くない。398は壺形の水指の口縁部～肩部。肩部には小割みな波状文を密に巡らせる。素焼である。399は桶形の水指の口縁部。口縁部より若干下がった外面に網状突帯を巡らせる。405と同様の形態になろう。400・401は矢筈口を持つ水指の口縁部。400は鉄軸で褐色に、401は灰軸で緑色に発色する。402は器壁が厚手のもの。口縁部を内側に折り込み端部に蓋受をつくる。鉄軸を掛け暗褐色を呈する。403は素焼きの体部片で、外面を沈線と波状文により装飾する。円形の貼付文の一部が確認できる。水指ではなく壺かもしれない。404は直立する体部に大きな波状文を描くもの。内面には粘土紐の接合痕が残される。素焼きである。

405・406は桶形の水指。405は全体の形態がわかる貴重な資料である。ほぼ直立する体部を持ち、口縁部は僅かに内面に摘み出しが、ほぼ四角く收める。網状突帯を口縁部からやや下がった外面に1条、及び底部から3cmほど上った外面に2条巡らせる。内面は弱い輪轂目が連続する。素焼きで茶褐色を呈する。406は405と形状は類するが、網状突帯の刻みのピッチはより広い。全体に薄く鉄軸を掛け、暗灰茶褐色を呈する。409も桶形水指の底部であり、底部から5cmの高さのところから2条の網状突帯が巡らされる。鉄軸が掛けられ褐色に発色する。407は桶形の水指であり、直立する



第140図 包含層出土遺物（水指）実測図③ (1/3)

体部を有する。口縁部は内側に折り込まれ断面方形となる。外面に波状文と2条の沈線からなる文様帶を二段に渡って巡らせる。叩き調整により成形され、内面には当て具痕である青海波文を残す。釉は口縁部付近の僅かな部位と内面の底部付近にのみ鉛釉が施され、褐色を呈する。焼成は焼締に近く、硬質である。口縁部上面には貝目跡が残される。408は直立する体部をもつもので、口縁部

を大きく外反させ、口縁部内面は貼付により肥厚させる。全体に鉛釉を施釉し褐色に発色する。口縁部上面には貝目跡が残される。

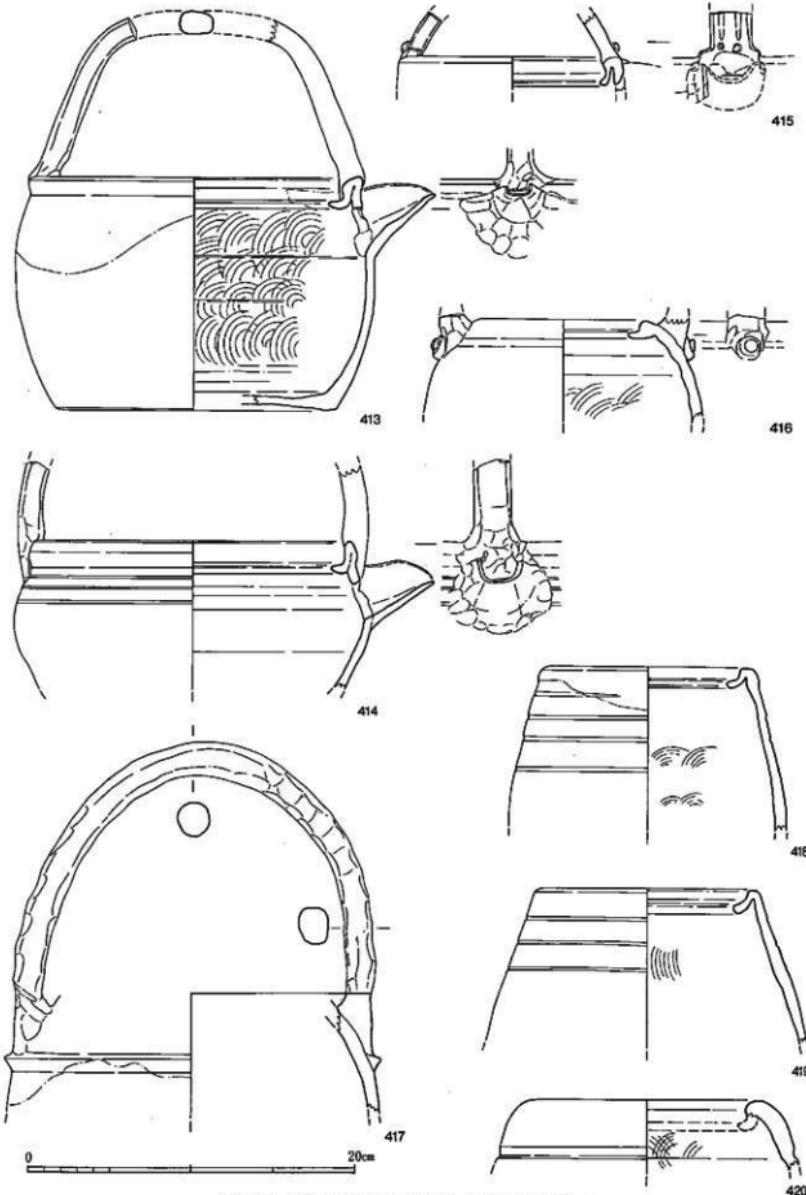
410は筒形の体部を有する水指。接合しない2片があるが、精良な胎土と特徴的な釉、すなわち外面は浅い緑色に発色する透明度の高い土灰釉を掛け、内面は褐色を呈する鉛釉を掛けるという点から同一固体と考えられる。口縁部は明瞭な稜をもって内折し、広めの口縁帯を有する。体部上位に太い沈線を2条巡らせるが釉が厚く入り込む。

411・412は直立する浅い体部を有するもので、口縁部は外反することから埴水、或いは水盤として用いられたものであろうか。411は口縁部を幅広く内面に折り込むことにより口縁部を肥厚させる。外面上位には櫛状の耳を付けるが、おそらく対向する位置に2ヶ所付けられたとみられる。外面は3条の沈線となるように強い櫛輪目を入れる。内面の櫛輪目も強く稜をなす。焼締に近い焼成であり、赤茶褐色を呈する。412は体部に縱方向にケズリを加え文様とする。鉛釉を掛け褐色を呈する。

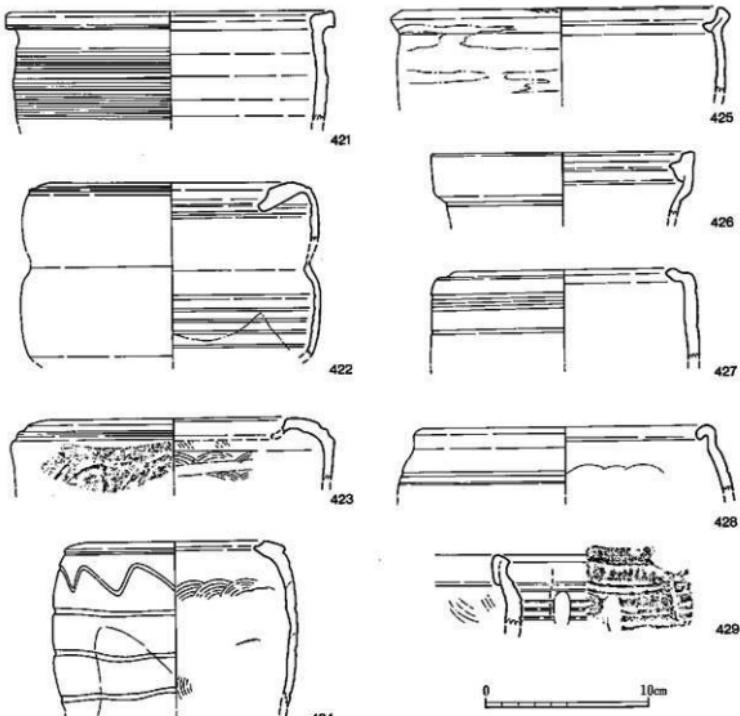
413～417は把手と注口を有することから水注であるといえる。いずれも体部は丸みをもつものである。注口部は片口のものと変わらない形状であり、伝世品にみられる円柱状になるものは今年度報告分には認められなかった。口縁部内面には端部を折り込むことにより蓋受をつくるものが多い。蓋受は一般に水指よりもしっかりとしたものをする傾向にある。蓋受と把手を有する点を除けば、その形状は片口に近いものであると言える。413は断面橈円形の把手を有する。叩きにより成形され、内面には當て具痕である青海波文を残す。内面を中心に施釉され、外面は口縁部とその下位には及ぶが大半が露胎である。鉛釉であり、艶の良い褐色を呈する。414は413と同様の形状の水注。胴部最大径よりもやや上位に二条の沈線を巡らせる。全体に鉛釉を掛け暗褐色に発色する。416は強く内湾する体部がそのまま口縁部となり、端部に蓋受を設けるもの。断面橈円形の把手をもつ。把手の付根には二重の円形浮文を貼り付ける。内面は口縁部付近には強い櫛輪目を残し、下位には叩きの當て具痕である青海波文を残す。全体に鉛釉を掛け、暗い褐色に発色する。417は把手と体部が接合しないが、釉調などの類似から同一固体として合成して図化している。把手は根元付近が断面長方形、最も上部が断面円形であり、全体に指押さえが顕著に残る。体部と把手の接合面には接着を良くするための刻みが不定方向に入れられている。体部は丸みをもつものであるが、残存度が低く全体の形状はわからない。把手付根の高さに断面三角形の突帯を巡らせる。

418～420は内傾する体部をもち口縁端部を内面に折り込んで蓋受をつくりだすもの。418は体部を叩きにより成形し、内面には當て具痕である青海波文を残す。外面には3条の沈線を巡らせる。また櫛状工具により整形したためか軽いカキメ状の調整痕が残る。釉は発色せずに黒色を呈する。口縁部上面は露胎、焼成は焼締に近く硬質である。419も同様の形態で外面には3条の沈線が巡る。焼締により硬質。焼成温度が高いためか随所に気泡が生じている。420も同様の形態と思われるが欠損部が多く詳細は不明。素焼きである。

421は口縁部を直角に外折させたもので、鉢と呼ぶほうがよからうか。外面は口縁部側面を含め櫛状工具で整形し、カキメ状の調整痕が残る。内面には叩き成形時の當て具痕である青海波文が残る。焼成は焼締により硬質である。422は器壁の厚さが5mm程度の薄い体部を有するもので、接合しない2片からなる。胴締の形態となり、胴部下半は故意に歪ませる。口縁部は幅広い口縁帯を有し、肩部に2条の沈線を巡らせる。胴部内面にはほぼ等間隔に沈線状の櫛輪目が走る。焼締により



第141図 包含層出土遺物(水指)実測図① (1/3)

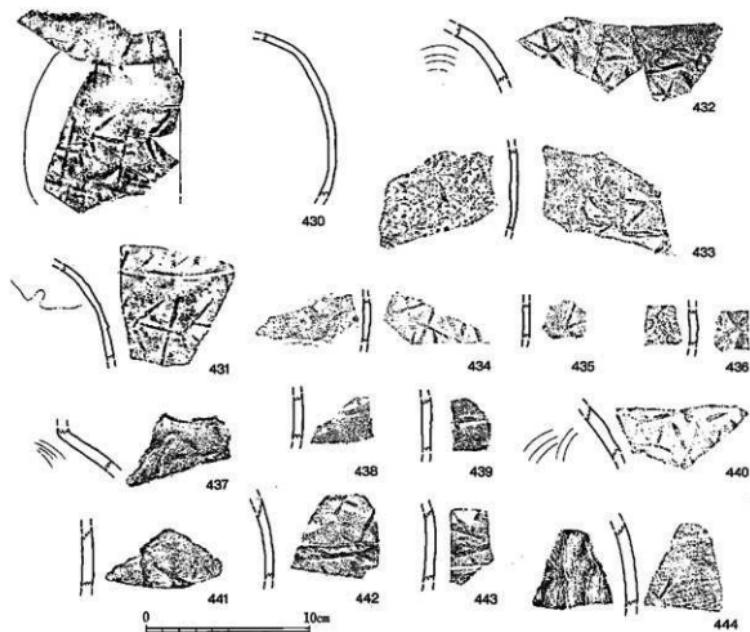


第142図 包含層出土遺物（水指）実測図⑤ (1/3)

硬質である。423は422と同様の形態である。体部は叩き調整により、外面には幾何学文の叩き痕を残し、内面には当て具痕である青海波文を残す。素焼きである。424は幅広い口縁帯を有するもので、口縁端部には短いが明瞭な蓋受を有する。外面には波状文と沈線を巡らせる。胴部は故意に大きく歪められる。体部は叩き調整であり、当て具痕の青海波文が残る。全体に鉄釉を掛け茶褐色となる。焼成は焼締に近く硬質である。口縁部上面には貝目跡を残す。408はほぼ直立する口縁部を軽く外反させ更に内面に折り込み蓋受をつくりだすものの、口縁部上面に3本の刻みを入れるが、その意味は不明。鉄釉を掛け、褐色を呈する。426は胎土が精良な素焼きの水指。叢った形状の蓋受を有する。427は内傾する体部に蓋受をつくるものの可能性が高いが、残存する小片から傾きを出すと図のようになる。体部は叩きにより内面には青海波文が残る。焼締で硬質。428は口縁部を丸く内側へ折り込むもの。外面には沈線を巡らせる。焼締により硬質。429は内側に折り込んで肥厚させる口縁部をもつもの。体部外面には多条の沈線を巡らせ、縦方向に彫文を刻む。内面には青海波文を残す。素焼きである。

文様状叩き痕のある陶部片（第143図）

第143図に示した破片は外面に特殊な叩き文様のある陶片である。いずれも幾何学的な文様が浮文として出ており、叩き調整時に叩き板に付けられていた文様が反映されたものである。374・1193にみられるように水差あるいは鉢に用いられたものと考えられ、調整と同時に装飾をも狙ったものと考えられる。しかし1368・1369のように擂鉢の体部にも施される例があることから、日用雑器に対しても使用されていたようである。ここでは器種が特定できない小片を一括した。施釉されるものは少なく、多くは素焼きの状態である。430は船舳を内外面に掛け褐色に発色するもので、球形の器形から瓶の胴部と想定される。内面に叩きの当て具痕は残らず、ナデにより消されている。431もまた瓶の肩部とみられ、一条の沈線がめぐる。432・437～439・441～444はE区北側の落ち込みから出土したもので出土地点が近く、同一個体の可能性が高い。432・437は丸みを帯びる器形で、上端部外面には横ナデが認められるので、瓶の肩部と考えられる。内面には青海波当て具痕跡を残すものが多いが、ある程度ナデによって消されている。器壁は薄く、6mm程度である。いずれも小片で傾き・天地の不明なものが多い。茶褐色を呈する。

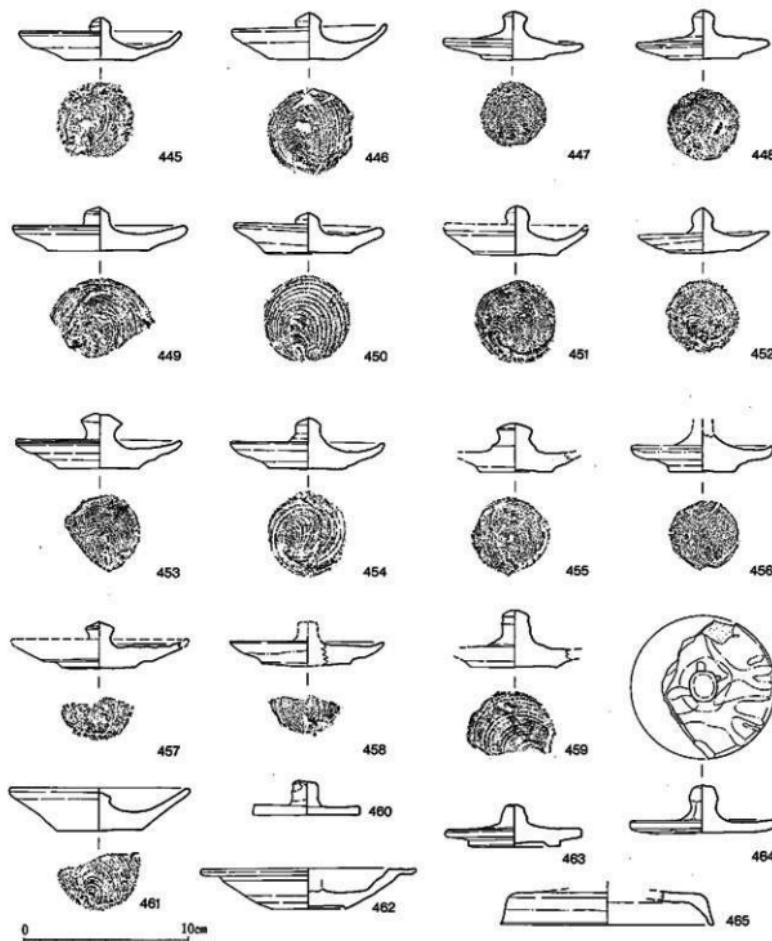


第143図 包含層出土遺物（文様状叩き痕）実測図（1/3）

蓋（第144・145図）

蓋の形態には大きく分けて二種類あり、ひとつは底部を糸切で切り離すもの、もうひとつは円盤状のものにつまみをつけるものである。概して糸切底のものは径が小さく、つまみの形状も似通ったものが多い。それに対し、円盤につまみをつけるものは径の変異が大きく、つまみの形状も趣向を凝らしたものが多い。

445から挙げたものは糸切の底部を持つタイプのもの。端部が強く内湾するものと、水平か或い



第144図 包含層出土遺物（蓋）実測図① (1/3)

はやや傾きを付けて上げるもの二者がある。461や462は縁が大きく反り上がるタイプで、つまみの高さを凌ぐ、いわゆる落し蓋である。462は底面を広い範囲に渡って削り、底面は基盤底とする。つまみの形状は丸みを帯びるもの・宝珠形・算盤玉形などの種類がある。底部は糸切の他に463のように高台を作りつけるものもあり、また464のように丁寧に削ることによって整えるものもあるが、これらはごく少数に留まる。素焼きのものが多いが、447・455のように土灰釉を掛け透明感のある明緑色に発色するものや、464のように鉛釉でガミ筆描するものもある。

460・466～479は平坦な円盤形の体部につまみを取り付ける形態。つまみの形状は円柱状のものや円柱を横から押し潰したようなものが多い。体部のつくりは叩きによるものとみられ、468～470・472には上面に直線からなる叩き痕が入る。466と467は体部上面に沈線で同心円文が描かれる。467から判るように、螺旋状に描くのではなく、一本づつ沈線が刻まれる。なおCD区土壙6から出土した同形態の蓋は、螺旋状に沈線を描いている。底面には製作時の台の表面が反映されたものが多い。466や469は細かい粒状の凹凸が多く入るが、どのような台のうえで作られたかはわからない。このような圧痕は他の器種ではほとんど見られないで、蓋を作るときにある程度きました台があったものとも思われる。477～479も底面は凹凸が多く、板から起こして調整を施していないようである。また底面中央に星形の浮文がつくものもある(471・474・476)が、製作台に刻まれた中心を示す印であろう。施釉するものは少ないが、施釉技法としてはイッチン掛けが多く、また上面に掛けたものであり全面に厚く掛けるようなものはない。釉は鉛釉が多い。

472は大きな蝶頭形のつまみをもつ。体部には鉛釉を掛け緑褐色に発色するが、つまみは露胎。底面に貝目跡を残す。475・476は幅広の粘土紐を折り曲げて貼り付けたつまみで、体部上面には沈線による文様が入る。476は鉛釉が施され斑のある褐色に発色する。473・477は細い粘土紐によってつまみをつくるようであるが、欠損している。479は方柱状のつまみに削りを加えて整形する。

465は外側の途中まで施釉し、口縁部及び内面は露胎であるために蓋とした。ハ字形に開く形態で、器壁の厚さは5mm程度と薄く作られる。釉は鉛釉。斑に発色する。

#### 花生（第146図）

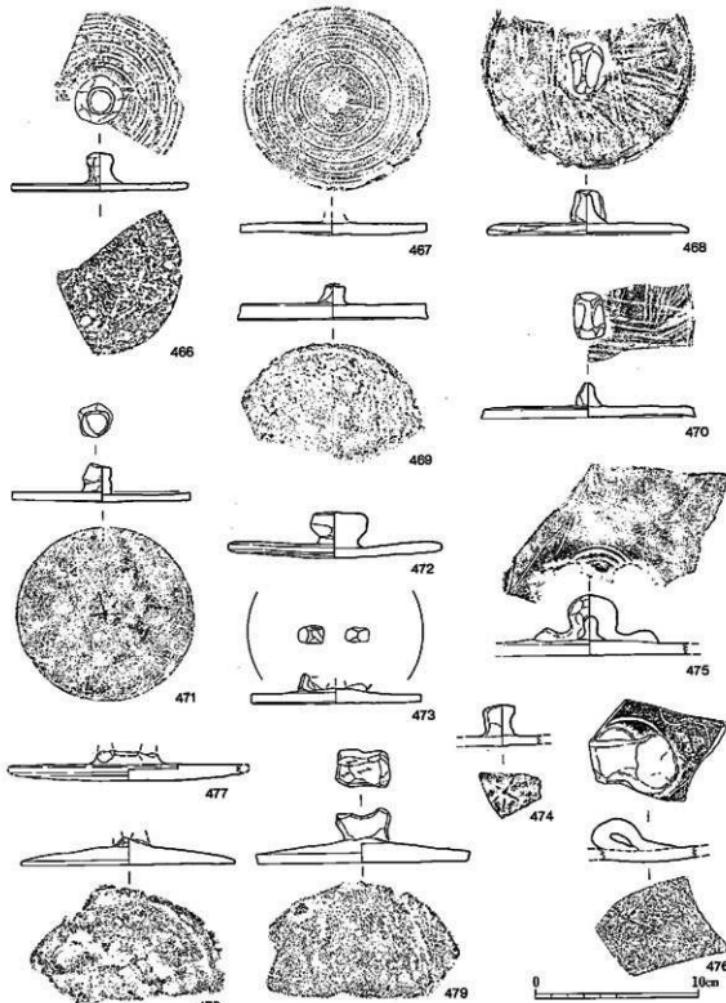
480は緩やかに内湾する体部を有する花生。端部はやや丸みを帯びる方形に收められる。体部は叩き調整により内面には当て具痕である青海波文が規則的に連続するが、釉が厚いために埋もれている。全体に薰灰釉が厚く施釉され濃青色に発色する。

481は直立する体部で強く短く外反する口縁部を有する花生。体部下半は大きく括り故意に歪ませる。断面円形の粘土紐による耳が付けられていたと思われるが欠損する。体部に沈線を等間隔にいれて装飾する。叩き調整で内面には青海波文が顕著にみられる。鉄釉を掛け、茶褐色～濃褐色を呈する。482はほぼ直立する体部を有するもの。口縁部近くの外側には4条の沈線を、更にその下位に波状文を巡らせる。素焼きである。483は内側に折り込む口縁部を有するもので直立する形態である。口縁直下に径6mmの穿孔がある。外側を棒状工具で調整し、カキメ状の調整痕を残す。体部は叩き調整により、内面には当て具痕である青海波文を残す。484は口縁端部を外側へ折り返し肥厚させるもの。口縁部直下の外側に波状文を持つ。下地釉のような赤褐色釉が全体に掛けられる。485・486は口縁端部外側を突帯状に肥厚させる。焼締により硬質に焼成される。

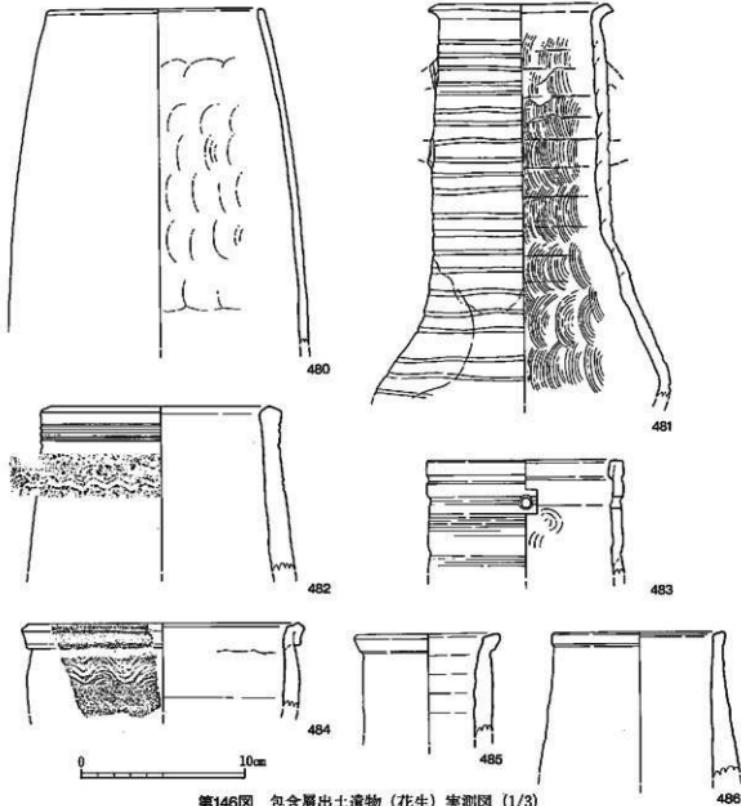
有孔鉢（第147図）

円形・方形の透孔をあけるものであり、向付として使用された鉢であろう。軸は藁灰釉を全体に掛けるものが大部分を占め、他に素焼きのものがある。503・504は内面が露胎であり、鉢ではなく香炉等の他の器種かと考えられる。

487から495は口縁部。口縁部の形状は直立し端部を丸く取めるものが大部分を占めるが、491はく字形をなす。490や493・495は沈線による文様表現も加わる。500から502は体部下半の資料であ



第145図 包含層出土遺物（藍）実測図②（1/3）



第146図 包含層出土遺物（花生）実測図（1/3）

る。これらの資料から、径は30cm程度であることが確認できる。501は高台をつくらず円柱形の脚が続くもので、欠損しその接合痕が残っている。

#### 盤・結文形鉢（第148図）

505は縁を直立させる盤で素焼き。全体を削りにより調整する。脚はつかない。一边が24.2cmを測る大形のものであるが、1/4強を欠損するので結文形となる可能性も否定できない。

506は厚手の器壁をもつ水盤で脚は粘土を丸めたものを用いる。粘土塊を削りだして成形したものであろうか、外面はケズリ調整で、内面には削り抜いたような調整痕にナデが加わる。釉は発色せずに鶯色を呈する。

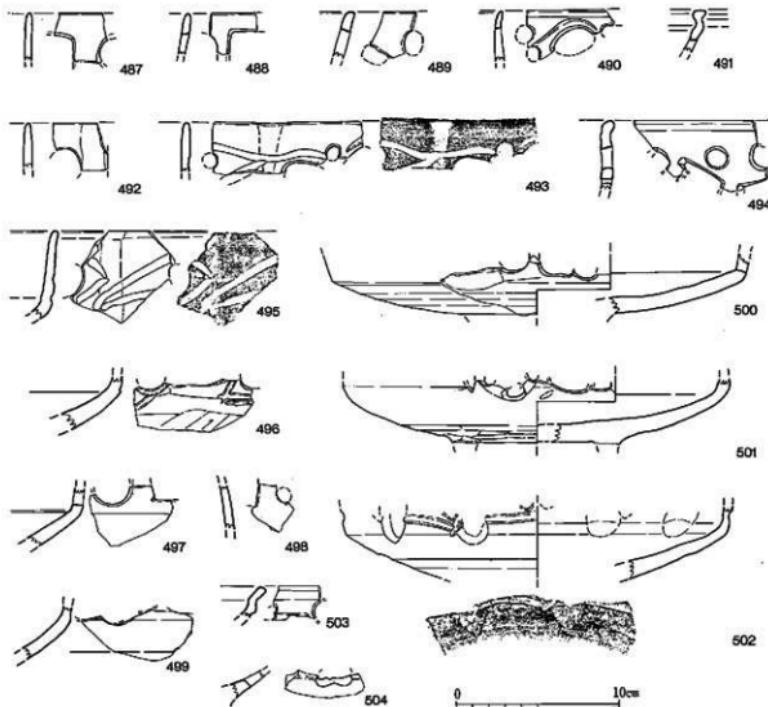
507～511は結文形の向付。直立する口縁部を有する形態である。脚はいずれも短い粘土紐をU字形に折り曲げて付ける。508は鋭角のコーナーを有する部位である。口縁部はやや内湾しながら聞く。釉は厚く掛けられるが未発色で黄白色を呈する。509はほぼ直立する形態。器壁は5mm程度の

厚さであり薄い。内面に鉛釉を掛け、褐色に発色する。509は平面形状が僅かに弧を描く形状である。直立する口縁部をもち、比較的深い部類に入る。明灰色に発色する長石釉を掛け。底面には模様が付着する。510は直角に近いコーナー部である。全体に鉛釉が施釉され、褐色に発色する。底面には模様が点々と付着する。511は直立する口縁部を持ち深い体部となる。複雑に屈曲する形状をなす。薬灰釉を掛け、乳濁色に発色する。

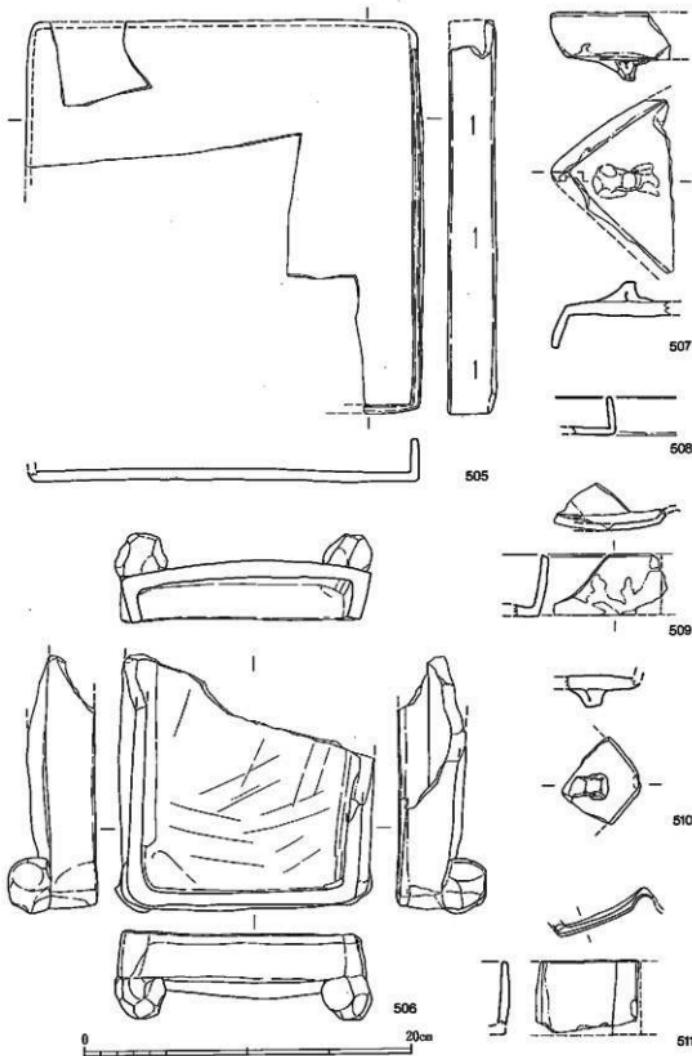
#### 火入・香炉 (第149図)

512・513は内面に肥厚帯をもつことから火入と考えたが、全体に施釉することからやや躊躇される。512は緩やかに外反する体部を有するもの。鉛釉を掛け褐色に発色する。513は器壁の厚さが3mm程度のごく薄いもの。薬灰釉を掛け乳濁色に発色する。

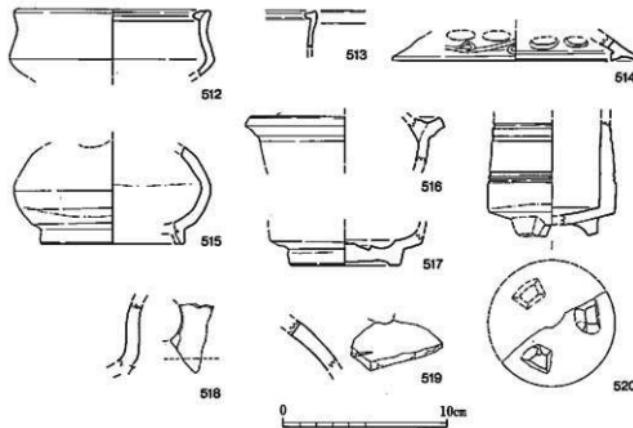
514は香炉の蓋。円形の透孔が連続し、外面には沈線により文様を刻む。内面に身受のかえりをつくる。外面を中心に薬灰釉を施釉し、乳濁色に発色する。



第147図 包含層出土遺物（有孔鉢）実測図（1/3）



第148図 包含層出土遺物（盤・結文形跡）実測図（1/3）

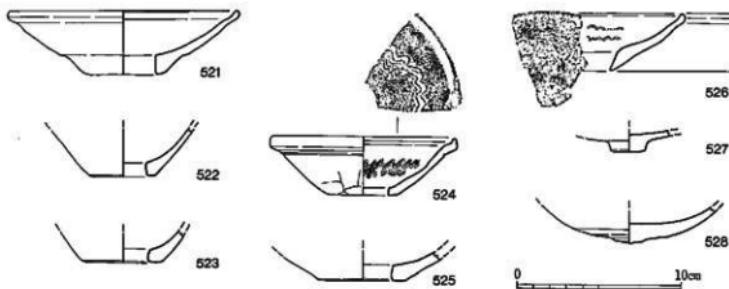


第149図 包含層出土遺物（火入・香炉）実測図（1/3）

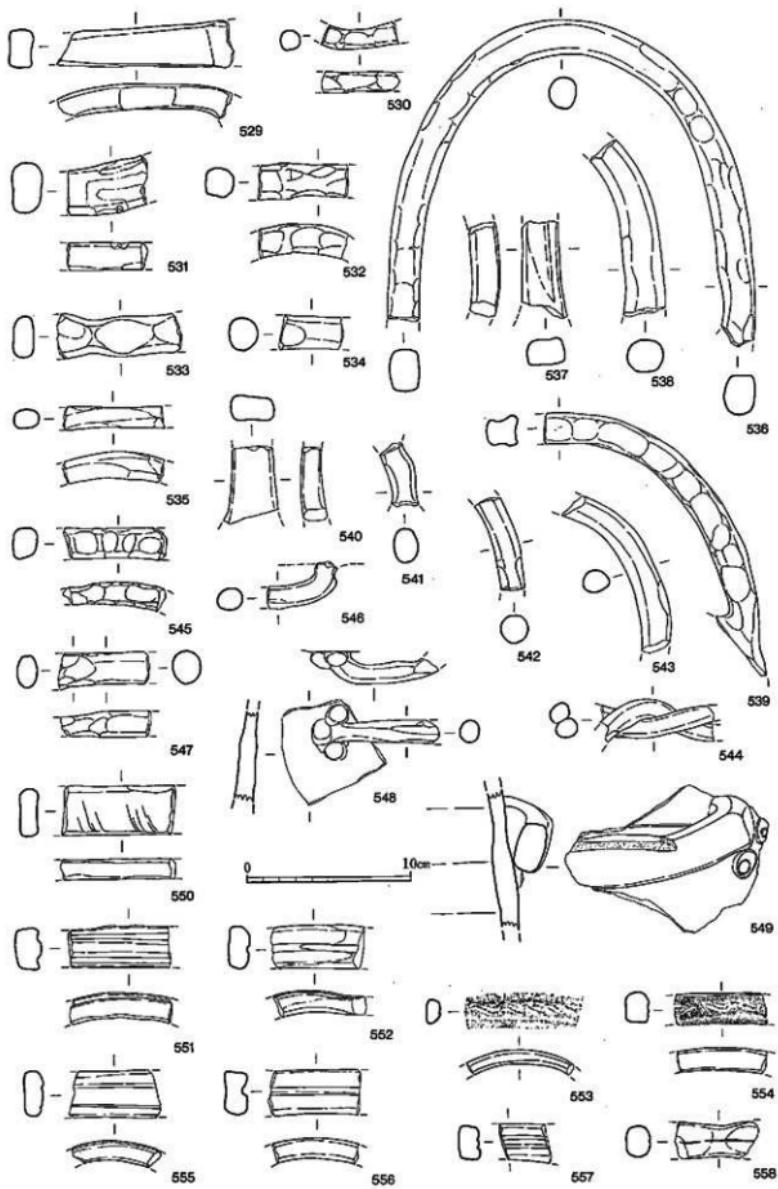
515から520は香炉の身。515ははんぐりとした球形の体部を有するもので、体部上位に円形の透孔を開ける。516は上を向く突帯を有するもの。335にみられるように同形態で透孔をもつものがあり、香炉と理解した。外面に鉛釉を掛けるが発色は悪い。内面は露胎である。517は筒形の体部をもつもの。内面が露胎で強い雜紋目を有することから香炉と捉えた。518・519は円形透孔を有し内面が露胎のもの。両者とも素灰釉を掛け、乳濁色に発色する。520は三脚の香炉。筒形の体部を有し、外面に沈線を巡らせる。外面に素灰釉を掛け、乳濁色に発色する。底部及び内面は露胎である。

#### 筆立（第150図）

521～526は底部に穿孔のある皿。527・528は皿状の体部の下にボタン状の突起を有するもの。これらは第1～3次調査の報告書で筆立と分類されているものであり、それに従う。



第150図 包含層出土遺物（筆立）実測図（1/3）



第151図 包含層出土遺物(把手)実測図① (1/3)

521は直線的に伸びる体部をもち、口縁部は内湾して立ち上げる。全面に施釉するが発色が悪くすんだ緑色を呈する。522・523は歪みが大きく傾きには疑問を残す。鉛釉を掛け褐色に発色する。524は直立する体部を口縁部で外反させ、更に端部を短く直立させる形態。内面には波状文をめぐらせる。全面に灰釉を掛け、透明感のある緑色に発色する。525は素焼き。526は焼成時の歪みが大きく径を出し得ない。口縁端部は僅かに内側に摘み出す。内面に波状文をめぐらせる。

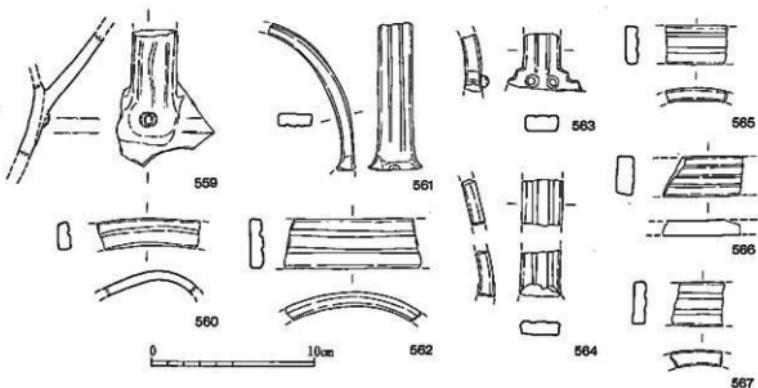
527・528は径2cm程度のボタン状の突起を持つものであり、台を伴わないと安定が悪い。527は藁灰釉を厚く掛けるが発色は良くない。528は素焼きである。

#### 把手（第151・152図）

包含層から出土した把手を一括する。水指・水注・大皿・鉢につくものが大部分とみられるがその判別は困難である。釉は鉛釉と藁灰釉がそのほとんどを占め、一部土灰釉のものがある。また素焼きのものも多く出土した。

530～535・545・547は断面円形の棒状のもので、指圧痕の凹凸が顕著である。536・539・543は強い弧を描くことから水注の把手と考えられる。546・548は鉢の側面につけられる断面円形の把手。548は付根に円形浮文を3個添える。549も鉢の把手で、断面方形の大形のもの。大きく焼け歪む。

551・552・555～557は断面長方形の把手に1ないし2本の沈線を入れるもの。558は断面円形の把手にごく細い沈線を入れる。553・554は断面方形の把手に波状文を入れる例であるが、このタイプは珍しいものといえる。559～567は断面方形の把手で沈線を入れるものであるが、先のものに比べて薄手である。559は付根に二重の円形浮文を1個置く。561の付根にも円形浮文の一部が、また563にも2個の円形浮文が付けられる。563は付根を階段状の形状にする。水注の把手であろう。



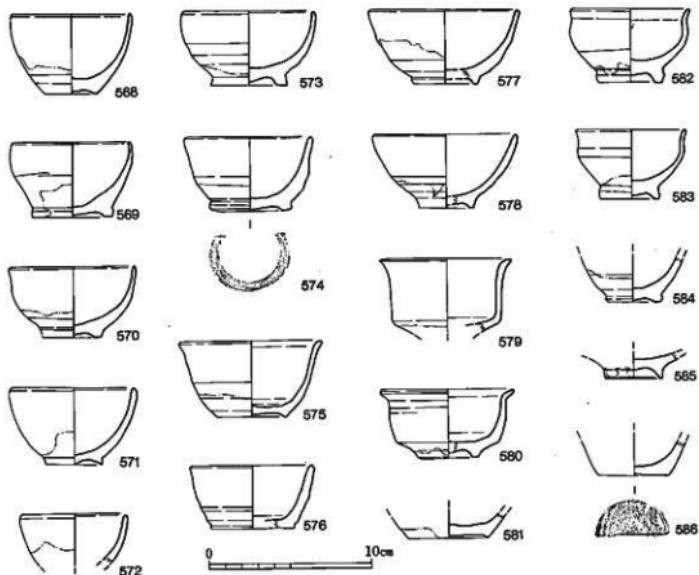
第152図 包含層出土遺物（把手）実測図② (1/3)

椀 (第153~162図)

第153図に挙げた椀はいずれも口径が小さくぐい呑みというのにふさわしい。ほぼ口径7.5cmの規格があるらしいが、577・578は口径が8.8cmで描いて、別規格であろう。高さに関してはほぼ5cmで描っている。高台径は5cmのものと3.5cmの二者がある。このようにぐい呑みに関しては、規格からいくつかのグループ分けが可能な見通しが得られる。全体的な器形に関しては丸形のものと縁反形のものの二者に大別できる。581は胎土が極めて精良であり、585もまた精良な胎土の部類に含まれよう。576・578は糸切の底部で、576は土師器的な焼成である。568・575は基筒底。

第154図に挙げたもののうち、589は口径・器高とも先に見たぐい呑みの規格に合うが、口縁を強く外反させ上面に波状文を巡らすことから、ぐい呑みの名称は適切ではなかろう。591は体部に一条の沈線を巡らせる。口径はぐい呑みにみられるものであるが、器高が高く、椀と呼ぶにふさわしくなる。

592~598は口径9.5cmの規格にのるものである。器形は丸形が多く、縁反形が若干含まれる。口



第153図 包含層出土遺物（椀）実測図①（1/3）

縁端部は丸く収めるものが多いが、594・597のようにやや肥厚し端部は尖り気味となるものがある。

さらに口径で分類するならば、10.5cmのところにまたグループが抽出できる。この大きさになるとすべて丸形の器形となり、端部を外反させるものは無くなる。高台は低いものが多く、601は高台際の削りが弱いために体部との境が不明瞭となる。604・609は高い高台を持つ少い一群である。600は深い体部の割には高台径が小さく、やや不安定な形状である。鉄軸を高台内まで縦掛けしており、黒褐色を呈する。

第155図の614・615・620～622・626・634は口径12.0cm程度の一群。器高はこれまでの大きさは6cm程度であったが、高台が高く9cm程度の高いものもある。器形はオーソドックスな丸形が多い。第156図のほうには口縁端部が外反するものを集めてあるが、数は多くない。

636・637・642～644・649はさらに大形で口径は14.0cmを測る。特に644・649は胎土が精良で、644は高台内まで鉄軸を掛けた縦掛けである。

656から661は弱く外傾する直線的な口縁部をもつ形態の椀。658は2条の沈線が巡り、661はビッチの長い波状文が描かれる。662・663は口縁端部を外へ短く折り曲げ丸く仕上げる。664は内面に肥厚帯がある。665から672は筒形椀。665・666・671は細い多条の沈線を巡らせる。669は基底底。670は薬灰軸の縦掛け。672は胎土が極めて精良で、つくりもシャープである。

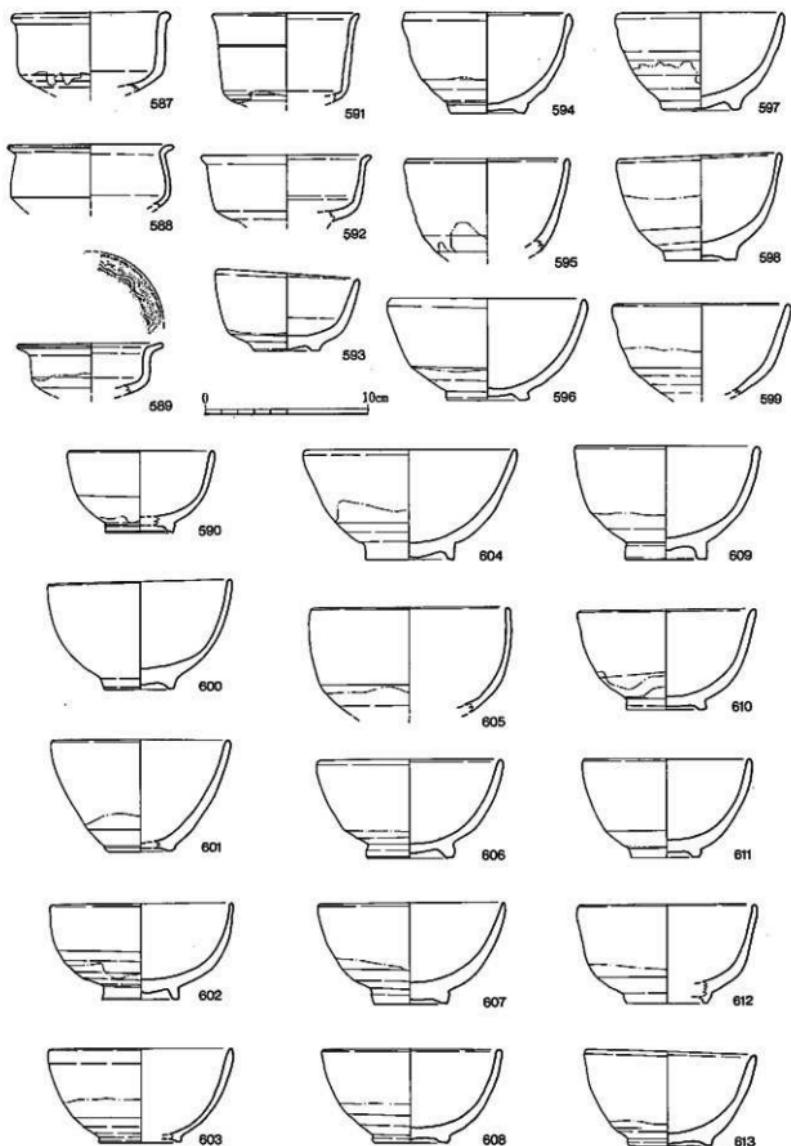
673・674は多条の沈線を巡らせる椀。675は角柱状、或いは杏形椀か。676は輪花口縁の椀で唐津焼の影響が強く感じられる。677から680は天目形の椀。681は直線的に大きく広がる椀で、今回の調査ではごく僅かしか出土していない。

685は高台内に沈線が2条、同じ所をなぞるように引かれる。686から690は撥高台。689は非常に小形の体部が続く。695～697は縦掛け。695は大きな体部に対しバランスの悪い小さな高台がつく。697は透明の土灰軸を縦掛けした後で乳白色を呈する薬灰軸を掛ける。699は高台内を回転を用いて荒々しく削ったもの。内面は強い輪轍目が等間隔に巡る。703・704は高台外面に太い沈線を巡らせるもの。704は薬灰軸の縦掛けである。705は「二」の字を高台内に刻むもので、3方向に切込みを入れる割高台。706は2方向に切込みを入れる割高台で、胎土は精良。698・707も割高台であるが、開けられる数はわからない。

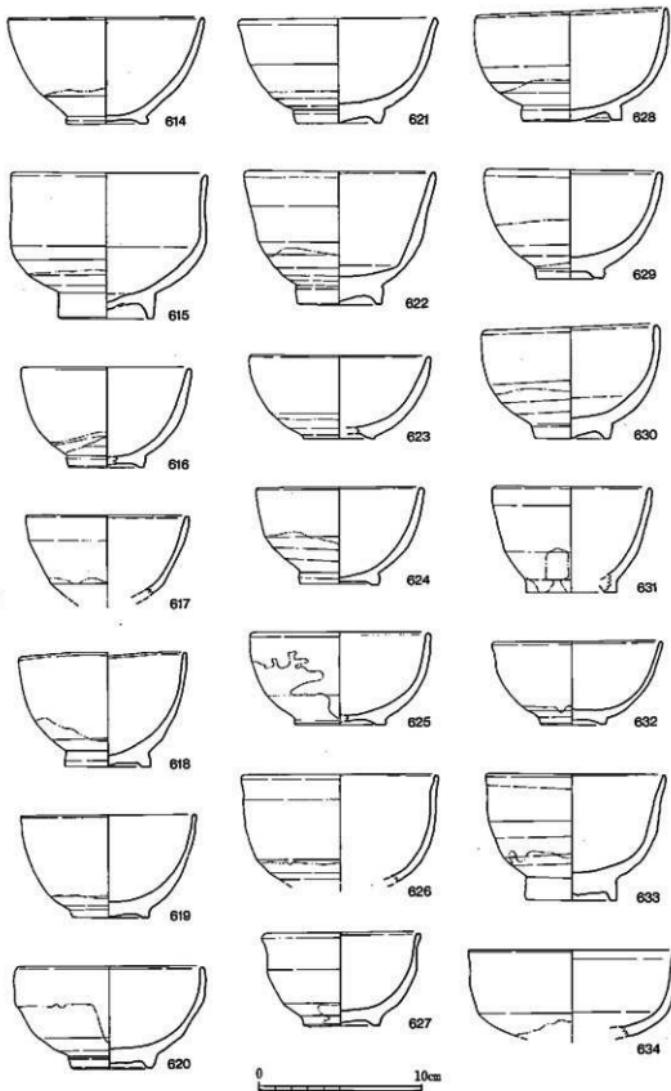
708から721は杏形の椀。708は完形品。薬灰軸はほとんど発色せず、剥落が進行している。709は山形に波状文を入れる。710は鉄軸のイッチン掛け。711は多条の沈線を巡らせる。712は薬灰軸の縦掛け。海鼠軸となる。713は精良な黒味を帯びる胎土のもので、椀の体部の一方を歪ませる。小堀遠州の影響が感じられるものである。719も薄いつくりで外面に多數の沈線と山形文が刻まれる。722・723に関しても遠州の影響が強く感じられ、綺麗さびの色が濃い。このような特徴が出るものには量的にはごく僅かである。

724は土灰軸の上に緑青釉が掛かる口縁部。725は細い脚がつくもので、「二」字が刻まれるが、摩滅気味で単なる傷の可能性も残される。726は高い脚をもつ小形の椀。齒車状に太い沈線が縦に入れられる。底面は糸切。

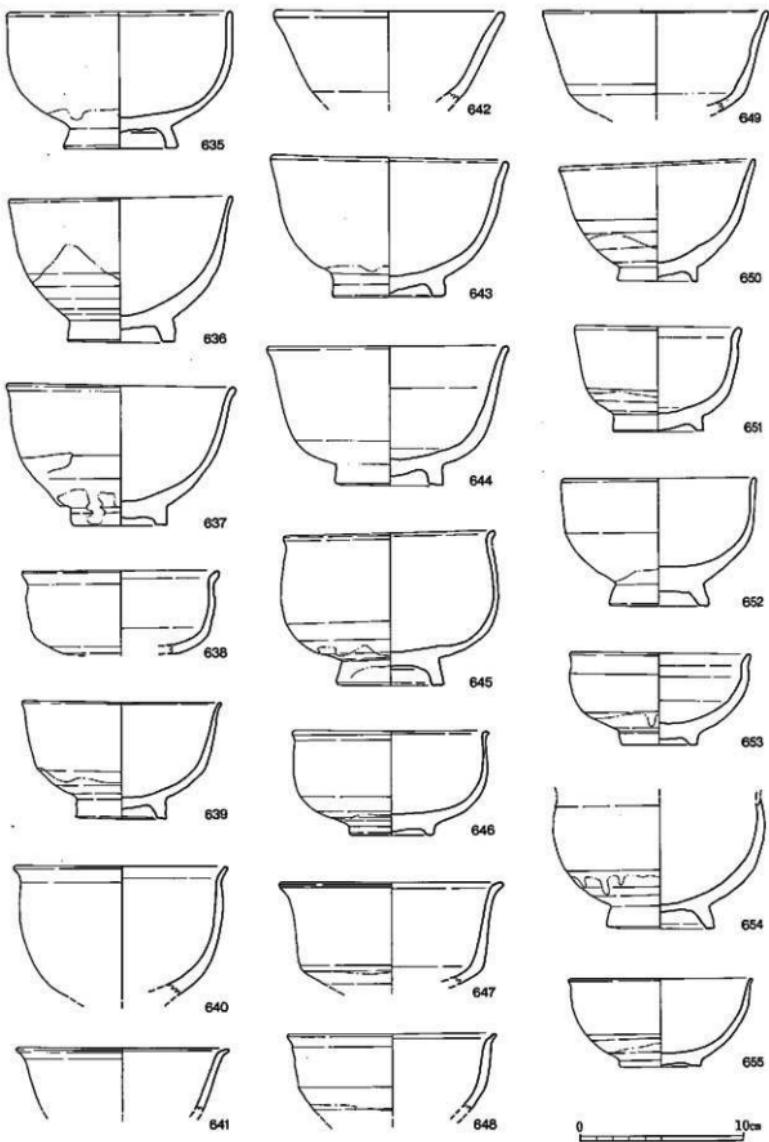
727から733は椀と言ふよりも向付として使用された鉢であろう。直立する口縁部に太い沈線によって文様が刻まれる。縦方向に直線を連続させるものが多いが、728のように山形文を組み合わせるものもある。734は波状文と沈線を入れる椀。735は太くて浅い彫りを入れ、杏形椀になるかもし



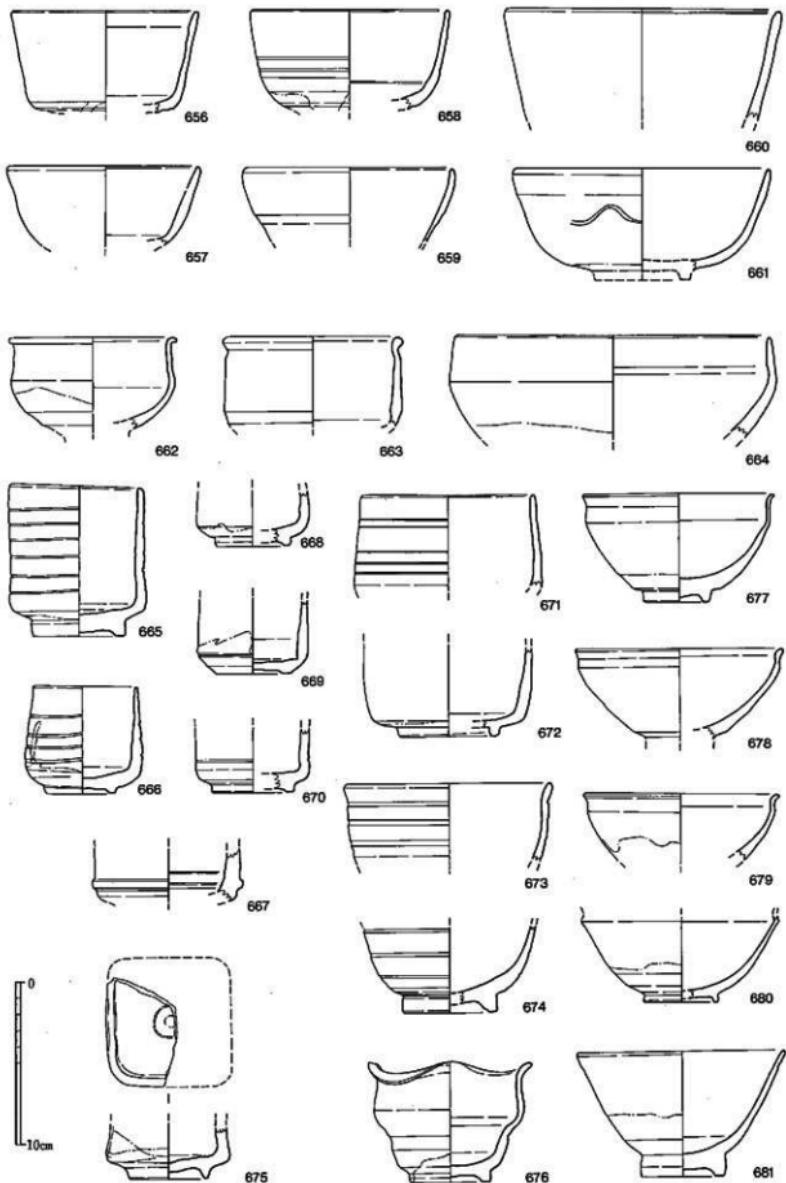
第154図 包含層出土遺物（椀）実測図②（1/3）



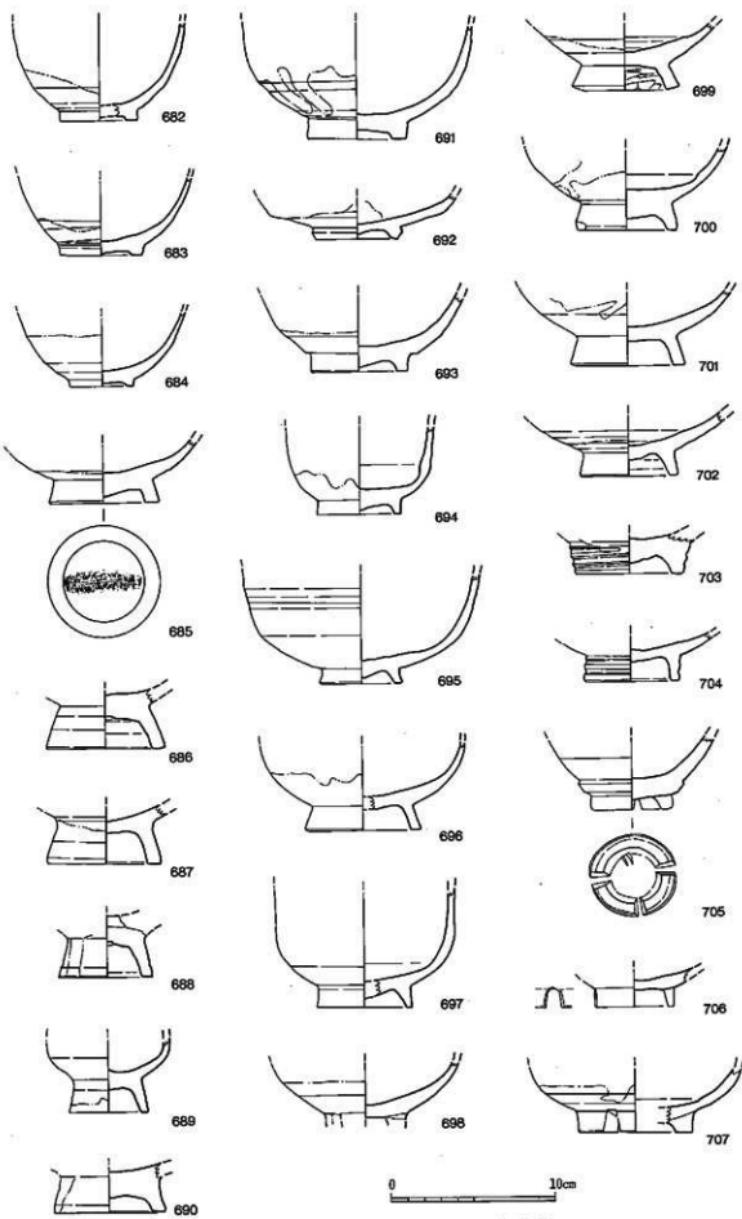
第155図 包含層出土遺物（碗）実測図③（1/3）



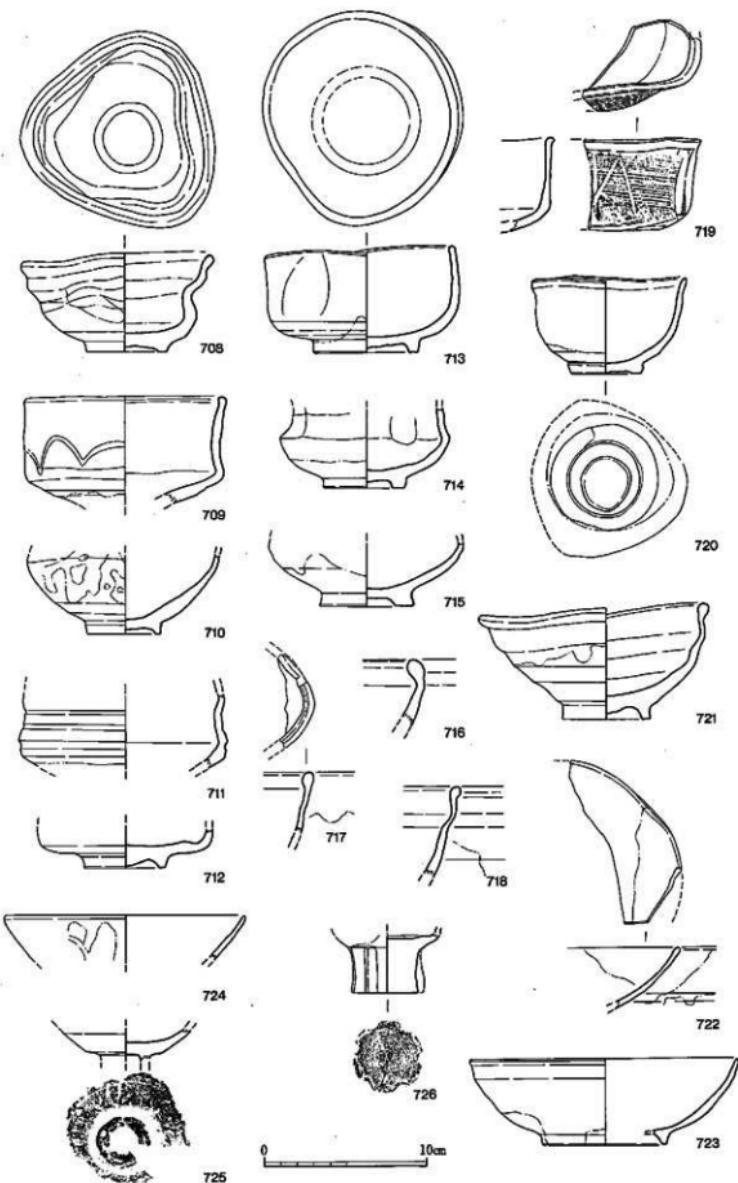
第156図 包含層出土遺物（椀）尖測図④（1/3）



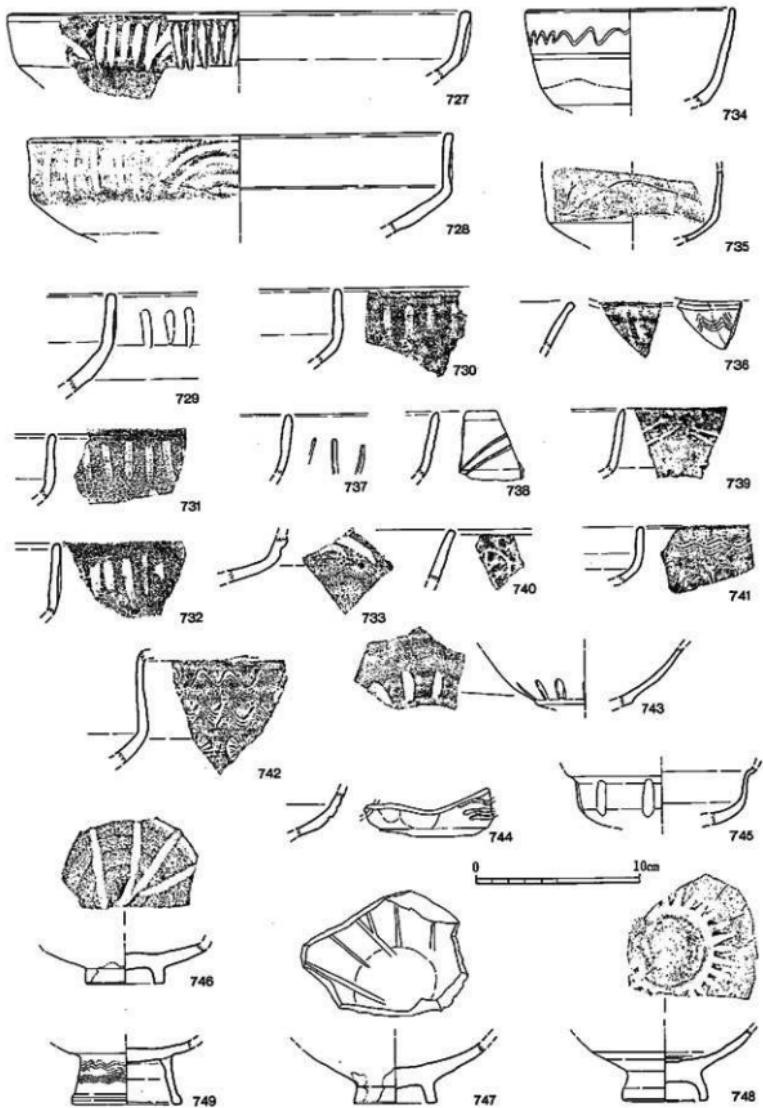
第157図 包含層出土遺物(碗)実測図⑤ (1/3)



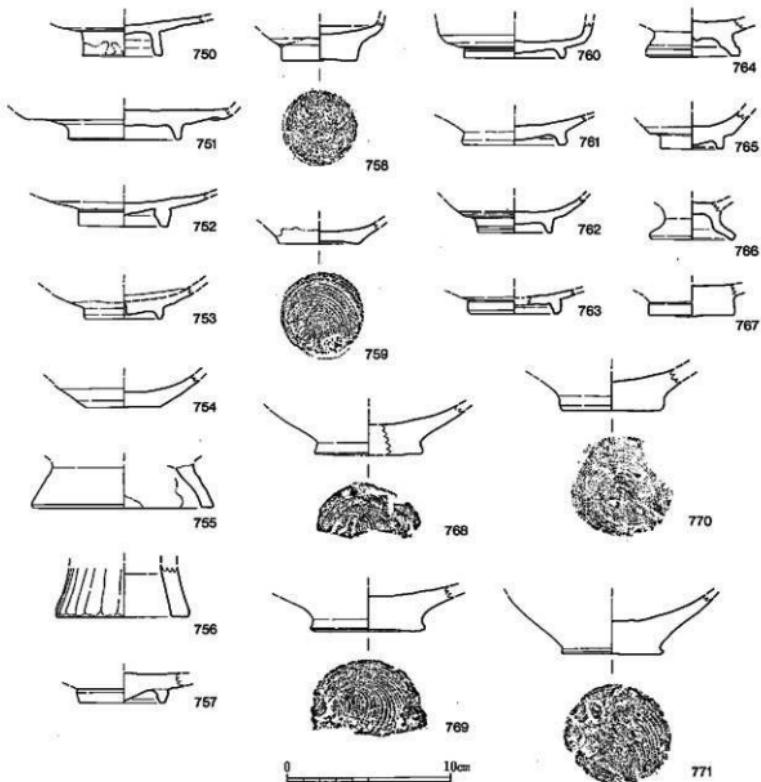
第158図 包含層出土遺物（続）実測図⑥（1/3）



第159図 包含層出土遺物(焼)実測図⑦ (1/3)

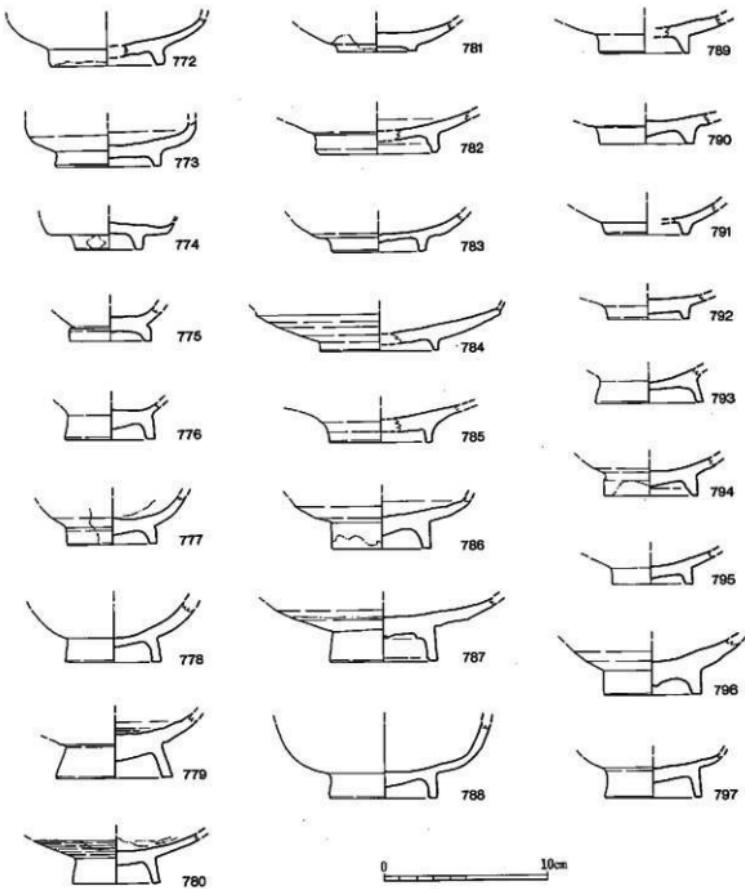


第160図 包含層出土遺物（続）実測図⑧（1/3）



第161図 包含層出土遺物（椀）実測図③（1/3）

れない。736は胎土が精良な椀の口縁で、波状文を入れる。長石釉と鉄釉の掛け分け。738・739はシャープな沈線を直立する口縁部に入れる。740は木の葉の表現であろうか。742は大形の椀、或いは鉢。外反する口縁部の外面に波状文と菊花文を組み合わせた文様を施す。744はその形状から透孔陶器の一部かもしれない。746から748は見込み文様を入れる椀。748は土灰釉の絶掛である。749は脚を有する椀、或いは鉢で、脚部外面に波状文を描く。体部と脚部とでは明らかに胎土が異なる。鉄釉を掛け濃青色に発色する。752は高台内面を削る際に深く工具を入れたために高台が浮いたような形状になるもの。753は高台内面の中心に小孔があり、トンボの痕跡かと見られる。757は貼り付け高台。758は内面が露胎で糸切のままの高台を中心として薬灰釉が掛けられる。天地が逆で蓋として使用されたものであろうか。760・762・763は胎土が極めて良い。遠州好みの椀であろう。764・766は据広がりの高台を有する。767から771は未製品。768から771は高台を削りだす前に放棄



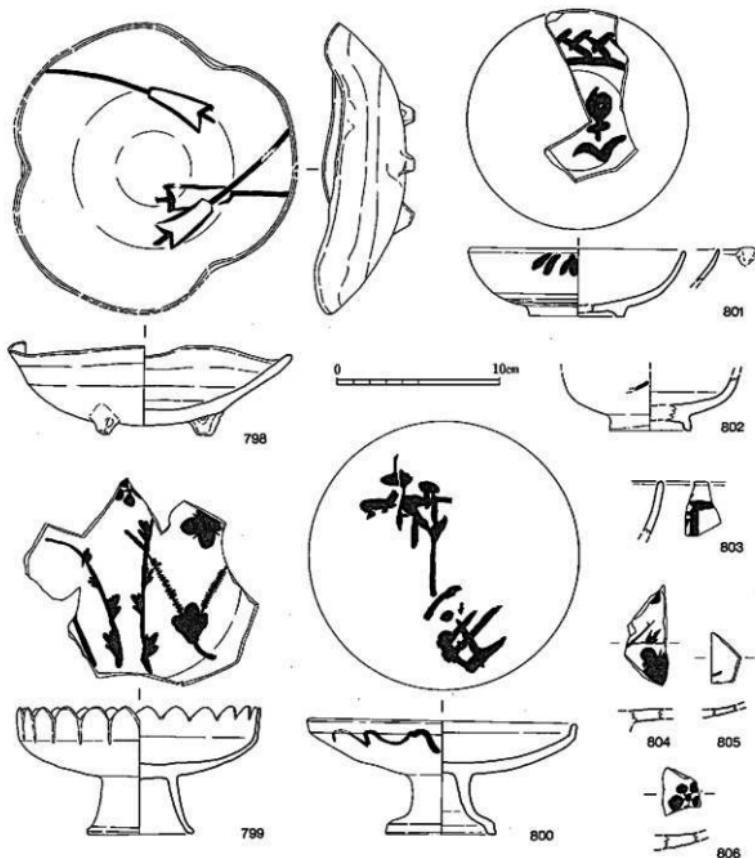
第162図 包含層出土遺物（haniwa）実測図⑩（1/3）

している。767は高台内面を削りだす時点で破棄されたもの。第162図には縦掛のものを集めた。この中には椀ではなく皿も含まれるかもしれない。777は長石釉を縦掛した後に鉄粒を掛ける掛け分け。780は藁灰釉を縦掛した後で緑青釉を内面にイッチン掛けする。

#### 鉄絵陶器（第163図）

今回の調査では鉄絵陶器は数は多くないものの器形全体がわかるものが多く、貴重な資料となつた。798は半球形の盆を三方から強く変形を加えた形態をなすもので、内面に鉄絵により三本の矢

を描き明灰色に発色する長石釉を全体に掛けたもの。脚は粘土紐をU字形にしたものを3個貼り付けており、疊付は露胎である。799は梅の木・花を描く高环形のもので、口縁部は同一個体と考えられる資料を合成した。緩やかに外反する脚部を有し、端部は僅かに肥厚させて丸みをつける。縁味を帯びた明灰色の長石釉を全体に掛けたもの。800は志野釉を脚部内面を除き厚く掛ける高环形のもの。浅い体部に直立する短い口縁部を付ける。脚部はハ字形に大きく開き、端部は下方へ短く屈曲させる。画題は山と木であり、外面には波状文を描く。801は丸形の小皿で、同一個体と考えられる破片には口縁部の摘み上げが認められる。見込に草花文を描き、口縁部内面には生垣状に直線を組み合わせた文様を描く。口縁部外面には点々と筆により描いた文様を入れるが、破片となり詳細は不



第163図 包含層出土遺物（鉄絵陶器）実測図（1/3）

明である。透明感のある緑茶色を呈する釉を掛ける。802は楕であり、外面に鉄絵の一部が確認できる。明灰色の長石釉を厚く掛ける。803は楕の口縁部。外面に直線からなる文様を描く。804・806は梅の花・木を描くものであり、805の文様も枝の一部であろう。いずれも長石釉を掛ける。804は釉が厚いためか文様がぼやけて見える。

### 皿（第163図～第187図）

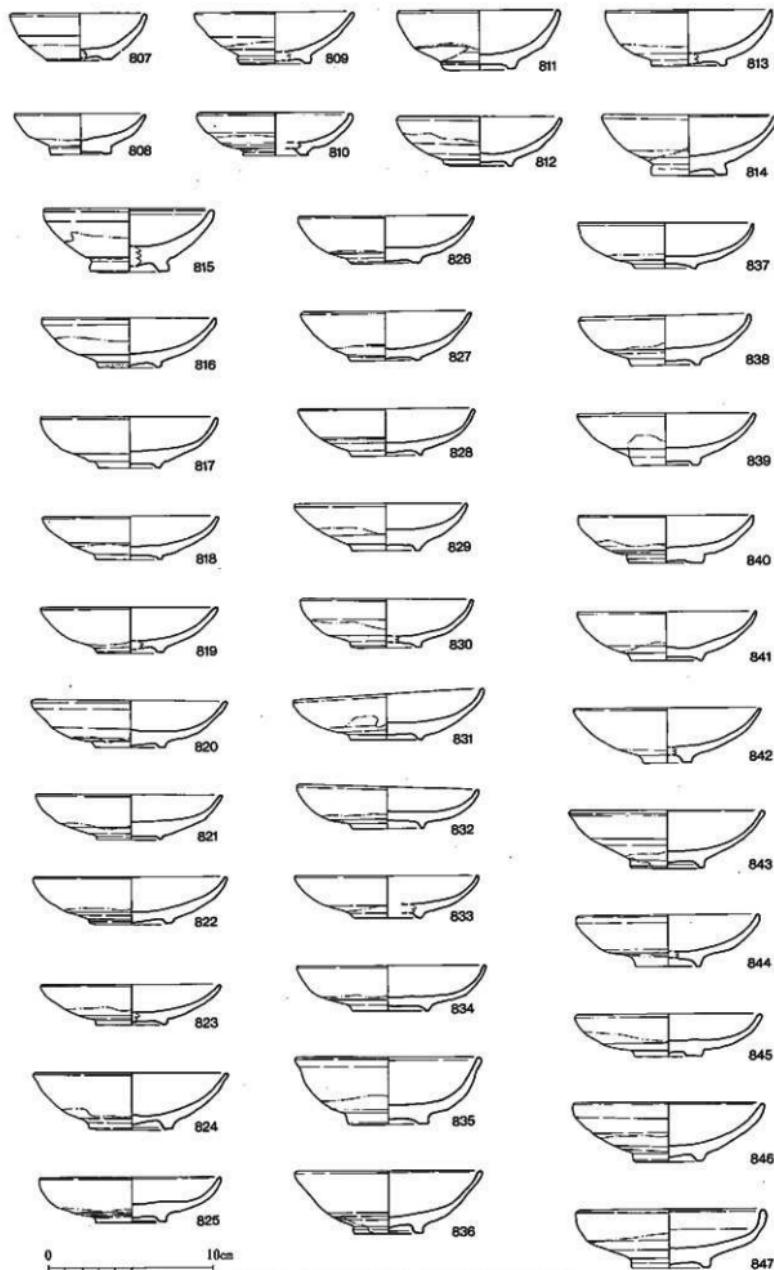
内ヶ磯窯で出土する最も多い器種に皿がある。皿には大きさから小皿・中皿・大皿と大きく分類することができ、さらにその中でも細かく、例えば同じ小皿と言っても大小といった分類が可能である。大きさのほかには全体の器形によって分類が可能であるが、特に口縁部形態に特色が現れるとしてよい。

皿の全体的な特色を挙げると、高台のつくりは低いものが多く、高台内中央が尖る兜巾高台となるものが殆どである。また高台内のケズリの中心が偏る三日月高台も多く見られる。体部のケズリは範囲が狭く、また疊付には糸切底を残すものも多い。見込み及び高台に目跡を残すものが多い。胎土色がほとんどであり、貝目はごく少なく大皿の一部に認められるのみであった。目跡の個数は3～4個であり、大皿の場合はほとんどが4個である。1123は見込み貝目跡が連続して密に残されている。

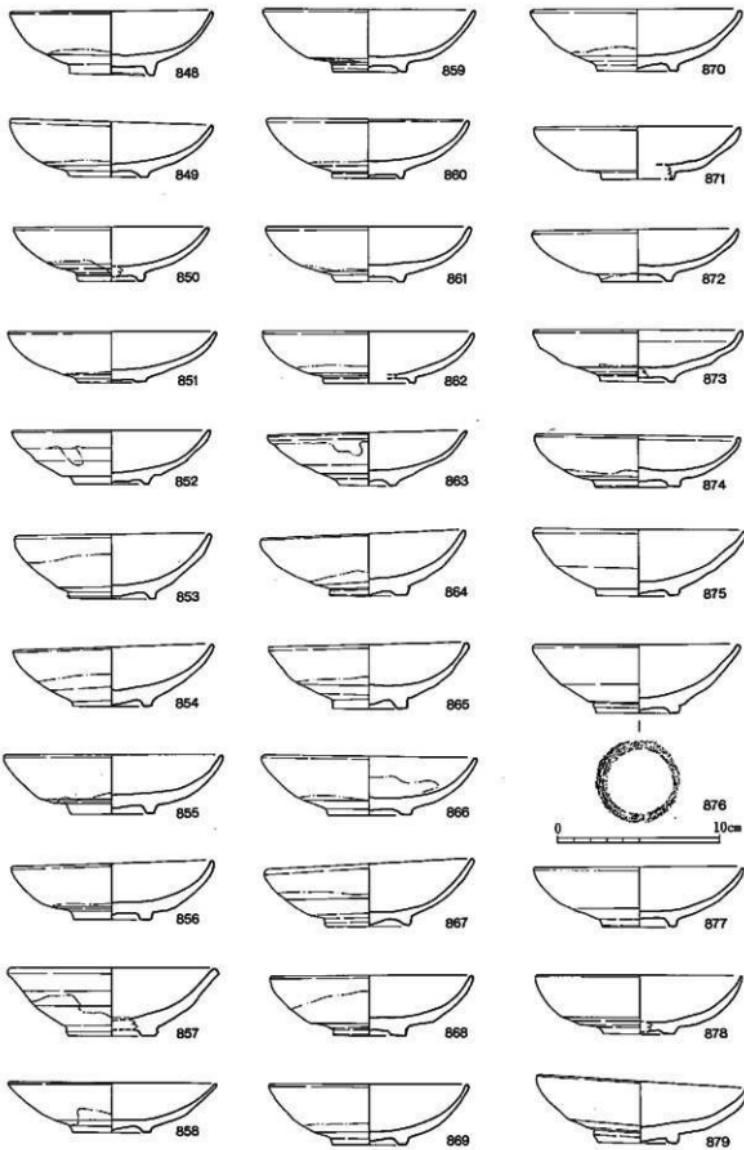
釉の種類は内ヶ磯窯でみられる殆どのものが採用される。ただし茶入に用いられるような茶褐色の鉄釉は用いられない。釉の掛け方に特色があるものは少ないが、880・1058のようなイッチン掛けが見られる。

第164図から第171図に小形の皿を挙げる。第164図から第166図には高台から口縁部にかけて緩やかに内湾する体部をもつものであり、いわゆる丸形と呼ばれているものである。小皿の中ではこの形態のものが一番多い。口縁端部は丸く收めるものが基本であるが、端部内面がややシャープさをもつものが含まれる。この特色は楕の中でも指摘できたことである。口径に関して規格があり、それに沿ってみてみたい。807と808は特に小形のもので、口径は8.2cmを測る。809～812も口径9.7cm前後と10cmに満たない。口径10cmに満たないものを一番小さい部類とするならば、この部類に含まれるのはごく僅かであると言うことが可能である。次に口径10.5cmというところに規格がある。813～819・826～830・837～841がこれに該当する。次は口径11.5cmを中心とするものである。これには820～825・831～835・842～847・880がこれに該当する。次は口径12.5cmを中心とするものである。848～854・856～861・863～865・868～869・871～874・876～879・881がこれに該当する。次は口径13.5cmを中心とするものである。855・862・866・867・870・875・882～886・890～892がこれに該当する。これよりも大径のものはごく少數派である。888～889は口径14.5cm。887は口径16.0cmである。口径に比べて器高は変異が少ない。大部分が器高3.0cmと器高4.0cmに収まる。基本的に口径が11.5cmまでのものが器高3.0cmであり、それよりも口径の大きなものが器高4.0cmであるが例外も多い。口径が大きい888は器高5.0cm、889は6.0cmであり、高台が高いことも含め他の小皿とは印象を異にする。最も口径の大きかった887は器高4.0cmであり、非常に平たい。

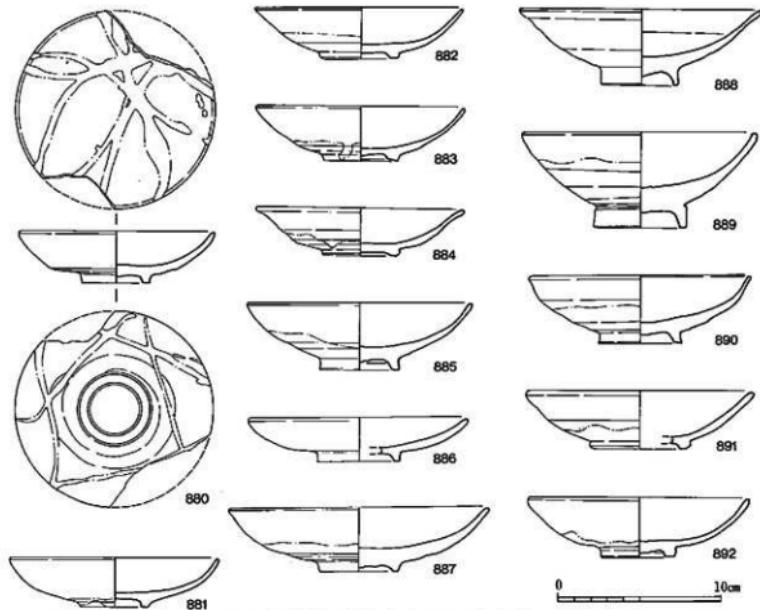
893から915は高台から口縁部に向かって緩やかに内湾する体部をもち、口縁端部のみ外反させるもの。縁反形と称されるものである。外反の度合いが強いものと弱いものがあるが、その境界は曖昧であるので分類していない。基本的に口径は12.5cmであり、899・900・903～906が口径13.5cm、



第164図 包含層出土遺物(皿) 実測図① (1/3)



第165図 包含層出土遺物(Ⅲ)実測図② (1/3)

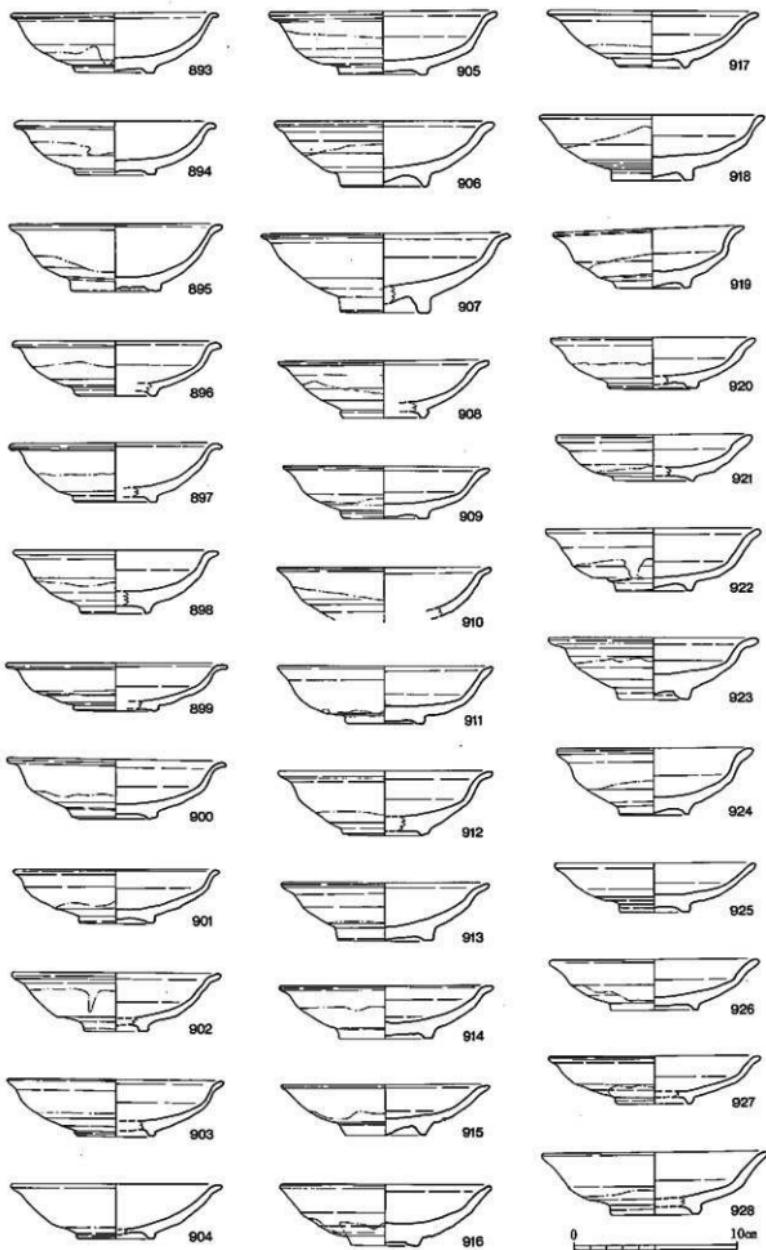


第166図 包含層出土遺物(Ⅲ) 実測図③ (1/3)

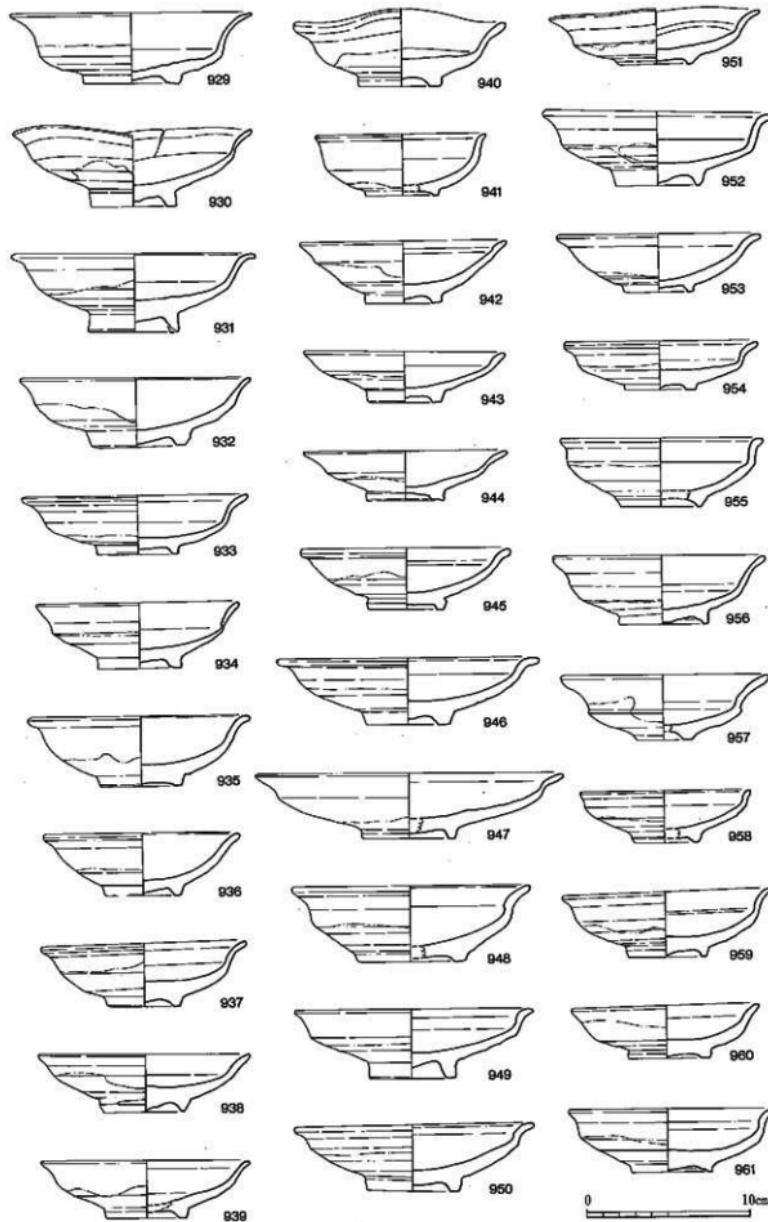
907が口径15.5cmである。器高は3.0cmと4.0cmの二者が大部分であるが、口径の大きい907のみ5.0cmであった。

916から941は口縁部が全体的に外反するものである。これもまた縁反形の一種と呼べる。口径によって分類すると最も小さいものは941の口径10.5cmである。次に口径11.5cmのものが続き、919・921・924が該当する。口径12.5cmのものが次にあり、916・917・920・925・934・936・939が該当する。次に口径13.5cmのものがあり、918・922・923・926～928・932・933・935・940が当たる。口径14.5cmのものが最大で929～931の3点である。口径12.5cmと13.5cmの規格品が大量生産されたと見られよう。口径はやはり3.0cmと4.0cmの二者に収まり、931のみ4.7cmと高い。

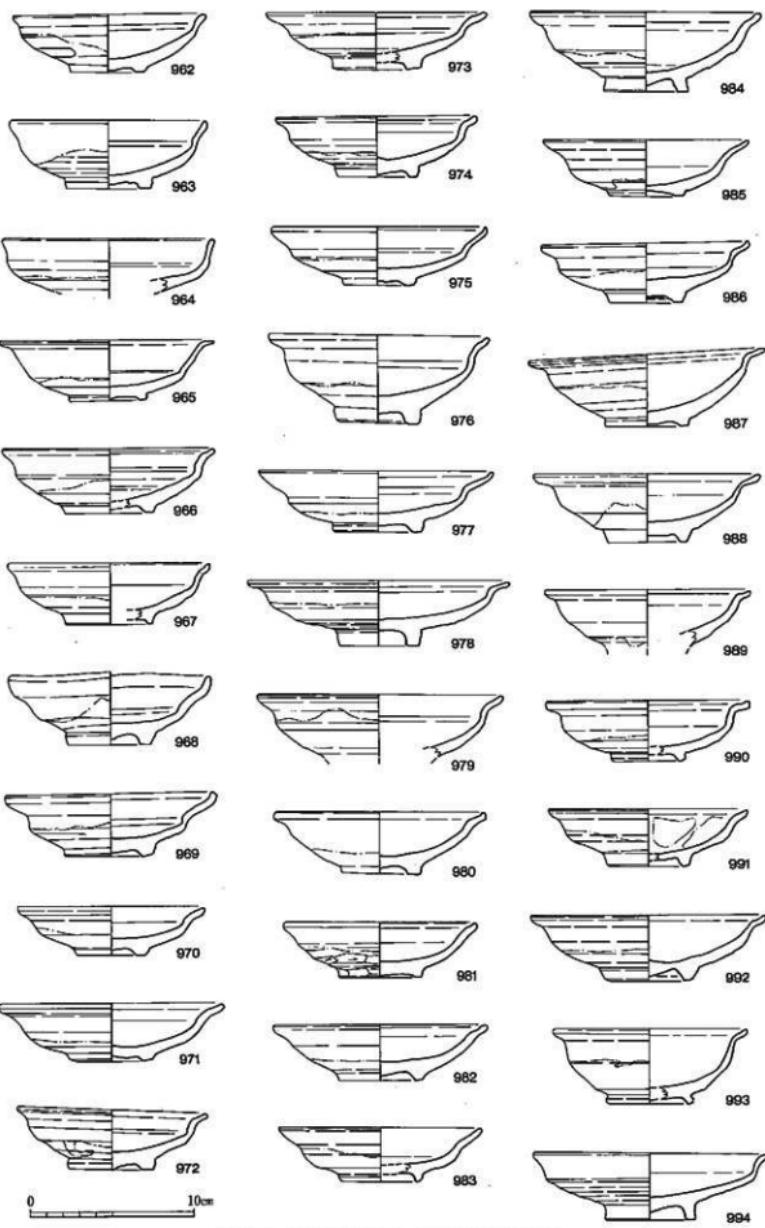
942から1017は口縁部が外反するが、外反の際に内面に強い稜が生じるもので、縁付形と呼ばれるものである。その縁には幅が広いものから狭いものがあり、また外反するものや内湾するものがあるが今回はまとまりがつかなかったので今後の課題とする。今回は単純に口径から見た規格のみ検討しておきたい。口径10.5cmのものが最小であり、958・1001がこれに当たる。口径11.5cmのものには960・962・963・970・972・981・993・995・999・1000が、口径12.5cmのものには942～945・951・953～957・959・961・967～969・974・980・983・985・986・989～991・996・997・1010・1011が該当する。口径13.5cmのものには952・964～966・971・973・975・976・982・988・998・1007・1009がある。口径14.5cmのものには948～950・952・977・982・984・987・992・994・1016・1017がある。これより大径のものは少数で、口径15.5cmには979、口径16.0cmには946・978・1012・1014、口



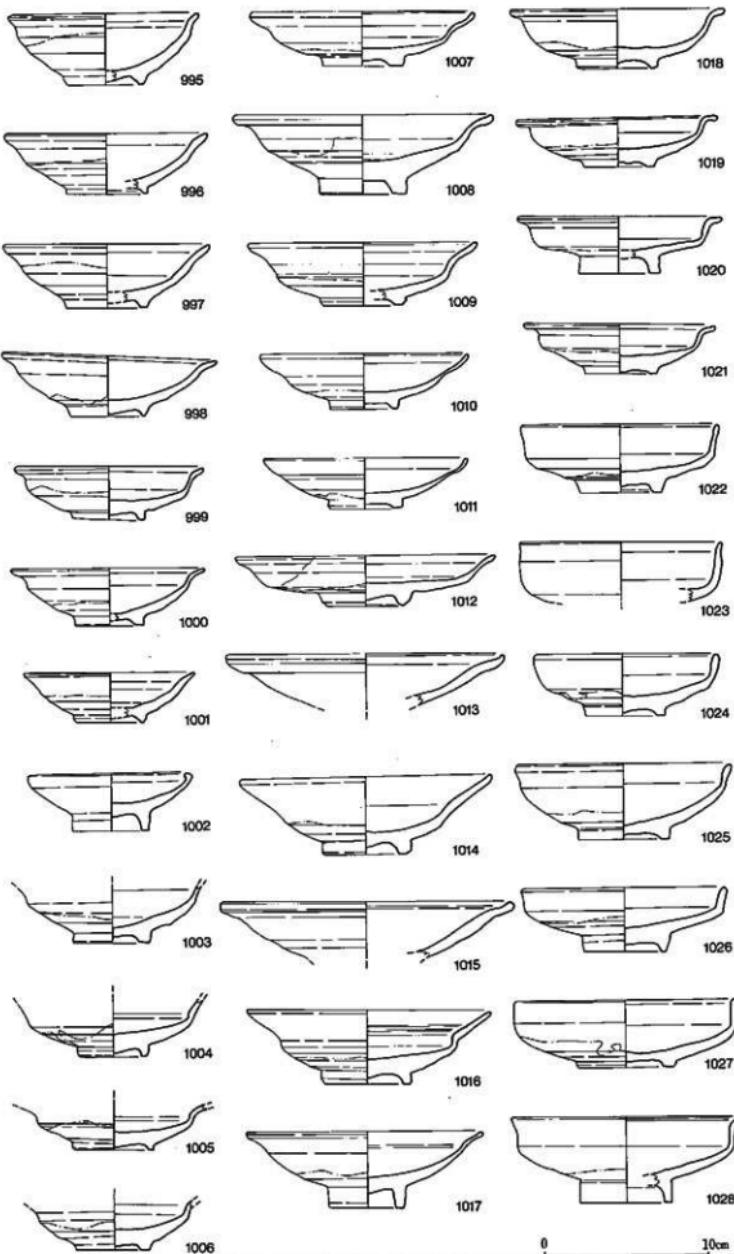
第167図 包含層出土遺物（皿）実測図④ (1/3)



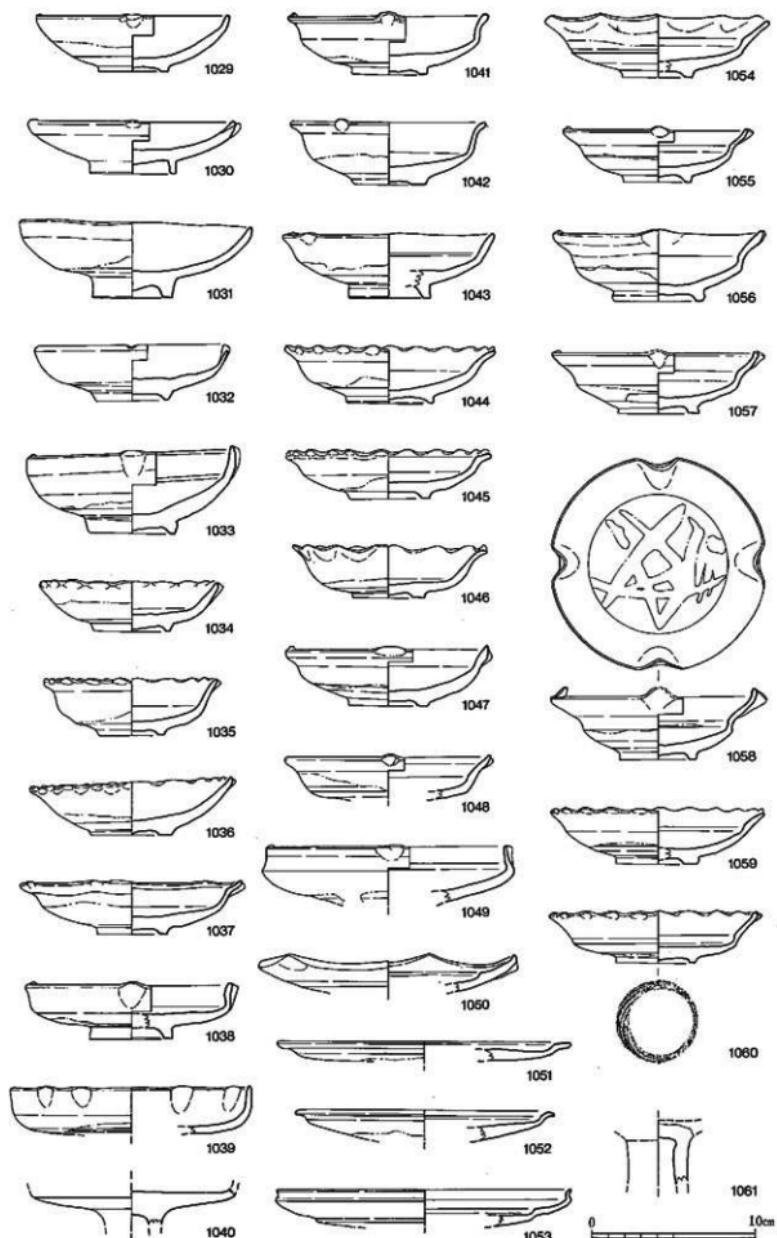
第168圖 包含層出土遺物（皿）實測圖⑤ (1/3)



第169図 包含層出土遺物（四）実測図⑥（1/3）



第170図 包含層出土遺物(Ⅲ)実測図⑦(1/3)



第171図 包含層出土遺物（皿）実測図⑧（1/3）

径16.5cmのものには1008、口径17.5cmのものには1013、口径18.5cmのものには947・1015がある。

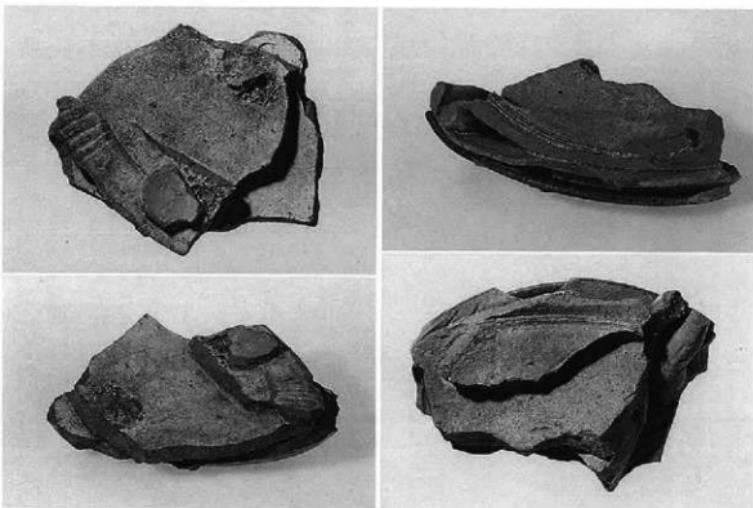
1022から1028は口縁部を直立させる縁立形とよばれるものである。1018から1021は縁立形の口縁部を強く屈曲させたもの。これらの形態は資料数が少なく、細部の検討は資料を充実させた段階で行いたい。

1029～1039・1041～1050・1054～1060は口縁端部を摘み上げる、或いは押さえることにより変化をつけるもの。縁なぶりと称されるものである。3ないし4ヶ所に施すものが多いが、全局に連続させるものも多い。その場合、頂点の数は一定せず、16から21頂点まで多様である。もととなる器形は丸形・縁反形・縁付形・縁立形と描い、特定の器形のみに施されるものではない。1031は口縁部に変化をつけるというよりも器形全体を五角形に形成するものである。

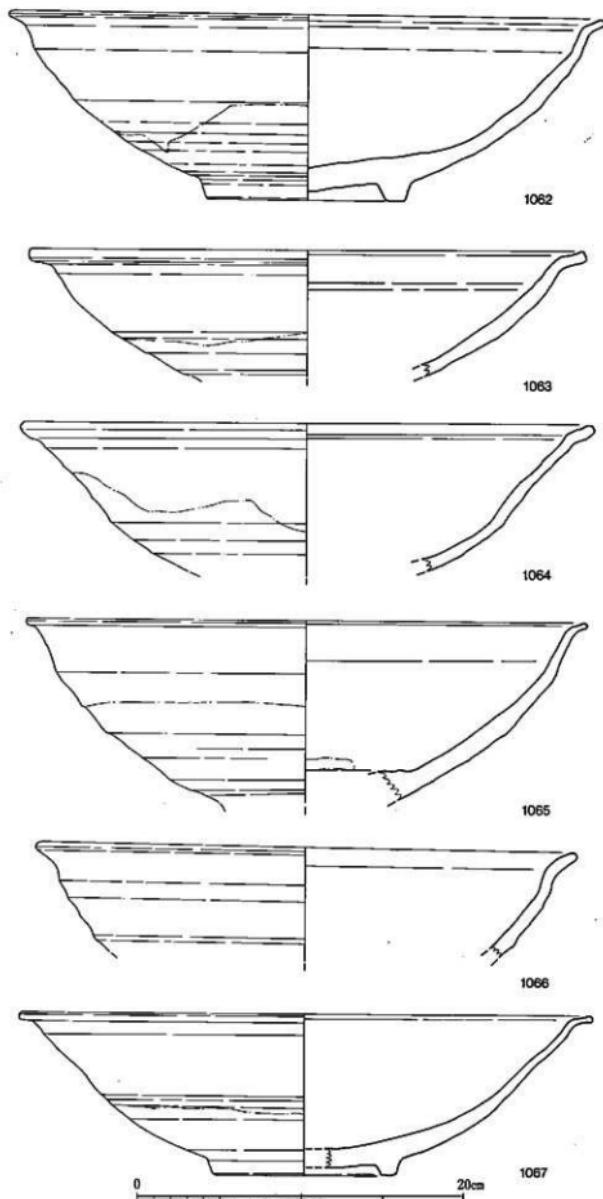
1051・1052は平坦な体部に階段状に段をもつ口縁部を有するもの。1053は平坦な体部に階段状に段を持つ広い口縁部があり、さらに端部は高く摘み上げ外反させる。1040は高環形となる。平坦な体部を持っていることから、1051・1052・1053も高環形の形態になる可能性を有する。1061は高環部の脚である。

1062から1106は大皿。1107から1133は中皿。大皿・中皿で形態上などの特徴はほとんど共通するとしてよい。大形器種であるために焼成時に歪みが生じているものが多く、復元時には若干の誤差は生じている点は理解しておく必要がある。第172図に挙げた写真は大きく歪み重ね焼きが崩れて多数の大皿がくついた例である。左の例には口縁部に彫文・見込に菊花文が、また右の例には大皿につけられた断面円形の把手が見える。

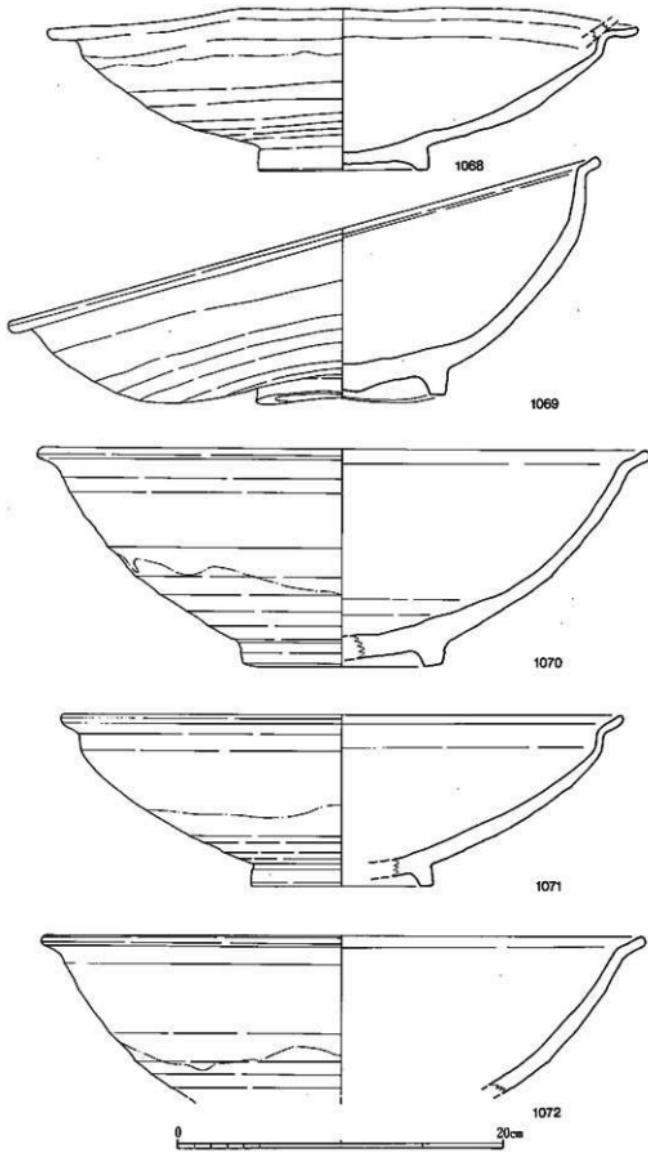
口縁部形態は縁付形が多く、丸形と呼べるものはない。口縁部上面の形態は緩やかに外反するも



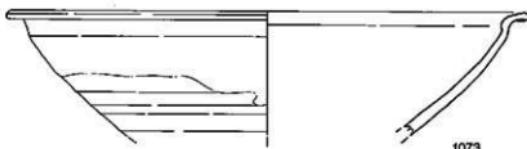
第172図 焼け歪んだ大皿



第173圖 包含層出土遺物（Ⅲ）実測図②（1/3）



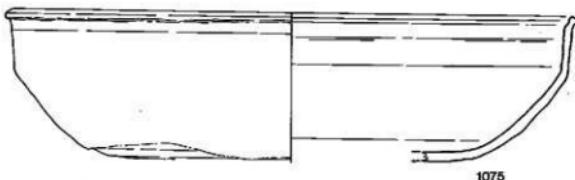
第174図 包含層出土遺物（皿）実測図⑩（1/3）



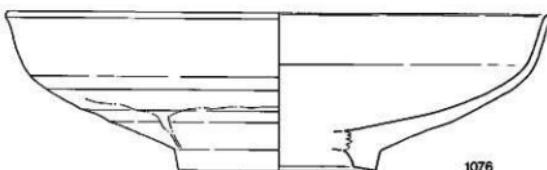
1073



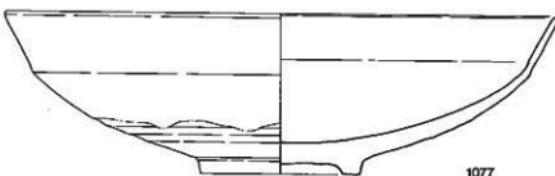
1074



1075



1076



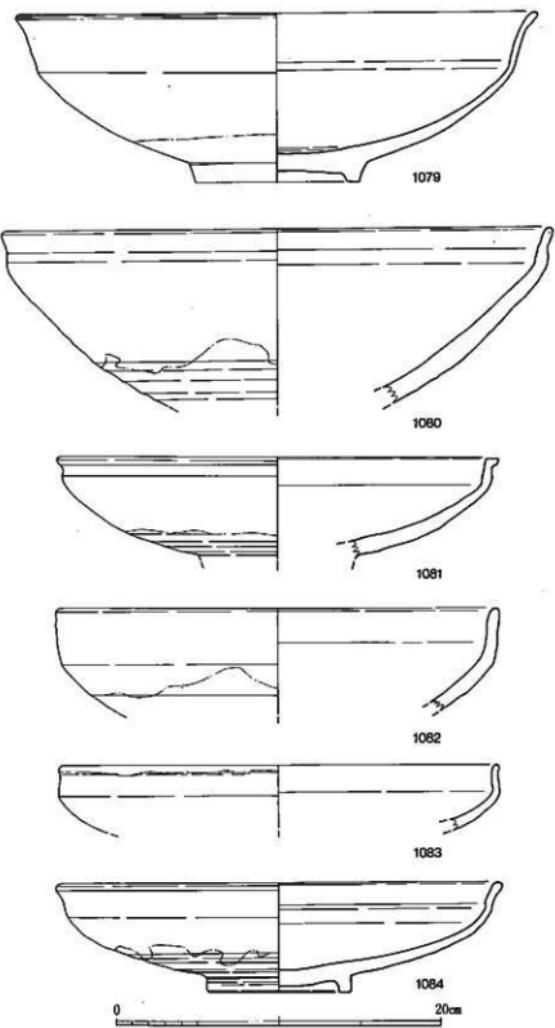
1077



1078

20cm

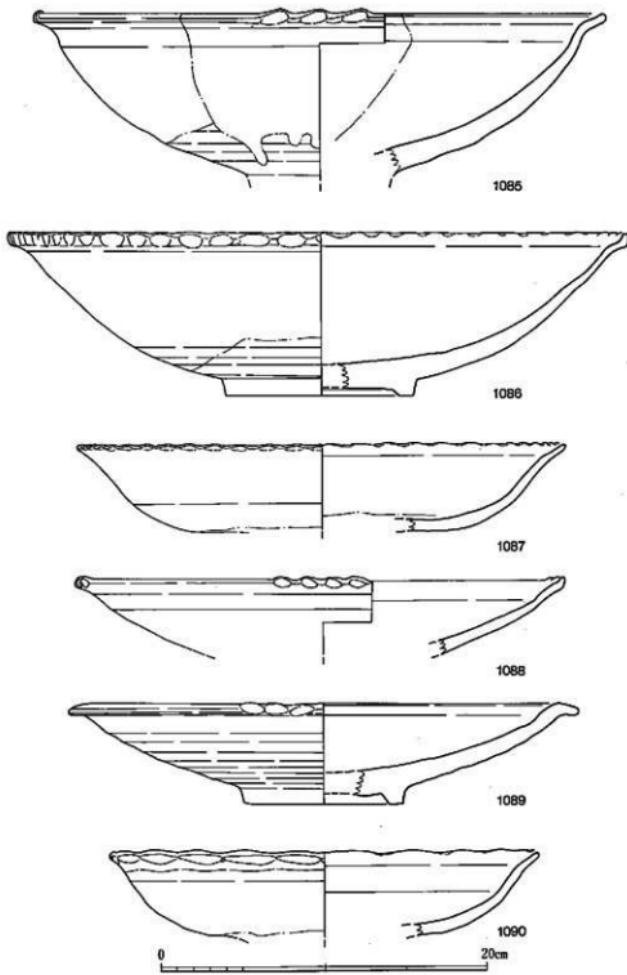
第175図 包含層出土遺物（皿）実測図① (1/3)



第176図 包含層出土遺物（皿）実測図② (1/3)

のと断面が匙状に若干盛むものに分けられる。縁付形でも1074や1109のように縁の部分が広いものは少ない。

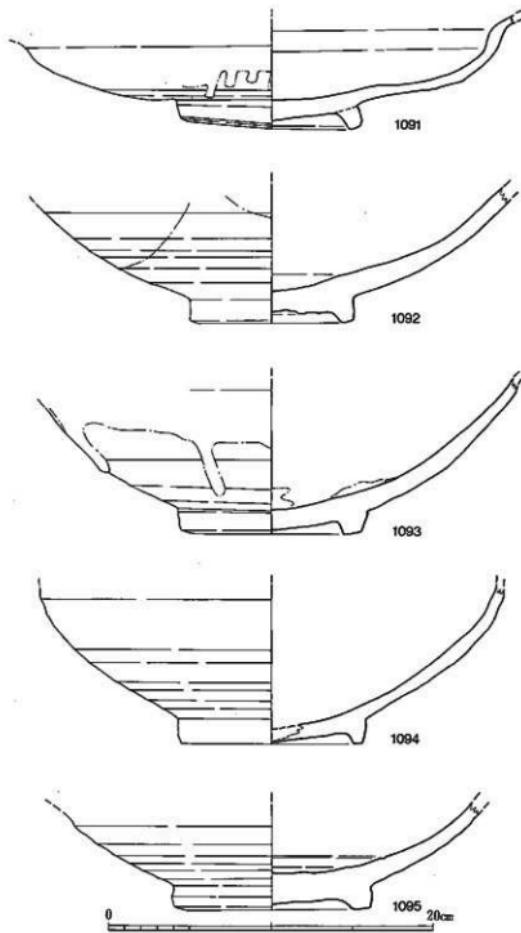
1085から1090は縁なぶりを施す。1086・1087のように小刻みに施すものから、1090のように幅広



第177図 包含層出土遺物（皿）実測図⑬ (1/3)

くつくりだすものなど変化に富む。縁なぶりは全周するもの以外に、1085・1088・1089のように3~4個つまみだし、それをおそらく周の四方に設けると考えられるものもある。なお、1085は乳頭色蓋灰釉と褐色鉛釉の掛け分けである。

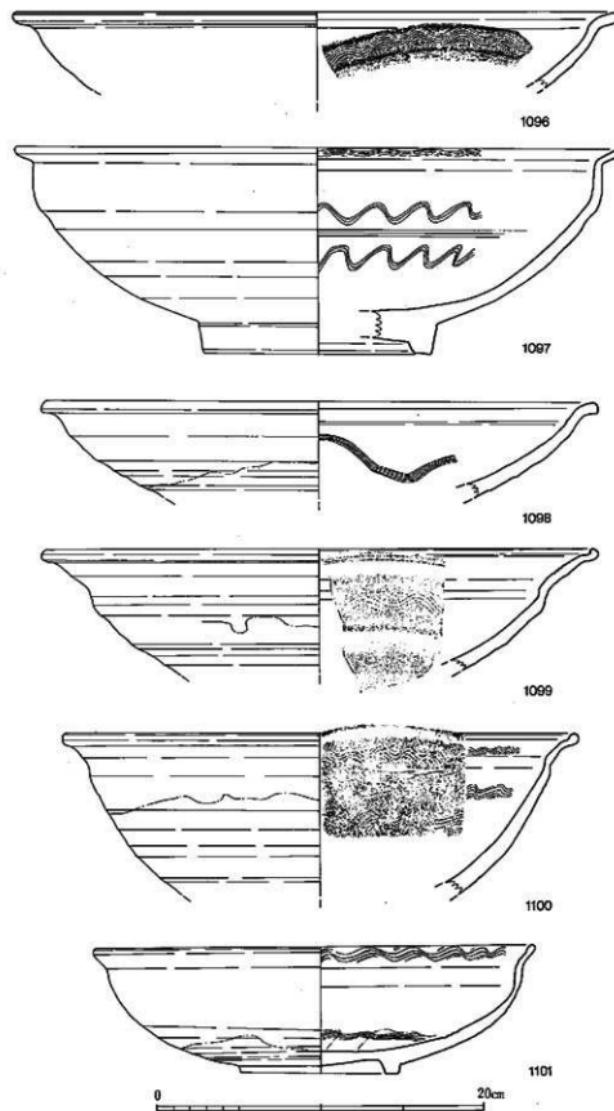
縁付形以外には縁立形がある。口縁端部をそのまま丸く取めるものと外面に短く折りだすものが



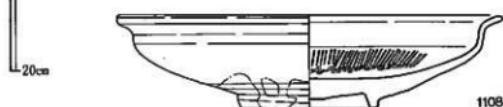
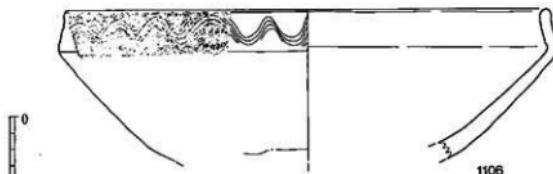
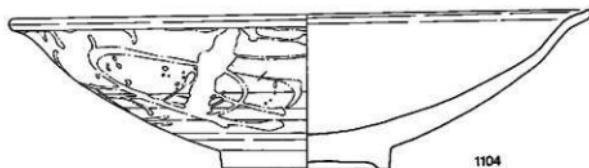
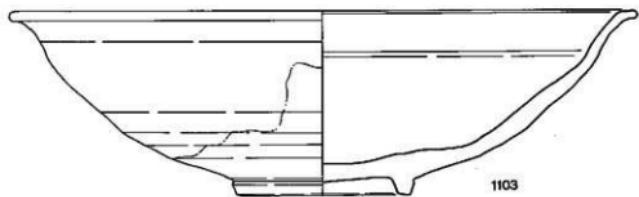
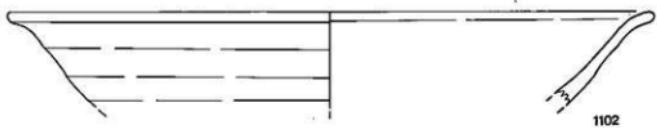
第178図 包含層出土遺物(皿)実測図⑩(1/3)

ある。縁付形と同様にさらに細かい分類も可能であるが、現況では細分されすぎる嫌いがあるので、資料の増加を待って再検討する余地が残される。

釉は褐色を呈する鉛釉及び乳濁色を呈する薺灰釉で大半を占める。1094は土灰釉で透明度の高いオリーブ緑色を呈するが、このタイプの釉は非常に少ない。施釉技法には浸し掛けが多いが、皿の四方を浸することで見込みが露胎或いは十字に釉が流れるものも少數に見られる。1104・1105はイッチン掛けであるが、全体に占める割合はごく僅かである。見込みに釉剥ぎを施すものが多く、大抵の場



第179図 包含層出土遺物（皿）実測図⑩（1/3）



第180図 包含層出土遺物（皿）実測図⑨ (1/3)

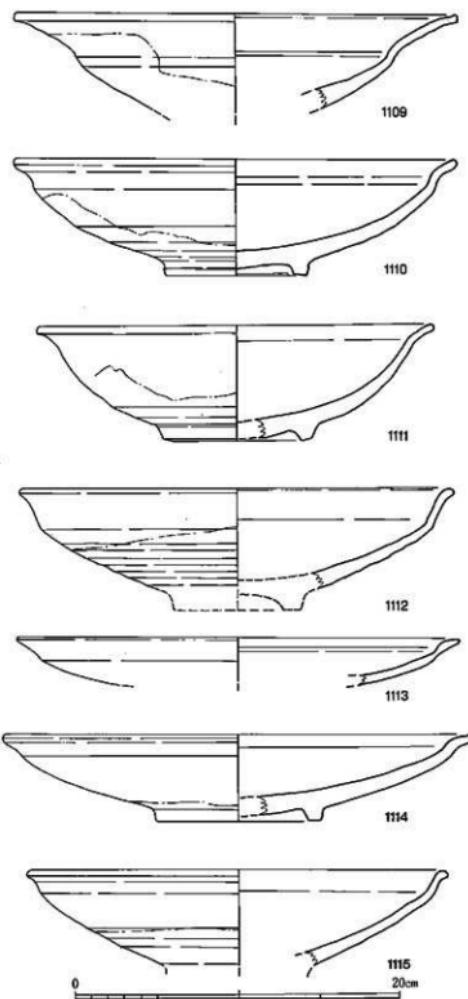
合方形に4ヶ所剥ぎ取られ、それに対応して胎土目跡が残る。

無文のものその他に文様を入れるものも少なくない。文様の種類は、波状文が多く、彫文がそれに次ぐ。

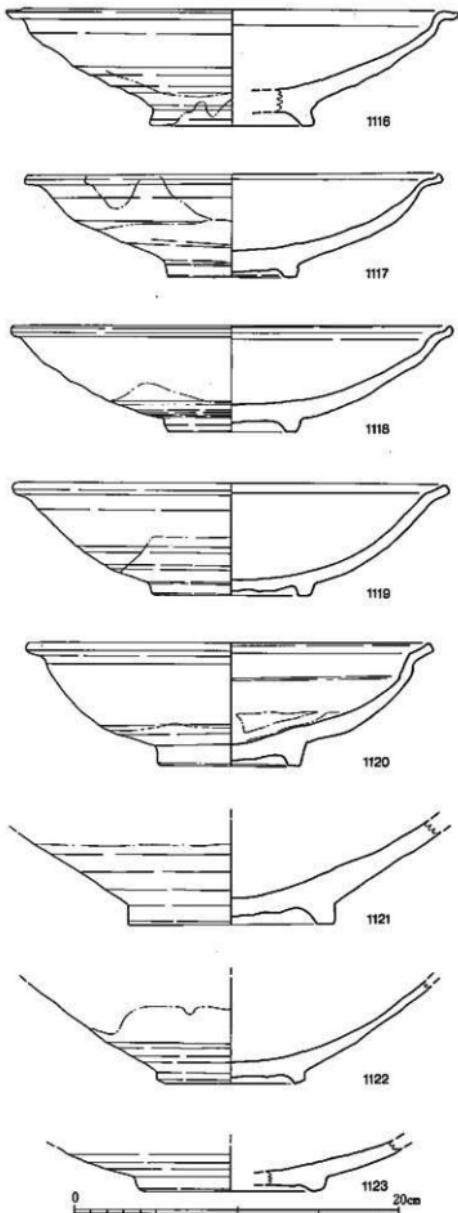
波状文については、縁付形に関して言えば口縁部上面及び見込に周に沿って巡らせるものが多い。或いは口縁部の屈曲部よりいくら内側に入った部位にも施されるものがある。なお、波状文を施すものには口縁端部をつまみ上げるものが多くみられる。縁立形に関しては口縁部側面に施すものが多い。1178は縁立形の大皿の見込に波状文を巡らせるものであるが、この形態は少ない。

彫文については縁付形の口縁部上面、或いは底面全体に施されるものが多い。縁立形に彫文はみられないようである。題材は口縁部上面には直線のみ、或いは直線と曲線を組み合わせたものがみられる。見込には木の葉文を描くものが多い。木の葉文には1155・1189のように細い彫りで具体的な文様を描くものと、1156・1157・1161～1163・1169・1170・1138～1142のように太い彫りで抽象的な円弧文を描くものの二者がある。数量的には後者が圧倒的に多い。

1167は特殊な例で直線的に広がる体部の外面に放射状に彫文を入れる。淡褐色を呈する胎釉を内面には厚く掛け、外面はイッキン掛けとする。



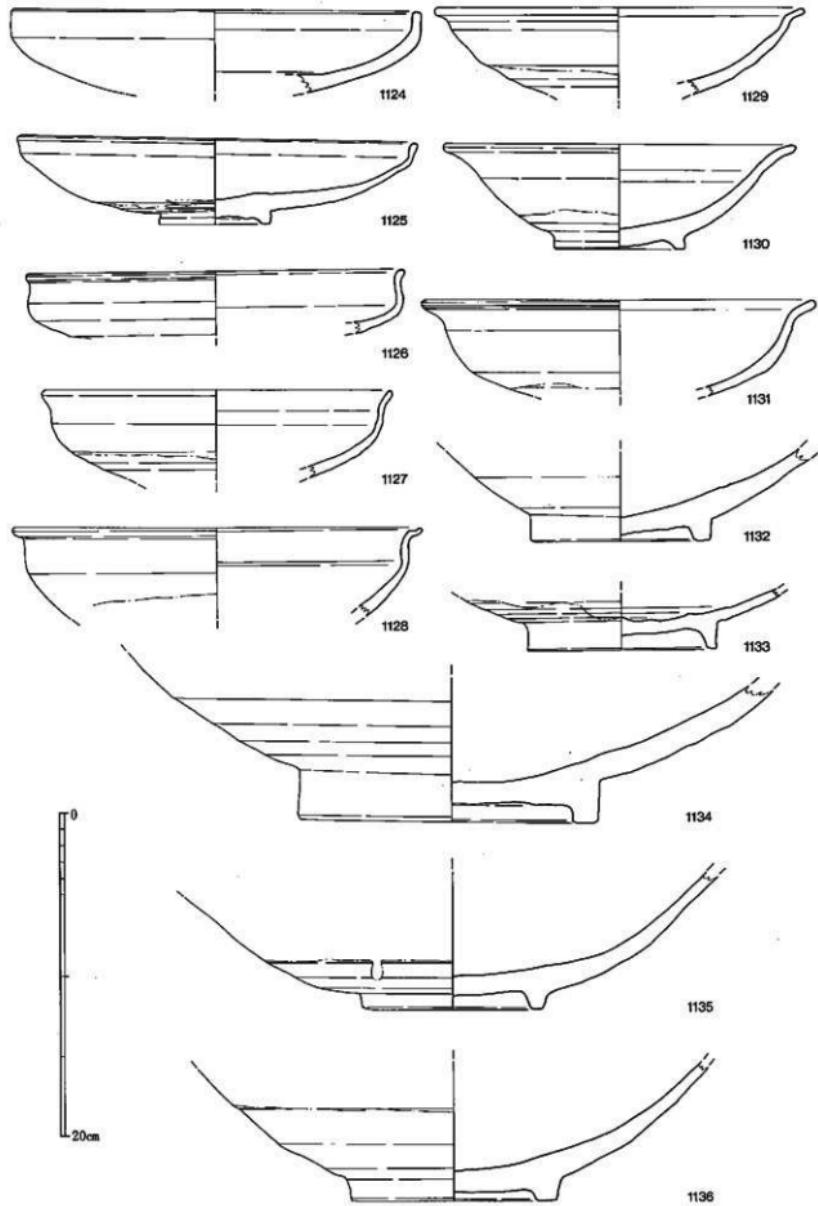
第181図 包含層出土遺物（Ⅲ）実測図②（1/3）



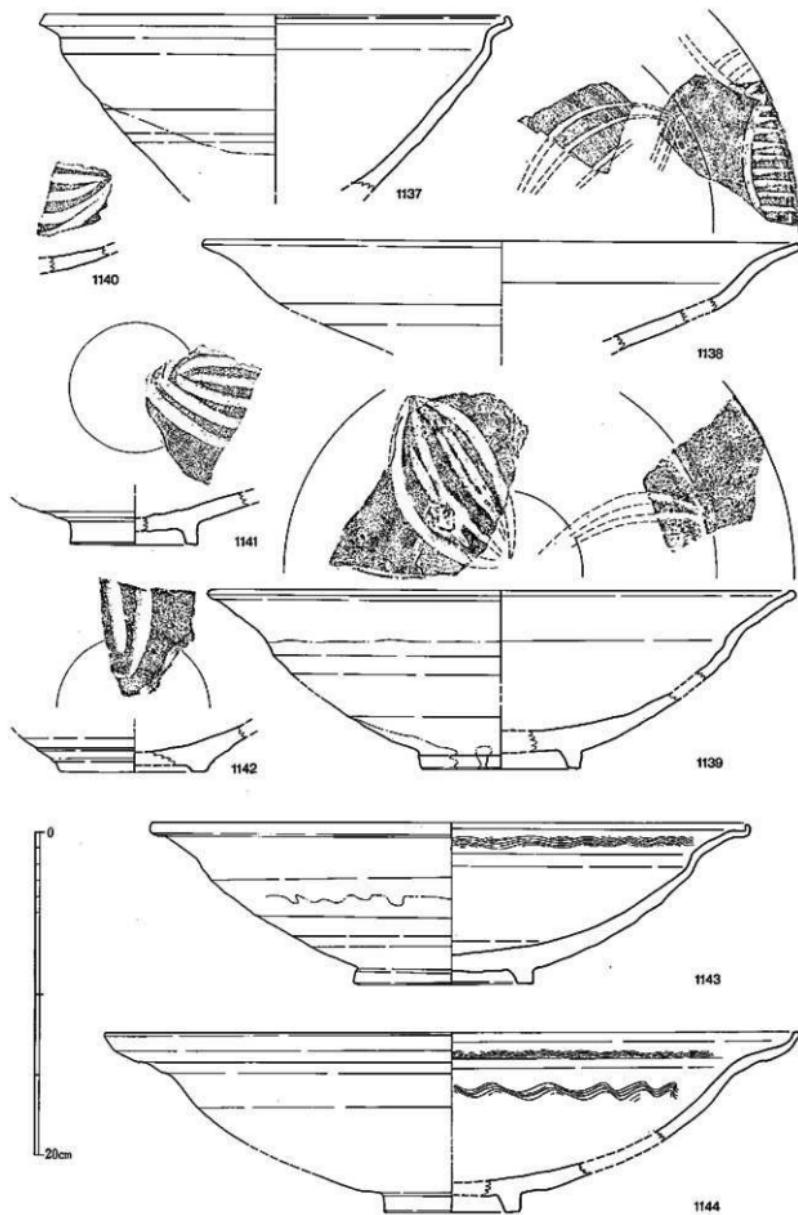
その他に櫛描により直線・曲線を描くものがある。1149と1150は同一個体。擡目状の櫛描文様を入れる。1151にも類例が見られるが、櫛描文は比較的少ない部類に入る。1108は見込に波状文を巡らせ、その外側に放射線状に櫛描文を施す。透明度の高い灰釉に乳湯色の薬灰釉を掛ける二重掛けである。釉が厚くかかるために文様の大部分は隠れている状態である。1175は見込全体に粗いケズリを施しさらに彫文をいれることにより装飾するものである。

特殊なものとして菊花文の押印による装飾を有するものがある。器種は中皿程度のものにあり、向付として使用されたものであろう。1172は菊花文の変形で扇形の押印。脚は高台をつくりらず、円柱形の脚が3ヶ所に付くと見られる。接合部周辺には沈線により取付部の目印が残されている。素焼きである。1173は浅い体部に短く直立する口縁部を有する皿で内面に菊花文を連続させる。飴釉を厚く掛け、褐色～濃青色に発色する。1177は薄くて高い特殊な高台がつくものである。体部が直立気味に延びるようであり、皿ではなく別の器種かもしれない。素焼きである。1180も特異な形態の皿状の器種である。平坦に近い体部に断面方形の口縁部を作りつけた形態をなす。体部の外面に貝目跡が付き、盆のように使用されたものかもしれない。飴釉を掛け褐色を呈する。

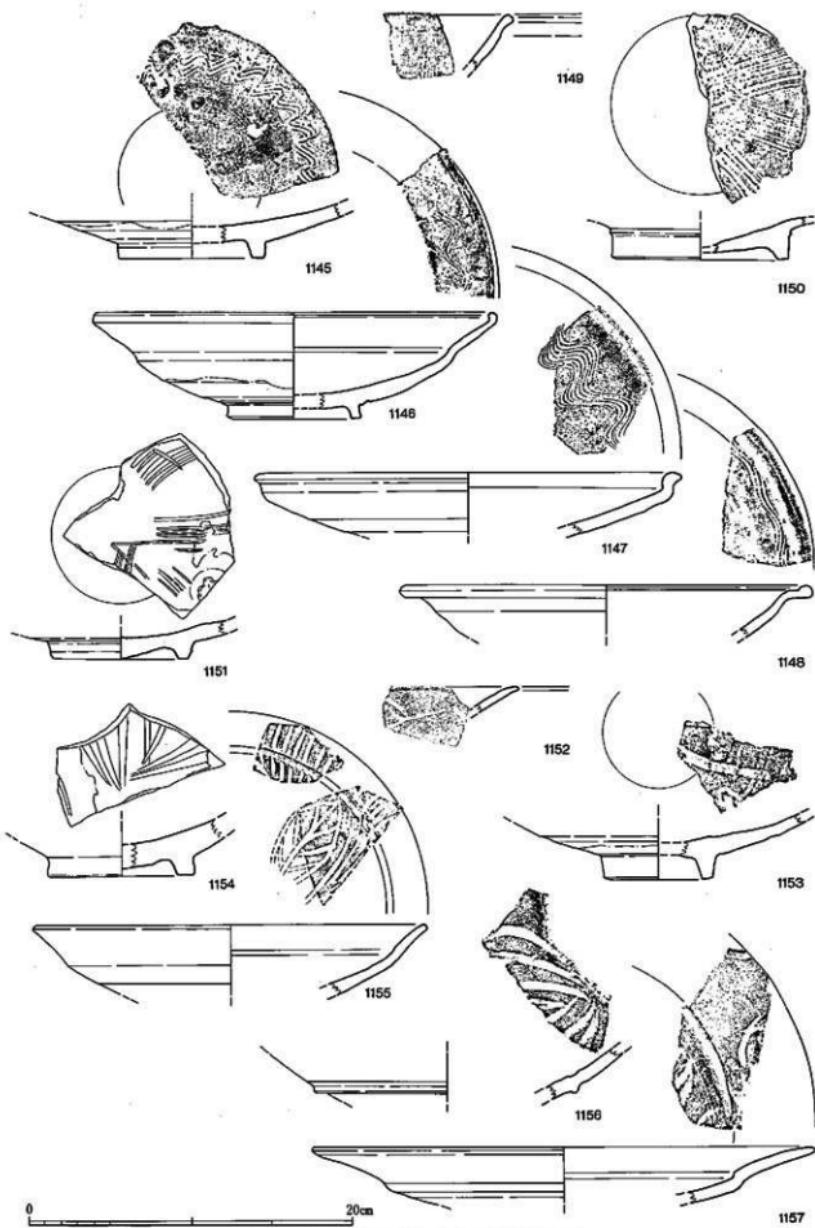
第182図 包含層出土遺物（皿）実測図② (1/3)



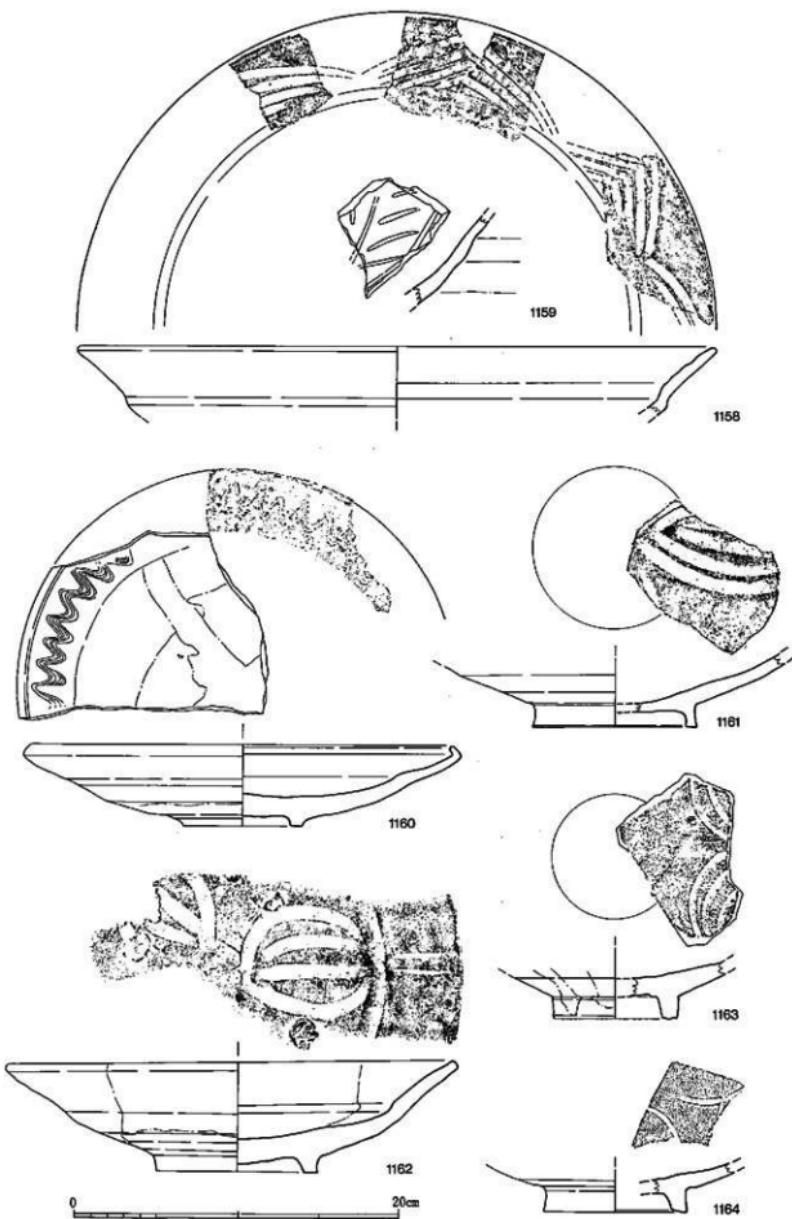
第183図 包含層出土遺物(Ⅲ) 実測図⑩ (1/3)



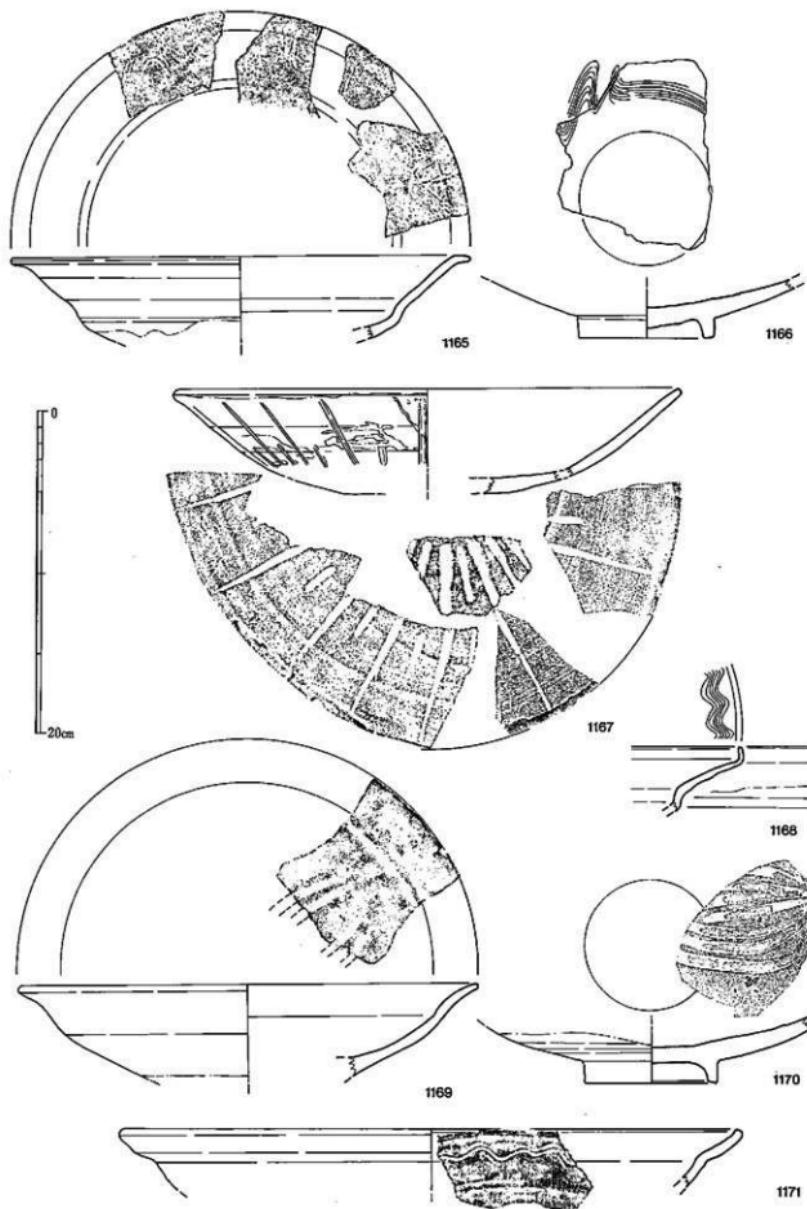
第184図 包含層出土遺物（皿）実測図② (1/3)



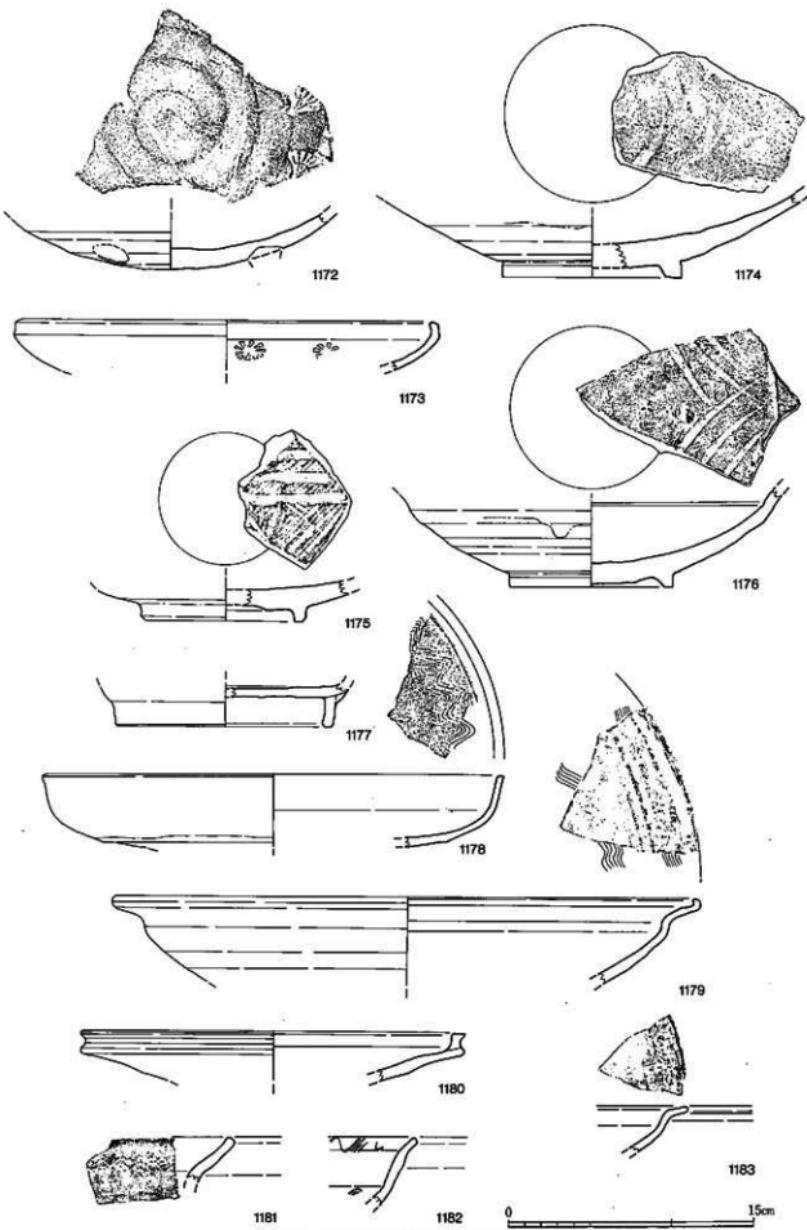
第185図 包含層出土遺物(皿) 斜測図(1/3)



第186図 包含層出土遺物(Ⅲ) 夾湖図② (1/3)



第187圖 包含層出土遺物（三）尖測圖◎（1/3）



第188圖 包含層出土遺物（皿）尖測圖◎ (1/3)

### 鉢（第189・190図）

鉢形の陶器を一括する。大皿との区別が曖昧となるが、ある程度の深さをもち高台を有さないものを鉢として扱った。しかしこのようにして分類したとしても、駿類を調理するようなこね鉢から、茶の湯の席で用いる水盆・手水鉢も同じ体として扱うことになってしまう点は注意すべきである。

1184は素焼きのこね鉢。大形で底径40cmを測り、底部から口縁部にかけて直線的に大きく開く形態を探る。口縁部は内側に折り込んで断面長方形に整形し、側面に沈線を一条巡らせる。内外面とも粗いナデ調整。素焼きである。1185・1186は素焼きのこね鉢片。口縁部は内側へ折り込んで整形する。1185の体部は叩き調整で内面には青海波文がナデ消されずに一部に残る。1186の体部外面はケズリにより調整される。

1188は三脚がつく鉢。緩やかに外反する体部は口縁部で内側に折り込まれ、口縁部を幅広く肥厚させる。口縁端部は上方へ軽くつまみ上げられる。内面は櫛状工具で横方向に調整しており、ハケメ状の工具痕を残す。外面はナデ調整で、底部端はケズリにより面取りされる。脚は欠損し、接合痕のみ残る。接合部には刻みが入れられ接着を良くするように工夫される。剝離痕の形状から断面椭円形の舌状脚が付くものと推定される。釉は鉛釉で褐色に発色。内面は口縁部から2/3ほど掛けられ、内底面とその周辺は露体。外底面はイッチン掛けをする。

1189は外反する口縁部をもつもので、体部外面には多条の沈線を巡らせる。内外面に釉をイッチン掛けするが発色しない。

1190は鉢の底部であろう。残存部上端で屈曲するが直立する体部がつづくものとみられる。全体に粗い調整で外面と底面には指圧痕が残される。内面に施釉されるが未発色。胸部から底部に続く部分のみケズリ調整を加える。

1191は直角近く外反させる口縁部を有する鉢で、端部はさらに軽くつまみ上げる形状。二段重ねの円形浮文が残るが把手の付根部につけられるものであろう。藁灰釉を掛け乳濁色となるが発色は良くない。1192は内湾する体部を有する鉢の口縁部。端部は一旦強く外反させ内側に折り込む。把手の付根が残り、二段重ねの円形浮文が残る。本来は付根の周りに3個つけられていたものであろう。褐色始釉の上から藁灰釉を掛け、藁灰釉は濃青色～乳白色の海鼠釉となる。

1193は焼締の鉢の底部。直線的に大きく開く形態をなす。外面は残存部で4条の沈線が引かれる。底部付近には幾何学文の叩き痕を残す。破片の上端に部分的に粗いナデがみられるが、把手を付けるときのナデの一部であろうか。内面はナデ調整で、波状文が巡らされる。

1194は桶形の鉢。やや内湾する形態で、口縁部は一旦強く外反させ、内側へ折り込んで整形する。外面はナデ調整で6条の沈線が引かれる。断面円形の把手が胸部最大径付近につく。内面は比較的輪権目が強く、釉が厚く入ることにより沈線状に発色する。褐色の鉛釉を掛け、口縁部及び外底面は露体。

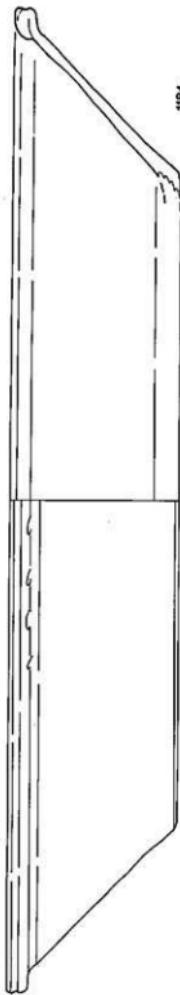
1195は浅い盆状の形態をなし、外面にピッチの長い波状文を二段に渡り巡らせる。始釉を掛け、暗褐色を呈する。

1196は直線的に開く深い体部を有する形態。口縁部は外反させた後、内側に折り込み整形する。始釉を掛け、褐色に発色する。

1197・1198は鉢かどうかは疑問を残すものであるが、分類が困難であるためにここに含める。

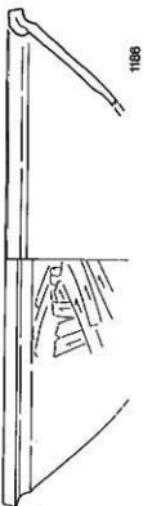
1197は直線的に開く体部をもつ口縁部小片で、敢えて径を出せば口径19cm程度となる。口縁端部は

1184



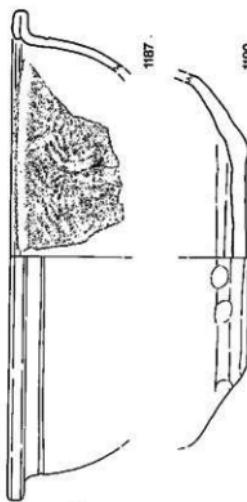
1184.

1186



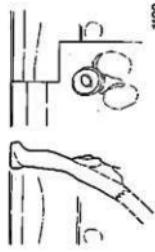
1186.

1187.



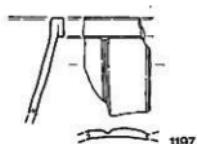
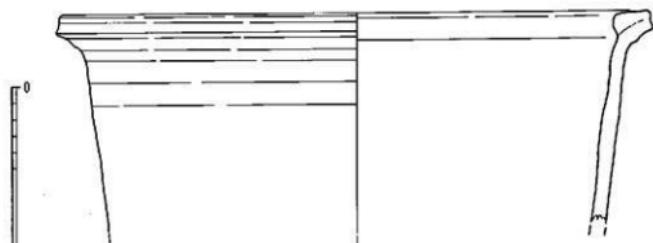
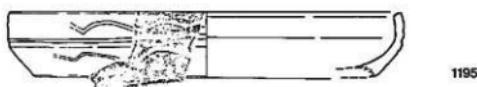
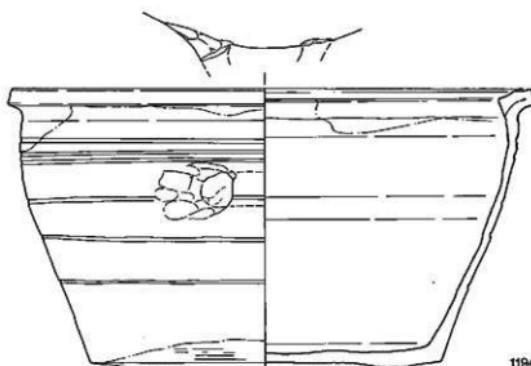
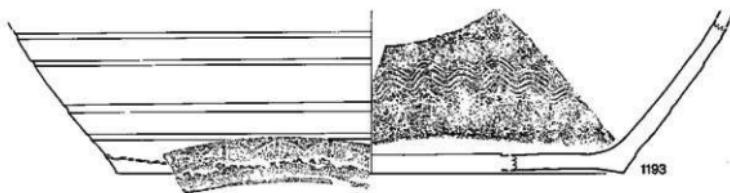
1187.

1189



1189.

第189圖 包含層出土物（鉢）実測図① (1/3)



第190図 包含層出土遺物（鉢）尖測図②（1/3）

外側へ折り返し、断面長方形に整形する。体部外面には縦方向に深い沈線を連続させるようである。  
1198は体部中段に断面鉤形の突帯をもつもの。外面には備状工具によりカキメ調整が入れられる。  
1197・1198とも鉛釉が施釉される。

#### 甕（第191～199図）

今回の発掘調査では甕片は多数出土するものの、副部片が多く、復元が困難な場合が少なくない。したがって実測可能なものは少なくなってしまうのであるが、本来はより多くの遺物がある点は留意しておくべきであろう。ただし全般的に見て、いわゆる近世の大甕と言って思い浮かべるような巨大なものは少なく、器高が40cm程度に収まるものが大部分を占める。

基本的な分類は、口縁部形態としては内側に折り込むタイプと、外側に折り返すタイプの二者がある。他には頸部のくびれ方、頸部から口縁部にかけての外反度などが分類基準となろう。

成形・調整はほぼ共通しているようである。胴部は叩き調整による。したがって外面には叩き痕が、内面には当て具痕が残される。外面の叩き痕は平行線として残る場合が多いが、たいていの場合ナデ消されていて観察が困難な場合が多い。内面の当て具痕は通常青海波文として現れる。

内外面共に施釉される場合が多いが、基本的に鉛釉が用いられ、褐色に発色する。釉が掛けられると特に内面の青海波文の凹部に入り込み、濃く発色する。青海波文はよく見ても拓本をとればまったく文様がでないという陶片は多い。例は少ないがイッチン掛けを行うものも見られる（1207・1229）。

1199から1208・1220は口縁部を内側に折り込むタイプ。口縁部上面は水平に仕上げるのが基本であるが、1206は内側に傾斜する。全体にややすんぐりした器形である。1199は胴部最大径よりもやや上位に沈線を巡らせ、その部分に新土紐を押し付けて作られた花文がある。おそらく対称の位置に計2ヶ所貼り付けられたものであろう。1201は肩部に波状文が刻まれる。やや頸部が長く壺的である。1208は胴部が焼成時に大きく爆ぜて長い亀裂が入ったもの。胴部最大径とその上位に細い沈線を螺旋状に描く。

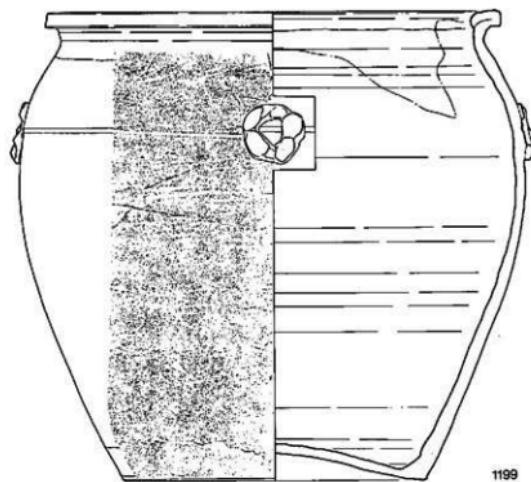
1209は素焼きの大甕。口縁部は折り返した後に更に補強・誇張をして大きく作る。

1210から1219、1221から1226は口縁部を外側へ折り返すタイプ。小振りの甕が多く、片口と共通する形態であるために、破片だけでは片口との区別がつかない場合がある。1219は強く内傾する口縁部の上面平坦部に多条の段をつくり装飾的にしたものである。

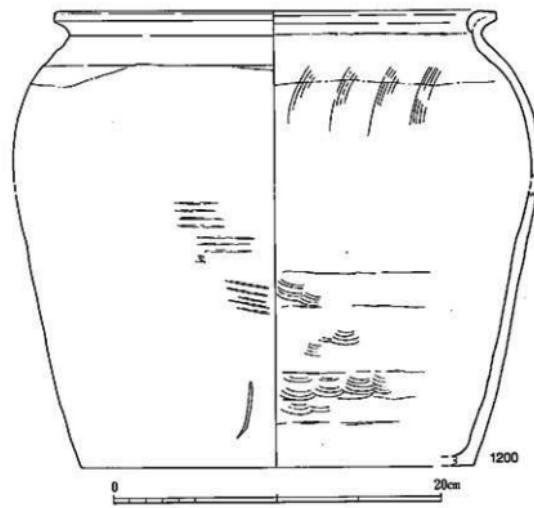
1227から1231は口縁端部を丸く仕上げ、頸部をもつもので、壺に分類されよう。1227と1228は大形の把手が統く。1227は断面長方形の把手の付根に径1.5cmのボタン状の円形浮文が貼り付けられる。胴部最大径よりやや上位に断面三角形の突帯を巡らせる。1228は肩部に波状文と沈線によって装飾を加える。

1229と1231は直立する頸部をもち、1231は細い。茶壺であろうか。1248は胴部最大径に断面三角形の突帯をめぐらせる。器壁は薄く4mm程度である。

1249から1251は直立する体部をもつもので、体部が深かったために鉢ではなくここで扱った。いずれも鉛釉を掛け、輪轍目或いは沈線に釉が深く入り色調に変化を加えている。

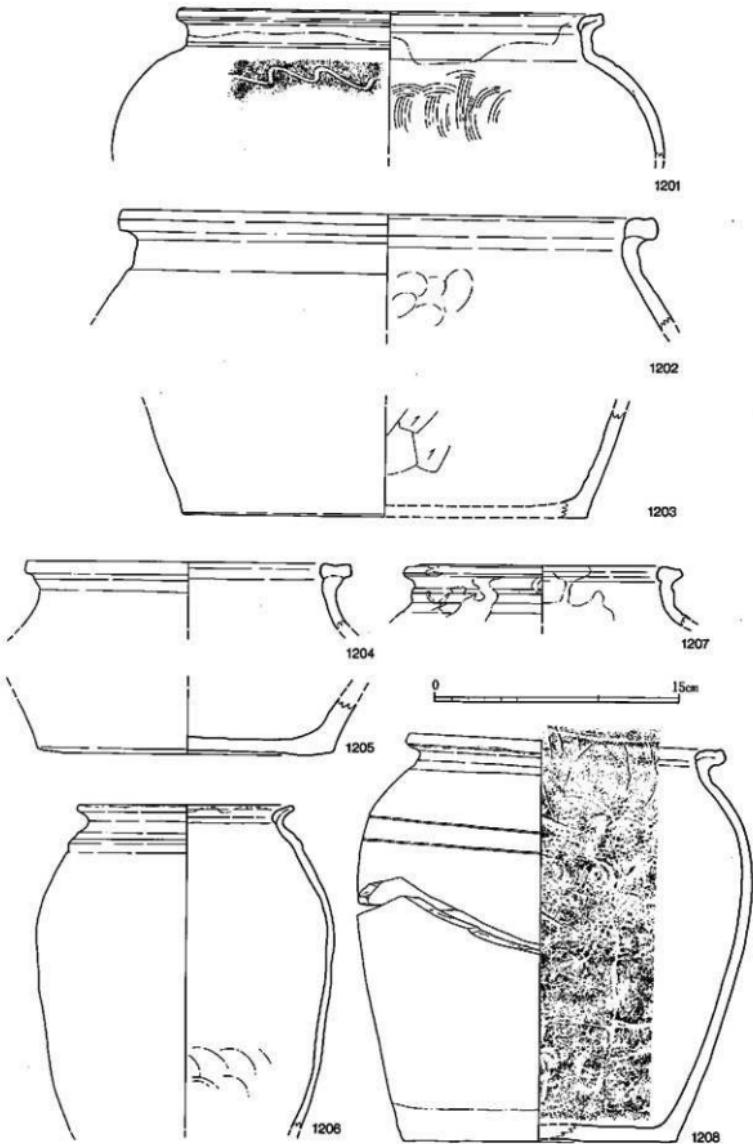


1199

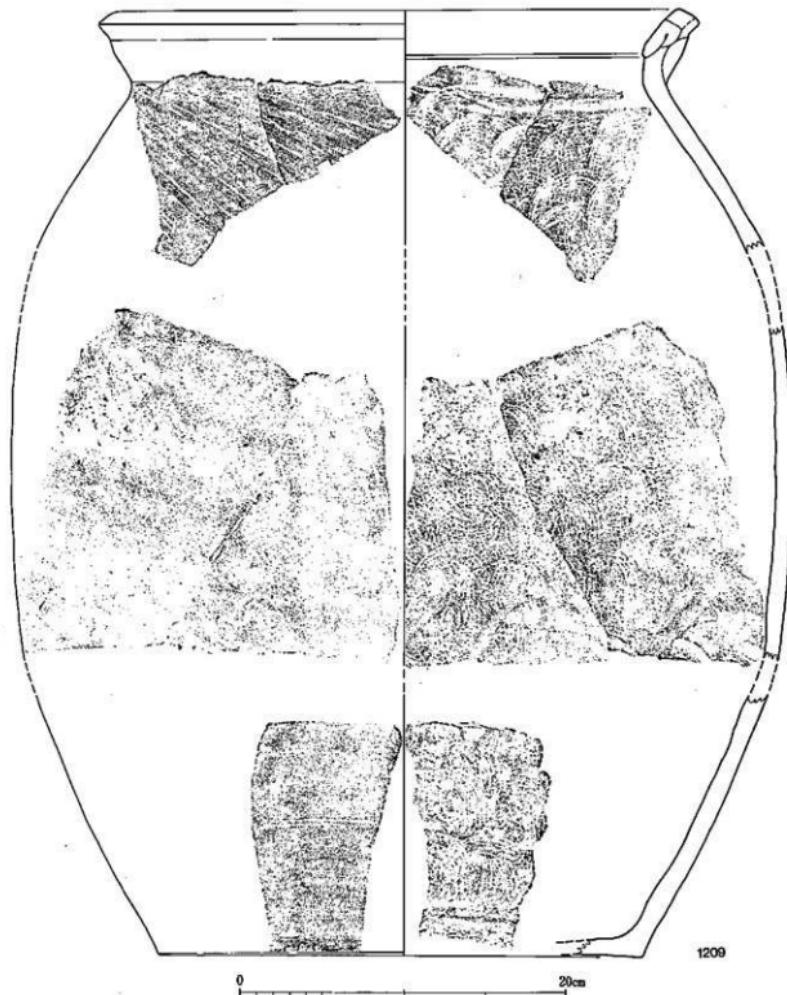


1200

第191図 包含層出土遺物（斐）実測図①（1/3）



第192図 包含層出土遺物（甕）実測図② (1/3)

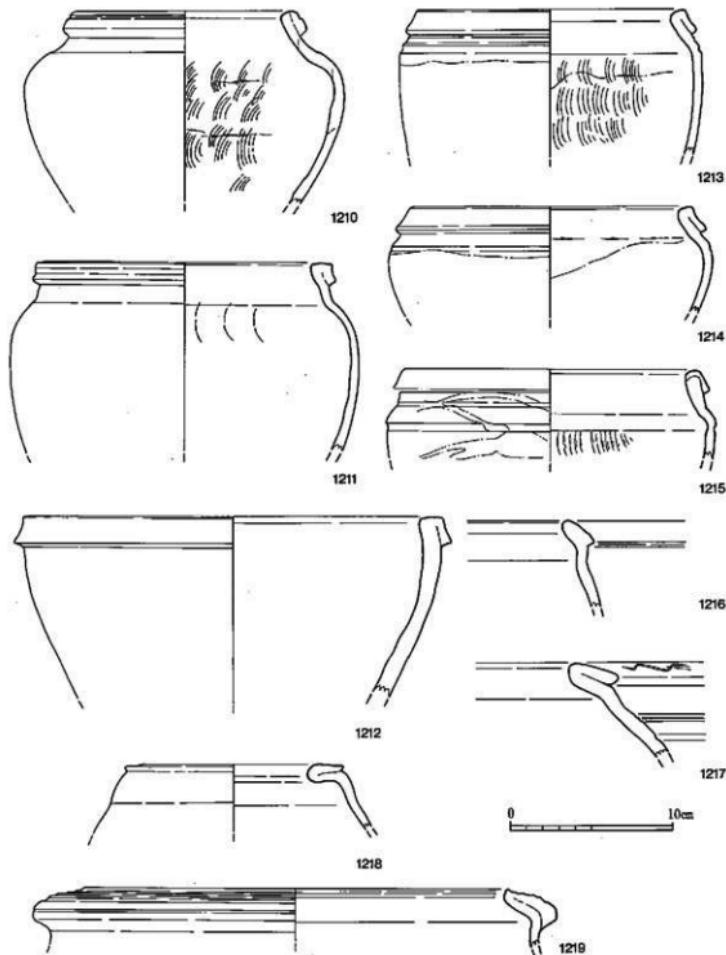


第193図 包含層出土遺物（甌）実測図③（1/3）

甌（第200・201図）

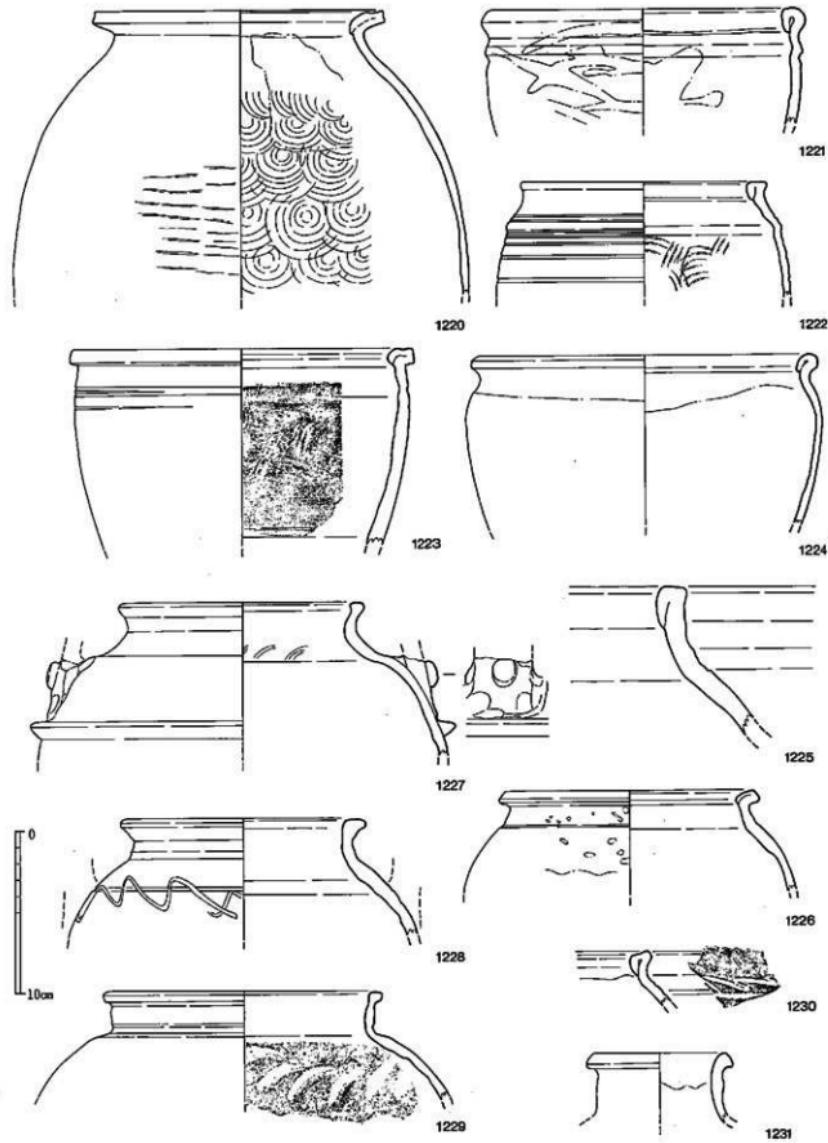
底部に穿孔があるものを甌としたが、1252のように極めて大形のものもあり、また全体につくりが丁寧なことから別の用途を考える必要もあるう。

1252は大形のもので、復元口径は32.4cm、腹部最大径は復元で52.4cmを測る。口縁部はL字形に

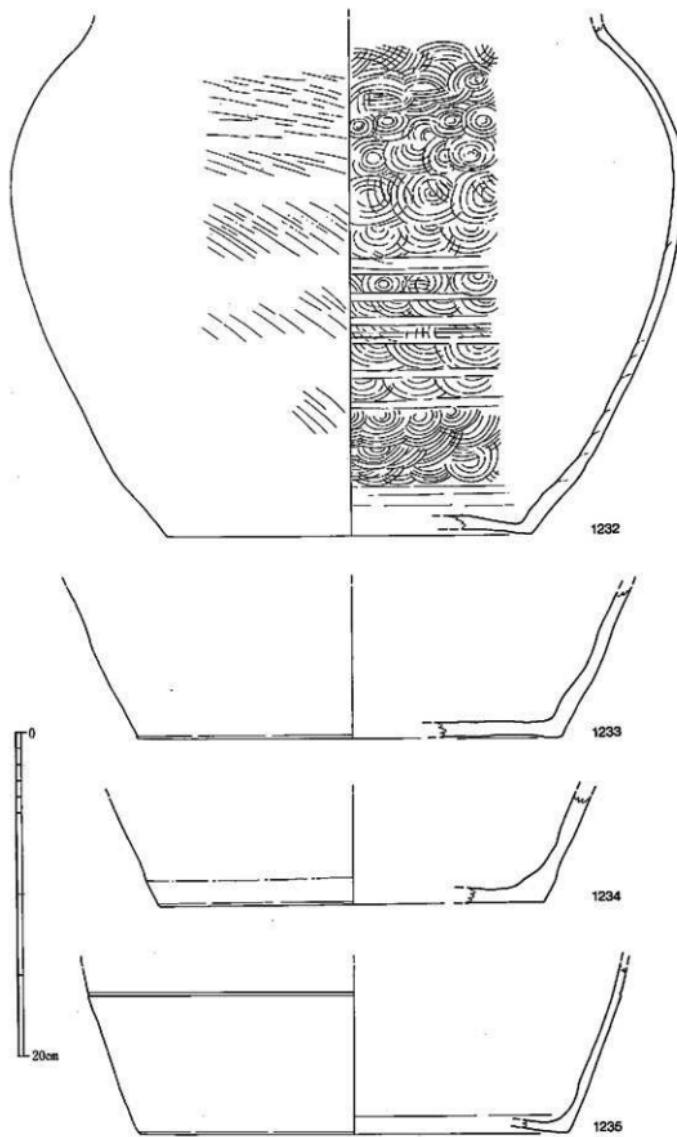


第194図 包含層出土遺物(甕)実測図④ (1/3)

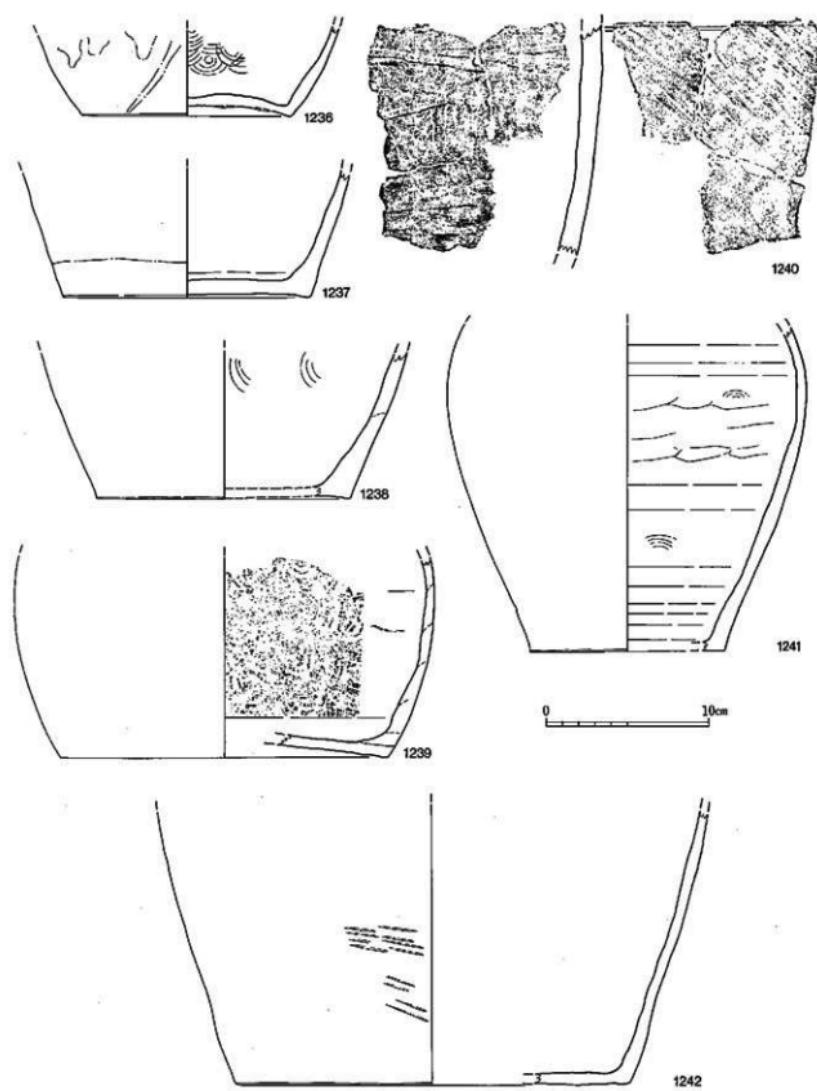
外折させ、内面に粘土紐を貼り付けて口縁部上面をやや壅ませる程度にまで肥厚させる。短い頸部を有する。肩部の最上位に菊花文の押印を約3cm間隔で巡らせる。その下位に網状突帯を巡らせ、更に胴部最大径付近にも同様の網状突帯を巡らせる。この網状突帯は第204図に挙げるものと比べてより大形で立体感がある。体部は叩き調整であり、内面には当て具痕である青海波文が明瞭に残る。この規則的に連続する青海波文は装飾的効果も高いものと思われる。肩部の菊花文や内面の青



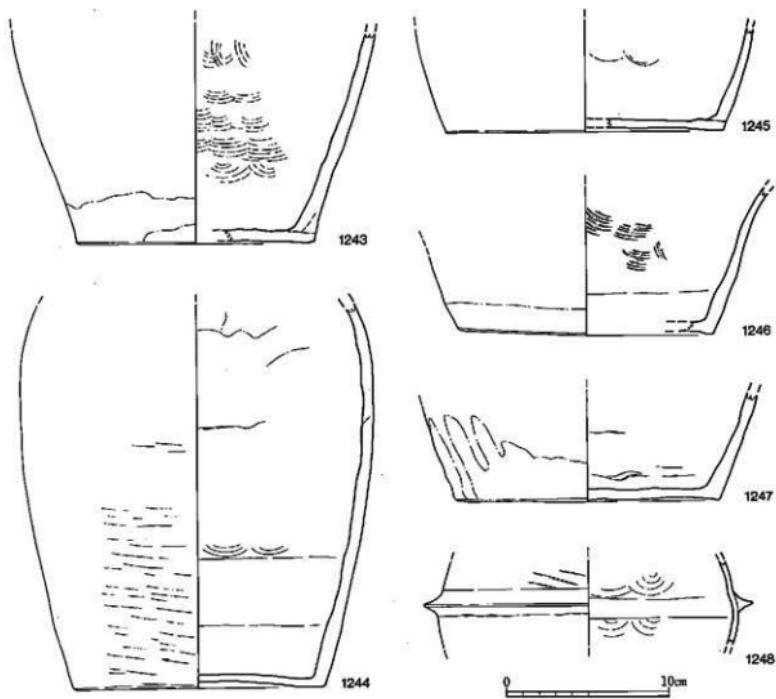
第195図 包含層出土遺物（甕）実測図⑤（1/3）



第196図 包含層出土遺物（甕）実測図⑥ (1/3)



第197図 包含層出土遺物（焼）夾洞⑦（1/3）

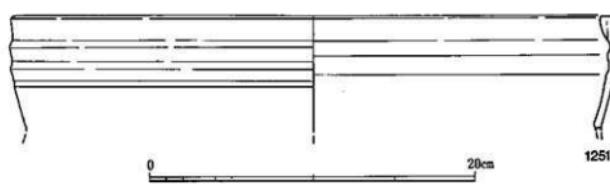
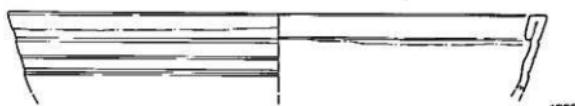
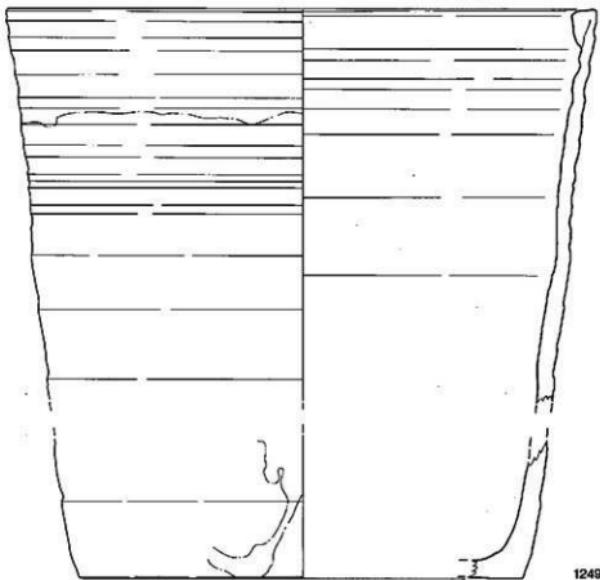


第196図 包含層出土遺物(斐)実測図⑥(1/3)

海波文には厚く釉が掛けられているために表面は平坦となり、拓本では表現できないほどである。同一固体と考えられる底部には穿孔が認められる。穿孔の形状は円形、或いは隅九方形とみられるが、残存度が悪く具体的には復元しがたい。頭部から肩部に掛けては補修痕が認められる。これはひびが入ったところに粘土帯を貼り付けたものである。緑色を呈する灰釉の上から乳濁色を呈する藁灰釉を掛ける掛け分けである。

1253から1257は出土地点も近く同一固体が含まれる可能性を残す他の底部片である。底部の穿孔の形状は大型の円形と小形の円形を組み合わせたものである。体部は開きながら直線的或いは緩やかに内湾しながら延びるものである。1255は底部角がケズリによって面取りされている。1257は底面中央に円形穿孔をおき、その周囲に6個ほどの円形穿孔が巡るようである。鉛釉が掛けられ、褐色に発色する。

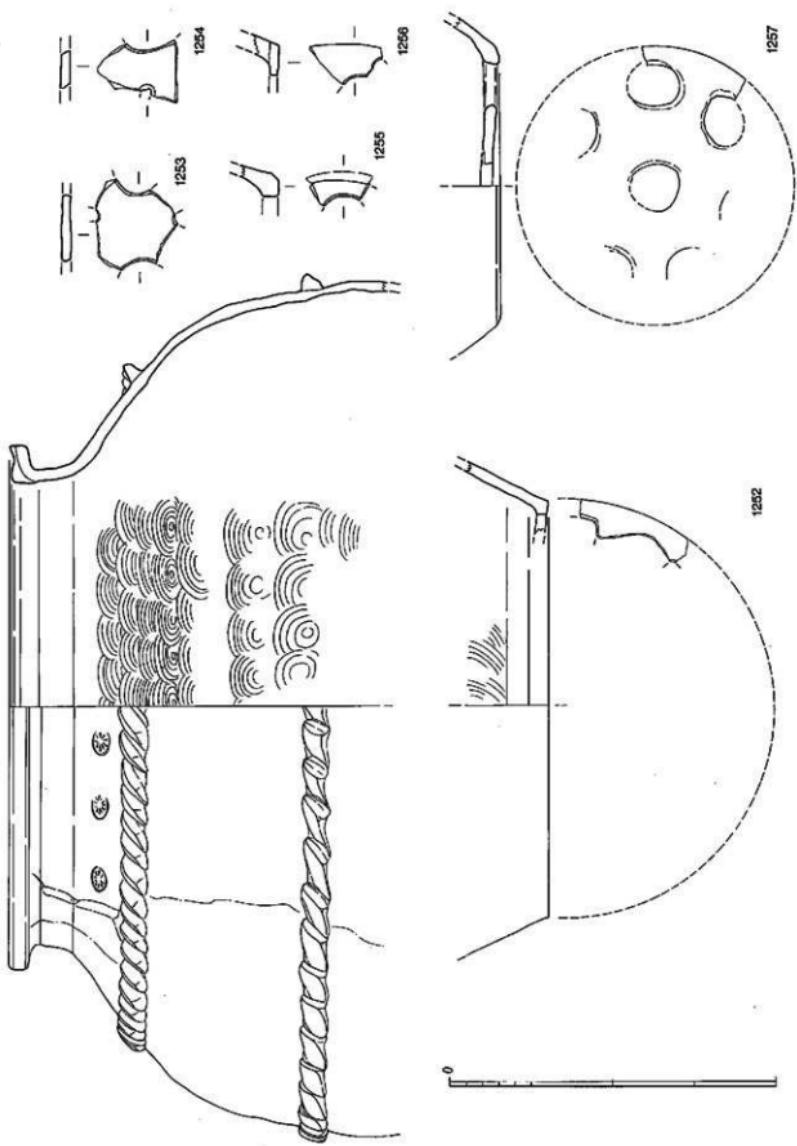
1258は接合しない同一個体片が3点あるもので、沈線の位置などを参考に復元実測したものである。口縁部は一旦強く外反させ端部を内側へ折り込んで密着させたものである。口縁部直下の外面は強い横ナデにより凹帯が巡る。胴部最大径は上位にあり、そこから僅かに弧を描きながら底部に

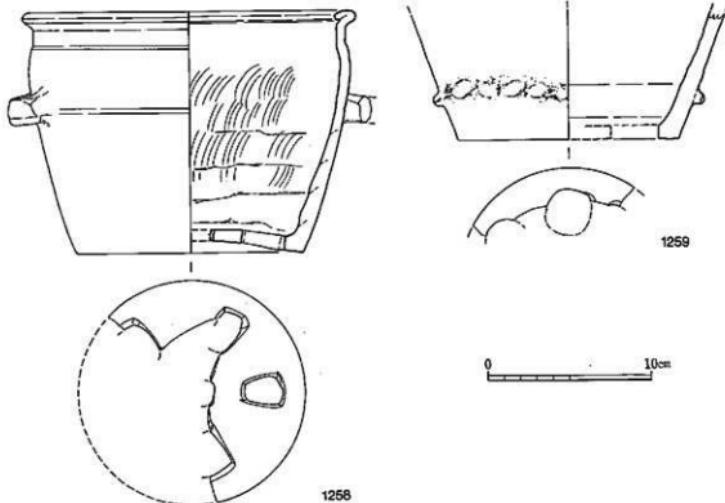


第199図 包含層出土遺物（甕）実測図① (1/3)

向かって径を減じる形態である。胴部の中位よりやや上に横方向に把手を設ける。把手の断面形状は長楕円形である。対向する位置に2ヶ所付けられたものであろう。把手の高さで沈線を1条巡らせる。底面には丸みを帯びる台形の穿孔がある。穿孔は鋭い工具で開けられる。中央には円形の穿孔がある。底部は約1/2周の残存度であるが、底面の周囲の穿孔は5ヶ所とみられる。体部は叩き

第200圖 包含層山土遺物(續) 實測圖① (1/3)





第201図 包含層出土遺物（瓶）実測図② (1/3)

調整であり、内面には当て具痕である青海波文を残す。底部付近の内面には粘土紐の接合痕を顕著に残している。内面を中心とし薄く鉄釉を掛けるがほとんど発色しない。外面には一部にイッチン掛けされるようである。焼締により硬質である。

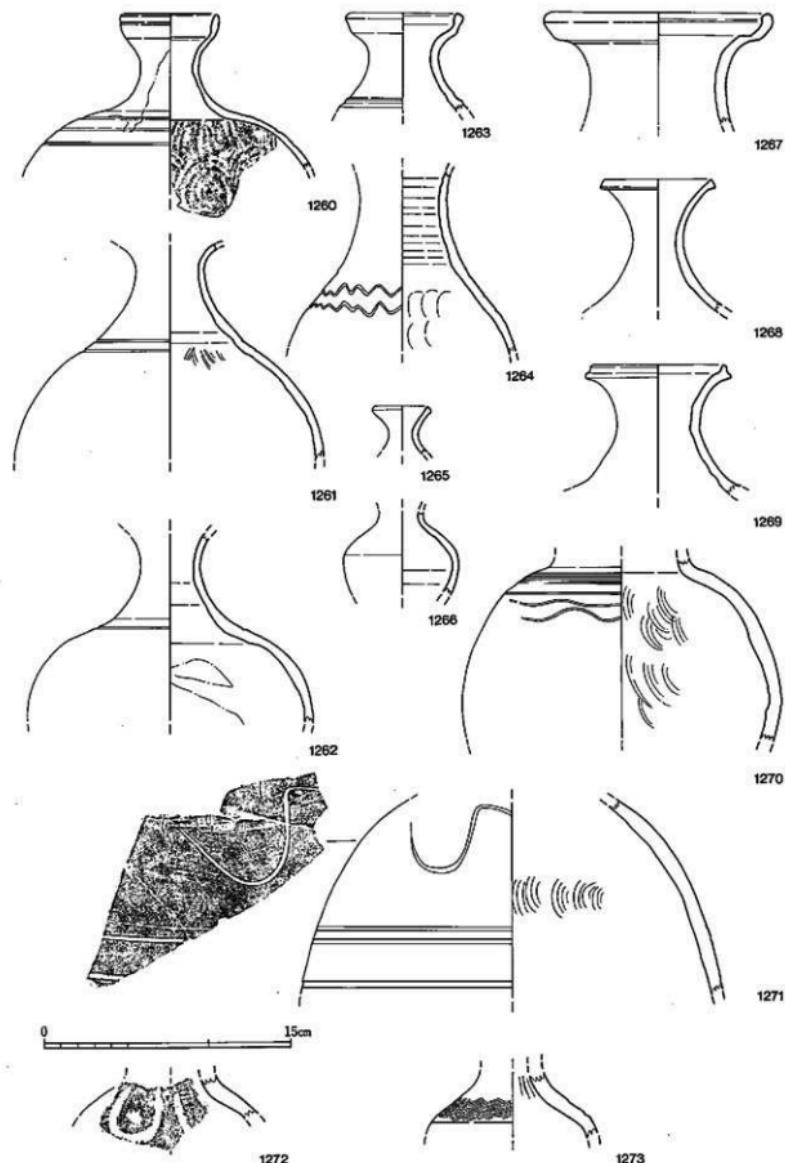
1259は直線的に大きく開く体部を有するもので、底部から2cmの高さに網状突帯を巡らせる。底面には正な円形となる穿孔が連続する。全体に鉛釉が掛けられ、褐色を呈する。

#### 瓶（第202・203図）

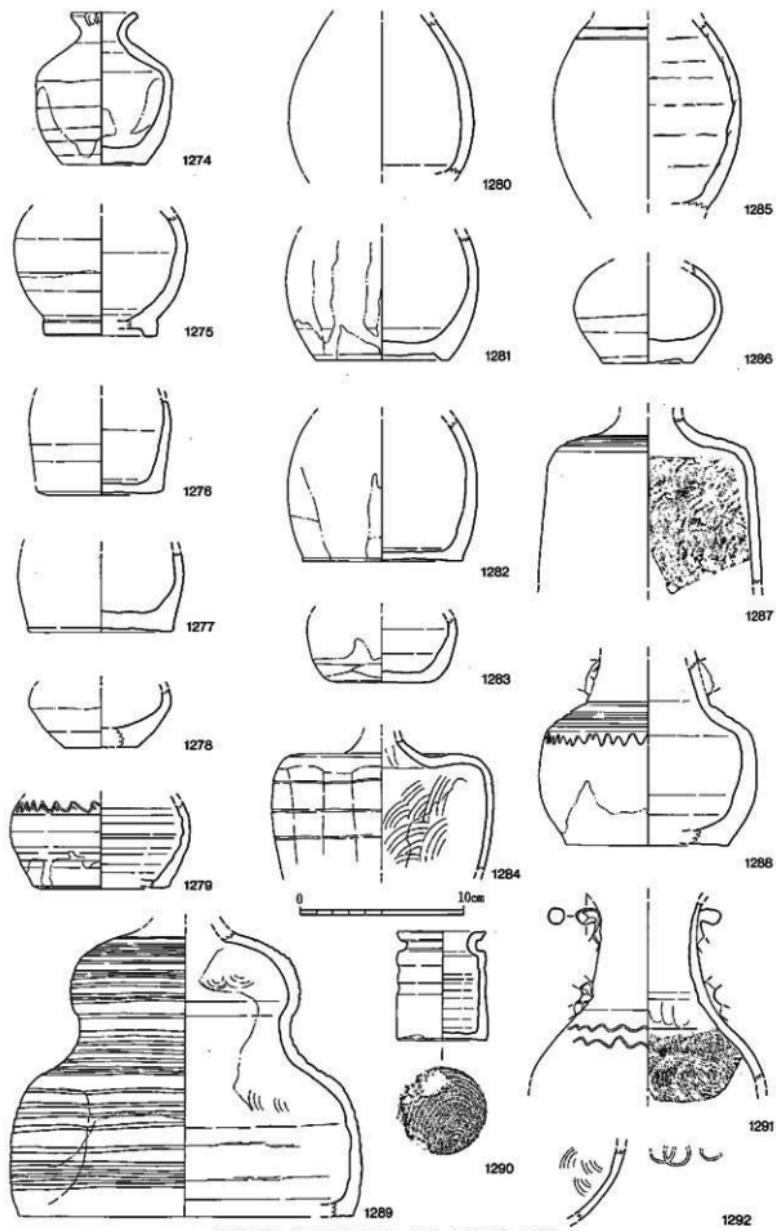
瓶形のものを一括したが、その用途は液体を貯蔵するもの以外に一輪挿し・花生等も含まれると思われる。大形のものの出土が多く、小形のものは少ない。甕と同様、破片となっているものが多く、実際の出土量よりも実測できる量はかなり少なくなっている。

大形のものは肩部に沈線を巡らせるものが多い。沈線のほかには波状文があり、両者を組み合わせるものもある。口縁部はくびれた頸部からそのまま広がるものと、直立させるものがある。1267は外反させた後で強く内湾させるものであるが、頸部が太く壺となる可能性もある。体部は叩き調整によるもので、内面には当て具痕である青海波文を残すものが多い。釉に関しては鉛釉が大部分を占め、素焼きのものがそれに次ぐ。1268は褐色の鉛釉の上に青味乳濁色の薬灰釉を掛けた二重掛けである。

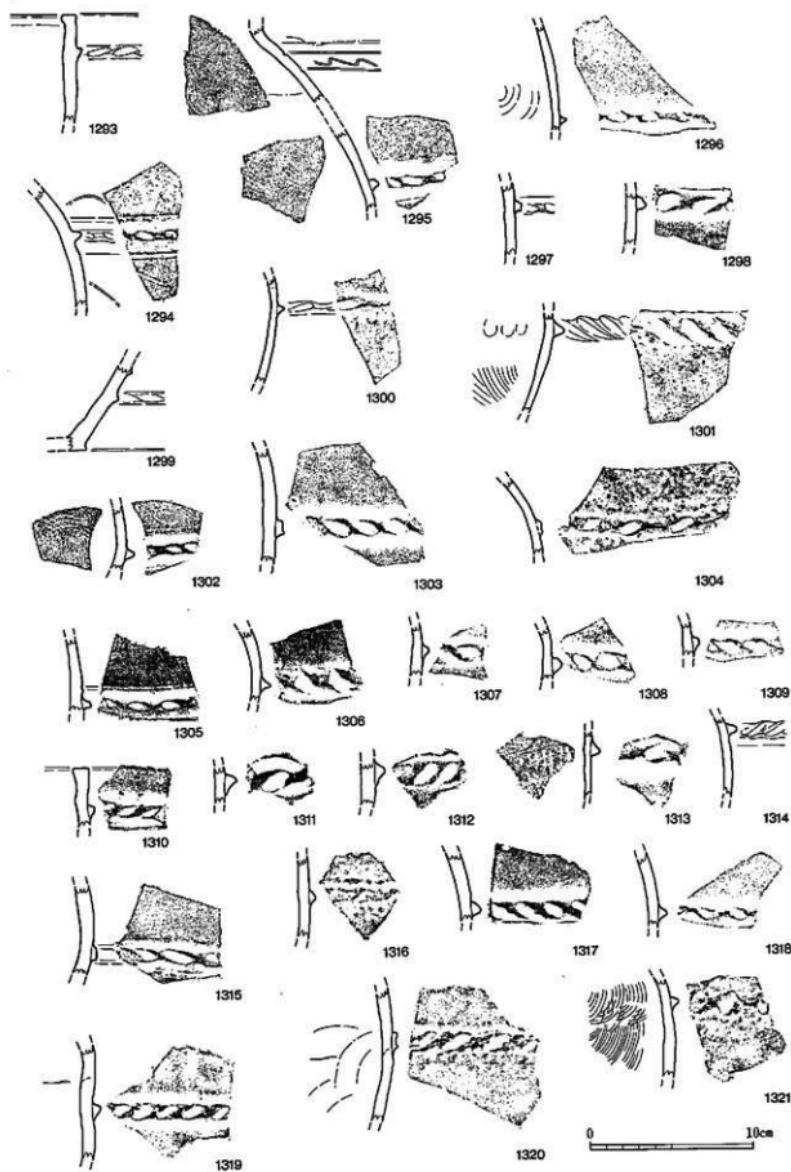
小形のものは、水引きによるものが多く、内面には強い輪縁目を残すものがしばしばみられる。口縁部はくびれた頸部からそのまま続いて外反するものが多い。底部は平底のものと、基筒底とするものの両者があるが、高台をつくりだすものは殆ど認められない。釉は鉛釉で褐色を呈するもの



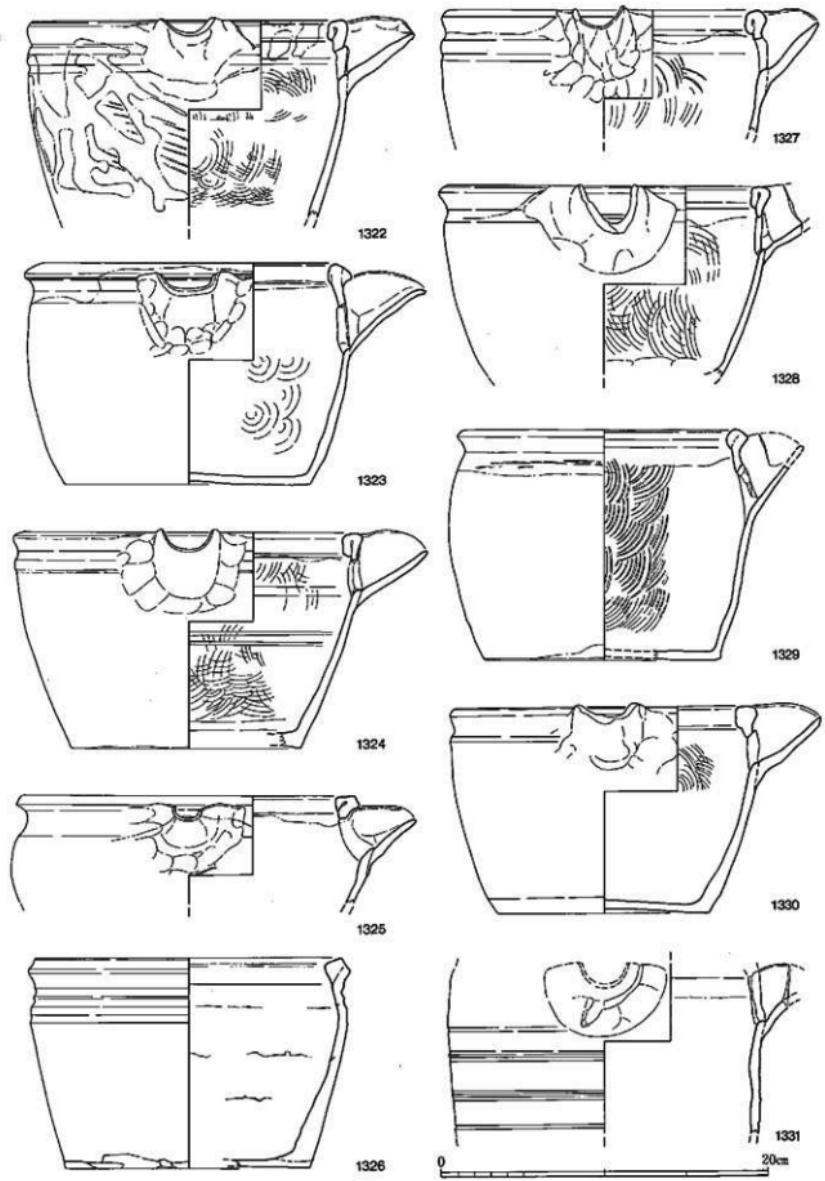
第202図 包含層出土遺物(瓶)実測図① (1/3)



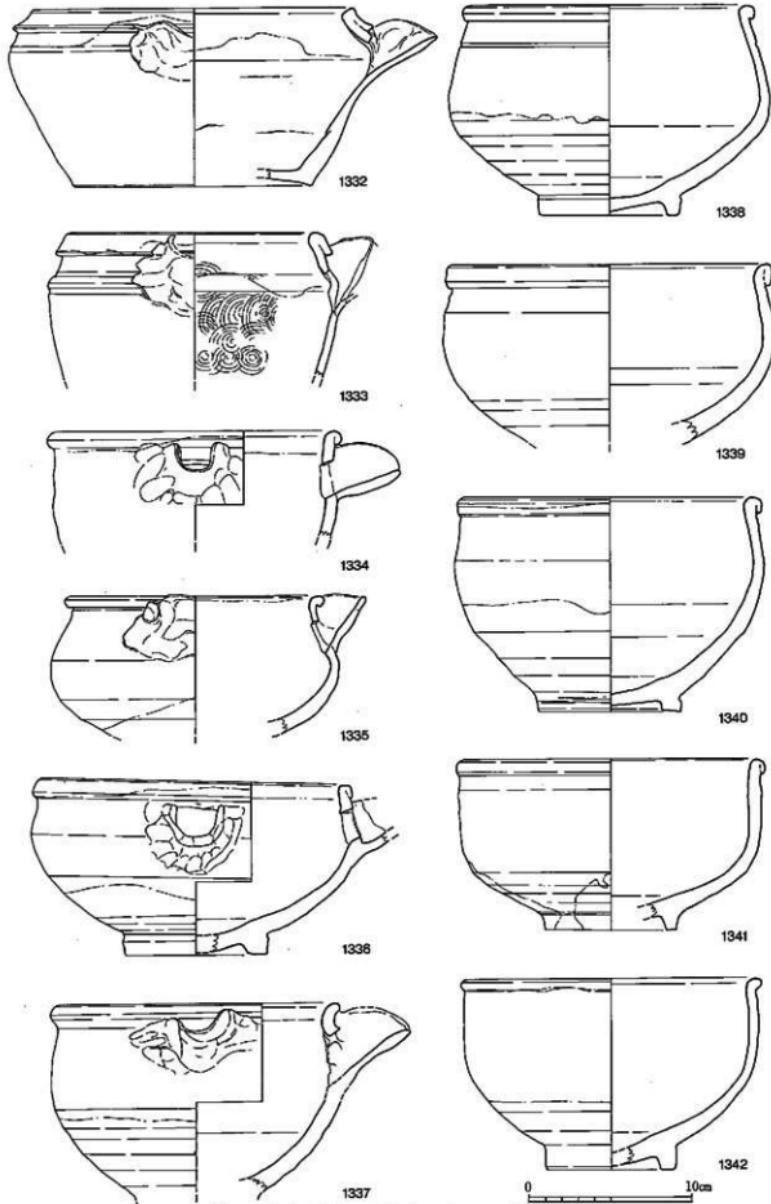
第203図 包含層出土遺物（瓶）実測図② (1/3)



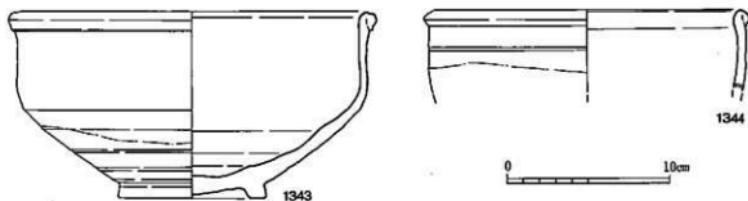
第204図 包含層出土遺物(網状突帯)実測図(1/3)



第205図 包含層出土遺物(片口)実測図① (1/3)



第206図 包含層出土遺物（片口）実測図② (1/3)



第207図 包含層出土遺物（片口）実測図③（1/3）

が多い。1274は藁灰釉で乳濁色を呈する。また1281・1285は鉛釉の上から乳濁色の藁灰釉を掛けた二重掛けである。

小形のもので装飾を入れるものは少ない。装飾を入れるものは花生といった用途が考えられる。1272は太い沈線と円形の押印で肩部を飾るもの。1273・1279・1288・1291は肩部に小刻みな波状文を巡らせる。1288・1291は頸部に耳を有するが欠損しており具体的な形状はわからない。1284は精良な胎土を用いてぐるぐる仕上げられたもの。大きく張る肩部を有し、体部と比べてぐるぐる細い頸部がつく。肩部から体部にかけて細い沈線を巡らせる。体部は故意に歪められた形跡を残す。1289は瓢箪形の瓶で、体部は故意に歪められる。体部は叩き調整であり、内面の一部に青海波文を残す。外面全体に沈線を密に巡らせる。褐色を呈する鉛釉の上から乳濁色の藁灰釉を掛けた二重掛けである。1290は茶入に類する形状であるが、器壁は厚手であり、内面まで藁灰釉を施釉することから瓶として扱った。口縁部は強く短く屈曲するもので、上面はやや窪みをもつ平面となる。肩部は明瞭であり、体部は直立する。底面は糾切である。1292は丸みをもつ体部を有し、内面には青海波文が残ることから瓶として捉えた。外面に円形のスタンプ文が連続するが、上半は欠損してわからない。外面のみ鉛釉を施釉し、褐色を呈する。

#### 網状突帯（第204図）

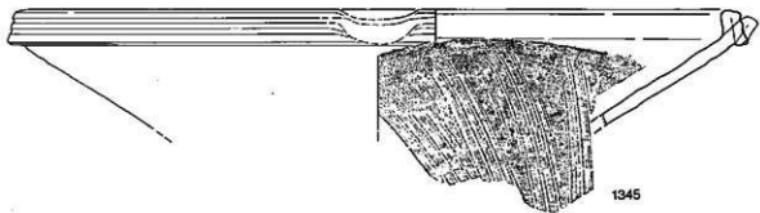
網状突帯を有する肩部片を一括した。おそらく水指や甕の肩部の装飾であろうと思われる。突帯に施される刻みは多様である。1293～1309は釉を掛けたものであり、未発色で判らないもの以外は褐色を呈する鉛釉である。1310～1321は素焼きである。

調整は叩きによるものが大部分を占めると考えられるが、ナデにより調整痕を消すものが多い。一部のものには、内面に叩きのあて具痕である青海波文を残すものがある。

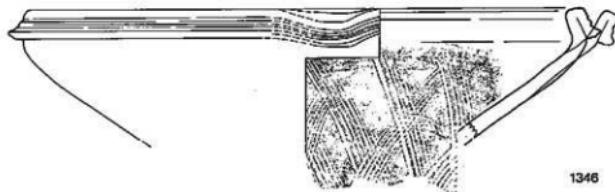
1293・1310は水指の口縁部であろう。405に類例がある。1294・1295は波状文を組み合わせて装飾する。甕の肩部であろうか。

#### 片口（第205～207図）

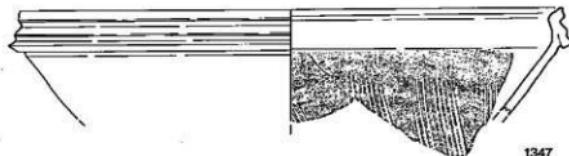
片口は口縁部形状から見て大きく3つのタイプに分類できる。ひとつは口縁端部を内側へ折り込んで密着させ、断面が方形に肥厚させるもの。更にほば直立させるものとやや外反させるものの二者がある。まず、口縁端部を内側へ折り込みほば直立する断面方形の口縁部形態をなすものは1322から1330が該当する。口径は20cmでほば描っていることから片口の大きさにも規格の存在がみえる。体部は叩き調整で内面には当て具痕である青海波文を残す。外面に平行叩き痕を残すものもある。



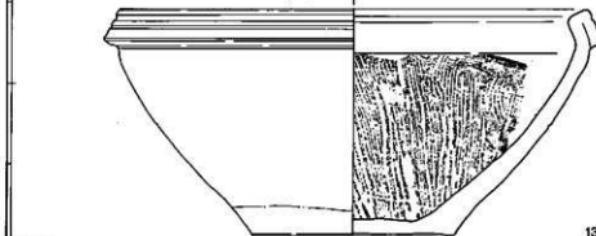
1345



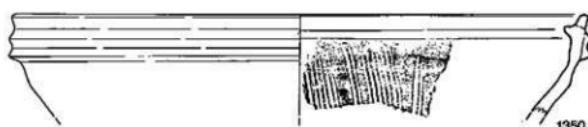
1346



1347

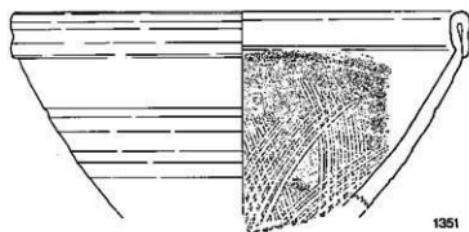


1348



1350

第208図 包含層出土遺物（擂鉢）実測図① (1/3)



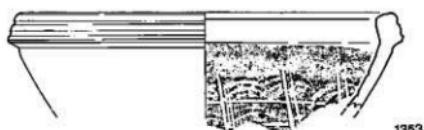
1351

底部はいずれも平底である。  
1323は底面に円形に網状の圧痕  
があるが、その意味は不明。  
1322は灰釉をイッキン掛けする  
もので、つくりが良い。釉は鉛  
釉が大部分であり、素焼きのも  
のもある。



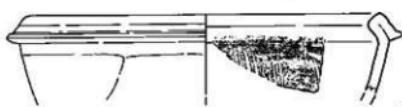
1352

二番目の口縁部形状は、口縁  
端部を外面に幅広く折り返し内  
傾させるものであり、1332・  
1323が該当する。体部は叩き調  
整により、内面には当て具痕で  
ある青海波文を残す。底部は平  
底である。



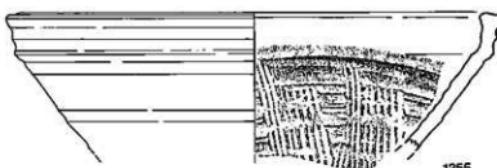
1353

もうひとつのタイプは口縁端  
部を短く折り返し丸く仕上げる  
ものであり、1334～1344がこれ  
にあたる。体部は水引き調整で  
ある。また高台を有する。こう  
した特長から前二者との違いは  
明瞭である。また口径は18～20  
cmであり、先のタイプよりも小  
振りである傾向が指摘できる。



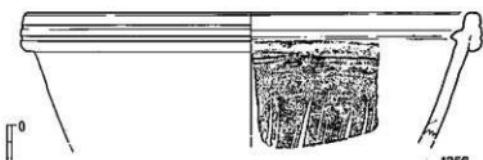
1354

1335は注口の両脇に円形の浮文  
を貼り付ける。



1355

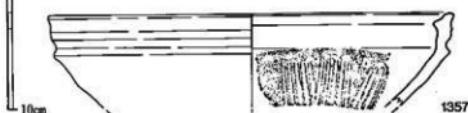
1331は直立する体部に沈線を  
多數巡らせるもの。特殊な形態  
であることから水注の可能性が  
高いが、口縁部を欠損するため  
に断言はできない。



1356

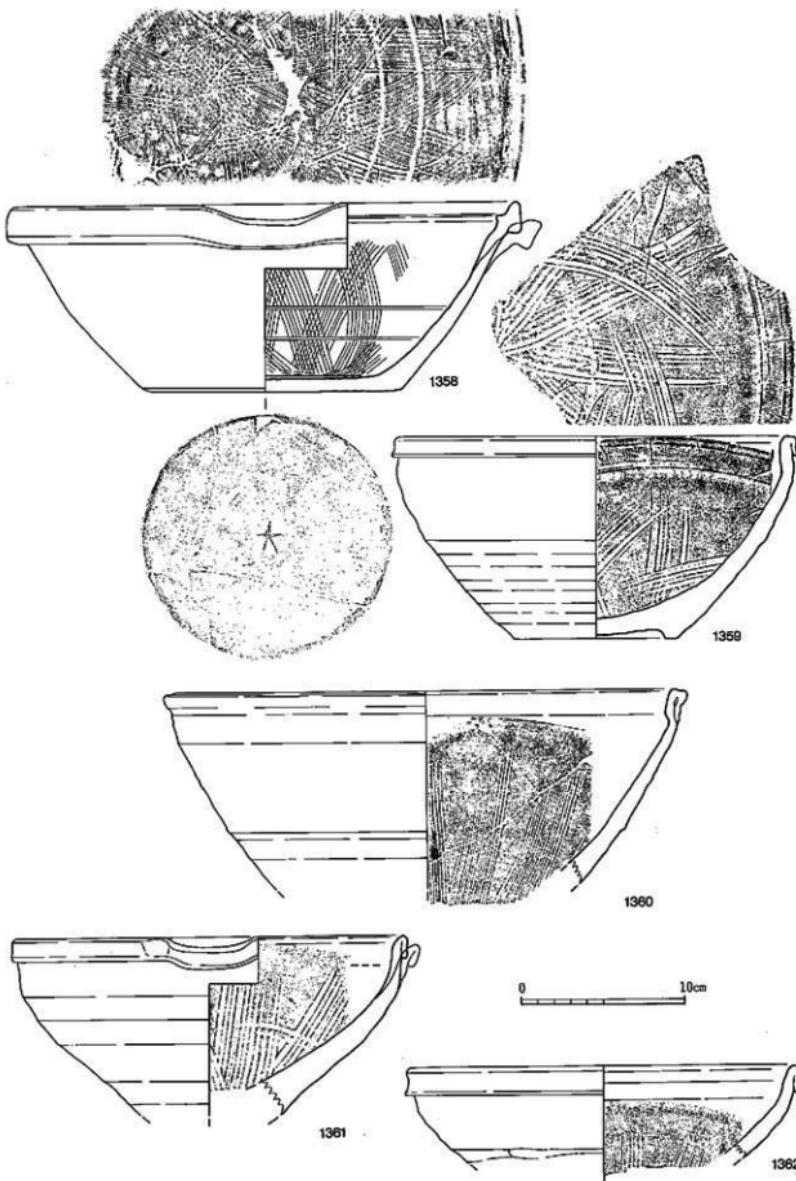
#### 擂鉢（第208～213図）

擂鉢も数多く出土する器種の  
一つである。大部分は素焼き、  
或いは焼締であり、釉を掛け  
ものは少ない。擂目の入れ方は、  
基本的には底部から口縁部に向  
かって直線的に施すものである

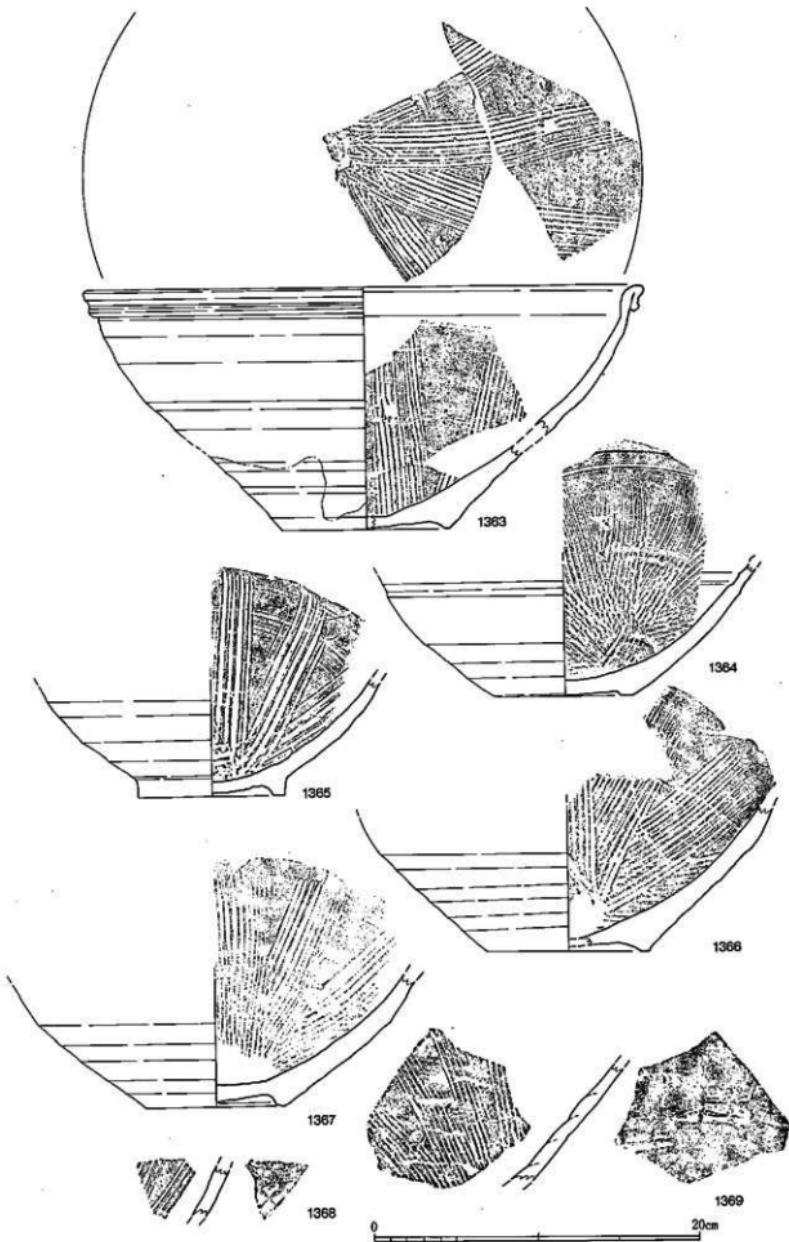


1357

第209図 包含層出土遺物（擂鉢）実測図② (1/3)



第210図 包含層出土遺物（擂鉢）実測図③ (1/3)



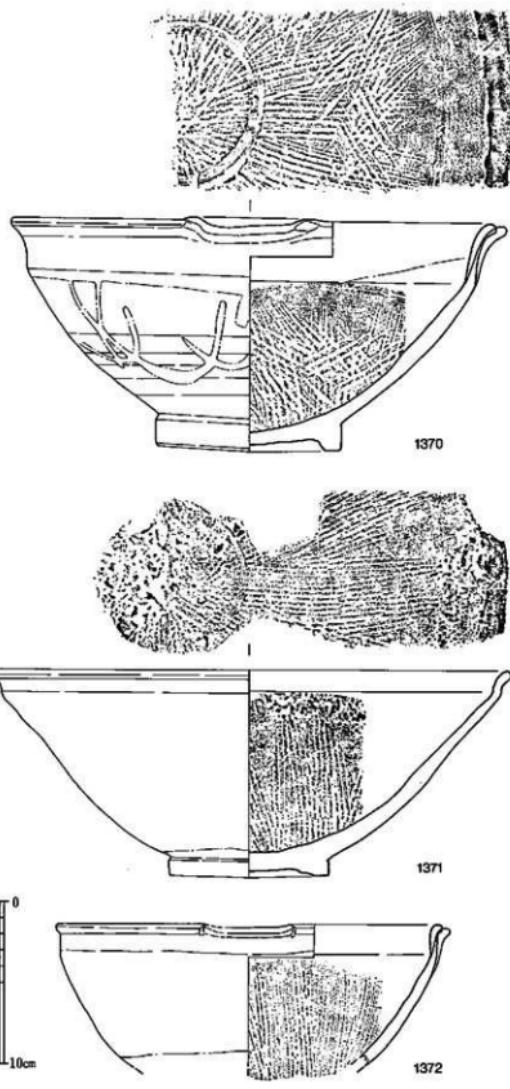
第211図 包含層出土遺物（擂体）実測図④ (1/3)

が、いくらかの割合でクロスさせながら施すものがある。擂目の間隔は密に施すものは少なく、上端で2cmの間隔を置くものが多い。体部は底部から口縁部にかけて直線的に伸びるものと丸みをもって立ち上がるものがある。体部の成形は水引きによるものと叩きによるものがあるようである。叩き調整のものには内面に当て具痕である青海波文を残すものもある。1368・1369は外面に幾何学文の叩き痕を残す。

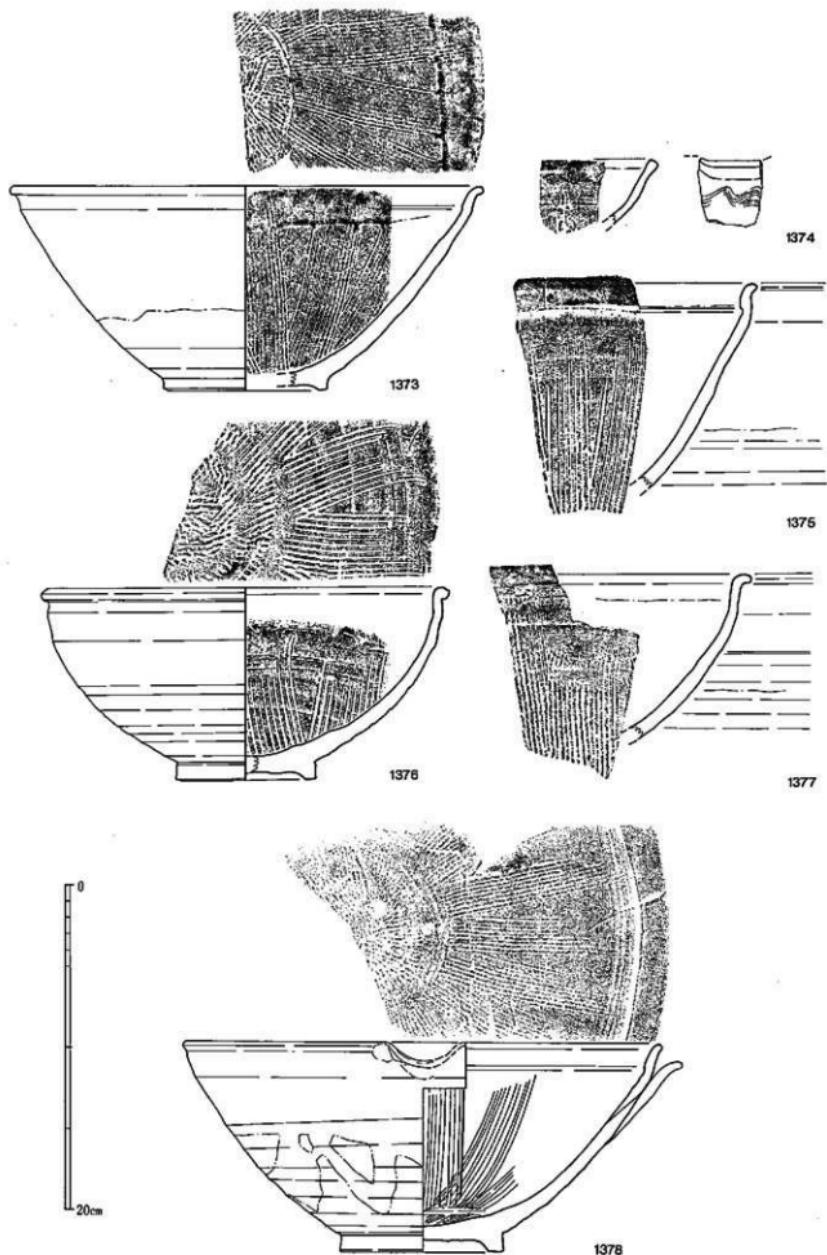
底部の形状に関しては釉を掛けないものには平底が多いが、基筒底のものもみられる。釉を掛けたものは高台を有する。

擂鉢の分類は法量からも可能であろうが、ここでは口縁部の形状を中心として簡潔にみてみることとする。口縁部形状は釉を掛けたものと掛けないものとは共通要素はない。まず釉を掛けないものについて述べる。

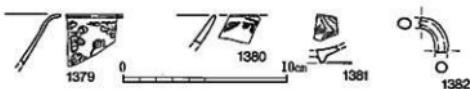
最も多い形状は口縁部を外側に折り返して密着させて口縁帯をつくり、そこに2条の凹線を巡らせるものである。凹線には強い撚糸目によって作り出すものや、沈線とす



第212図 包含層出土遺物（擂鉢）実測図⑤（1/3）



第213図 包含層出土遺物（擂鉢）実測図⑤ (1/3)



第214図 包含層出土遺物（磁器）実測図（1/3）

るものがある。口縁帯の幅は変異が大きい。また口縁帯の下端を強調するように突出させるものがある。口縁部内面に蓋受状に突出部をもつものもある。口縁部は直立させるものと内傾させるものの二者がある。このように凹線の強弱や口縁帯の幅によって多様性を生み出している。

1358は口縁部を外側に折り返し断面三角形に肥厚させるものである。内面には蓋受状の突出部をもつ。底面には製作台の割付印の反映とみられる星形の浮文が残される。

1359～1363は口縁部を外側に折り返し密着させるもので、口縁帯に凹線を巡らさず若干側面を窪ませるものである。

1365・1370～1378は釉が掛けられるもの。釉は褐色に発色する鉛釉が多く、乳濁色に発色する露灰釉が若干みられる。1370は体部下半にイッチン掛けで釉を掛ける。口縁部の形状は外反させるものが多いが、その形状は多様である。1373・1375・1378は外反部に対応して口縁部内面に強い稜をもち縁付形となる。1376は口縁部を外側へ短く折り込んで丸く仕上げる。

#### 磁器（第214図）

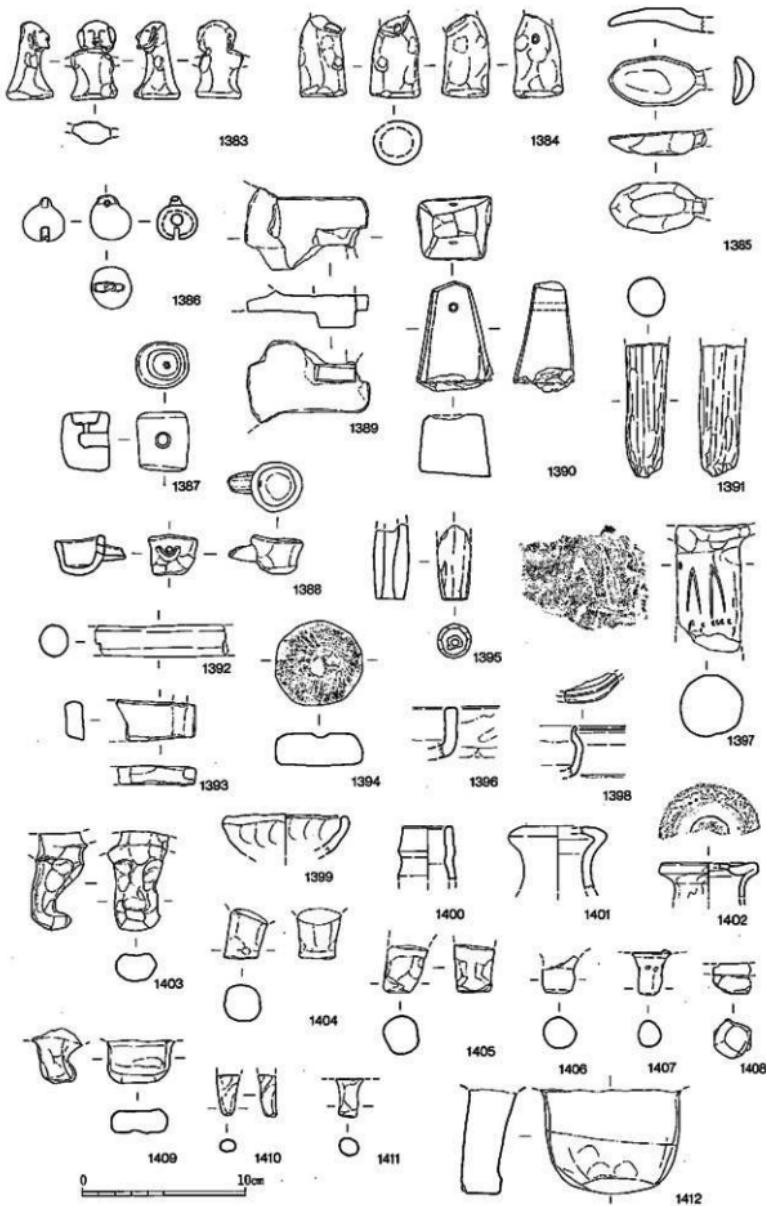
磁器の出土はごく僅かであり、内ヶ磯窯で焼成されていたというよりも生活用具として持ち込まれたもの、或いは後世の何らかの理由による混入と考えたほうが自然である。時期の決定を含め、今後の課題として残される。

1379はやや内湾する体部に強く外反する口縁端部を有するもの。器壁は薄く3mmを測る。外面に細かい円文を重ねて草状とする文様を描く。口縁部内面には二本線を入れる。1380は口縁部小片。外面に草文を描く。全体に濁った色調を呈する。1381は底部小片。見込に文様を描くが小片のため詳細は不明。G区土壤10から出土したもの（267）に類する。疊付には砂目を残す。1382は強く屈曲する径6mmの断面円形の把手状のものである。

#### 陶人形・ミニチュア・脚など（第215図）

陶人形をはじめとする特殊品を第215図に挙げた。器形全体がわからぬために器種不明の特殊品としたものもある。

1383・1384は陶人形。いずれも素焼きである。1383は陶土を捏ねて簡単に成形したものである。両腕を欠損する。脚部は表現されない。顔面に関しては目・鼻・耳と細かい表現を施す。特に鼻には大きな鼻腔を表現している。1384は手足と頭部を欠損し、胴体部のみ残す。中空で背中に小穿孔



第215図 包含層出土遺物（特殊品）実測図 (1/3)

があることから水滴と考えられる。

1385は匙。持ち手の棒状部は欠損する。長楕円形を呈するもので、指圧痕の凹凸が多い。底面には模が多く付着する。鉛釉を掛け、暗褐色を呈する。

1386は鉢。内部には径6mmの球が入っており、実際に振ると軽い音が鳴る。全体に土灰釉を掛け、透明感のある浅い緑色に発色する。

1387は円柱状の体部の上面を一段削りこみ、その底面から小孔を開け、また横からは径8mmの孔を開けて、先の小孔と繋がるようにする。キセルであろうか。素焼きである。

1388はミニチュアの片口。小さな体部に長い注口を持ち、体部には小孔が開けられている。焼締に近く硬質に焼成される。

1389は用途不明品。平面に対して、随所に円形・方形の透孔が開けられ、また突起が少なくとも3ヶ所に設けられる。

1390は陶鉢。縦断面が台形の四角柱を呈するもので、頂部は山形とする。上寄りに径5mmの穿孔をもつが、吊り下げるためのものであろう。全体に鉛釉が掛けられ、緑褐色に発色する。1395は棒状の陶鉢。端部はケズリにより面取りされる。硬質に焼成される。

1394は石臼状の刻みを入れる円盤。中央は径7mmの窪みを付ける。

1391は棒状を呈する不明品。側面はケズリにより面取りされ、細かい面が多数生じる。先端の調整は丁寧ではない。全体に鉛釉が掛けられ、緑褐色を呈する。1392は中空の棒状のものであり、断面は正円に近い。素焼きである。1393は断面長方形の棒状のもの。先端近くに何らかのものが巻かれていたような痕跡を残すが詳細は不明。灰釉が掛けられ、明緑色に発色する。1397はトチン状の円柱形をなし、高环形となるかもしれない。脚状部に沈線による山形文や竹管文等を入れる。

1396・1399は手握ねの楕形土器。1396は鉛釉をイッテン掛けするようであるが、小片のため判断しがたい。1399は明瞭に指圧痕を残している。

1398は茶入に用いられる精良な胎土でつくられた小形器種。故意に重められるために径は出し得ない。墨灰釉を掛け、乳濁色に発色する。

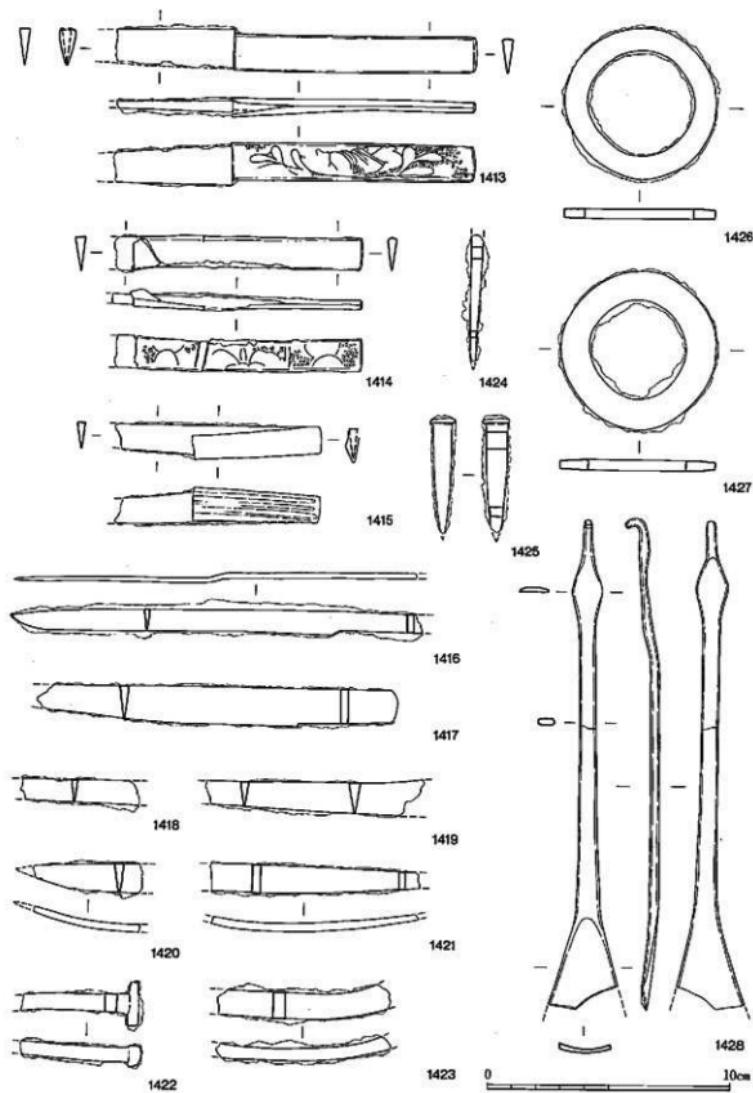
1400は筒形の口縁部。一輪挿し、或いは片立であろうか。1401は瓶状の頸部が強く内側に屈曲するものの、鉛釉が掛けられ、暗褐色を呈する。1402は筒状に延びる体部を強く外反させた後内側へ強く折り込んで密着させ、上面を平坦とするもの。上面には波状文を巡らせる。用途は不明。

1403～1412は脚。猫脚・千鳥足・团子状脚等があるが、水指や皿類につけられていたものであろう。1412の舌状脚は1188のような鉢につくものとみられる。

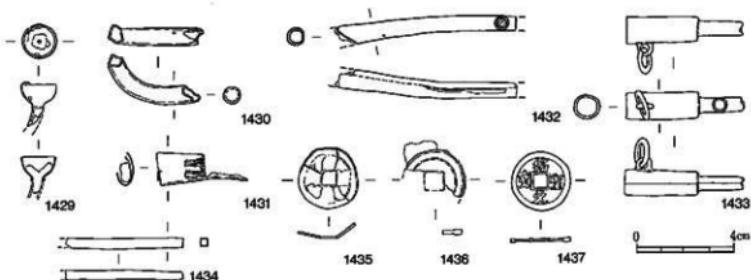
#### 金属器（第216・217図）

1413～1415は青銅製の柄を作う鉄製刀子。小柄であろうか。1413と1414の柄の片面には細線で文様が刻まれる。曲線を組み合わせた草花文と魚子である。1415は柄の片面に3本の凸線を浮かせる。1416～1420も刀子である。1416には故意と思われる屈曲をもつ。1421は刃を持たない断面長方形の棒状のもので、僅かに反る形態。1423も同様の形態であるが、やや厚手である。

1422・1425は釘であろう。1422は先端を欠損し、頭部はT字形を呈する。1425は太くて短い釘であり、頭部はやや広い平坦面を作り出す。1424も釘状であるが細いものであり、針に近い形狀である。



第216図 包含層出土遺物（金属器）実測図① (1/2)



第217図 包含層出土遺物（金属器）実測図②（1/2）

1426・1427は鉄製の輪であるが、用途は不明である。両者は重なった状態で出土したが、二つ一组で用いられたものであろう。刀は持たない。

1428は青銅製の匙で、匙部の先端を欠損する。持ち手の先端は鉤状に強く屈曲させ、掛けられるようにしている。またその屈曲から持ち手にかけてには幅を広くした部位がある。匙部は浅い屈曲を有し、かなり細長い形状となるようである。

1429～1433はキセル。いずれも青銅製で薄く作られる。1429・1431・1432には内部に木質・炭化物を残す。1433は吸口部であるが、紐を掛けるようなリングが伴う。

1434は青銅製の細い棒である。断面は一辺4mmの正方形で、一端を欠損する。

1435～1437は鉄。1435・1436は鉄製であり、腐食して文字は判読できない。1437は銅製で紹聖元寶と読める。

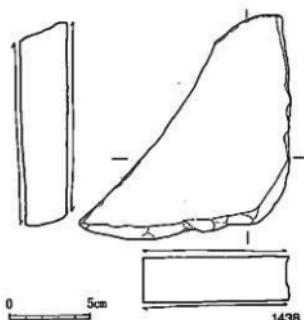
#### 石器（第218図）

1438は砥石である。厚さ2.8cmの平坦な形態で平面形は三角形を呈するが、側面がいきているかどうかは不詳。両面は平滑となるが、削痕はみられない。砂岩製。572.2gを量る。

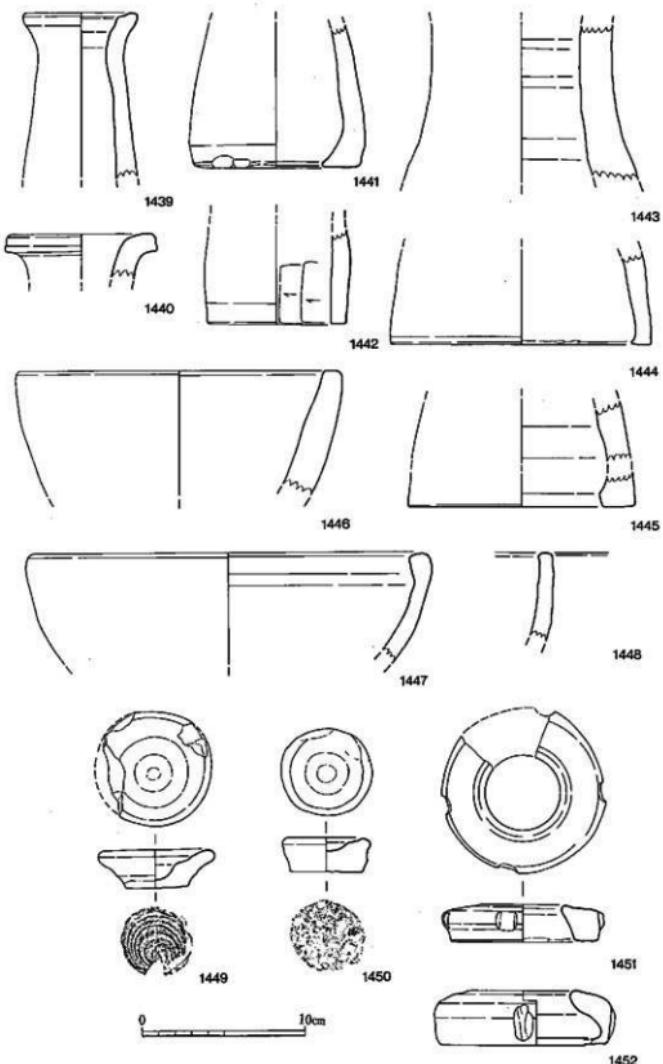
#### 製陶道具・窯道具（第219・220図）

1439～1445は高台を削りだす際の道具であるシックである。これ以外にも土壤から比較的多く出土している。いずれも器壁は厚手で、器壁の厚さは1.2～2.0cm程度を測る。1439と1440は外反する口縁部を有する。底部は筒状であり、内面に肥厚させて肥厚部の端部を削るものが多い。1442は直立する形態で内面を全体的に横方向に削ることから別器種である可能性を残す。

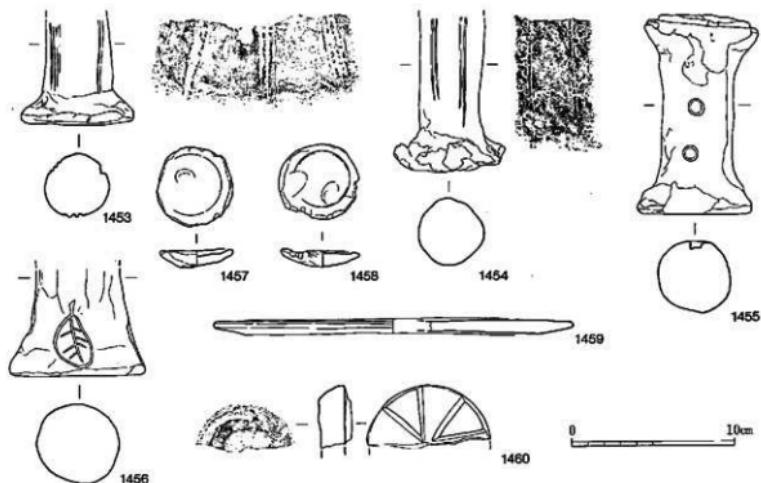
1449と1450は輥軸の回転軸受け。いずれも平面形は円形である。底面は糸切。底面を除き土灰釉が施釉される。透明感のある緑色を



第218図 包含層出土遺物（石器）実測図（1/3）



第219図 包含層出土遺物（製陶道具・窯道具）実測図（1/3）



第220図 包含層出土遺物（窯道具）実測図（1/3）

呈するが、1449は剥落が著しい。

1451と1452は轆轤の回転軸の支えであろうか。ドーナツ状の形態を呈する。4方向に切込みを入れる。滑り止め、或いは轆轤の4本の脚に対応するものであろうか。二者の断面形状は異なるが同機能を有するものであろう。1451は全面に丁寧に鉛釉を掛けた。1431は素焼きである。

製品を焼成する際に用いられる窯道具は極めて多量に出土しており、最も多い器種といつても過言ではない。その大部分は重ね焼きの際に用いられた胎土目であり、トチンの出土量も多い。胎土目・トチンとも大小様々なものが出土する。本年度の報告ではそれらに時間を割けず、ごく特殊なもののみを図示するに留まった。胎土目・トチン以外は少なく、特にサヤと思われるものは非常に少數であり、その是非を含め今後の検討課題として残る。ハマには径5cm程度のものが多いが、茶入専用のものも出土する。

1446～1448はサヤであろうか。梳等の器種とするには器壁が1.2cm程度と厚すぎる。いずれも内湾する体部を有し、端部は四角く收める。あまり強い火を受けていない点は気になる。

1453～1456はヘラ記号状のものを有する特殊なトチン。1453・1454は沈線を縦に入れるもの。1455は竹管文を二つ入れるもの。1456は端部近くに木の葉の模様を描くもの。木の葉部分には鉛釉を掛けており、褐色に発色する。

1457・1458は茶入用のハマであり、薄い円盤状を呈する。茶入の圧痕とみられる円形の凹部を残す。茶入用にはこの他にドーナツ状のものも出土している。1459は大形の円盤状のハマ。底面には繊維状の圧痕を多く残す。1460は円盤状のハマに放射状に溝を切るもの。底面には糸切痕を残す。

## V 自然科学分析の調査

### 内ヶ磯窯跡から出土した炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

#### はじめに

内ヶ磯窯跡は、直方市の東部、鷹取山の北麓に位置する。江戸時代初頭の1614年（慶長19）～1624年（寛永元年）の10年間、高取八山（高取八戸）によって操業された陶器窯である（森谷、1984；村川、1994）。高取八山は豊臣秀吉による朝鮮出兵の際に日本に連れてこられた陶工で、永満寺住間窯で筑前国黒田藩の御用窯として活動を開始し、その後この内ヶ磯窯に移り本格的な活動を繰り広げた。内ヶ磯窯では擂鉢や鉢などの雑器の他に茶陶をはじめとする多種多様な陶器がつくられており、その後大きく展開していく高取焼の基礎を作り上げた窯であるとされている。窯本体は、燃焼室14室と焚口1室の連房式登窯で、全長は46.5m、比高差15mの規模を呈する。このほか、周辺からは工房跡などの建物跡や炭や粘土を貯蔵した造構などが検出されている。

本報告では、工房跡の炭貯蔵施設から出土した、釉の材料と考えられる木炭の樹種同定を行い、種類構成を明らかにする。

#### 1. 試料

試料は、工房跡の炭貯蔵施設（F区土壌7）から出土した木炭である。木炭は、一括採取されたものが、2袋に分けられており、それぞれに100点以上が入っていた。試料はこの中から無作為に25点を抽出した。

#### 2. 方法

木口（横断面）・杼目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

#### 3. 結果

樹種同定結果を表1に示す。炭化材は、全て広葉樹材で、3種類（スダジイ・シャリンバイ・アセビ）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

- スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイノキ属  
環孔性放射材で、孔圈部は3～4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。

- シャリンバイ (*Raphiolepis indica* (L.) Lindl. var. *integerrima* (Hooker & Arnott) Kitamura) バラ科シャリンバイ属  
散孔材で、管壁は中庸、ほぼ単独で散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は單穿孔を有する。壁

表1 樹種同定結果

造構名	用途	点数	樹脂(点数)
炭貯蔵施設(F区土壌7)	釉の原料	25	スダジイ(1) シャリンバイ(21) アセビ(3)

孔は保存が悪く観察できない。放射組織は異性Ⅲ型、1~3細胞幅、1~20細胞高。結晶細胞が認められる。

・アセビ (*Pieris japonica* (Thunb.) D.Don.)

ツツジ科アセビ属

散孔材で、年輪始めに横方向に道管が揃うが、その後は散在、主に接線方向に複合しながら漸減する。道管径は極めて小さく、分布密度は中程度、年輪界はじめが最も小さく密度も高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列~階段状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ~Ⅱ型、1~3列、1~15細胞高。

#### 4. 考察

高取焼は火に弱く、焼くと焦茶色になり良質とはいえないため、悪い土をカバーするために土の上に掛ける釉の開発に力を注いだとされる(芳村、1980)。今回の炭化材も、このような釉の原料と考えられている。

本窯跡出土陶器の釉薬の分析調査から、内ケ磯窯跡では燃料としてマンガン、鉄分の少ない柞(イスノキ)、楡(ナラ)などの雜木を用い、また釉薬として白物には木灰中の鉄まで意識して少ないものを使用し、黒物には酸化鉄(ヤケ:鉄分を多く含む粘土)を使用していたと推定されている(板本・山田、1983)。したがって、窯の燃料または釉薬の木灰のいずれにも、マンガンおよび鉄分が少ない木材が用いられたことが考えられる。今回の結果では、樹種はシャリンバイを中心とするダシイとアセビが混じる組成が認められた。これらの樹種は上記の釉薬の分析結果から推定されているイスノキやナラとは異なり木灰の材料としては一般的ではないが、これらの木材もマンガン、鉄分が比較的少ない可能性がある。本窯跡周辺に生育していた適材を選択的に用いたのかも知れない。

今回のような試料については調査例が少ないので、わかっていないことが多い。今後さらに調査を行い、類例を蓄積すると共に、現在における民俗例等についても資料を収集し、検討したい。

#### 引用文献

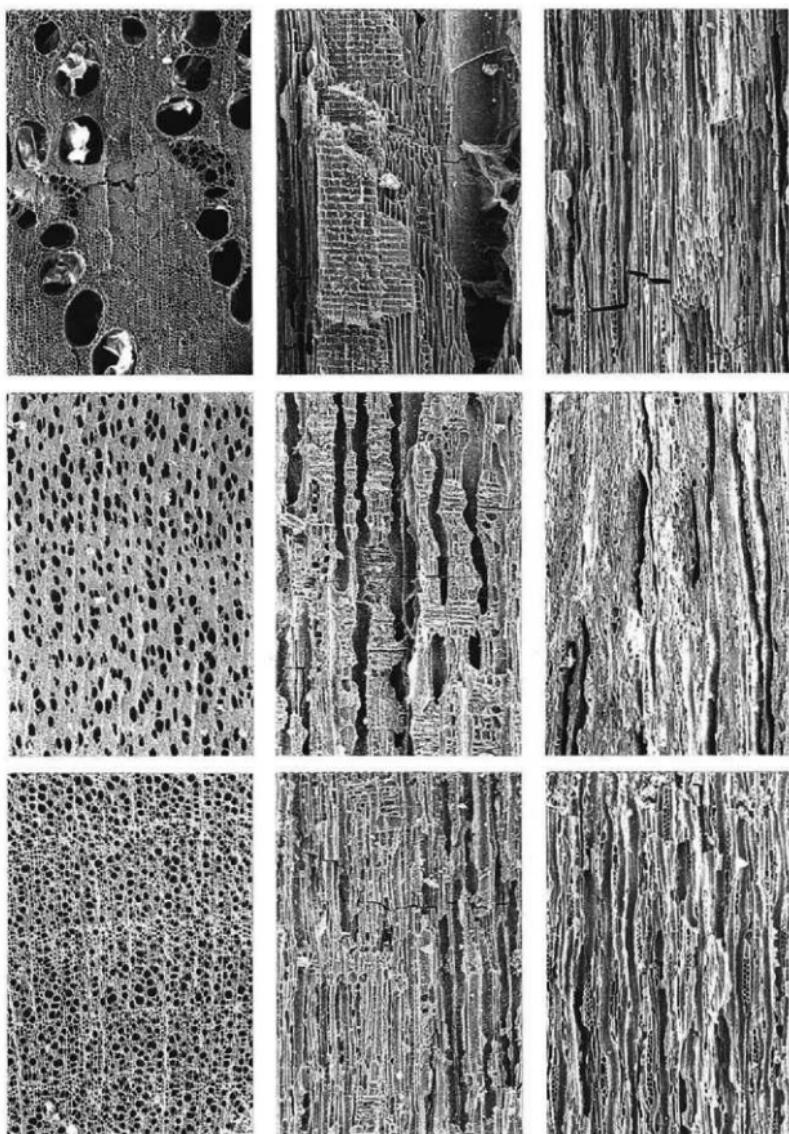
森谷冠久 1984「近世陶磁生産の發展」

甘粕健・網野善彦・石井達・黒田日出男・田辺昭三・玉井哲雄・永原慶二・山口啓二・吉田孝編『講座・日本技術の社会史』第4巻 窯業 P.179-214, 日本評論社。

村山武 1994『窯別 日本のやきもの』, 241p., 淡交社。

板本栄治・山田昭朗 1983「2. 宅間窯跡出土陶器破片の螢光X線分析」「古高取永満寺宅間窯跡」直方市文化財調査報告書 第5集, P.55-68, 直方市教育委員会

芳村俊一 1980『土と石から見たやきもの』196p., 光芸出版。



1. スダジイ (F区土7)
  2. シャリンバイ (F区土7)
  3. アセビ (F区土7)
- a : 木口, b : 楢目, c : 板目

第221図 炭化材

— 200μm : a  
— 200μm : b, c

## VI おわりに

最後に今回の調査成果に関して若干のまとめを行い、今後の展望を記したい。今回の調査区は工房跡・屋敷跡が想定された地域であったが、調査の結果掘立柱建物や粘土貯藏土壙等が確認され、そのような性格が裏付けられたといえる。もちろん昭和56年度の第3次調査によってもそのような事柄は明らかになっていたが、今回窯前面に展開する平坦面を全面的に調査することによって更に具体像が明らかになったものと評価できる。粘土土壙は、その堆積状況から多くのバリエーションがあることがわかった。粘土土壙からは特殊遺物がある時には埋納したような状況で出土し、当時の精神的な一面を垣間見ることができる。例えばCD区の土壙1やF区の土壙2横の柱穴では検出面において趣向の凝らした瓶や水指を置いていた状況が確認された。粘土土壙を施業する際に何らかの祭祀を行なったものであろうと推定される。また遺構は各区で満遍なく検出されているようであるが、特に集中する地区はF区であり、工房の中心がF区にあったものと考えることもできよう。しかし工房の位置は時期によっても変化する可能性があり、単純に遺構の密度だけで決定することはできない点は留意しておきたい。これに対しては出土した遺物の検討から再考を加える必要がある。しかしながら出土した陶器片は膨大な量に及び、担当者自身の頭の中で整理がつかない状態であり、来年度以降の整理を通して検討を試みたいと考える。

現時点でいえる遺物に関しての今回の調査成果をまとめてみたい。まずこれまでの調査では小片のみの出土で具体像がわからにくかった鉄絵皿に関して良好な資料が加わった。これまでも言っていた事ではあるが、唐津の影響の強さは顕著であり、鉄絵以外にも676のような椀の形態は明らかに唐津の影響を受けたものである。唐津以外にも志野の特色に類するものが出土した。当時の盛んな技術交流を物語るものである。唐津や志野・瀬戸といった当時の生産の本拠地との関連を追及することはもちろん重要であるが、この直方の地で周辺地域との関連を整理することもまた重要である。すなわち至近距離にある上野焼との技術交流の問題、或いは同じ高取焼の中で前代の宅間窯、後続する山田窯・白旗窯との製品の変化、実態がまだ不鮮明な千石窯や上畠窯との比較など課題は山積みされているものといえる。例えば、先行する宅間窯と比べると器種の多様化とともに釉薬の種類も多様化しているものと見られる。宅間窯では船釉や蘆灰釉がメインと見られるが、内ヶ磯窯においては土灰釉がかなり多く現れる。エメラルドグリーンに似た透明度の高いものであるが、これがあらわれるのに加えて、出土する状況も同様の形態・同様の色調のものがまとまる傾向にある。例えば、K区土壙3はその一括資料として興味深いものであり、またH区の落ち込み部でもそれが集中する傾向にある。

遺物量の多さと担当者の力量不足で、十分な報告が出来たかどうか疑わしく、また来年度に補遺として整理する部分もでてしまい反省点が多い結果となった。しかしある程度器種分類とその規格性も明らかとなり、また時期的な差異の問題も予察が得られた。さらに、これまでの調査では良好な遺物に恵まれない点もあった鉄絵陶器等も今回の調査を通して明らかとなり、また各方面的研究に活かすことの出来る成果は得られたと考える。内ヶ磯窯の製品は歴史的にも美術史的にも一級資料といえる存在である。膨大な量の陶片が出土したが、これを如何に活用していくか、仮に三ヵ年で報告書作成作業が終わつたとしてもこの問題に対しても前向きに取り組んでいきたい。

# 図 版



338



339



341



347



363



364



1



260



270



253



2



271



343



340



342



344



345



346



348



349



350



352



351



353



354



355



356



359



360



357



358



361



362



368



366



367



369



386



385



413



1289



481



72



224



127



1290



261



447



464



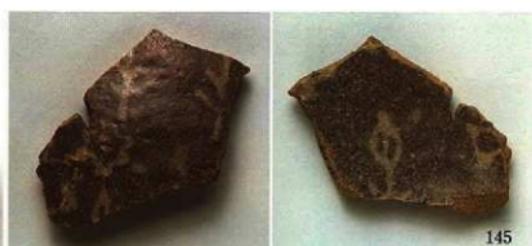
798



800



铁绘陶器・水盤



145



524



97

1383



1450



1390



194



1451



1386

筆立・輻轂回転軸受・小形特殊品



569



582



570



583



57



602



292



607



598



613



618



653



630



125



639



615



650



636



637



665



652



666



676



681



677



708



81



713



644



888



63



831



129



832



159



835



297



849



298



853



319



855





972



1024



994



1025



1002



1031



1017



1036



1021



1033



333

118



1162



1120



119



1101

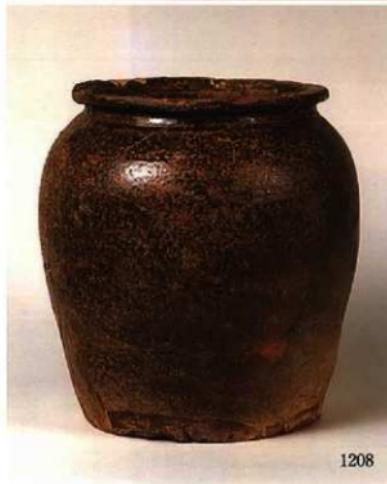
1108

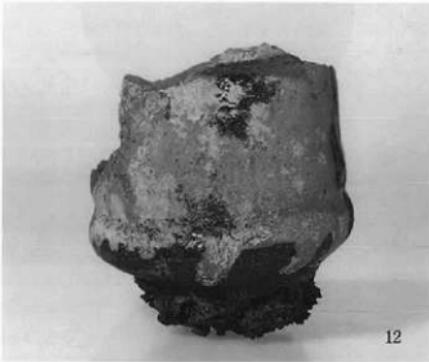
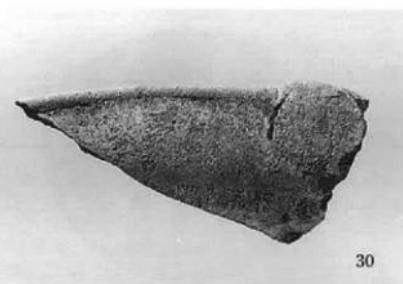
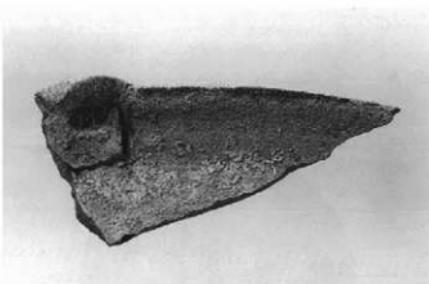


103



1194





B区土壤1出土遗物

79

62



C D区土壤2出土遗物



101



127



126



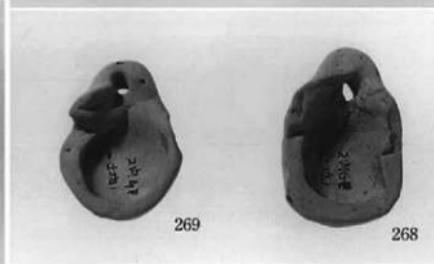
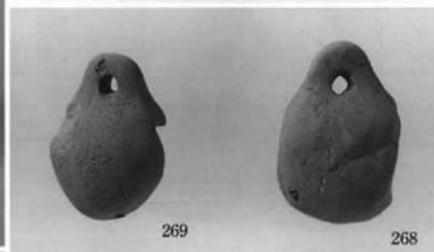
99



130



C D区土壤 6、E区土壤 1・ピット出土遺物



E区土壤1、F区土壤1・5・11、G区土壤10出土遺物



287



256



292

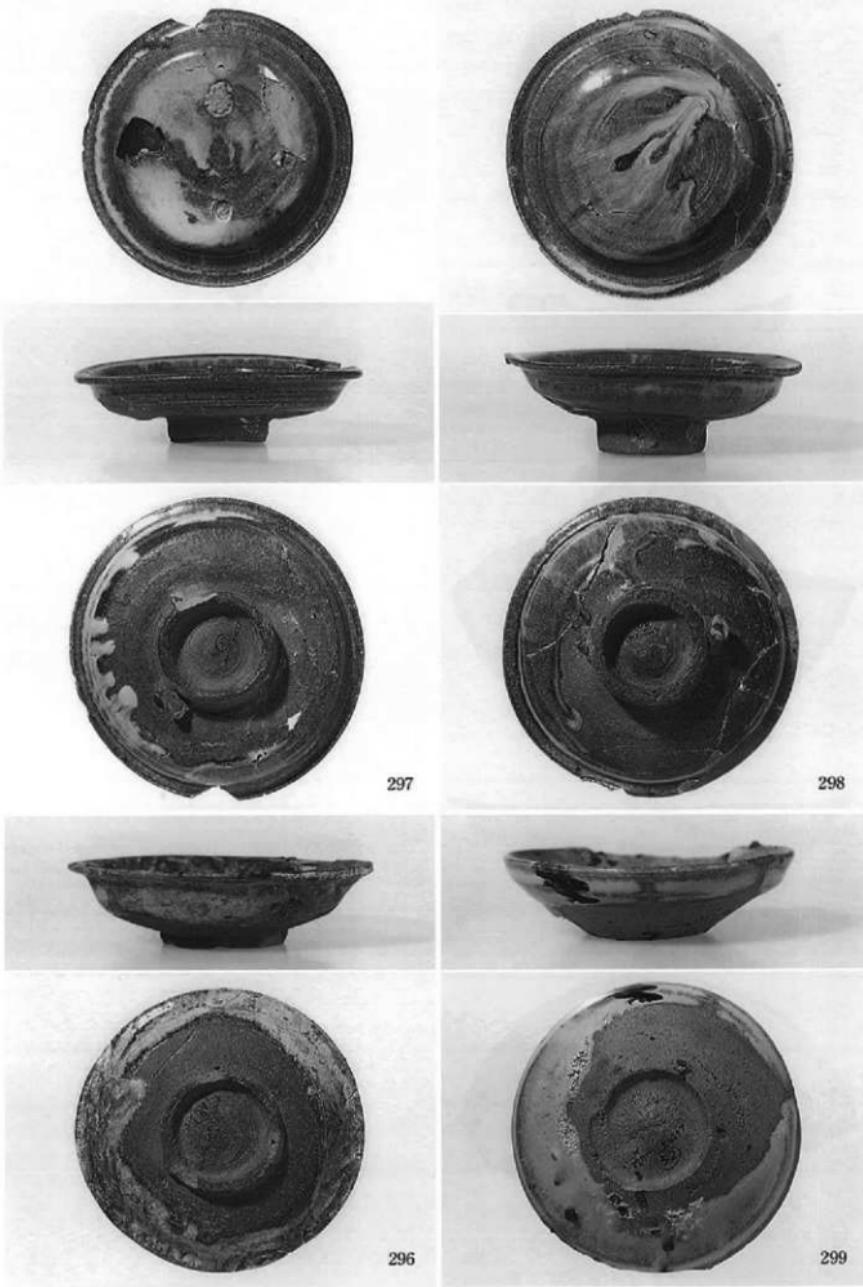


288



293

F区土壤12、H区土壤7、K区土壤1出土遗物



K区土塙1出土遺物



302



303



316



304



319



320



321



322



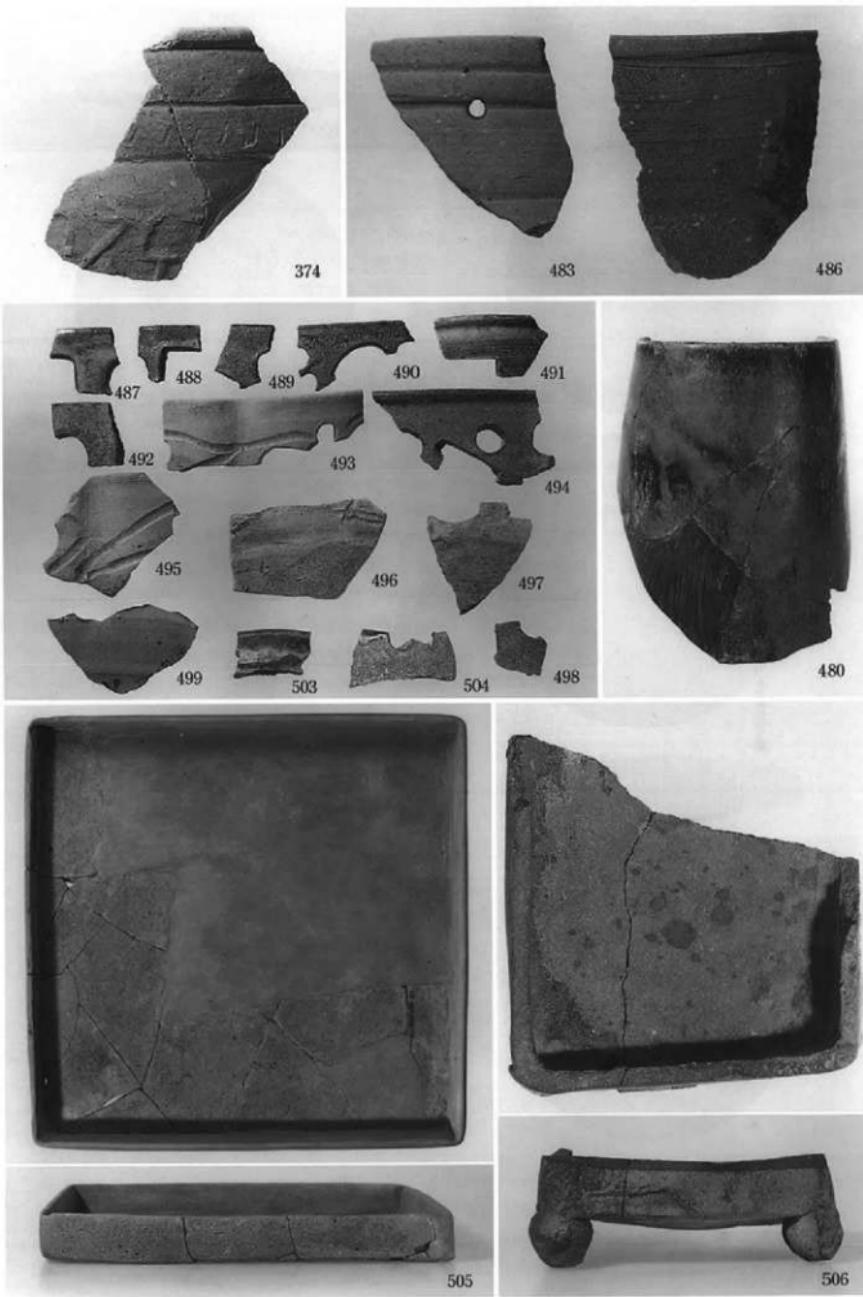
324



325



K区土壤出土遗物、包含层出土遗物①



包含層出土遺物②



450



463



467



468



469



471



516



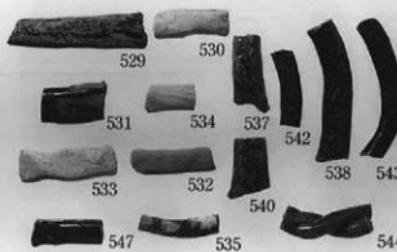
518



519



520



550

541

546

521

551

522

555

523

552

524

548

553

525

556

526

557

527

558

528

559

529

560

530

561

531

562

532

563

533

564

534

565

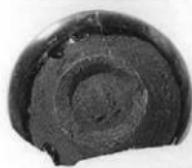
535

566

536

567

包含層出土遺物④



570



593



603



600



610



624

628



622

629



635



639



643



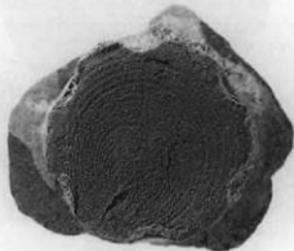
645



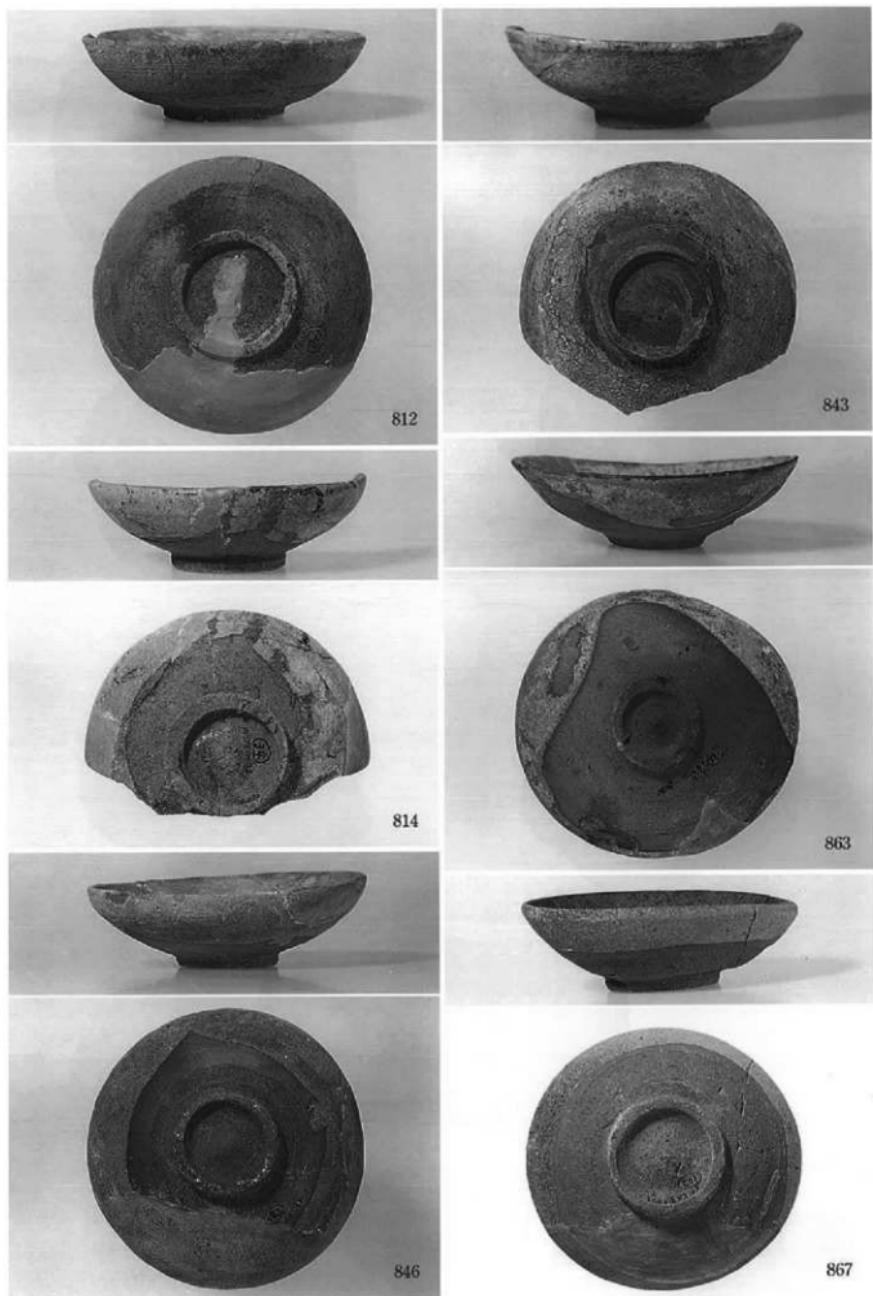
699



645



包含層出土遺物⑧



包含層出土遺物⑨



866



880



876



887



931



889



951



890



942



950



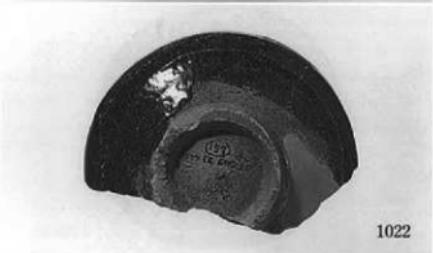
954



1017



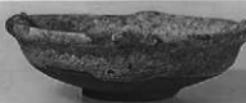
999



1022



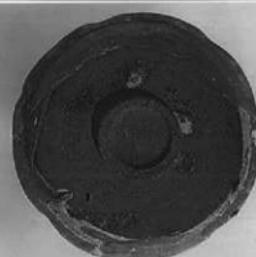
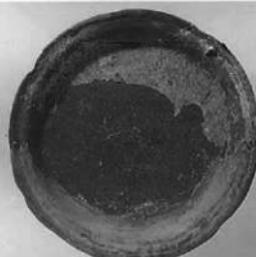
1034



1042



1047



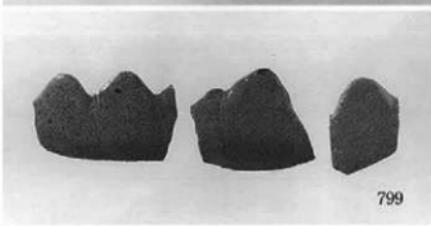
1037



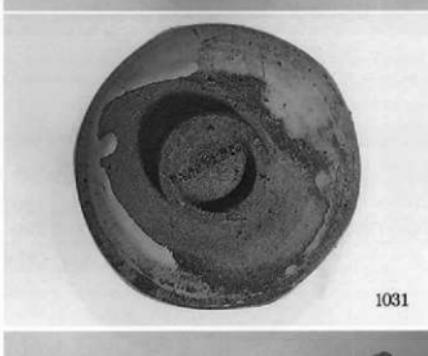
1056



1060



799



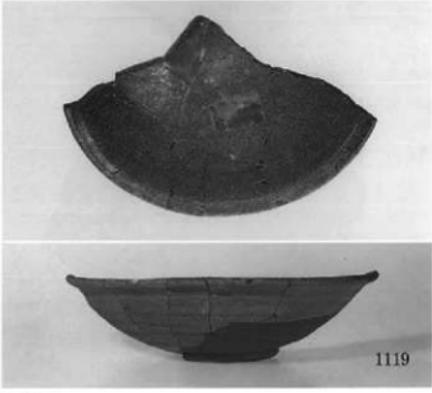
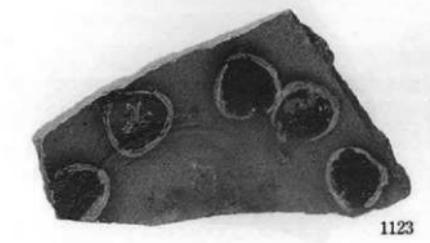
1031

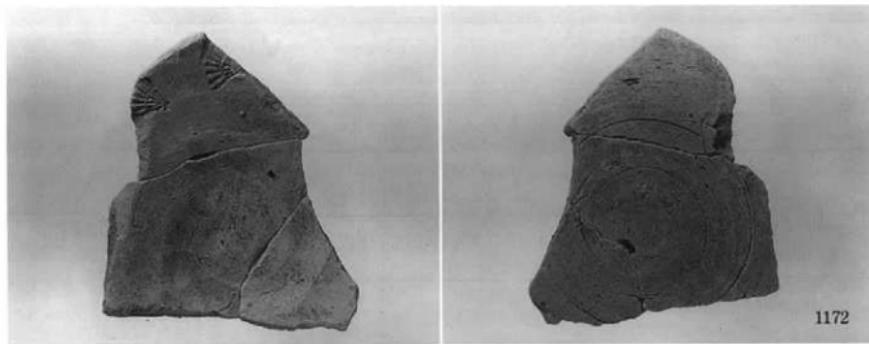


1097

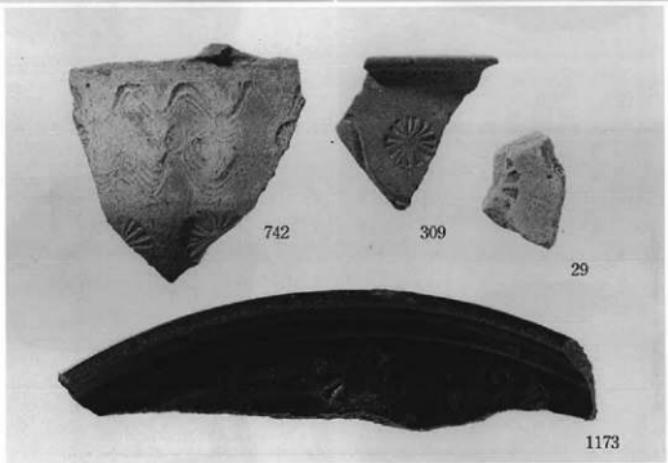


1069





1172

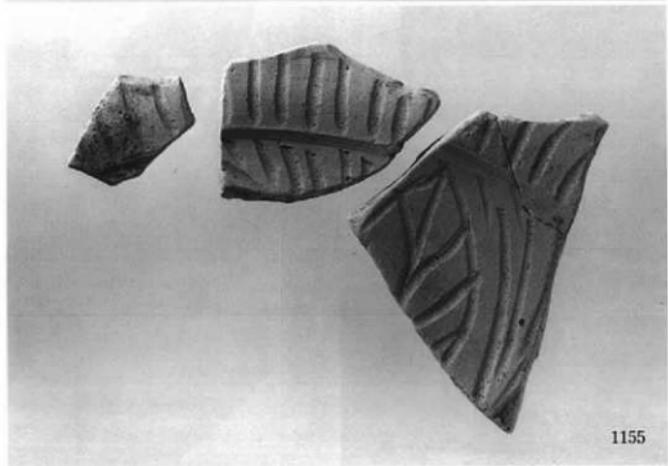


742

309

29

1173



1155



1214



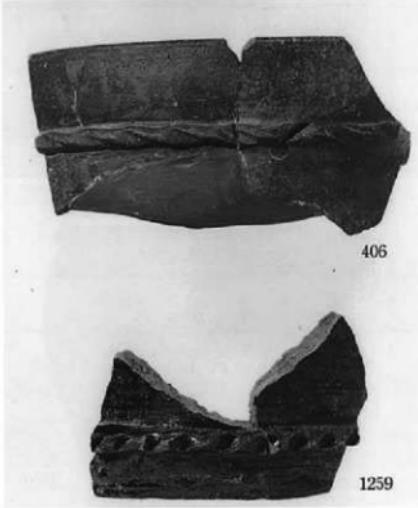
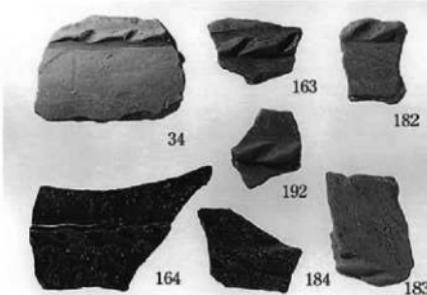
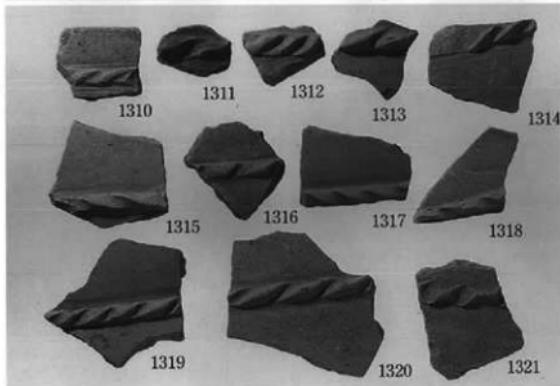
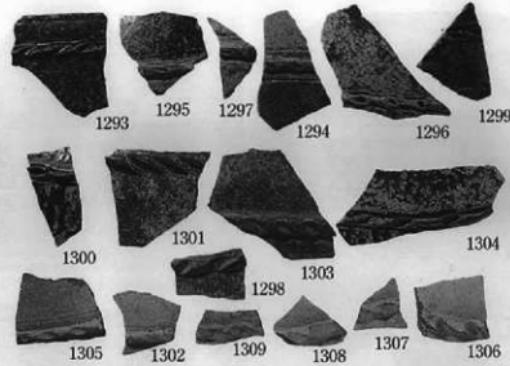
1188



1258



1288



包含層出土遺物



1330



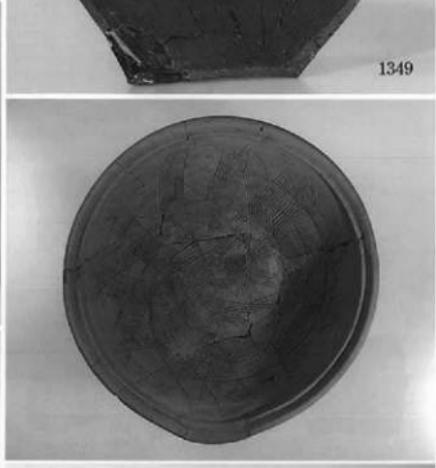
1323



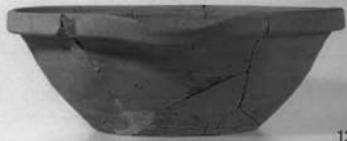
1349



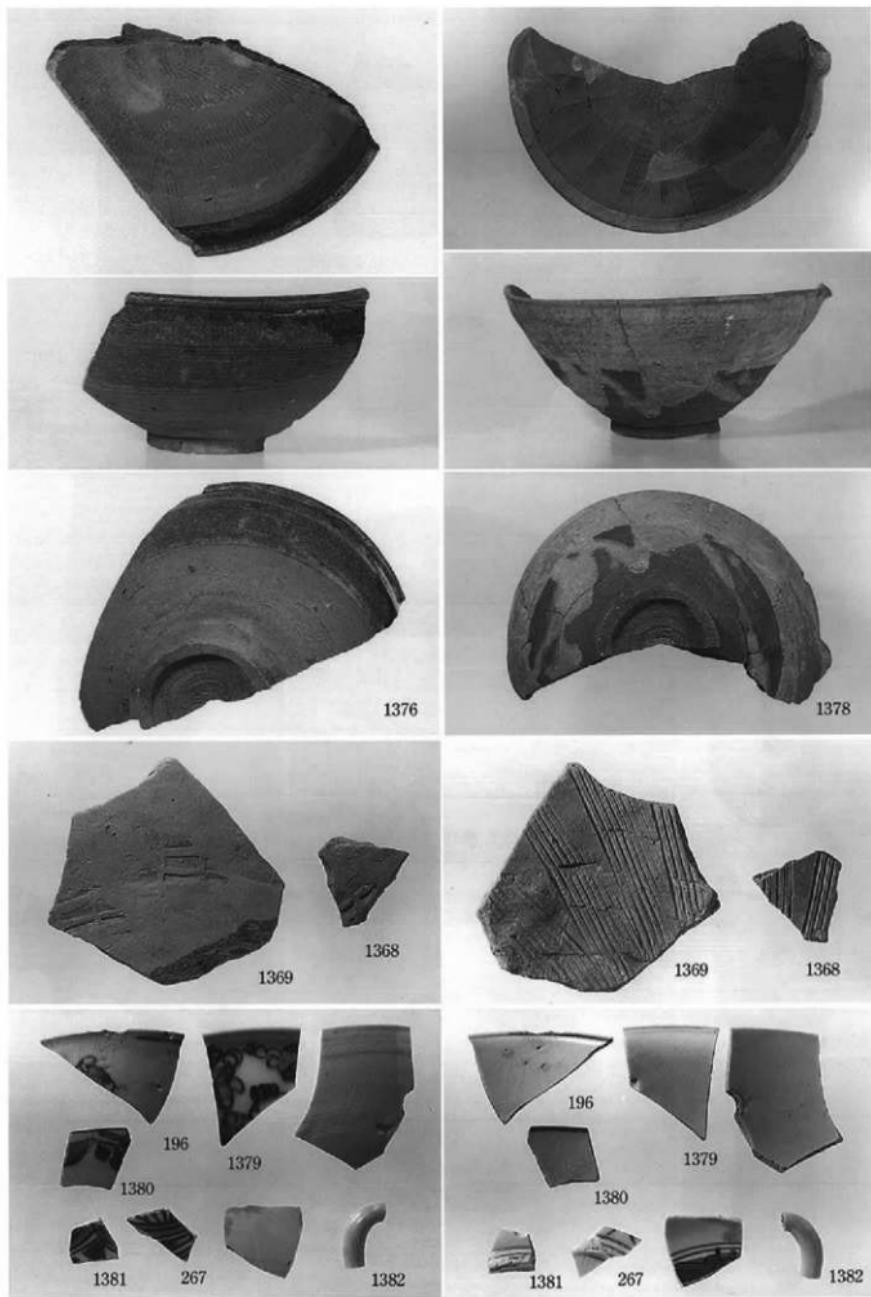
1326



1329



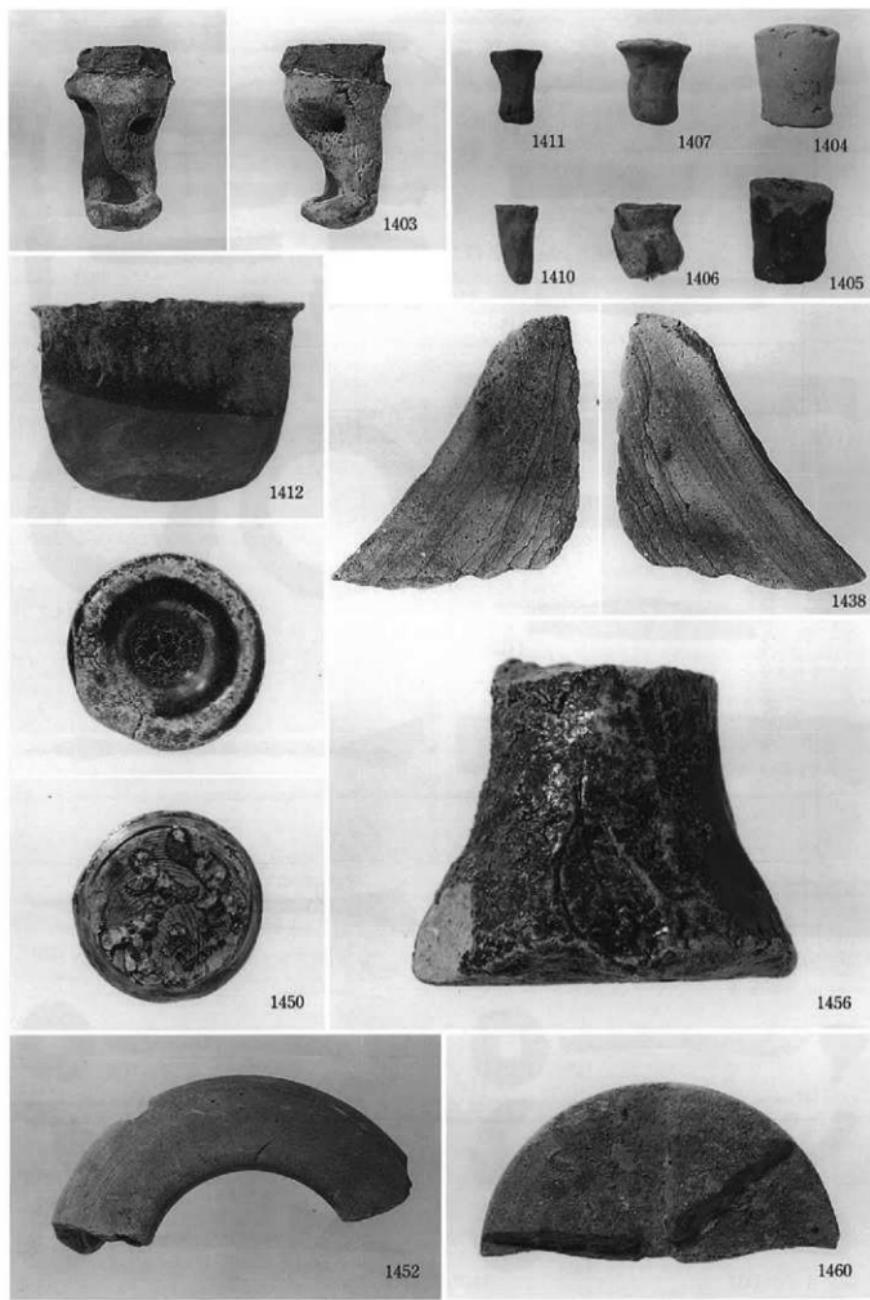
1358



包含層出土遺物③



包含层出土遗物④



包含層出土遺物②



1413



1414



1415



1416



1417



1418

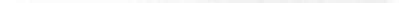


1419

1424



1420



1421



1422



1423



1425



1413



1414



1415



1426



1427



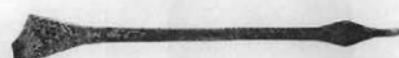
1413



1428



1414



1428



1429



1432



1433



1436



1430



1434



1437



1429



1432



1433



1436



1431



1434



1437

包含层出土遗物②

## 報告書抄録

ふりがな	うちがそかまと							
書名	内ヶ磯窓跡1							
副書名	福智山ダム建設に伴う福岡県直方市大字頓野所在近世窓跡の調査							
巻次								
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第163集							
編著者名	岸本圭・岡寺良・大庭孝夫							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8575 福岡市博多区東公園7番7号							
発行年月日	西暦2001年3月30日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
内ヶ磯窓跡	福岡県直方市 大字頓野 宇二ノ瀬・ 宇下久保・ 宇白毛瀬	402044	50118	33°45'10"	130°47'8"	1995.8.24 1995.10.30 1996.6.10 1997.8.10 1997.8.10 1998.8.10 1998.5.12 1999.3.19	4,000	福智山 ダム建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
内ヶ磯窓跡	窓跡	江戸時代	掘立柱建物5棟 土壙37基		陶器・金屬器		古高取窓跡	

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2 1 3 3 0 5 1
登録年度 12	登録番号 12

## 内ヶ磯窯跡 1

福岡県文化財調査報告書 第163集

平成13年3月30日

発行 福岡県教育委員会  
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 セントラル印刷株式会社  
福岡市中央区大宮1丁目5番13号